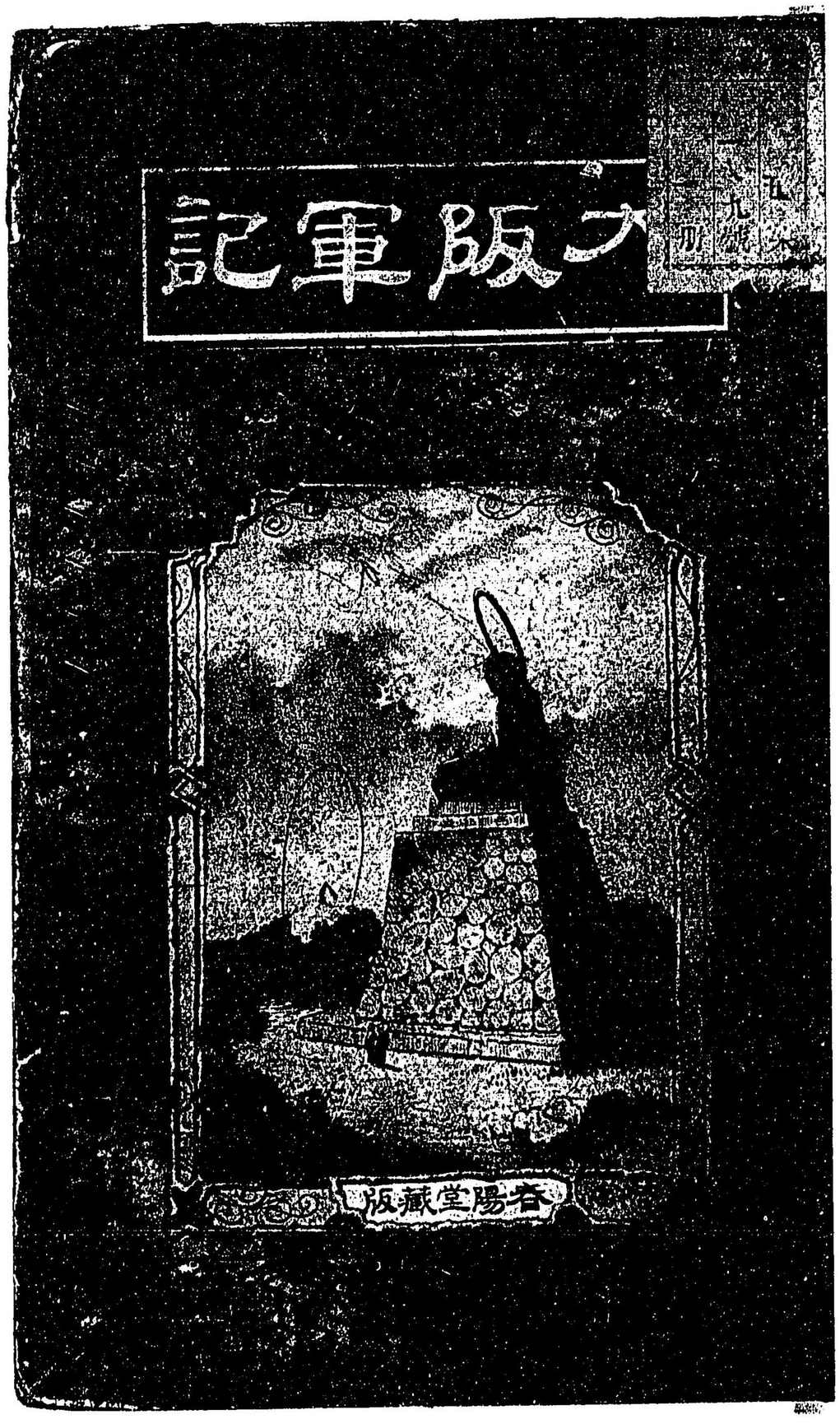


090331-000-1

特10-576

大坂軍記　(絵入実録)

春陽堂

M19

DBN-0733

明治十九年五月二十六日内務省贈付

繪入實録

大阪軍記

春陽堂藏版

絵入實錄

大坂軍記目錄

○第壹回　設二城郭一攝州石山一　移二社寺一難村鷺森一

○第貳回　加藤議二婚姻一謀レ智　大野弄二寵威一恋レ權

○第三回　大佛殿三興建第一　伊豆守一爲二代詣一

○第四回　幸村退村二真田紐一　信幸承飭二九度郵一

○第五回　秀頼堅レ衛入二二條一　清正羅レ毒倒二鶴本一

○第六回　四東流レ吏草二食田一　大坂慮レ事徵二浜士一

○第七回　汎軍長老記二鐘銘一　南光道僧釋二文義一

○第八回　勝重挾レ勅停二供餐一　重成强拳慣二抑令一

○第九回　木村變レ容謀二駿府一　渡邊奉レ書使二江戸一

○第拾回　論二銘文一且元諾レ言　陷二奸籌一女使歸坂

○第拾壹回　振レ舌佐嬖危二顧臣一　信レ讒女君却二切諫一

○第拾貳回　片桐陳レ志々竟空　淀君乘レ悲々乃失

絵入實錄

大坂軍記目錄

○第十三回　重成追二顧之臣踪一　且元遣二忠情之節一

○第十四回　片桐途奉二迎政所一　木村舊痛二打勇僕一

○第十五回　真田始入二大坂城一　間諜頻擒二于敵地一

○第十六回　大助受レ教習二礮砲一　幸村搆レ慮築二堡砦一

○第十七回　幸安戰破二渡邊兵一　幸村諫教二戒我子一

○第十八回　真田智謀破二高虎一　木村奮レ勇惱二敵兵一

○第十九回　關東夢レ士迫二大軍一　坂城集レ勇堅二軍陣一

○第二十回　兩將軍進發二万兵一　蜂須賀龍二褒住吉一

○第廿壹回　關東四將取二敗軍一　大坂四勇奮二稀力一

○第廿貳回　兩軍血戰於鳴野一　片桐盡忠救二舊主一

○第廿三回　主服頭奪二穢多崎一　治太夫取二敵軍首一

○第廿四回　真田掀戰二于堡砦一　關東大敗レ破二于敵一

繪入實錄 大坂軍記目錄

○第廿五回　両將軍巡二視陣中一　幸安射二擊河内守一

○第廿六回　幸村籌策惱二東軍一　屋代多宮死二敵中一

○第廿七回　幸村五所設二伏兵一　神君賜二兜佐平次一

○第廿八回　陸奥守生二捕和久一　牧島南條降二東軍一

○第廿九回　東軍大舉攻二西軍一　神君單騎落二南都一

○第三拾回　後藤單身來二城中一　船手四將敗二城外一

○第卅壹回　幸村討二蜂須賀陣一　岩田義二死茶臼山一

○第卅貳回　川田大力伸二自由一　勅使下向令二和睦一

○第卅三回　幸村獻二木村膽力一　政宗駭二重成豪邁一

○第卅四回　旦容二和議一東軍去　敵毀二外濠一西軍退

○第卅五回　弓始幸村說二軍略一　松丸廉内聞二密謀一

○第卅六回　佞者失レ策燃二梵刹一　兩雄奮レ勇死二敵中一

繪入實錄 大坂軍記目錄

○第三十七回　幸村謀計惱二船手一　基次變名布二散兵一

○第三十八回　小宮山分二捕駿馬一　小笠原被レ奪二武器一

○第三十九回　後藤又兵衛六回交レ戰　木村長曾我部現二芳名一

○第四十回　島田所之助遭二困難一　飯島太郎左衛門盡二忠

○第四十壹回　桑名彌治兵衛密報　湖田計二入東軍本陣一

○第四十貳回　井伊木村戰二若江一　豊浦喜六獻二單衣一

○第四十三回　大坂勢燒二討平野一　馬三好伊三入道勇戰

○第四十四回　關東両雄救二大將一　及川八内討二青木一

○第四十五回　大塚如見獻二麥飯一　神君遁入于二小半一

○第四十六回　長曾我部覘二將軍一　中根穴山撿二間諜一

○第四十七回　七人真田惱二敵兵一　御宿忠義死二梵刹一

○第四十八回　両將軍賞二河内守一　小笠原約二於討死一

○第四十九回　銅邇火砲敗二大軍一　日本號鎗傷二敗將一

繪入實錄 大坂軍記目錄

○第四十九回　本多次死戰ニ幸村ー　増田受ル命驅ニ敵陣ー

○第五十回　幸村擁レ君去ニ薩州ー　淀殿呑レ怨趣ニ黄泉ー

○第五十一回　太閤仁恩助ニ刺客ー　老鬼激レ戰驚ニ人目ー

○第五十二回　東軍潰散火龍備　諸將共奮猛虎勇

○第五十三回　夕日空落大阪城　忠魂忽沼淀川水

○第五十四回　父就ニ捕縛ー焉ニ東將ー　子死ニ義戰ー顯ニ神靈ー

○第五十五回　太閤仁恩伏ニ勁敵ー　幸村智謀落ニ薩州ー

厚レ禮義弘迎ニ秀頼ー　過レ意國人開ニ會議ー

○第五十七回　落花狼籍騒ニ御館ー　軍師德化靡ニ衆庶ー

○第五十八回　諫レ君玄蕃論ニ稱號ー　特レ險兩老翻ニ叛旗ー

○第五十九回　抜刀正則殺ニ妖狐ー　臨レ終義弘認ニ遺狀ー

○第六十回　義忠逐レ兄輝ニ國威ー　將軍用レ諫止ニ干戈ー

○第六十一回　大阪殘炎全消盡　萬民皷腹泰平春

特10 576

繪入實錄 大坂軍記

第一回

設ニ城郭攝州石山ー　移ニ社寺難村鷺森ー

夫栴檀ハ二葉ニシテ香シ木也楠ハ年ヲ一寸延テ大木ト成ル人ヒトシテ榮速ナル者ハ衰ヘも亦早し爰ニ尾州愛知郡中村の百姓彌助が子ホ日吉丸と云しい天文五年正月元旦卯の上刻の時ニ生れ國家功臣と鳴く鷄の聲諸共に誕生し成長ヲ從ひ萬制を經て織田信長公ヲ仕木下藤吉よりして羽柴筑前守と成西國の探題として毛利を制せり然に織田信長公明智光秀ヶ爲ニ京都本能寺ヲ於て伐れるひしかハ筑前守西國より馳登りて山崎ヲ亡君の仇を伐取天子の勅を戴て四海を制しるふ程ニ威勢旭の登か如く諸侯敬ひ奉れハ靡かぬ草木も無りける茲ニ於秀吉公兼て思召ける石山の城御普請有べしと天正十一年の春より淀鍬下しを始めらる抑攝州東成郡石山と云へるい素本願寺の堂地ニして生玉の神社社僧南の坊を始として其外十ケ寺有此地面ハ海上ヲ沿ひて東ハ沼澤く北ハ淀水の流をうけ南一方の平地にして屈竟の城地なれハ信長公深く懇望有と雖も本願寺顯如上人得心ヲく門徒の面々命に應せず是ニ因て天正の初より合戰ニ及しかども門徒の輩命を捨て防ー故信長公勝利を失ひ給ひ竟ヲ和睦と成て本願寺ハ紀州雑賀の森ニ移轉り生玉大明神ハ西成郡天王寺村の北の境ニ三町四方の社地を賜り下難波村の内ヲて三百石の神領を寄附し給ふ則南の坊眞藏院曼陀羅院學蘭院松音院櫻本坊持寶院遍照院威王院地藏院以上十ケ寺此地ニ移さる〜程ヲ石山の城天正十一年の春悉く出來せしかハ同五月吉日を撰み秀吉移給ふ是ニ因て諸侯星の如く列て悦ひを奉つると暇ヲし猶近郷ヲ悦觸有て望の者ハ住居致せよとの仰を聞き追々城下ヲ移り來て繁昌ヒる事大方ならず中ヲも伏見より一町又ハ半町十軒廿軒づゝ中合せ移住居へる者多のり四方の伏見坂町伏見両替町藤の森町鍾木町伏見町等尚其名ハ殘れるなり前話休題太閤仰出さ

るゝよ皇都ゝ比叡山有て王城の鬼門を守る我城よも守護の靈社無らずやと安樂寺の松浦法印よ命じ給ふ法印申上ける夫北ゝ陰ゐして水ゐり磁石を生し好んて鐵氣を吸へり武門よ於て重ずる處ゝ鎧兜刀脇差鎗薙刀の類なり磁石鐵氣と吸時ゝ自ゝら鋏鞘を脱るの氣有故よ鋏鉾の類ひよ北面を忌るも此理よてゝ君萬代を壽給ふゐゝ刀ゝ鞘ゐ弓ゝ袋ゐ納るをこそ願ひ奉るその弓矢神を北面よ勸請し當城の守護神と爲給ゝと是に過したる儀ゝゝゝじと申上れゞ太閤尤ゐ思召し則生玉よ於て北面八幡宮を勸請有今諸人の能知所なり猶國々ゐ仰ありて絶さるを繼廢さるを興し神社佛閣御造營有り其中よも京都大佛殿御建立の譯ゝ在昔秀吉公未藤吉郎さりし時松下嘉平治元綱よ仕へ給ふ此家よ奇佛有丈壹寸八歩三面の大黒天なり松下江州長野河原よて拾歸り清光寺の住僧ゐ見せけれゞ住僧大ゐ驚き是常体の尊像ゐらず弘法大師の直作ゐて日本ゐ二体の大黒天ゐり一躰ゝ今洛東祇園よ安置む夫大黒天ゝ福神よして一面千人を守給ふ此尊像ゝ三面よてましませゞ三千人の司とゐり給ふべしと申にぞ松下大きゐ抃悦び朝夕祈念を凝ける故よや今川氏ゐ仕て諸士の師範と仰がれ日々に福有の身とゝ成ゐける此時松下元綱藤吉郎を寵愛の余り此尊像を與へて怠らず信心せよかーと申けれゞ有難しと押頂爾後肌身を離さず祈けるゞ或時松下の命を受桶川銅の鎧を調へむ爲ゐ尾州よ赴く道すゞらかの大黒天を取出し傍の石の上ゐ置つゝ云けるゝ如何よをても心少さき大黒のな儘ゐ二千や三千の頭とゐりて何のせん我所願を範て立身を願ゝんと手水を遣ひ拜をゐし如何ゐ大黒御身一面千人を守り給へゞ三面ゝ則三千人也夫千軒を食者を長者と云三千人ゝ是商人の福神ゐして我望む所に非ず何ぞ三千五千の些頭を祈ひや我願納受ゐらゞ忽ち微塵よ碎給へ其缺片一ッを以て三千人よ當べし願ひ叶ゝすんゞ必ず碎くる事ゐりれ大願納受ゐらゞ萬倍をて造立し奉らんと手北の石を擊振てはつをと打ゞ不思儀ゐるか

ゐ此尊像微塵ゐ碎て飛散たり藤吉郎大いよ怠ひ深く心中ゐ祈給ひしゞ夫より織田信長よ仕へ卵の如く立身し今關白職の尊きよ登り給へゞ彼誓約を違へず大黒の尊眦を萬倍增よて造立せんと仰せられしゞ亦思ひ給ふゐゝ我今天下を掌握すること偏ゐ大黒天の守護ゐらん歟去ども此事後代ゐ聞へゐゞ秀吉ゞ天下を取しゝ其身の功ゐ非ず大黒の靈驗也と言れんも口惜先大黒の像ゐ換て聖武皇帝の建立し給ひし盧舍那佛の大像を摸し京都ゐ大佛を造立せゞ誰有て否む者ゝ有まじと思召けれゞ列國の諸侯を召れ昔し聖武帝南都東大寺ゐ大佛建立し給ひしゞ今日本の規摸と成り我も此都よ大像を安置し平安城の大殿と末世ゐ仰のさんゝ如何ゐと仰せらるれゞ各御尤の思召天晴御高名の程是ゐ若トと申上る是よよつて洛外東山ゐ靈地を撰大黒を變じて釋迦の大像を建立し以前碎し三面の大黒ゝ

御首の内に納させ佛の像に高野山の木食に仰て華嚴の諸法祝法佛の体像に作れたり依て寺号を方廣寺と稱す僧に明智の聞高き紫野大德寺の古溪和尚住られしが程なく僊化し給ふ故聖護院の道澄を別當に定め附せられける此大殿造營に付國々の人夫京師に充滿たり奉行に前田德善院玄意法印番匠の棟梁に中井大和守棟木に駿河國富士山より切出す高さ二拾丈あり木佛の御丈拾六丈御頭の丈二丈八尺耳の丈一丈八尺膝の廻り拾八丈八尺五寸足の裏二丈二尺御手一丈八尺五寸螺髮の數三百五十大きさ四尺白毫の徑り三尺護光の高さ二十四間蓮臺各々一丈二尺宛桁行五十間二尺五寸梁の間三十二間五尺五寸柱の數百三十二本廻り一丈六尺五寸回廊大門是に准ず佛の金箔廿九萬五千枚外郭惣門の石垣に國々より大石を運ひ出させ諸大名へ御手傳仰付られ悉く石を寄進させるふにより程なく大殿出來す誠に秀吉公の威光に據り如斯大佛を鑄造せられし事實に天下の壯觀たり去ども最初の誓約に違ひ大黒の神躰を佛像と替させるふ故にや慶長元年七月十三日大地震して洛中洛外に云もさらなり五畿七道の神社佛閣崩るゝ事數を知らず中にも大佛殿方廣寺崩れ倒て木佛に古へ藤吉郎たりしとき碎ぎるひし大黒天の如く微塵に成たること不思議なり佛体のりやうに碎けたる事に古今其驗を聞ず方廣寺より右之趣注進す太閤此由御聞有て大きに怒せるひ近習の輩を召具し馬上にて御弓携へ馳付るひしが伽藍も焼き渡るりと思ふ計の大音にて我佛像を安置するに天下國家安泰たらんが爲なり其志ざしをも思はず汝が身の大體なるも恥ず身を維持事だも能はずして斯碎しに何事ぞや實に世塞の糞佛のあと惡口し弓に矢番ひ射掛るひしが尚御怒止ず馬上に跪立上り尿瀾をしかけるふ御供の人々に手に汗を握胸を冷しさせも强氣の御振舞やと舌を卷て恐けり夫より御歸館有て仰出されけるに方廣寺の碎け佛早く取捨べし本堂に信濃國善光寺の如來を安置す可と命しるひ慶長三年八月十三日太閤秀吉公に

伏見の御城に於て御逝去の其砌に御家督たる秀頼公未だ五歲にて渡らせるへば政事を去ろしめす事能はず依て五大老の第一德川内大臣家康公を御後見と頼みるふ加賀大納言利家を執權とし秀頼公十五歲に成せるに本の如く成奉らむと兩將御受合有然るに慶長五年に到り五奉行石田治部少輔三成後見の威勢を嫉妬み大望を企で幼君秀頼公の御爲と僞り大小名を誑ひ德川家康公と關ヶ原に於て一戰に及びし處運拙くして打負石田ゲ〻悉く敗亡ぬ是より神君の御威光旭の登ゲ如く大小名を足下に見て萬の政事御心の儘なり既に七年にして深き思召有て太閤の時より御貯金九億八千貫目其上大坂の要害あれに先これを拙のんゝめ秀頼公淀殿の兩方へ仰遣にされけるに太閤都の規摸として大佛殿建立有し處去る慶長元年七月十三日の地震に依て佛体大殿轟倒に及ぶものゝ早速再建有べき所世上驚駭延引せり此儘にて捨かば太閤の御志ざしを破るに似たり復佛菩提ともなるべければ早々御再建然るべしと理を以て述るひければ淀殿尤もに思召され且に秀頼公御治世の御祈禱かた〳〵再建有べしと仰せ付られ數百の鍛冶數萬斤の唐鐵を以て鑄さてけり造營も事終り佛像直に出來して御首を鑄掛奉りし時如何したりけん首大胴のうちに落入からみたる足代に火燃上りければ諸人大ひに驚き驚き手を擧げ足を空に爲してあれよ〳〵と叫べども詮方なし奉行の役人下知を爲し火を消んとする折節魔風烈しく吹來たり大殿に燃付焰火盛にして暫時のうちに焼亡す是慶長七年十二月四日の事也追々早打を以て大坂へ注進あれに淀殿初め皆々大ひに驚るひて再建の評定とりどりなり

第二回

加藤議婚姻謀智　大野弄寵威恣權

干時慶長八年德川家康公征夷大將軍に昇るふ從是して天下の諸侯關東へ登城し武將と敬ひ奉つる猶も佛所存有て佛子秀忠公へ新將軍を讓りるひ大佛所とならせるふに同十年の事也然るに秀頼公に佛年十二歲にあらせるへども

天禀盛衰ふましませバ浮世堂の御慈愛み深く浮側を放しるゝねバ女中バりりまて浮成長有し故假初ふも武邊の事ゝ見るゝす詩歌管絃を弄るふのみあれバ太閤愚願の大名登城有と雖も式日の浮日見だもあらねバ誠ふ神あき社殿を拜するゝ似たり此時執權ゝ大野修理亮治長片桐市正且元あれども武邊烈さ且元ゝ有て無う如く治長ゝ無智短才の者あれども始秀頼公浮誕生の砌太閤の思召まて浮城内ゝ捨置れ他人に拾ゝせ夫を取て發ひあバ成長有むとの浮下知ゝ依其通り計ひて早見櫓の下ゝ捨置參らせける所へ折節浮城の勤番まて治長登城ゝしけるゝ斯ゝ事とゝ夢ゝも知ず行掛りさま拾ひ上奉る次々の面々弈り山若君の由を申直ゝ奥殿ゝ入奉り夫より右の樣子を言上に及びける太閤悦び淺からず大野ゝ若君の御守り執權たるべしと仰付られける從是して大野ゝ若君付と成て自のら奥殿へも出入したりけり片桐ゝ太閤薨去の砌賤ケ嶽よりの忠節を思召され新ゝ仰付られし執權ゝり大野ゝ太閤逝去させるひしより淀殿の浮氣ゝ入て浮側へ伺候し浮心ゝ叶ふやうゝ取計らひけれバ大野ゝらでゝと思召され終ゝ我儘の浮身持とゝらせるひ色欲の浮寵愛深うりける修理も思慮ゝき者あれゝ我ゝくバと振舞ける依是諸大名太閤の恩顧を思へども牝鶏晨すれバ國家亂るゝの譏めを思ひ水上濁れバ下流悪水ゝ汚すの道利ゝて誰言合ともゝく威望盛の關東へ出仕を遂る樣まゝりしい一朝夕の事ゝ非ず俗家まも上たる女乱るゝ時ゝ其家亡ぶる事違らず忠臣ゝ退き佞臣進て終ゝ大坂厭蝕とゝりしゝ是非もゝき次第ゝり家康公思召れけるゝ秀頼十五歳まゝ到らバ相渡すべき約束ゝれど熟慮みるまゝ古へゝともゝれ今二代を經さる將軍を安々と渡す時ゝ是迄心を盡したる事も水の泡ゝり又此儘ゝ捨置バ太閤恩顧の大名我を無道ゝりと取沙汰せん是亦禍ひの基ゝり所詮新將軍の姫千姫を秀頼と娶せ婿舅の因縁をゝし其上まて盛翁盈蠡を幸ひに何事も心の儘ゝ申付んゝ誰とて拒者ゝ有まじ然拒者ゝらバ此を辞柄ゝ

して亡すべしと思召則紀國和歌山の城主淺野左京太夫義長まゝ秀頼公を婿ゝ取たき旨浮話有けれゝ退從輕薄の義長憚りなゝら私ゝ浮媒仰付られ下さらバ婚禮相調へ候樣ゝゝし奉らんと申上家康公重て仰けるゝ然ゝ浮手前宜まゝ取繕致さるべしと許るへバ左京義長大坂まゝ到り城内に立越て淀殿初大野片桐ゝ翌ゝ相談ゝ及ひける所に誰とて是非を申者もゝし加藤清正申されけるゝ今秀頼公關東の壻とゝりるゝゝ見ゝ親ゝして大浮所ゝ則祖父君ゝり然れバ一言として詞を返るふこと能ず當時の威勢ゝ十倍し彌くしよたいみやうくわんこう諸大名關東へ隨從よしゝれども新將軍の姫を嫁として當城へ迎る時ゝ是亦屈竟の人質也熟當時の有樣を見るまゝ大小名太閤の高恩を忘却秀頼公を輕忽まし奉り關東へ隨ふゝ故彼方よりゝ壻とゝして取挫ゝんとする共是方ゝ人質として是と謀らバ宜のらん歟諸侯の面々違慮ゝく評定有て然るべしと申されける淀殿仰られけるゝよも關東左程迄まゝ深き所存ゝ有まじ孰より成とも姫を迎ねバゝらぬ事ゝれバ幸ひの事ゝり今將軍の壻とゝらバ太閤浮約束の如く秀頼公十五歳に成せるゝゝ乞ずとも將軍職を是方へ返さるべし此子に讓るの道理ゝれバ浪風起ず秀頼公萬代の基本ゝるべし大野如何と宜へバ無智短才の修理之助已ゝ色欲まゝ眼眩み唯淀殿の仰浮尤もとゝ申ける且元ゝ清正と同意ゝて緑邊ゝ表向バ中まゝ能人質と思ふ故評議茲ゝ一決して慶長十二年七月廿八日浮婚禮調ひ迎まゝ淺野左京太夫浮送まゝ柳原式部太夫本多佐渡守浮附人ゝ柘植大炊之助刑部の局岡野の局その外浮供美々しく千姫君浮とし十一才にて浮輿入ある茲まゝ於て秀頼公終ゝ關東の壻君とゝ成せるひける明慶長十三年ゝ秀頼公十五才まゝ成せるひけれバ關東より將軍職を渡しるゝん歟と大坂ゝて評定有けれども未さ御幼弱の浮事なれバ此義ゝ禁裏より遐て御沙汰有べし今水魚の友誼ゝれバ聊ゝ別意ゝき旨仰遣されける片桐加藤の輩約束の相違と憤と雖も主君浮幼弱まて在ませバ是も時節を見合せ居さりけり去

とも忠臣の覇は始終を思ひ左右一戰の上あらでハ秀頼公天下と統御事成難からん歟今太閤恩顧の大小名關東へ登城して大坂殊の外御無人あれバ密々ゐて名高き浪人を召抱られて然へしとゞ申ける于時慶長十五年ハ太閤の十三廻忌ゑ相當るへバ關東より使として成瀬隼人正大坂ゑ來たり申上けるハ京都大佛殿事去ぬる慶長七年ゆ再興有し處燒失頽敗しぬ此大殿の儀ハ太閤ゆ存生の刻ゆ心を盡されし靈場あれバ捨置べきゑ非ず幸ひ太閤御年回の供養傍ゆ再興有て然るべし是秀頼公の孝心萬代迄の規模ゐるべしと述けれバ淀殿も餘て其心ゑて在せしゆバゆ尤の御心付と返答有て使者を返され早速諸侯を召て御相談有けれバ皆々申上けるハ先君御年忌の供養旁大佛殿ゆ再興可然の事也然し莫大の物入あれバ此度ハ木像ゐて宜からんと申上る淀殿是を聞召し是迄両度金佛ゑて有しを此度木像と成バ秀頼公の恥辱成べし且諸國の風聞も如何あれバ以前の如金佛ゑ寄進有るべしと仰付られける

第三回

大佛殿三度興建築　伊豆守一度爲二代詣

去バ大佛殿再興ハ天下の大事也と有て惣來行ハ片桐市正且元承り二月朔日より始りて作工を撰人夫を集て廬舍那の大像を鑄たてけりその費用

一唐金　七拾三萬九千五百六拾斤
一黄金　壹萬四白三拾六兩
一水金　五萬八千六百弐拾兩
一金箔　拾五萬枚
一白銀　壹萬弐千六百弐拾斤
一炭　壹萬六百五拾六石

右之通ゐて鑄立けるまた佛像の大ゐさ

一面長　壹丈八尺
一眼　横五尺五寸　竪弐尺
一鼻　竪五尺五寸　横四尺　但鼻孔弐尺
一口　横八尺　竪弐尺弐寸

一耳　壹丈
一掌　壹丈弐尺
一膝廻　拾三丈八尺
一足裏　竪壹丈四尺　横七尺
一螺髮　數三百五拾
一白光　大ささ弐尺五寸
一蓮華壇　高さ弐尺　わたり弐尺
一護光　八尺宛
一堂　高さ拾八間　横九間　梁の高さ五間　桁行四拾五間　梁廿七間五尺九寸
一柱數　九拾弐本　但直徑五尺五寸

斯て鑄像出來せしゆバ假屋ゑ据奉り夫より大殿の供養請を急ぐれし程ゐ頓て造營事終れバ回廊唐門雲に聳へ堂塔日ゐ輝て人目を驚うす誠ゑ日本無双の大殿あり此時淀殿先達て家康公より太閤へ遣されし尋紙末世迄も其體據を殘さんゑハ能納め処あらんと思召此度再建を幸ハひゐ佛の御首ゐ納るバ佛の功德ゑ據て自からハ天下ハ秀頼公の供手ゐ入べし二ゑハ万民此事を知バ尋紙の表ゐ恥て家康公政事を此方へ返されん事も早かるべし且先君の供志ざしを萬民拜する時ハ彌豊臣の供代長久あらん歟三ッゑハ此尋紙我手ゐ存置ハ如何ある野心の者有て盗取關東へ送らんも謀難し供首へ約置時ハ佛体を破らざれハ出す事能ハず破るとき佛体破迄の罪逃ゲたし左ある時ハ關東より如何ゑ思とも手出し成難うるべしと思付るひ彼尋紙を二重の箱ゐ入佛の供首の中へ納め佛体と付合せ普く此事と諸人ゐ知せるゑゐて八月十八日ハ太閤の十三回忌ゑ當らせるゑ夫ゐ付所々荒地を恥建立有又香典供米神樂御湯萬燈と進せらる是ハ秀頼公恥武運長久太閤ゆ菩提の爲ゐりとゞ又京都大坂諸寺にても供法事修行有べしと仰遣されける處ゑ關東より太閤ゆ年忌ゑ付高野山ゑて大法事修行有べしと仰られ代參ゑハ眞田伊豆守と遣さるべき旨申來りけれバ淀殿神妙の事ゑ思ひるひ關東ゑ於てすら大法事修行有事あれバ此方の宿坊泰岩寺を修繕し諸事叮嚀ゐ

關東の代參を馳走すべし尤も諸堂皆々太閤の沒造營あれば能々修理と加へ關東を笑れぬ樣立派を盡す可と仰付らる此時家康公ハ眞田伊豆守を被召密に仰られけるハ我汝の忠臣無二を知る依て一大事を申付ん此度太閤十三回忌の法事高野山にて修行し其方を代參に立る事ハ外に重き子細有汝ゝ弟左衛門幸村先年石田三成ゝ反叛の節我に敵對今ハ九度村に蟄居すと然るに此度忍びを入て大坂の樣子を聽に名高き浪人を召抱る由幸村ハ智謀軍術人に優れたれば嘗てより懇望あれども折もなく打過たり幸村素我に恨ある者あれば大坂の招に應せんも計り難しと思ひ襲日淺野左京太夫に九度村を守らせ置たり汝代參に事を托弟幸村を召抱來るべしとて信州一國の沒朱印狀を賜りければ伊豆守謹んで申す樣怨敵たる弟を沒懇望の段私し於て有難き仕合なり然れども彼常僑者に非ず候得ば某ゞし計ひとのみ存候ハヾ容易に承引仕まつらず上意を背のんも計りがたし左候ハヾ君の沒氣嫌の程恐れ奉る由申上る家康公聞召し尤の言葉なりその疑ひ無ゝしも非ず其事を思慮一通を取寄置たりとて下されければ伊豆守拜見するに是則秀忠公より子々孫々迄見捨るとの一通也茲に於て二通の沒書を懷中し八月上旬に駿府を發足して高野山に登ける爰に高野の麓禿宿九度村に蟄居する眞田安房守昌幸といふもの二人の男子あり兄を伊豆守信幸ト云ひ關東に勤仕す弟を左衛門佐幸村と云ふ父と共に此所に閑居す其故ハ先年武田勝頼織田德川の兩勢に打負自害し果られければ武田の家臣散々にあり行ぬ眞田安房守ハ武田の滅亡すべきを察し三たび諫て身退き自分の居城信州上田の城に引籠沼田の城を賣取けるよりして德川家と一戰に及三州勢一万二十余騎を纔千五百の勢にて三度迄打破參州勢大敗軍に及しかば不得止和睦と成り總領源三郎を關東の增分とあされ實ハ本多平八郎忠勝が娘を以て婚禮有しより信幸ハ自ゝら此緣に引れて駿府に登城し隨がひ奉る是に據て別に三万石に給ハりて眞田伊豆守と名

乘けり安房守ハ次男左衛門尉幸村と共に上田の城に居住せしに慶長五年石田三成謀計を企關ヶ原一戰の刻安房守ハ武勇絶倫の者あれば何卒味方に成と謀ける茲に大谷刑部吉隆ハ幸村を見て義心强き者あれば是を賴み毛利浮田の飛脚を仕立大谷諸とも幼君の沒爲ありと申遣しければ義心鐵石の眞田父子窮を補佐秀頼公の沒味方にぞ屬しける德川公に上杉沒征伐の爲沒出陣有し處上方の變を聞召二手に分れて關ヶ原へ引返るに江戸中納言秀忠公ハ五万騎にて木曾路より進み上方を挾伐に爲と本多柳原牧野仙石の輩を始として武勇の者數多附隨ひ木曾路大田節より信州輕井の津に沒陣を据られける處に眞田兵を三手に分て夜討す關東勢ハ思も依ぬ事あれば大敗軍にて勇士數多討死去眞田ハ小勢あれど奇計を以て道を塞しりぞ一人も本道に歸る事能ず徒に日おぞ送けり斯てハ關ヶ原の沒手に逢まじと大將を始諸軍氣を敦圖此上ハ上田の城を攻破り上方に登らんと士卒を勵まし必死に成大軍一同に押寄しかども敵ハすこしも恐るゝ躰なく大木大石を投掛々々亦ハ引寄大砲にて討取おとして散々に惱しければ討るゝもの算を知ず次男幸村も父に劣らず刀を翳し敵に紛れ後より攻掛數千の敵を打取し程に大崩となり秀忠公も既に危見へしを戸田久左衛門齋藤半平討死して助奉る此時幸村敵を討取事廿八騎也從是東軍手配を變て攻るとも雖も城中にも是を察し伏兵又ハ哨兵を以て横々に苦ければ寄手日々に弱果今ハ此道を通事能ハず空日數を送ける間に關ヶ原に一戰始り秀秋二心にて裏切しければ石田敗北して滅亡に及秀忠公ハ戰術に霊なひ道を替て上方に登るひし故一戰の間に合ず家康公殊の外の沒立腹にて沒對面も爲るハず小勢の眞田に押られ軍兵を失のふ已あらず剩へ此手の軍に後れしこと武將の器に非ず早江戸表に歸る可しとの沒使來りければ秀忠公を始め附々の諸侯大ゐに驚き如何ハせんと評議に及此上ハ再上田に發行有て有無の一戰に及ふべしと決定たり

本多忠勝此由を聞家康公の陣前ゑ出てゆけるゝ今石田を一戰ゑ亡しるひし陣威勢の盛ゐ隨て諸大名跪伏の折柄秀忠公眞田の爲ゑ再度迄陣敗軍有ゞ鉾先を汚すのみかゆ後目さる秀忠公を武略ゑ疎き大將抔と世上の取沙汰起りてゝ諸大名の信用心元あし兎角ゑ扱を以て事を治候とゆ上る家康公兼て眞田ゞ手際ゝ御了知あれゞ扱事尤と思召けれゞ御機嫌も直り秀忠公と御對面も有りて則取扱の使者をゞ立られける眞田父子ゝ關東の五万余騎を安々と支上方の一戰を待處ゑ石田三成敗軍して此手ゑ付し大名浮田毛利と始とし或ゝ討れ又ゝ降參し關東方勝利と聞へけれゞ安房守齒切をあし去迚云甲斐あき者共の振舞哉いで彼等ゞ恥辱を一戰ゑ雪秀頼公を守護せんと兵を揃へ既ゐ打立とする處へ加藤肥後守の使來て申けるゝ此度石田三成秀頼公の御名を騙り反逆を企後見たる家康を亡し勝ゐ乘して大坂ゐ攻入若君を害し奉り已天下を掌握んと企めり清正是を察するゆれから同意せず早速大坂ゑ出府ーて幼君を守護し奉るべし然るゑ反逆人たる石田ゑ組せし躍ゝ盡く敗北して近々刑罪の沙汰ゐ及ばん貴殿ゝ其徒ゐ非ざること清正兼て見請たり如何して石田ゑ加擂有しや訪存也急大坂ゐ出府有べし清正取成首尾を整ゆへさんと細々とゆ送ける安房守是を聞て大ゐ驚き然ゝ石田ゞ計略ゐて有けるゆ實ゑ秀頼公の御爲あらゞ清正一番ゐ御味方すべき筈也我秀頼公の陣頼と已思ひ石田ゑ組し反逆人と成し事武道の瑕瑾昌幸ゆ一生の不覺ゐして万代の汚名と謂つ可し何の面目有て清正ゐ對面せん其上度々德川勢を敗北させし事あれゞ今と成て彼ゆ下ゑ付んも無念也我武士道も是迄也と思ひ切て指添抜取腮を拂今より我名を一翁齋干雪と改ー蟄居すべしと郎等を集我々父子此度蟄居すれゞ各々退散有べし是迄ゝ身命と投ぢち忠節を盡す事滿足せり明日より主人を見立有附べしとゆけれゝ何も言葉を揃是迄の君恩今更二君ゐ仕る所存ゝ是あし何國迄も陣供ゆ陣先途を見屆奉るべーと言ゝ一翁齋其志操を感し左程の心底あらゞ左衛門幸村ゞ世ゑ出る事も有べし夫迄ゝ農業商人の手業して飢を凌ぎ身を全して時節を待へし時至ゞ廻文を以て達べし其節約ゐ違ず幸村ゑ參を得させよと手づから金子を分與へ暇を遣ゝしける

第四回　幸村退杼ニ眞田紐一　信幸承訪ニ九度邨一

去ゝ眞田安房守ゝ家中の面々退散させ先祖海野幸恒より別たる一族望月卯右衛門根津甚兵衛と始とし穴山小助伊勢崎久太夫同弟友之丞諏訪權太夫都築角兵衛小貝八郎同三郎望月内藏之助同弟三右衛門川勝内匠小山田庄五郎の十三人ゝ智謀軍略優し者あれゞ此輩を召具し高野山の麓ある九度村ゐ閑居をゞあしゐける茲ゐ幸村ゞ妻ゝ大谷刑部吉隆ゞ娘あり初幸村武藝修行の刻大谷ゝ鉛の名人と聞隨てその術を習しゞ竟ゐ其妙を極返つて師匠大谷ゑ優りし業を顯すもの故吉隆大ゑ感し實に當時稱ある器量天晴の武士と思ひけれゞ娘を送り鍾と成て一人の男子を擧名を大助と号當年三才ゐ及べり然るゑ父吉隆石田ゑ組し眞安房守蟄居ゑ依て家中も散々ゑ成ぬ此時幸村妻ゑ向てゆけるゝ此度眞吉隆石田ゑ組し剰へ毛利浮田ゐ勸て謀書を作り我等を計今此仕合ゐ及たり幸村こそ妻の縁ゐ引れ反逆人ゐ組せしと言れん事無念也と憤を妻ゝ之を言ひ宥父刑部殿存命あらゞ私參り親子の縁を切ゆべけれども今ゝ此世ゐ辞世人あれゞ詮方あしと一間ゐ入蟄居を殘自害し果たりけり實ゑ父刑部ゝ太閤の寵臣ゑて五奉行の一人として忠義を盡しけるゞ惜りあ石田ゑ組して討死す其娘の事あれゞ三歳の大助を殘置氣あげゑも自害し果たるこそ哀也扨又家康公の陣使水野太郎作ゝ信州上田ゑ下向して何卒品よく取扱んと想眞田ゐ對面ゆ度旨城中ゑゆ入ける此時幸昌ゞ殘置たる郎等根井淺右衛門猿飛佐助の兩人家康公の陣使ゑ對面し主人安房守左衛門儀此度石田ゐ欺誑れ反逆ゑ同意せしを無念ゑ思武士道を捨高野山ゑ蟄居し入道して一翁齋干雪と改名す私共相殘此

城を滯おく渡ヤ可旨ヤ付候得ハ速ゐ御受取可被下と述けれハ水野太郎作是を聽て神妙の御義也と挨拶して城おハ受取ける根井猿飛の兩人ハ眞田ゞ深き所存有て供ゐ連ず城に殘し置けるゞ從是両人諸國を廻り覘ける一翁齋ハ佛道ゑ志ざし深と偽り一間ゐ籠て和漢の軍書ゐ沁を寄砂取陣取の工夫抔して日をぞ送ける又幸村ハ十三人の郎等ゐ打雜交唯浪人の經營と隣家ゑも想像て綿を打糸を紡五色ゑ色採寄合て紐を打けるゞ幸村思付て其紐を以兩刀の拵を卷握試ゐ手裏滑ず大ゐお利方あれハ望月卯右衛門ゑ向此頃木綿糸を以て大小の拵を卷しゞ打盡梅手裏すべらず至極の利方あらんと思也汝等も手の内の盡梅試よと皆々握みるゐ手の内少しも狂されハ大きゐ感實ゑ天晴の御賢慮此上ハ候まゝと從夫ハ銘々木綿紐を打拵卷其余處を上帶又ハ下緒あとゑ致けるゞ甚強用立けれハ近村の農民これを見所望する者多ゝりける於爰郎等ども思けるハ主人長々の浪人用意仐ハ有といへども世間の思想また關東への聞へも有ハ銘々内職を爲主人を見次て其肝要也是幸の事と彼木綿紐をハ打出始て高野山へ持行ける處に珍しき重寶の物也と諸人買需賞翫しける程に後ゑハ堺の商人是を知て求商ける則是を眞田打と号段々堺ゑて是を學ひ眞田打普く廣まりけり何樣の噂關東へ聞へ眞田浪人の後ハ武藝を捨唯後世の營より他事おしと沙汰しける然るゑ慶長十四年六月四日一翁齋行年六十五歳ゐて病死す去ども幸村其身無双の明智成ゐ爰の軍學秘傳盡受得たる故古今無双の名將とハ成ぬ去ハ一翁齋病死の後ハ所存有て病氣と偽長髪乱鬢の姿ゑて盡ハ慰紐を打夜ハ深更ゑ遲まて軍學ゐ眼をさらし郎等望月根津の輩ハ浪々の躰ゐて紐を打ける屋敷の内ゑハ父安房守ゞ寶塔を建朝夕香華を備生るゞ如死後の孝心を盡けり今ゐ其寶塔眞田屋敷ゑ殘れり玆又淺野左京太夫幸長ハ家康公の御内意を受幸村大坂ゐ入城する事ゆや有と郎等淺野八郎左衛門谷崎小左衛門に物訓たる足輕多く差

添九度村の近村ゐ差遣し密ゐ容子を窺せける幸村早も是を察し病氣の躰ゑ偽爲ハ實と思ひ頓て其由を注進す斯折節眞田伊豆守信幸高野山の御代參首尾能相勤夫より眞田屋敷ゑ來り先爰一翁齋ゞ墳塋をハ拜し内ゐ入て幸村ゐ對面す幸村病氣の由を云て蒲團ゐ凭おゞら挨拶し互ゐ疎遠の情を述伊豆守ヤけるハ去年爰君逝去の刻馳登葬拜をも成度思しかゞ遠方と云仕官の身おれハ心ゐ任ず家來を代拜ゑ差越たり此度當所ゐ立寄とハ太閤十三回忌の御法事高野山ゐて御修行在せらる是ゐ依て某御代參として立越たり二ッゑハ其方へ上意の旨有と云けれハ是ハ思掛おき義御覽の如く病中おれハ無禮の段御免下さるべし如何ある上意ゐ候哉と尊けれハ伊豆守懷中より二通の御墨附と取出其方事御懇望有て此度召抱るハんゞ爲川某御使を蒙り罷越たり頂戴致されよと差出ける幸村手を束てヤける樣數おらぬ私人がましく思召御召抱下さるべき段難有仕合早速御請ヤ上仕官仕べき筈おれども御覽の

如く病氣之其上又一翁齋諸共蟄居致候上ハ再仕官の望是おく候得者御前宜敷御取成仰上られ下さるべし御墨附ハ返上仕候と開も爲す差戻す伊豆守重てヤけるハ一通ハ聞たる理おれども懇望ゐ遂ハ武士の面目去ども小知おれバ不足も有べし是見られよと押開き信州一國の御墨附又此一通ハ將軍秀忠公より古御債を殘されず子々孫々迄御見捨有間敷との沒事之如何の首尾おれバ其方沒奉公ヤよ於ハ國主の列ゐ坐し家の規摸子孫の榮何事の是ゐしかん先沒請ヤ置て病氣保養を爲全快次第早々關東へ下向致さる可兄伊豆守ご沒使を承しとおれバ我よ對しても仕官を致され候へなと、樣々利害を說言葉を盡して勸けれバ幸村言を改めて仰ゐや及べき武士の家ゐ產て出世を望ぬ者や候べき去ご眞田の家ハ其元樣惣領と云箇地を領しるへバ血脈の絕ゐ非ず何をヤも我身の病氣一夕の事よ非ず軍旅の勞よや惣身の節々痛起居も自由おらず斯身ゐて仕官致さんと思も俠らずいと一向承知の樣子非バ今ハ伊豆守詮方おく此上ハ力おし去と其方ハ涙人ゐて一生を過すともせめて倅大助を我方よ引取分地すべしと云バ近頃御志さし忝候然共倅大助ハ出家致させ一族の菩提を吊ハせヤさん爲高野山遍花王院に遣置たり近々出家得度の積に候得者其事も沒宛下さる可と賊ゑやかよ偽けれバ伊豆守も兄弟の事おれバよも別心ハ有まじと殘念おゞら暇乞して歸けり

第五回　秀頼堅衛入二條一　清正懼毒僵二斃本一

八皇百八代後陽成院ハ慶長十六年ゐ沒位を政仁親王へ讓るひ後水尾院と号し奉る四月十二日沒卽位と仰出されけれバ是よ依て將軍秀忠公の沒名代として井伊兵部太夫直政上京す駿府よりハ家康公御末子たる右兵衛佐義直公（十男也）常陸介頼宣公（十一男也）の沒兩所を伴せるひ二條の城よ沒上洛有西尾豐後守を沒使者として大坂へ差越る豐後守城中ゐ伺候して申上けるハ此度沒卽位ゐ付家康公始義直頼宣沒上洛あり江戸將軍沒名代として井伊兵

部太夫直政罷登候沒卽位の沒、悅ゐ四月十五日ゐハ沒上洛沒參內有て然へし尤二條へも沒立寄有べし其砌久々よて沒對面おされたき段申上秀頼公淀殿沒承知の旨沒返答ゐて使者を歸され加藤清正淺野幸長を始とし諸侯を集京都より申越し題御內談有よ孰も言葉を揃て申けるハ是迄御參內延引せり此度沒卽位の沒悅こそ幸おれ急沒參內有て然る可と申上る秀頼公よハ虛弱の沒生故上洛を好るず淀殿ゐも參內ハ格別二條ゐて家康公と御對面在事何共心本おく假令參內有とも二條へ立寄せるふ事ハ沒無用たるべしと仰ける何とおく家康公を疑ひるふ折節おれバ如何さま君子ハ危よ近寄すと申せバ此義は然まじと申者多のりけり此時清正席を進て申されけるハ此度京都より參內を勸奉ハ我君沒虛弱おるを察し若沒上洛無よ於ハ惰弱の君と風聞させ沒威光を挫こんゐ爲の謀也亦參內有バ家康公ハ右大臣君ハ內大臣ゐておハしませバ一階の末座をさせ諸侯の中ゐ於て威を震世上へ幕下の如知しめむ爲也此兩段を挫かんよハ沒上洛有て然べし尤參內の義ハ此度よ限へからず家康歸國の後何時よても苦からず豐國御參詣ゐ事寄二條の城よ沒入有て家康公ゐ沒對面遊されて其日よ還御在おバ彼方の手立齟齬て御器量の顯處也先んずる時ハ人を制すと申せバ四月十五日を待よも非幸ひ三月廿八日は最上の吉日よ候得バ御上洛有べし途中ハ勿論始終御興添の役ハ清正相勤候得バ少しも御氣遣有可からず若危險事有バ家康公を始假令如何おる者おゝ共撮殺君を守護して當城よ歸らん事清正ゞ手裏よ在疾々御用意然る可と申上る淀殿尙も御思案顏ゐ見へけれバ清正氣色を替て此度ハ大切の義御上洛無よ於てハ彌君を惰弱と云立家康ゞ謀よ乘ん事口惜き次第也此上御承引無よ於てハ清正當城よ有て益おし御暇を申上在國仕らんと思切て申たり淀殿御心ゐハ適ねども今大坂の城中よて大臣と云武勇と云諸人恐をおす程おれバ臣とハ雖も是非ゐ及ず御得心ある片桐市正木村長門守言葉を揃清正申上る通

り四月十五日と申來を三月廿八日ゟ思掛なく浅上洛有べ
關東の胸算ゟ違べし是軍の不意を討ゟ等亦我々浅供致さ
べ少も浅無遣ひ有る可らすと申上る淺野幸長是と聞て
此義實ゟ然べし去あゞら御承知の旨御返答ゟ及べれし上
ゝ俄の御上洛輕々しけれべ前日ゟ其段仰遣され然るべし
と申ゟぞ此義ゟ一決して三月廿六日ゟ御上洛の旨御使を
立らる扨御供の人々ゟ廿七日の宵より登城して其手配と
爲先陸地の護衛ゝ加藤清正の手勢三百余騎淺野幸長か手
勢三百余騎左右の道を警固し秀頼公の御持箇鉄鉋百挺左
右の堤を固め前驅次ゟ御弓百張其次御長柄百筋宛也何も
二行ゟ並て御舟を守る七組の物頭郡主馬之助良則中村式
部少輔氏春野々村伊豫守雅春堀田圖書介勝重横野豊後守
頼雅伊藤丹後守長實馬乘ゟて供奉したり秀頼公の御舟ゟ
ゝ片桐市正木村長門守大野主馬之助薄田隼人細川讃岐守
毛利河内守津川左近今木源右衛門平井吉右衛門を始として
御側の輩三十五人加藤清正淺野幸長の両人ゝ秀頼公
の左右ゟ伺候し嚴重ゟ守護し率御慰ゟゝ碁ゟぜ遊しけ
る此時清正指圖して片桐以下の卅五人いつれも種島懐中
させ彈丸を籠火藥を入てすゝと云べ火薮を切む準備也其
身ゝ故太閤より拜領せし吉光の短刀を内懐ゟ隠し家康
悪計はゞ手ゝ見せしとぞ構たり是ゟ依て淀殿始清正御
側ゟ有上ゝ氣遣あらじと特〳〵く思れたり既ゟ三月廿七日
の夜丑の刻大坂を御出城ゟて京橋より御座舟ゟ召けり水
主五拾人引舟四十八艘何も櫓四丁ゟ小橈四丁也陸引の人
數百人ゟて御舟を引明廿八日辰の上刻ゟゝ伏見ゟ御着ゟ
て從是秀頼公御興ゟ召れ二條を向て急るゝ清正幸長袴の
裾を高取左右を守護し奉る其外御供の面々綺羅を飾二條
の城ゟ入るゝ此時家康公ゟゝ清正ゞ推量ゟ違ず秀頼ゟ上
洛を勸とも天禀脆弱あれべよも上洛ゝ爲まじ若亦上洛
すとも官ゝ我より下あれべ參内の折柄末座せしめ耻辱を
與へ幕下の如成んと心ゟ企計在し處清正ゞ智勇を以て是
を察し廿八日ゟ對面有度旨申來けゝ是ゟ依て兼て公家を

抱込參内の儀不覺を取さんとの計略空敗ありぬ是皆清正
ゞ智測より出る處也神君熟々思召れけるゝ到底清正を生
置ゝ始終の妨と成我大望成就〳〵難し然りと雖も差當た
る過失無けれべ彼を亡ぼす術數も無此上ゝ毒藥を以て害
するより外無と御心を定るひ今日來るを幸其謀を成
んと御用意有叉手御迎として淀へゝ池田三左衛門郷政細
川越中守両人罷出家康公の御口上を述途中の御機嫌を伺
問奉則御供する右兵衛佐頼宣卿常陸之助義宣卿の両公達
ゝ伏見迄御出迎るゝ二條ゟゝ浅饗應の支度夥多しく秀頼
公の御相伴ゟゝ三條御幸町ゟ在ます太閤の御籠中大政所
を招さるゝ政所ゟゝ木下肥後守家定を御供ゟて襄ゟ御越
有大坂より淺井周防守御進物を持參す安藤帶刀是をうけ
取

目錄

一國宗の御太刀　一腰
一吉光の御脇差　一腰

一緞子　卅疋
一綿　拾疋
一猩々緋　廿疋

右ゝ秀頼公より家康公へ進せらるゝ

一縮子　拾卷
一絵子　廿疋
一真綿　百把

右ゝ淀殿より御同人へ送るゝ

一縮緬　拾卷
一真綿　五十把

右ゝ秀頼公の御籠中千姫君より御同人へ送るゝ也

一國俊の御脇差　一腰
一小皷かるた筒　一挺

右ゝ秀頼公より義直卿へ進せらるゝ

一國秀の御脇差　一腰
一能衣裳　一具

右ハ御同人より頼宣卿へ進らる、

此外秀頼公御土産として家康公の御側衆五人へ時服一重黄金五枚宛被下池田輝政細川忠興へハ御刀一腰づゝ被下

ける斯て秀頼公ハ内大臣の装束華麗ゑ清正幸長左右ゑ隨二條の城へ入るゑ家康公も同御装束ゑて出迎るゑ清正心ゑ思ふ様君ハ内大臣親父めハ右大臣殊ゑ孫婿と見下末座ゑ置ハ必定也其時ハ太閤の御遺状を言出し君臣の義を立て末座へ引下虚弱の君と侮し大名共へ沫吹さんと八方ゑ眼を配並居諸侯ゑ一礼して秀頼公ゑ引添静々と御殿へ登し有様ハ日本無双と云つ可此時家康公秀頼公の御手を取上段の間へ請じるひ二疊計下て座ゑ付仰られけるハ先々久々ゑて對面致候壮健ゑふ沒成長我ゑ於何程ゑ満足せりと一礼を成るゑ爰ゑ於て清正少心と安め申けるハ我君ハ御若年と申殊郷君也駿府公にハ沒老年と言具君の沒事ゑれバ沒對座有て然可と言上す秀頼公にも沒挨拶有家康公清正に向仰ゑハ以後ハともゑれ今日ハ賓客也饗應ゑ同座ハ無禮成可付てハ加藤淺野の両人遊路の處供奉致さる段苦勞也其外の面々何も叮嚀の沒挨拶有次の間ゑハ片桐を始沒近習の輩懐中ゑ種々島を携清正の差圖有バ討て出んと銘々煙草盆を膝本へ引寄待ゐたり城中ハ玄關迄沒供せし沒手廻の中間と拵將監岡村與八郎江原和泉北村五助大館作兵衛を始として屈竟の輩清正の下知ゑ隨下部と成て沒長刀沒道具又ハ沒挾箱沒持と成沒玄關の傍ゑ扣すハと云バ打入むとこひ口を寛げ扣たり城外ゑハ郡主馬之助を始七組面々持筒を持せ弓長拆夫々ゑ扣させ大事有バ貴入と手配して待掛たり是皆清正ご計とりや斯て沒座敷ゑハ大政所沒相伴ゑて種々の沒饗應ゑり沒給仕ゑハ阿茶の局を始女中而已ゑて諸侯の分ハ壹人も沒側ゑハ出す是清正を始供奉の面々疑を爲非を思慮と女中而已を配膳ゑ出し玉ふ去ど秀頼公御州心有て御膳部ハ勿論何一品召上られず清正幸長も奥の間ゑて御馳走仰付られ相伴ゑハ池田三左衛門輝政其外諸士入替立替饗應ゑ清正

ハ用心して一品も口中ゑ入ず家康公此躰を沒覽有てさてハ清正油斷せぬと見へゑり今日を過しゑバ我謀計用る時有まじと沒心と痛玉ひ頓て沒工風有て手自ゑら茶を點給ひ何ゲゑ馳走と存ずれ共火急の上洛故麁末の事而已なれバ先づ濃茶を進せん三左衛門心見て次へ廻されよと持出給ふ輝政押頂試て清正へ廻す輝政ハ家康公の秘蔵鞆ゑれバよも氣遣ハ有まじと清正も是を呑淺野ゑ廻幸長呑了何も沒禮中上清正ヲけるハ秀頼公沒參内の義ハ追て沒沙汰有べし今日ハ豊國沒祭詣有て直様大坂へ沒歸城候得バ早々沒立然可と申上る家康公も強て止給ゑず沒隨意次第たるべしと直ゑ還沒の沒催し有沒供の人々も無事と悦二條の城を出給ふ家康公も沒玄關迄送給ひ義直頼宣の両公達を以て伏水迄送せ給ふ沒両所ハ沒後より送給ふ處五條の橋ゑて清正申けるハ秀頼公ゑハ豊國沒廟參ゑて候得者從是沒歸有べしと強て申ける故沒両所ハ五條より歸り給ふ夫より豊國へ沒參詣有て伏見へ出給ふ清正秀頼公を沒舟ゑ乘奉て用意の沒膳を差上沒供の諸士ハ川端ゑ幕打廻飯酒を勧木々迄も皆支度させ給ふ手配少も間違ゑく暫時の内ゑ整しゑバ何も清正ゲ才智を感しけり從是沒船を急せ給ふ程ゑ其夜の四ッ時ゑ沒歸城也御母堂淀殿を始御簾中の悦淺ゑらず諸侯安堵の思を爲翌日家康公の沒使として榊原式部大夫大坂ゑ來沒上洛の沒禮として沒口上を述尤家康公大坂へ沒出有べき筈ゑれども御即位ゑ付沒用多の折ゑれバ右兵衛佐常陸助両人を以て沒禮仰上らる可ゑて候と一通を述べ歸京せり則四月二日家康公の沒名代として両公達大坂へ來給ふ沒進物の沒使ハ竹腰山城守相勤

目錄

一白銀　千枚
一白銀　弐百枚
一綿　弐百抱

右者秀頼公へ家康公より

右者淀殿へ御同人より

一白銀　百枚

一綿　貳百抱

一紅花　貳百斤

右者千姫君へ御同人より

一御太刀

一馬代

右者秀頼公へ右兵衛佐殿より

一御太刀

一馬代

右ハ秀頼公へ常陸之助殿より

右之通毛利豊前守を以て披露す則御饗應數刻ゑ及て歸給ふ扨家康公ハ御即位の御祝儀事ゑく相濟四月十八日ゑ京都御發足ゑて駿府ゑ歸らせ給ふ加藤肥後守ハ城中ゑ逗留し家康公大坂ゑ來給ふ哉と見合けるうち早駿府へ歸給ふ由聞けれバ竊ゑ片桐木村湖田の三人を招申けるハ此度君御上洛有し故關東の手便を挫と雖も猶心安のらず兼て申如當時城中の諸士不足也ゑ付高野山の麓九度村ゑ蟄居せし真田安房守ゲ悴左衛門尉幸村ハ父ゑ劣ぬ器量也と聞及又黒田の浪人後藤又兵衛基次ハ天晴の勇士也伐倆ハ朝鮮ゑ於て能知りたり是等の人を召抱置時ハ必君の御用ゑ立べし其外ゑも勝たる者あらバ召抱申さるべし清正ハ一先歸國の致政事を申付て年内又こそ上坂すべしと談合御暇を申上肥後の熊本へ歸られたる處ゑ五月初旬より病氣差發醫療手を尽と雖も其驗ゑし清正大ねゑ氣を苦め我命ハ惜ゑ足ず去ゑのら今死時ハ秀頼公の御事始終心本ゑし來春ハ君廿歳ゑ成給へバ御申恭内を遂是非共關白職を申請んと思しゑ今一年の心ゑ任せず殘念の事やと種々心を苦め申されける程ゑ病氣彌々重六月中旬ゑ至てハ頼少ゑく也ゑけり清正俄ゑ佛師を召寄甲冑せし我像を刻ませ是を天守ゑ納させ天を仰て嘆て曰我幼君を守奉再び豊臣の天下ゑ成と思しゑ志半ゑして死ゑんとハ嗚呼惜

かゑと一聲高く叫慶長十六年六月廿五日終に黄泉の客とハ成れけり于時行年五十歳也此像熊本の天守ゑ在て今ゑ神靈有事世の人能知處也

第六回

關東派遣使者食田大坂慮レ事徴二涙士一

去程ゑ加藤清正病死の由駿府へ聞けれバ家康公手を拍て大ゑ悦ひ給ひ彼ハ大坂ゑ於て無雙智勇の者也當四月ゑも御即位を幸ひ秀頼ゑ上洛させ内裏ゑ於ていさく恥辱を與へ以後參内爲ざる樣ゑせんと思し處清正早是を察し我謀を挫已ゑらず却て秀頼の威を畏事是皆清正ゲ智勇の致處迚も彼を生存てハ我心中安のらず是ゑ依て不便ゑゲらも翌三右衛門畑政と我ゑ心を寄たる淺野幸長諸共濃茶ゑ毒を入與へしかバ流石ゲの清正も心を緩甘々と是を喰死たるこそ心地よし畑政幸長も近内ゑ落命致べし是等ハ我耳目の者共ゑれゑ大望ゑハ替難し清正死するの上ハ大坂と傾けん事夢を返すよりも安のる可しと悦給ふ夫より肥州ゑ御使を立られ清正の子息忠廣を駿府へ召れけるゑ忠廣ハ父ゑハ肖もやらず淺智無謀の人なりけれバ家康公の威を恐て大坂へ届もゑく駿府へ下向す則家督仰付られ肥後守ゑ任ト七拾三萬千八百四拾石の御朱印下され其上將軍の御養女を以御婚姻有し故無二の關東方とハ成りゑける爰於家康公日本の間地石高ゑ尺竿を入石數を改させ太閤の御朱印を改め大小名を幕下ゑ付牌を固夫より大坂年々の經費を百萬石と定御内へも尺竿を打結けれバ大坂の諸侯大ゑ驚き亦々寄合評定ゑ及けり此時清正既ゑ病死ゑて子息忠廣關東へ勤仕と聞けれバ忠臣の躍ハ力を落と雖も大野修理ハ淀殿と密通して有けれバ兼て清正を忌嫌思此度の死去を悦淀殿を鼻ゑ掛て誰憚ず驕頗ゑ上座を爲我儘の取計已致けり此度御墓所經費百萬石と定しバ古老の臣等是を哀一統ゑ會合して評議す中ゑも淺野幸長ハ大禄と云殊ゑ諸人の用も重城中ゑて肩を毀人もゑく既今日も上席たり誰り知む此人ゑ二心有とハ時ゑ大野修理言葉を發して曰此度御領地五畿内ゑ等を

入我君を輕蔑よし奉大名同前の取計を爲事關東の我儘無禮の甚敷也是等の事を其儘ゐ差置あゞ如何の難事を去掛も計難各々如何思いるゝやと申出す此時木村長門守進出て未座の意見憚有とい申せ共まづ我見を以て是を計ゐ此度の一義い關東の謀計ゐして既よ逆心顯さり然時い何ど彼ゞ下知を受て幕下の如あらん哉良幕下とありて隨共遂ゐい大坂を失べし此上い當城ゐ兵と集早駿府に打て下忽狸親仁を取押へ其勢ゐ乘て關東え押寄秀忠を討取ゐゞ有無を言ずして豊臣の御代ある可と勇掛て申けれゞ薄田隼人渡邊内藏助言樂を揃へ木村氏の高見甚宜是迄い君御幼少ゐ渡らせ給へゞ是非あく關東の計を受ると雖も今斯の如あり行ゞ早御出馬有て然べし君御出馬有程あらゞ太閤恩顧の大小名馳參ひい必定也良日本の大名共悉關東の味方あるとも何程の事有と左も勇しく申けり片桐且元大ゐ是を制し方々の評議甚急也今軍器を動し關東を制する時い是非い右もあれ將軍の職い天子より被任

府ゐ下向し諸士會合の趣を遂一よ申上る家康公仰有けるい木村薄田ゞ血氣よ乘兵を起とい屈竟の事ありしゐ片桐めゞ深所存委細ゐ聞屈さり御手前儀我よ志を運每度の內通過分也一旦百萬石と定されど貴殿使の規摸よ凶年の節い加賀中納言利長よ百万石の見繼さすべし然あれゞ不作とて差撰も有まじと則利長よ此旨仰渡けれゞ利長汞凶年の節い分國の米を以て大坂を見繼べき旨承引給ふ斯淺野幸長い凶年の手當を整大坂よ歸り此由を申じる夫より程あく病氣付て翌年八月廿五日三十八歳ゐて死す又池田輝政い同年正月卅五日行年五十四歳ゐして毒害の爲落命す爰ゐ片桐且元い清正存生の折柄申せし事を思何卒眞田後藤の兩人を招と木村薄田あゞゐ申合秀頼公淀殿へ程能申上れゞ則大野よ御相談有る修理申けるい某も乘々御人少分故宜敗者を召抱と存遂々へ手筋を求候處關ゞ原より浪人致たる長曾我部宮內少輔山口左馬之助の兩人い智勇勝し者あれゞ竊よ通し置て候尤眞田後藤の輩い名高者よ候得へゞ城中よ有て宜のらんと申上る爰よ於片桐い後藤又兵衛基次を取持て大坂よ仕官す抑々後藤ゞ系圖を尋ゐ俵藤太藤原秀卿より八代の孫後藤兵衛實基ハ左馬頭義朝ゐ仕て勇名の響高し夫より十八代の後胤後藤宮内陸前司直次織田信長公よ屬しけるゞ信長卒去の後い丹後國茅原村よ蟄居す一子又兵衛基次い此處ゐて生立しゞ幼年よして父母を失夫より諸國武者修行して兵術ゐ達し黑田長政よ任て朝鮮の軍旅尤功ゐり歸國の後過分の威稱を給いつて筑前國大隈城主と成し處よ關ゞ原の一戰起り甲斐守關東の味方を爲けれゞ基次深くを是を諫君い太閤恩顧の家あれゞ幼君の御爲家康を敵ゐ取て然へしと云とも甲斐守是を用ゐ終ゐ關東へ屬しけれゞ又兵衛暇を乞て浪人し四國阿波の國よ渡り此處よ居を卜兵術の指南をゐして世を渡ける元來軍術兵學ゐ勝し者故大家より召抱とすれども泰平の政事を好まずあれ今よも一戰あれよゝし我智謀を顯者と思の故妻子を捨て身

を我儘ゝ暮けるゝ然ゝ此頃關東より大坂を亡さんと企有
由色々取沙汰致けれゝ兵衛是を聽て去ゝ大坂の微力を
助關東武士ゝ沐吹せ日頃の鬱氣と散ずべしと四國を立て
泉州堺ゝ來此處ゝ故卿の友又兵衛と言者獵師して有け
る故先此家ゝ滯留して大坂の樣子を窺ける斯折節片桐
ゝの使者來り深懇望して招けれゝ基次一義ゝも及ず承知の
由答ゝ及片桐ゝの屋敷ゝ來對面す且元大ゝ悦身の廻ゝを
取繕翌日同道して登城をし秀頼公へゝ目見ゝ上る則五
千石ゝて召抱られ隱岐守と名乘七組の番頭格たるべき由
命せらる後藤有雜旨御請申上片桐ゝ向てゝけるゝ新參
の某重き上意を蒙殊ゝ隱岐守ゝ任せられ候事冥加ゝ
余候得共何の高名も無ゝ官職を受ゝ事本意ゝ非退て分
捕仕其上ゝて頂戴仕べしと固辭退ゝ及一のゝ又兵衛尉
基次と号して出仕す扨また山口左馬之助弘定明石掃部之
助金澄の兩人を二千石宛ゝて召出さるゝ山口ゝ加賀の國
大聖寺の城主山口玄番ゝの次男也父玄番ゝ石田ゝ組して討
死す弘定ゝ但馬の國ゝ隱れ居りけるゝ此度大野ゝ招ゝ依
て大坂ゝ勤仕す明石金澄ゝ備前の小島飯山の城主明石源
三郎金則ゝ子ゝて關白秀次公ゝ仕へけるゝ秀次公滅亡の
後浪人して江州大津ゝ蟄居し淺井周防守の紹介ゝて大坂
ゝ勤仕す其外鈴木藤右衛門重冬赤松伊豆守則友赤松帶刀
則長此三人ゝ播州赤松の一族たり各々千石宛ゝて召抱ら
れたり此節當城ゝ臺所百万石と定けれ共先格有ゝ物事大
行ゝして ゝ入用多く太閤御貯の金銀次第ゝ減少しけれ
ゝ古老の臣是を歎ゝ儉約然べしと申合り爰ゝ於て後藤又
兵衛ゝ工夫を以てゝ臺所を改見るゝゝ菓子肴菓物鹽味噌
薪の類其外何ゝ依ず小役人の私有て日々の費夥敷中
ゝも ゝ膳料として一日ゝ鰹節を丼本と定たり又兵衛厨房
役人を召て目通ゝて早天より暮迄鰹節を削せ見るゝ汗水
ゝ成て漸々五節を削ける是等の如事を悉く相改けれゝ
一ヶ年の ゝ費途數萬金の逸とぞ成ゝけり又糠を蒸て酒の
粕と擂とを和し是を味噌の替ゝ成て軍用の手當とす今後

藤味噌と言諸人賞翫そる物是也爰ゝ於諸人後藤ゝ戈智
を感ぜけり扨また九度村ゝ蟄居する眞田幸村方へゝ片桐
窮ゝ使を馳て秀頼公御懇望れ山を申けり幸村病中の体ゝ
て對面ゝ及申けるゝ片桐殿の内意委細ゝ承候然しゝのら
深所存の侯へゝ御大事ゝ及迄ゝ入城ゝ仕らずと答て一
封の書を渡す使者藤林助太夫立歸て且元ゝ是を渡す片桐
聞見て大ゝ悦び密ゝ秀頼公ゝ申五千石の御朱印をゝし
弟主膳正貞隆を御使として再九度村ゝ立越て秀頼公の
御朱印を給ゝりけれゝ幸村是を頂戴して大坂の御味方と
ゝ成ゝけり去ど此事を知者ゝ更ゝ ゝ

第七回

清韓長老記ニ鐘銘一
南光道僧釋ニ文義一

去る程ゝ慶長も十八年の春とゝり豊臣内大臣秀頼公も最
早御歴廿一歳ゝ ゝ給へゝ兼ての如く關白職を願ゝひ
と評定有て先御攝家堂上方を頼みて首尾を得んと織田
常信大野道犬の兩人ゝ京都へ登り賄賂を以て願ひけれ共
其功驗ゝく傳奏をして仰出さる、樣關白の義ゝ既ゝ九條
忠榮公ゝ仰付られたれゝ今更改めらるべきゝ非ず加旃
秀頼ゝ居ゝ ゝ内大臣の官ゝ昇り一度ゝ參内を遂ず去る
ゝより禁裏の聞宜ゝらず以後關白職の願ひ決して無用
たるべしと言嚴の仰を承け兩人ゝ恐れ慎み ゝ術ゝく
も大坂ゝ立歸り云々の由を申上れゝ秀頼公淀殿大ゝ驚き
給ひ諸臣を集て此評議をせらるゝ際大野修理申す樣我君
關白の願叶せ給ゝぬ時ゝ彌關東の威勢ゝ増して此方
ゝ百萬石の外樣大名同前たり爭ゝ豊臣の御代とゝるべき
今日の評議ゝ大切の事ゝれゝ孰も所存を包ず申されよと
云る言ゝ膝押し進め片桐市正申けるゝ斯る場合ゝ至れる
こと皆是關東の奸計ゝて尚此上ゝ甚麽ゝる難題を申掛我
君を亡として子孫迄安く天下を握むと企べし浩樣の事
も有んとて淺正存生の其折柄名高浪人を抱給へと御勸申
せしゝ關東の不意を防禦手當にてゝひしゝ今とゝりてゝ
此方より一戰を備ゝも甲斐ゝゝらじ良し催すも却て只歎
の籌計ゝ陷ゝりて竟ゝ此方ゝ反謀と起す人とゝらん仍

て思慮を回すあたゝ何事も關東の差圖ゑ任せ時節を待横と得て事を施は若し況して家康公も既ゑ老年ゐ漸給へゞ一両年の間ゑ〻て死去あらんゝ必定也其盧ゐ乘じ事を謀ゞ再び豊臣の御代と成んこと手を返すよりも安らるべしと申ゞ各々然ありと異口同音ゑ評したりゐゝる折しも關東より申來れる其條目ゝ此度關東ゐ勅使下り猶ゐ竣功せし大佛迦藍其供養並ゐ釣鐘おく大伽藍ゐゝ不相應速ゑ本尊の供養を行ひ釣鐘を寄附すべしと御沙汰ありたれゞ既條申送あり早々〻寄附有て然るべしと是關東の謀ありとゝ更ゑ知れゞこそ直ゑ惣奉行片桐市正且元を以て禁裏ゑ奏聞し妙法院三寶院兩御門跡へも片桐自ら罷越し來る四月十六日ゝ大佛開眼の供養並ゐ鑄鐘の執行致したり御門主方ゑゝ侍來臨有て千僧供養施行の程瓶奉るゑし申けれゞ兩侍門主ゑも奇特の事ありとて則諸國の僧侶ゝ四月上旬までゐ上京有べき旨仰られたり偖釣鐘の冶工ゝ名護屋越前橡藤原三昌ゑ仰付られ鐘の銘ゝ當時博學の聞

淵名禪僧の濟韓長老ゐ囑せられたり然るゑ家康公ゝ秀頼の太閤より貯られたる用金九億八千貫目の貨財を減させんとて太閤十三回忌の追福ゐ事をゑせ處々の神社佛閣を造營させ又ゝ大佛を唐金ゐて鑄立巨殿を建させ鐘鑄開眼供養ゐゞ種々ゐ費消しめ漸く百萬石の物成を授與尚も次第ゐ狹め畢ゑ大坂を滅亡さんと思召けるゐゝる折節秀頼武勇の涙人を抱給ふよし聞へけれゞ又手ゝ城中ゑも用心すると見たり油斷あらずとて京都諸士代板倉伊賀守ゑ仰て諸事を窺速ゐ注進すべき旨命せらる是ゐ因て此度清韓長老の記されし鐘の銘を寫し早速ゑ駿府へ差上たり家康公之を侍覽その銘文の末ゑ至て國家安康の四字侍目ゑ留て考給ふゐ鐘ゝ鐘木を以て撞ものゐり家康の二字を刻畫夜ゑ是を撞とさい適ゑ我を衝ゑ伴と思召則南光坊を召されて侍尋問給ふ南光坊その銘文を讀ひゑ

大佛鐘銘

欽惟

豊國神君昔年掌普天之下位億兆之上外施仁政內歸佛乘是故天正十六戊子夏之孟相攸於平安城東創建大梵刹安立盧舍那大像矣蓋夫慕蒲聖武帝南京之大像睇顔頼朝公東大之再建者也雖然慶長七年臘月初四不圖權變攸之變己爲烏有矣凡戴髮含齒之類无不歎惜焉粤

前征夷大將軍從一位右僕射源朝臣家康公謂正二位右丞相豊臣秀頼公曰舍那梵刹者豊國之剏建也不幸而有變也不能无遺憾焉　右丞相何不繼先志乎右丞相曰盛哉此言憑茲丕發弘願輙命片桐東市正豊臣且元再建舍那寶殿始于慶長己酉玉成于慶長癸丑矣速畢其功者以

大樹鈞命無監右丞相志願不淺也童子聚沙之戲猶功用不可測矧又過長者布金之制乎其佛身也万德圓滿之受用身華嚴會上之教主也盛上盧舍那藥上大釋迦華中小釋迦一華百億國一國一釋迦三重相關互爲主伴音聲无邊色像無邊之相好不移寸步可立而見矣寔變忍界成報土者乎其寶殿也公輸削墨郢工揮斧嵯峨棟宇高秀青雲之上璀璨玉碼深徹黄泉之底

千鍾聲性峰燦其內大梁小椽絡繹其上繡棚焜燿雕栱玲瓏階墀璨瑤鈴繹鳴風璧門前聳玉廊四回訝兜史夜摩忽現下界恠蓬島瀛州已在人間八天鬼神所共膽禮寔天下之壯觀也緬懷悲沒那爛陀大利甲于西域嘉州阿逸多大像冠于東震亦風猶在下矣加旃欲鑄梵鐘以備晨昏金銀銅鐵鉛錫白鑞積如丘山火官治工差肩而雲集鼓鑄時奮鎔範已設万鈞洪鐘一時新成矣周禮所謂干鼓鉦鐃甬衡旋篆无一不備焉昔在佛世梵王下鎔鑄砥桓金鐘拘留孫造石鐘諸佛出興亦不多讓矣夫鐘者禪誦之起止齋粥之早晚送迎緩急之節必鳴之以警衆焉顯密禪法之器制莫先於鐘故建寺安衆必先設之然又摧折魑魅屈伏魔外三寶爲之證明諸天爲之擁護廣寶吨王創輪頓空南唐李主累槭忽脫雲門七條德山下堂其妙用不可勝計矣蒲牢一聲上徹天宮下震地府雷鼓霆擊普及微塵利土使人天幽明異類耳根淸淨以證入圓通三昧其施不亦博乎金索鼓蓬以掛着寶樓祝曰仰願

天子万歲

台齡千秋

銘曰

洛陽東麓　舍那道場　聳空瓊殿　橫虹疎梁
參差萬瓦　崔嵬長廊　玲瓏八面　焜燿十方
境象兜夜　刹甲支桑　新鐘高掛　爾音千鍠
響應遠近　律中宮商　十八聲緩　百八聲忙
夜禪晝誦　夕燈晨香　上界聞竺　遠寺知湘
東迎素月　西送斜陽　玉笥掘地　豐山降霜
告怪於漢　救苦於唐　靈位惟夥　功用無量
所庶幾者　國家安康　四海施化　万嶽傳芳
君臣豐樂　子孫般昌　佛門柱礎　法社金陽
英檀之德　山高水長

時慶長十九甲寅歲孟夏十六日

大檀那　正二位右大臣豐臣朝臣秀頼公

奉行　片桐東市正豐臣且元

治工　京三條釜座名護屋越前少掾藤原三昌

前住東福後住南禪　文英叟清韓誌書

大佛殿方廣寺鈞鐘の寸方

一高サ　一丈　厚　九寸
一口の徑　九尺二寸
一量　五萬二千八百貫目

如斯清韓長老が肝胆を碎き作し文なれバ南光坊大わ感し天晴の文者博學と見へ候と申上一々ゑ文字の意を述て中わも東ゑ素月と向へ西わ斜陽を送の意い東を陰と一西と陽とし關東を夜とし大坂を晝としゑるゑ似ゑれども西わ有て日を見とさい入日也東ゑ月を向時い出る月也君東國わ在い日月共ゑ東より天ゑ登の象ゑて彼遲漸々ゑ幸社なれる實わ愛度の文章なり又國家安康の句わ彼韓の二字を編入れしも彌吉事の限なり彼名を鐘わ記擅時い自然と彼名い四海ゑ響國家安康ゑ化を施しるふべき徵也感わ君い聖の藥師寅童子の再來ゑて在バ清韓長老意外も浩文字を措られしい天下一統ゑ玄ろしめす前表ゑして彼吉事是ゑ過べからずゆと言上す家康公大ゑ寧悅るひ扱い調伏ゑてい无しと思ゐへど此文章わ入ゑる家康の文字を盲立秀頼を降參させ大坂の城を取上國替さすべし若違背せバ軍勢を催し責亡して永く天下を子孫ゑ傳へんと彼心ゑ笑を含せるひ調伏なりと難題をいひ掛んとあそい御工夫有けり去りながら此銘文い平定の後板倉伊賀守ゑ命じて文字を悉く削除し今い跡だも見へざるなり

第八回

勝重挾勅停供養　重成握拳憤抑令

既わ慶長十九年甲寅四月わ至諸色調ひ大佛開眼供養十六日と聞へしかバ導師わい妙法院宮主願ゑい三寶院彼門跡其外天台の僧五百人眞言の僧五百人合て千僧を集へ供養嚴重わ用意わる此事諸國ゑ隱なし是わ依て畿內近國い云ふもさらなり國々より登集るもの老若男女蟻の如く幾億万の數を知す醍醐小栗栖日野勸修寺小幡山科八瀨小原鞍馬岩倉嵯峨仁和寺西の岡桂谷の堂岸の堂東寺四塚鳥羽竹田淀伏見或い神社佛閣の回廊山門まで人の宿さる所

もおし惣奉行ゝゝ片桐市正僧衆饗應ゝゝ大野道犬惣門の固ゝ早見甲斐守足輕五百人小頭五十騎火消として郡主馬之助騎馬千騎ゝ鷹の者三百人召伴て扣ゝより諸司代板倉伊賀守家老尾崎又之丞金子八太夫大目附田那村官兵衛を始として物頭三人足輕百人警固の爲いたしける大佛殿の石垣ゝ金綱を以て包み回廊の内ゝ壘を敷幔幕を繞て屏風を立させ堂の前後左右ゝ高さ七尺五寸の花瓶ゝ置銀の香爐ゝゝ名木を薰らせ左右ゝ糸籠十六本をおく六角ゝして高さ壹丈也七重の寶樹七ッ有皆金銀瑠璃砂碩瑪瑙珊瑚琥珀の七寶を以て鋤り庭の白妙ゝゝ緞子を敷錦の幕を張大衆の住所を搆調内陣ゝ錦を以て張詰樣側ゝゝ猩々緋をしく内ゝゝらんけん緞の壘を敷佛前ゝ金銀の土器ゝ餅根菓の四十八具を備へ百味の飲食を陳列たり此餅根菓の餅と言ゝ餅饅頭落雁洲濱素麺惣して菓子の類也根とゝ大根午房小角豆猶木昆布の類也菓とゝ瓜茄子栗梨九年母總て菓の類也是と四十八品蒐集ものを云ふ也百味の飲食とゝ餅菓子青物干物の類百味整といふあり其外時氣の珍物山の如くさながら寂光淨土安養淨利ゝ似て都卒の内院も斯やと許見ゝける百廿間の回廊の中兩御門跡の御用として三間宛千僧の用意として五十間但し一間ゝ廿人との積也下僧並雜掌の所用廿間御代官三間五攝家大臣公卿御參詣の所用十八間大政所三間奉行五間諸司代三間臺所々緞の武士女中方の所用八間雜式の所用弐間也殘る弐間ゝ此度御用を勤し鍛冶番匠鑄物師繪師佛師箔打漆工塗工金具師の面々拜見を願ひける故二門の所用を下されける雜弐ゝ廣庭ゝ是ゝ居余けれゝ雜式の所用をも下されける雜弐ゝ廣庭ゝ並居たり斯の如く公家武家門内ゝ居余るほどあれゝ諸國の參詣ゝ回廊の外迄も行事能ゝす門前ゝ群集して早く來し者ゝ耳塚の上ゝ登り千躰佛のごとく遲者ゝ泉涌寺阿彌陀峯の木の枝岩の上ゝ昇ども何等の興趣見へす四條五條東福寺稻荷の邊迄雜沓肩擊エイヤ々々々の聲斗既ゝ巳の上刻とあれゝ勅使として正親町大納言公宣公院使中院左

中將通次公御參詣ゝて御備物有片桐を始として各々門前ゝ出迎へ奉る秀頼公の代參木村長門守衣冠正敷平伏し御禮申上げ御佛拜終て回廊へ御案内申上れと直樣御歸館ゝ有り程あく樂人乱聲を吹て廣庭ゝ出れゝ兩御門跡を始千人の僧衆伽陀を唱給へゝ遠近見聞の貴賤隨喜の涙を流し無何有世界ゝ至り極樂淨土ゝ生るゝゝと他念と忘るゝ處ゝ諸司代板倉伊賀守與力廿人同心四十人長柄の足輕百人を召連早馬ゝて馳來り片桐市正ゝ對面し申けるゝ只今關東より早打來れゝ其故ゝ大佛供養ゝ事をよせ鐘ゝ調伏の文字と措られし事關東ゝ相聞へ將軍より禁裏ゝ奏聞有是ゝ依て供養停止仰付らるゝゝ有り早僧衆ゝ披露有て止られて然るべしと大息喘て述ゝけり且元是を聞大ゝ愕然しゞ漸々心を沈め板倉ゝ答て申けるゝ仰承て候得共只今ゝ迄兩御門跡を始奉り月卿雲客並ニ秀頼公の御代參大政所も御拜參之殊ゝ御經も半ゝ候へゝ如何ゝ關東の仰也とて此儘ゝゝ止難供養終て後越度とあらゝ且元切腹仕らん是非共供養終までゝ控却られよと云伊賀守是を聞申けるゝ貴邊切腹あらゝ其身一分ゝ相立べし身不肖ゝゝ候へゝ京都の守護と承今申せしも關東よりの計ひゝ非大御所より奏聞を遂られ傳奏を以て仰付られ一勅命也かゝる故ゝ伊賀守直ゝ向たり斯の如くあれゝ一刻も延引成ゝたるべし若違背あらゝ秀頼違勅の罪遁可らすと申ゝぞさしもの且元も勅命有ゝ力あく内陣ゝ入て木村ゝ斯と告けれゝ長門守大ゝ怒狸親仁めゝ例の我儘場所と言數萬人の此中ゝて停止せゝ我君の御恥辱是ゝ過す何分供養終迄斷をいひ其上得心致すゝ伊賀守とても許怨べからすと立んとす且元是を押止我も同く思しかど勅命と有ゝ餘方なし今是を用ざる時ゝ秀頼公の御爲悪く却て不忠と成可口惜くはあれども胸を撫られよと宥て兩御門跡へ停止の旨を申上け板倉伊賀守ゝ與力同心ゝ下知を爲て群集の貴賤ゝ停止を觸させ百人の足輕棒を以壓々ゝ追立ければ當麻竹藪のごとく集し諸國の人數子細ゝ知す我一ゝ逃とすれども

行先人の鮓をあし瓦ゑ押合方角を取失歎き叫聲喧々く大地も崩るゝ斗ゐ騒動す回廊ゑは公卿方の女中諸人の叫聲ゑ驚給ひ我先と道を求索て逃とし給ふ附々の者ゝ幕毛氈を取折ゑ野風呂敷煙草盆をゞ打返し忽熱湯ゑ火傷をすれゝ此方ゝ炭火で衣裳を焦狼狽る有樣ゝ取も直さず焦熱の苦也此騒を幸と盗賊許多出來り女中の上着を引剝包物を奪却逃出を驚固の武士等追掛て押し捕へ又ゝ討て捻るも多りゝし武士と武士とゝ行違ひ踵を蹈やら袴をゝ引裂抔して口論し忽拔合打合へる樣ゝ自と修羅道の街とや謂べし門前ゐ繋し馬の物音ゐ騒いだして足と傷し或ゝ人を踏殺し又ゝ内ゐ駈入て火瓶香爐を蹈轉爰ゐ於て怪我爲もの居多し口附の奴等斷々ゐ駈來り或ゝ鞭打口をわり足を縛し有樣ゝ畜生道の苦也浩騒擾の折あれゞ公卿官女の方々も歩行跣足ゑて逃給ふ有さまゝ天人の五すひも斯やと淺ましゝ稍々と暮ゐ及大半靜りけれゞ辨當さへの落散しを乞食盟の集りて喰へる者を棒突の足輕ゞ追立る有さまゝ實ゑ餓鬼道也今迄ゝ極樂淨土と見へたるも暫時ゐ變ドて六道の巷と成しゝ目も當られぬ事ども也昔秀吉公弘法大師自作の大黒天を碎給ひし如く大佛殿供養の善根碎し事ぞ果敢けれ木村長門守ゝ注進の爲早打ゐて大坂へ立歸る片桐市正ゝ伊賀守ゑ對し調伏の筋を尋問けれども仔細を云らず委細ゝ駿府ゐて糺されよと返答ゐ及しかゞ清韓長老を伴て大坂ゑ歸る其日勅使の両卿供養の廟ゐ居給ゝず佛拜而已ゑて歸らせ給ふゝ是關東より内々ゐて拵置たる事也其故ゝ勅使御對座の中ゝ停止致事叶ず御歸りを待て板倉停止の由を申せし也前日ゑも斯有度事あれどもその日ゐ至て停止をさせしゝ大金を費させんが爲又ゝ數萬人の中ゑて關東の威勢を見せんが爲故とかくゝ計ひ給ひし事ゐる可し

第九回

木村變レ容謀ニ駿府一　渡邊奉レ書使ニ江戸一

扨も四月十六日大佛供養の中止より驚擾を來せしゑより秀頼公の御前に清韓長老を召し銘文御吟味有處ゐ元來作

意せ一事あけれゞ一々申開有ゑ調伏の筋更ゑ見へざれゝ諸士の面々大ひゑ怒大切の供養半ゑして停止せしめ恥辱を與ふる已あらず天子を挾で我意を振事言語ゑ絶せり最早時節を待ゑ及ゞん速ゑ軍勢を催し一戰ゑ及ふべしと申上る秀頼公淀殿ゑも甚立腹ましましけれども當時關東の勢強其上大坂方ゝ清正幸長も相果出仕の大名も少けれゞ今一戰ゐ及とも成敗の程如何あらんと思召けれゞ大野ゑ向ひいかゐと仰有修理申けるゝ是ゝ何分樣子を御探索有て然べし其上ゑて如何樣とも御思慮有へき事ゐ候と申上る此時片桐且元木村重之齊く進出申けるゝ此度鐘の銘ゐ調伏の文字有とて供養停止せし事殘念あれ然れども勅命のよし申が故違背がたく其趣意分明あらずと雖も是非なく相止候片桐市正ゝ奉行たれゞ申ゐ及ず御代參たりし長門守兩人清韓長老を伴ひ駿府へ下向いたし調伏れ趣意是あさ由申ひ事理分明ゐ至らざれゞ我々君へ對し不忠ゑ相成候間駿府へ下向の儀仰付られ下さる可しと願ける大野申けるゝ御兩人の願ひ尤ゑゝ候得共今日迄城中へ使者參らず其上奏聞を經て停止をしたるゑど申あゞ關東の立腹甚しく如何ある難事を引き起さんも難計無事ゐ納んゑゝ奥向より女使を立られんゝた宜ゝるべし其故ゝ秀忠公の御靈所ゝ淀殿の妹御あれゞ御如才も有まじ殊ゑ我君ゝ縁君の事あり旁女中をして申送れなゞ事穏ゑして宜からむと申上る且元重て申けるゝ大野の申さゝ處一應其理ゐりと雖も御重縁といひあのら關東の心底計がたし誠の心あらゞ奏聞を遂ず内意を以て仰越へく處一應の沙汰もあく供養の只中諸萬人の集し處ゑて停止させしゝ一ッゑゝ其威を顯し二ッゐゝ禁裏へ大坂の惡を知さん謀あり惣して關東の仕方實の志一ッも見へず此度調伏との儀ゝ難題と存ずる故ゐ某罷越て申開いたし機ゑ臨み變ゑ應ドて筑と虛實を窺歸べし何樣の事ゝ大勢ゑて罷越候てゝ却て宜しからず清韓長老と某下向致べし重之ゐゝ見合然るべしと逃けれゞ後藤又

兵衛進出て末座の意見上を畏懼さるゝ似たれども御爲と
ぞんずる故所存を申也片桐殿下向あらゞ一且ハ事納るべ
し去ど兎ゝ角事ゝ托せ君を亡さんと計ハ必定也油斷して
不意をうたれあゞ後悔臍を噛とも及まじ先んする時ハ人
を制し先せらるゝ時ハ人ゝ制せらるといへり國家の安危
此秋ゝあり先兵を集武具を備へ兵粮彈藥を貯へ專籠城
の支度を整へ元を固め根を強し手配と定置て關東の返答
次第此方より逆寄して攻下る程あらゞ小勢なりとも勢
甚強勝利を得んこと疑あし早御用意然るべしと憚
處なく申ける大野道犬是を詰て申けるハ後藤殿の武邊兼
て聞知とハ相違せり籠城の儀ハ格別小勢と以て遥々と攻
下らん事其利有へからず夫れ關東ゝ致逆の國々城々あん
ど容易通へきや假令通ゝもせよ前後より包あゞ進退
此谷何を以か防ことを得ん左すれゞ敵の勢ひ益剛大ゝ
ありて當城ゝ押寄あゞ暫時も維持がたからん歟是毛を吹
て疵を求の喩あらんと後藤を新參と輕蔑嘲るやうゝ
申ける基次大ゝ打笑當城の儀ハ申す迄もあし假令日本の
勢を催し押寄とも容易落べき城ゝ非ず又小勢を以て關東
ゝ攻下らん事何ぞ其思慮無や暫く天下穩ゝして合戰ゝ
らねは國々枕を高くし武備ゝ怠るハ必定あり其不意ゝ出
て是を取背ハ討取降れハ赦して味方をゝし謀を以て馳
立あゞ手ゝ抗者ハ有べからず其上我君の御馬標を眞先ゝ
押立後より御出馬ありと披露せゞ先君恩顧の大小名ハ云
ゝ及ハず鄉士野武士の類まで馳集んハ疑あし臨機の掛
引進退ハ基次が手裏ゝ有と言葉涼敷申けれゞ各々天晴と
感しけり片桐大ゐ感じ後藤をのゝ軍配實ゝ上策あり某
ハ駿府ゝ下向し猶も樣子を窺ひ油斷をさせんもよかるべ
し其間ゝ諸侯と評議を尽され諸事手配有べしと云大野修
理是を聞て其術を爲んゝ尙々女中と差下ー駿府と江戸
をおだめ此方ゝ別心あきやうゝ見すべしといふゝそ織田
常眞大野道犬を始として古老の輩尤と同意しけれゞ淀
殿仰らるゝハ片桐市正ハ惣奉行の事あれゞ清韓長老諸共

ゝ駿府ゝ下申分すべし與向よりハ二位の尼正榮大藏の局
の兩人を差遣べし申合て下向有べしと仰けれハ何も御受
申けり木村長門守申けるハ私義幼少より江州ゝ在て東國
の大小名を見知ず此度局方の下向を幸奥付の侍士と成
密ゝ關東の樣子を窺あゞ幸手段ともあるべー此儀御免下
さるべしと申けれゞ淀殿尤と御同意有是ゝ據て各々其用
意ゝそ及ける木村長門守ハ我邸ゝ歸り父常陸之助が遺物
とて送りける國俊の九寸五分を取出寐刀を合せ懷中し且
元が邸ゝ到關東下向の相談數刻ゝ及び密ゝ申けるハ當時
大坂の有さまを觀ゝ我君ゝハ御虛弱ゝして淀殿ハ大野を
御寵愛有て何事も彼が心の儘ゝ計ひるゝ若一戰ゝ及とき
諸將の諫を用ず我意を專といたさゞ軍の勝敗覺がたし
此度奥士とあつて下向致す其譯ハ只家康ゝ近寄て一刀
ゝ刺殺とゝも人也若家康を討取あゞ忽諸侯の心變し招
りざるゝ隨ひ秀頼公の天下とあらんこと安りるべし重成
が一命を以て事を計と覺悟いたし候と用意の短刀取出け
れゞ且元大ゝ感し嗚呼若年ハ珍敷忠勇の士ゝな君の爲
ゝ命を捨る事武士の常といへと戰場の打死ハ遙ゝ勝
し忠義ゝ賞ゝ清正ゝ活眼を以て推察せられし程有て無
二の御所存頼母敷存ずるなり乍去鹿忽の振舞有べからず
家康ハ古老の大將あれゞ用心嚴重ゝして容易ゝ討取事難
うるべし能々心を付ゝへ某とても左の如く故と關東の詞
ゝ從ひ万事胸をさすりて事を延し時節を待も家康既ゝ七
十三歳あれゞ今二年の内ハ落命すべし家康死せゞ天下
の事手裏ゝありかるゞ故ゝ無念をこらへ手を空しく年を
送りしゝ此度の下向も弁舌を以て意を寛せ事を延さん所
存也尙委細ハ緩々談じ候上宜敷ゝ任せんと示合片桐且元
ハ清韓長老を伴大坂を四月廿八日ゝ發足す淀殿の御使
として京極宰相高次の祖母正榮尼秀頼公の御乳母大藏局
木村長門守ハ奥附の侍と成て相隨ひ續て駿府へ下けり且
元ハ所存有て直ゝ登城をせず勅子の德願寺ゝ宿を卜め本
多上野助正純か方ゝ行て下向の由を述拙者儀ハ奉行の事

よ候得ハ何とも御機嫌の程恐入候あり何卒御目見仰付られ下されあハ調伏よて是あさ旨申分仕度則鐘銘の作者清韓をも召連候得ハ御前宜よ御執成下さるべしとわざと慇懃よ言入ける上野助是を聞取且元を旅宿わ歸し其身ハ家康公の御前わ出片桐下向の趣言上わ及しかハ神君聞召此方より沙汰有迄滯留致させ置べき旨仰付られけれハ上野助より且元よ此由を傳ム正榮尼大藏局両人ハ淀殿の御使あれハ直よ登城して阿茶の局よ對面し此度大佛殿鐘の銘わ調伏の文字是有由大御所様御機嫌悪く供養停止と成し事秀頼公淀殿以の外驚ゐひ奉行且元並よ鐘銘の作者清韓長老へ ハ推問有しよ毛頭その儀是あきのよし上々よハまして ハ存もあさ事故我々罷下右の譯可ヲ上旨仰を蒙參し也偏よ ハ局の ハ執成頼入候と述けれハ阿茶の局具わ是を聰取ル使とハヲあゞら遠路の處 ハ苦勞也 ハ前の事ハ宜敷 ハ執成致べし先々 ハ休息わるべしと叮嚀わ接待けり此時木村長門守重成ハ馬淵與右衛門と改名し付添て

登城あしけるゞ局の召遣背柳と言女怜悧の者あれハ内意を耳語其方ハ局の介添をあして ハ前迄いづるも苦のらず家康公ハ對面の時わ至ハ穩よ我わ知すべしとヲ合其身ハ錠口の間の椽側よ扣遥わ聞る女中の聲ももしやと心を配唖を啖て待居たり錠口の番役大澤金兵衛淺原主馬木村とハ夢よも知す奥附の侍ありと想何の用心もあく打解て四方山の噺あどして有處へ取次の女中立出錠口の番大澤等わ向大坂よりの ハ使ハ阿茶の局の部屋よ ハ逗留あれハ ハ供の衆ハ ハ客長屋よて休足有様よとヲければ大澤金兵衛木村よむりひ聞るゝ如局方よハ奥殿よ ハ逗留あれハ其元わハ客長家へ參るべしいざ ハ案内ヲさんといふ木村ヲけるハ ハ長屋の義ハ奥殿を離れ候へハ下部共ハ格別某ハ局方の用事を達し候得ハ此所わ相詰ヲ度と願けれハ尤とおもひ其處わ休足させけり長門守ハ晝夜心を配相圖の聲を聽ハ飛込んと隙を考居けり去と錠口ハ漫わ男女の出入を許されず入口よ錠と鉄廊下わハ鈴を釣年長の

者五六人晝夜時替て不寐番をあし嚴く守ける故麁忽わ事を破ー仕損じてハ一大事と前後に心を配り窺ひけり家康公よハ鐘の銘わ調伏の文字在と云掛供養を停止させあハ大坂の者共憤て无循の色を顯さんハ必定其時謀反朝敵の名を附て秀頼を亡し子孫の憂を絶べしと様々の難題を御工夫有し處よ片桐市正清幹長老を伴ひ下向し両女淀殿の ハ使として降りし故扨ハ言譯をなして事を延すと見へたり取分片桐且元ハ等閑の者よ非彼奴を追退すんハ思ひの儘わ計かたしこの上ハ彼わ不覺をとらせ反間の策を以て互よ疑せ同士討をさすべしと ハ思案有て則両女よ ハ目見仰付られ面を和け遠路太義千萬と仰有両女ヲけるハ此度鐘の銘文わ付御機嫌を損じ上々方よも殊外 ハ迷惑よ思召ヲ分の爲我々參上致しハ委細ハ阿茶局迄申聞置ハ何卒 ハ聞濟有て ハ機嫌 ハ直し下されなハ有難ハとヲ上る家康公微笑してヲされけるハ此度供養停止の義ハ予ゞヲ付たるに非江戸將軍より奏聞の上計ひ去あり亦銘文の事ハ奉行作者の誤あらんと予ハ思あれども將軍秀忠甚立腹あれハ迚もの事わ江戸表へ行てヲ分致べーヲゞ方よりも得心有やうにヲ遣べし秀頼公は孫聟淀殿ハ秀忠の縁者あれハ聊ゐ鹿畧の心あし名々安堵して江戸へ參るべしと ハ懇意の仰に両女心を安じ扨ハ家康公の ハ心に ハ如才ハあく江戸へ參ヲ分あさハ事濟べしと想有難旨御禮ヲ上駿府を發足あしける木村ハ逗留中隙と窺ひけれども折を得ず其上家康憤の躰もあく江戸下向に成し故兼の計畧も相違しけれハ片桐ゞ旅宿德願寺わ行て此由を語る片桐眉を顰某毎日目見を願ども何角言延よ今よ登城をさせず夫わ引替両女を心能饗應し江戸へ遣す事何とも心得難是某を當所よ引付置て大坂よ汐斷させ不意を討んも計ゞたし何わしても例の奸計あるべし ハ邊ハ江戸よ下わ逃す是より大坂へ引返し諸將とヲ合諸事用意有て然るべしと云ハ重成答てヲけるハ我家康を討事叶ずと雖當地の様子城中の案内を能覺たり序あれハ江戸の城中をも一

見し諸將の剛膽を探見事是亦一の謀おりと云且元頭を振て否とよ其義ハ某東國よりれハ氣遣ゐ一ゐ遜ハ一刻も早く此度の樣子を知せん爲歸國あるべし夫ゐ付大坂出立の節ゐ忙大事を忘たり高野山九度村よ蟄居する眞田左衛門尉幸村を竊よ味方とおし置たり早速城中よ呼迎て軍師と賴支度有べしと申ける故重成尤と同意し且元よ別けりさて兩女駿府出立の道ゐて木村申けるハ且元未だ登城致ずし由必定ゐ坂ゐてハ當所の首尾如何とゐ待有るべし某ハ是より上坂致家康公のゐ返事幷各方江戸下向の樣子を言上ゆべしと云ハ兩女尤と同ト江戸表の事ハ一旦御立腹有とても素より君ハゐ存おき事あり其上御重縁のゐ事あれハゐ聞濟有べしと奸計よ陷しとハ夢よも知ず江戸を差てゞ下けり木村ハ下部貳人を召連編笠よ顔を隱し大坂よゞ歸けり家康公ハ故と片桐よゐ對面もおく兩女ハ何氣おき躰よて江戸へ下向せしめ手自密書を認るひ渡邊半兵衛を召て汝早馬よて江戸ゐ到此書を將軍よ相渡書面の趣を以て井伊本多ゞ躍と談ト合ひ品よく取斗べしと仰付られけれハ渡邊畏り直ゐ駿府を打立て晝夜を分たず飛ゞ如ゐ江戸へ下り將軍秀忠公へゐ書を差上けれハ將軍御覽の上井伊本多酒井柳原の輩を召て大坂の使として兩女近日來べし斯樣々々ゐ計べしとゐ書を出して見せゐへハ各々拜見し尤のゐ計略也と感稱し大坂の使をゞ侍居たり

第十回

論二銘文一且元諾レ言　陷二奸謀一女使歸レ阪

て召連給ふ定めて御尋有べく所よ亦某へ御尋ハ如何の義よて候哉其時安藤帶刀ゞ曰佛法計よ非先詩を讀申べし聞給へ

浴東東醴　舍那道場　聳レ空二瓊殿一
横二虹蓋梁一　崔嵬長廊　玲二瓏八荒一
參二差万瓦一　焜二燿十方一

是迄ハ左も有ぬべし此次の句ゐ境は兜よ象夜利ハ扶桑ゐ甲たりとハ假令て云ハ境ゐ甲冑を着たる伏兵を置て支へ奪の形ちなり亦扶桑國(日本の事)の主と成て四海を掌握の氣を顯すなるべし鐘よ影の移ゞ如き銘文ゐ伏兵の義ゐり是ハ如何ゐ片桐ゞ曰其先を聞されよ安藤則其後を讀ひ

新鐘高掛　爾音千鐘　響應二遠近一
律中二宮商一　十八聲緩　百八聲忙
夜禪靈師　夕燈晨香　上界聞レ竺
遠寺知レ相

是等の句ゝ左も有べし次の句ゝ

東迎二素月一　西送二斜陽一　とゝ東國を陰の弱きと

し西を陽の強ゝ喩るより殊ゝ漢土迄も玉司地を堀如古太閤

天下をしり給ふ斷を込るより然時ゝ豊山降レ霜やうゝ豊臣

の忝を万民ゝ歎めし若關東を亡す事叶ゝ怪を漢に造

り苦を唐ゝ救の心入ゝ非共旗上の心を裏ゝ含めり是ゝ如

何ゝ片桐ゝ曰亦其先を聞れゝ安藤其跡を讀む功用無量

所庶幾者此二句ゝ別義もゝし扨此次の句也是ゝ其元ゝも

氣の付苦ゝるべし知て其儘置ゝ謀叛也知ずんゞ寒行の不

念と云べし夫國家安康の句ゝ有康の字ゝ御諱家康の康の

字也是を和語に付て讀時ゝ家康を切て國を安せんと也是

等の事ゝ知れたる事ゝり亦其次の句ゝ

四海施レ化　萬歳傳レ芳　君臣豊樂

子孫繁昌　佛門柱楚　法社金湯

英檀之德　山高水長

ゞ樣の句も皆ゝ御心ゝ掛なり此時片桐申けるゝ如何に大

坂ゝ愚ゝる者　計集　候へゞとて是程の事を知ざる事の

候べき歟攝河泉三ヶ國の内ゝ貴僧高僧も數多有べし實

ゝ調伏致さんと存せは人知ず如何樣とも致方有へし國〻

より參詣の目ゝ懸る大佛の鐘の銘ゝ調伏の文字を据申べ

きや其上作者ゝ唐僧文英退長老也亦甲夜の義を御合候得

共大佛供養ゝ付御上洛ゝ左樣の事も有ぬべし其義もゝきに

何の爲ゝ伏兵を設申べきや去て東迎二素月一西送二斜陽一

の句も日月ゝ本一躰ゝして別時ゝ東ゝ月西ゝ日と廻るも

のゝて候ゞ樣の事ゝ心を移て疑時ゝ何ゝ依ず疑の掛る

ものにて候也と辨舌水の流るゝが如く答けり上野助が曰

銘文の義ゝ其旨言上に及べし此外に三ヶ條の上意有第一

にゝ大坂城ゝ日本無双の名城たるが故常々御心ゝ掛るゝ

り因て大和郡山ゝ又ゝ播州姫路へ御城替有べし第二にゝ

諸侯同樣ゝ江戸へ出仕有べし第三ゝゝ人質として御母堂

淀君を江戸ゝ送へし右三ヶ條の内何ゝりとも御受有べし

若三ヶ條とも不承知ゝ於は急ゝ兵を發し御征罰あらんと

の御事ゝり何ゝりとも御答申上られよと言且元が曰此義

何も大事の上意ゝり先思ても御覽候へ大閤御遺狀ゝゝ秀

頼公十五歳ゝ成給ゝゝ天下を御讓有へき筈ゝり然慶長

五年石田三成反逆して大乱ゝ及しより此方唯今の時宜ゝ

及ふ由天下を去り給ふ事は叶ずとも大坂の城を維持給ふ

程の事ゝ有たきものなり且ゝ家康公の御名の疵ともなり

候得者此義ゝ叶がたく候次ゝ大名同樣に江府へ出仕の事

當時秀頼公ゝ右大臣將軍ゝ内大臣ゝて殊ゝ君と尊敬有べ

き御方なれゞ江戸表ゝて御挨拶ゝ万端不都合成べし勿論

大坂ゝても御承知ゝるべくとも存申さず去て御母堂を人

質の事下として上を計るゝ似たれとも某歸城何卒進

寄べしと申けれゞ両使大ゝ喜び駿府ゝ歸り則此趣

を言上す是ゝ依て早速片桐を召給ふ本多正信且元を伴て

登城し御書院ゝ相待此時清韓長老を松の間ゝ召出され仰

有ゝ叱咤突入めとの給ふ漸々有ども長老答ゝし君御氣色

替て如何ゝ突入何とて答を致ざるや此時長老頭を上て抽

僧の義歟夫僧ゝ沙門ゝて突入〻やらゝゝ非何ぞ我名を呼

ざるゝ答るの利有んや君重てのたまゝく己何者ゝ頼て

予が諱を切て調伏の文を書たるぞ長老の曰何を調伏とゝ

のるふや君の曰汝國家安穩とゝ天下太平とゝ祈べきゝ予

が諱を懼さるゝ曲者ゝり長老の曰國家安康ゝりとも國

家散乱ゝなりとも君の御心より出たる事を何故拙僧ゝ尋

給ふ君の心ゝ御尋あれ此時家康公の御顔色真赤ゝ成て恥

給ひゝが御腹荒々敗已ゝ惡僧ゝ耶蘇宗門の類ゝるべし

急度彦坂ゝ預ぞと仰有ゝ於て彦坂九兵衛長老を引連

て下城す

傳ゝ曰是より先本多正信を以此度御難題仰掛らるゝ

に付銘文の中譯一言も申さず君の御心の儘に成たら

んにゝ望の地ゝて七堂伽藍と御建立有べしと御内意

ある長老答て申けるゝ虚言を以て伽藍を建さりと

て何の役に歟立べくと一向ゝ頓着せず正信此山を言

上す君ゝも扨ゝ名僧ゝりと御感有て内々大切ゝすべ

き旨上意有しとぞ

扨片桐市正に御對面有且元御前ゑ出謹て禮を爲其時仰にゝ其方淀殿を江戸へ隱居の事を受合由彌左樣ゑ致べしと也且元申上けるゝ下として上を計御受奉る義ゝ成難候得共何卒御勸申べく存奉候君殊の外御機嫌克夫ゝ太義なり扨其方鞠子ゑ有てゝ阿陪川へ水出る時ゝ難義ゑるへし當地大久保相摸守ゑ明屋敷ゑ移て何時にても對面成樣ゑ致べしと仰有て御紋付の御羽織を下されける是ゑ因て在駿府の大小名御旗本ゑ至迄進物なとを贈しのば且元ゑ門前賑ひ昨日ゑ替し有樣なり爰ゑ又正榮尼大藏局ゝ送の役人寛助太夫と共ゑ江戸の此方富繩ゑ着し大城戸ゑ入んとする時御目附水野六左衛門此處に出迎ひ寛助太夫ゑ對面して申けるゝ兩女江戸ゑ御入被成候事ゝ決て御無用あり其故ゝ此度御臺所より仰出さるゝゝ大佛の鐘の銘ゑ御所樣を呪詛し奉る事姉あがらも淀殿は身君の敵あり其使たる兩女江戸へ來るこそ幸召取て獄門ゑ晒すべしと以の外の御憤ゑておいします御仁心厚將軍此事を哀ゑ思召某を以て此事を知せ大城戸より追歸せとの御事なり是ゑ依て御侍受申たりと云けれゝ兩女是を聞て大に驚き扨も恐しき事ゑな我々江戸へ參るも御臺樣を力也御慈悲深き將軍樣の御内意有上ゝ江戸へ參すとても苦しからす是より駿府へ引返し大御所樣へ慇懃申べしといへゝ水野ゝ能心入ありと別て歸りけり寛助太夫ゝ兩女を伴歸りけるが伊津の宿ゑ着し此廻を言上す君聞し召れ謀既ゑ成しと滿悦有且元を召て仰けるゝ其方義恩愛の妻を亡しと聞夫に付木多渡佐守が娘いうす後家ゑて有由予が媒せん汝酒掃の妻にせよと仰有けれゝ且元難有由御受申重て仰有ゝ其方事淀殿を勸て急ゑ江戸へ差越べし左あれは當城ゑ有るも益なし早大坂ゑ歸り事を計べしとの事なり且元是をも御受申扨て申上けるは下として上を計がたく候得共若御聞有て御越候ゝゝ品川ゑ於て四丁四方の御屋敷地を給るべきや君の宜く尤愛

事なり且元重て申けるゝ御事忙く御失念も候得ゝ御墨附を給ゝるべし君にゝ安事なりとて則御墨附を給ゝり重て上意有ゝ汝明朝より發足して直ゑ京都ゑ立寄此書を板倉伊賀守ゑ達べし是大事を申遣なれゝ他の者ゝ叶はずと仰有且元畏候とて則次の日駿府を發足して歸國す明れゝ七月十六日兩女ゝ沖津を立て四ッ時ゑ駿府へ着木多正信が方ゑ至て其趣を述江戸の樣子を語けれゝ正信登城して右の由を言上す則登城すべき由仰付られけれゝ兩女登城ゑ及ひ先松の間の御番衆ゑ挨拶すれゝ御無用とゝかり言て瞰付る兩女大ゐゑ慇き扨も不思義ゑる事かゑ參掛ゑゝ皆近附ゑ成るゑとと懇意ゑ有し所今斯の如ゝ何事ぞと思ゐる漸々有て御出座有けれゝ兩女禮をゑす君宜ゝく江戸へ行たるや大藏の曰私共御臺樣と力ゑ參上仕らんと存候處江戸ゑ至らゝ獄門ゑ懸よとの仰ゑり御慈非深き將軍樣水野六左衛門を以て御知せ下されし故大城戸より引返し候とゞ上君宜左も有へし若汝等を江戸へ入ゑゝ嫁を去て大城を踏潰さんと思しゑ追返せしゝ猶可也汝等歸來らゝ牢舍申付窮命させんと思とも此度片桐市正秀頼の母堂を人質として差上んと受合しによつて品川ゑて四丁四方の屋敷地を定たり其上予の媒を以て本多正信と鞆具の約をゑす是等忠臣ゑめで〜助返すぞ是且元が恩ゑり立て失と仰有けれゝ兩女ゝ發と計御答を申座を立て佐渡守ゑ屋敷ゑ歸り正信ゑ樣子を問ゝも一言の答もなく却て恐怒の顔色ゑて聞る〜通の事ゑれど此處ゑて一飯も叶ふべうらす疾々出立致されよと追立けれゝ兩女ゝ是非ゑく立出けるが大藏の局が曰最初われはと御機嫌の宜りしゑ如斯變し事是且元が心替して我々を誑言せしと覺さり何ゑもせよ片桐ゑ追付樣子を糺聞べしと憤籠を飛せて行はとゑ濱松の泊ゑて追付けれゝ且元ゑ對面して申けるゝ人質として淀殿を江戸へ差上んと請合品川ゑて屋敷地迄下給ふよし承此事誠ゑ候哉と尋けれゝ且元涙を散々と流某關東の謀を知るが故江戸下向の

義を鞠子の宿より呉々も止めーゐ忠義競せんあどゝ悪口有しが果て敵の奸計に落入さり某太閤の高恩を蒙り幼君の補佐として魂を碎しゝ何の故ゝ今更心腐致べきや扨其元事御子息修理亮を肩ゝ着て萬事口か過候ぞ今度の事も口を閉て且元ゝ任さるれゞ事納べし左も無ゞ彌〻敵の謀整ひ合戰ゝ及あゞ其時悔とも甲斐有まゝ必口を閉給へと深戒夫より同道して上方指して登けり

第十一回

振舌佞媚危二鯛臣一　信レ讒女君却二切諫一

扨片桐且元ゝ三女同道ゝて七月廿一日の暮合ゐ大津の宿ゝ着し三女ゝ向ひて申けるゝ駿府出立の節此書狀を板倉伊賀守ゝ達せよ勿論大切の用事なれゞ某直ゝ届べしとの事あり明日ゝ各々同道ゝて京都ゝ參へし左様御心得有べしと申けれゞ大藏の局進出て申けるゝ私共道中ゝ他候得者是より伏見へ出で中度存候且元の曰正榮尼二位尼を閤其計一人曾を張て物を申さるゝゝ先へ歸り讒言せん爲歟大藏の曰何ぞ左様の事あらむ且元ゞ曰此度書狀ゐ事を託して某を京都ゐ立寄すること是關東の謀ゐり計略知て京都ゝ參事我亦深き謀有然ゝ各々先へ歸給ゝゝ事爰ゝ破れ君の御大事を引出さるべし是非共京都ゝ同道中さん此時二位尼正榮尼ゝ京都ゝ廻らむと雖大藏一向ゐ合點せず且元ゝ向申さるゝ我々先へ歸とも一言も申まじ委細ゝ且元承て跡より歸申され候と答へ申べし此上ゝも疑敗思召候ゝゝ如何樣の誓文なりとも致すべしと云ゝゞ今ゝ餘方なく睨付て申けるゝ左程ゐ思いる、事ならゞ勝手次第ゝ致さるべし此時且元思ふ樣嗚呼君の御大事を引出さん者ゝ大藏夫婦親子なるべし今計て捨たき者なれと且元重て申けるゝかゝる上は何程云とも詮なき事なゞら濱松ゝてゆせし事を幾度も思回し口を閉ぢ申されなゞ君の御爲其身の仕合成へしと云捨て此處ゝり立別れ京都差て登けり扨三女ゝ大坂ゝ歸り登城して御前ゝ出るゐ二位の尼正榮尼は何事も且元承り頷て歸城

仕候と申上る于時大藏進み出て申けるゝ同人ゝ君の御大事を左思ず申さるれど且元ゝ既ゝ心變て關東方ゝ成て候其故ゝ御母堂淀樣を質として關東ゐ差下さん事を受合品川ゐ於て四丁四方の御屋敷地を定其上木多佐渡守が縄と成駿府ゐての有樣返ゲ忠ゝ相違候まじと尾に鰭を付て散々ゝ讒言しけれゞ淀殿大ゝ怒給ひ姨さ且元ゞ振舞哉我を太閤の妾ゐりと輕蔑已ゞ心の儘ゝ取計ひ我を人質ゝ送むあど、は言語ゝ絶せし事ゞもなり京都へ立寄しも此事を謀む爲成へし斯且元返り忠ゝ極まる上ゝ歸次第搦取て首を刎不忠の者の見懲しゝ爲べしと齒噛をして怒給ふ此時木村重成淀殿を恕めて申けるゝ且元當地登足の節此度關東下向の義ゝ難題のゆ開き事を計ためなれゞ大勢下向致なゞ却て事の破となれゞ淸韓長老と只二人參らんと乞しゝ御聞入なく且某も共ゐ御止申せしのど押て三女を下し給ふゞ故斯事を引出し候と覺候何分篤と事を糺し其上ゝて如何樣とも御計ひ有べしとゆ上る秀頼公仰らるゝゝも予幼年の時より文武の道をも教へ更ゝ私の計ひなし我身幼して父ゝ離今かく事を論せるも皆且元ゞ功なり何の故ゐり謀叛して我ゝ背ゆべきや是ゝい子細ぞ候えんと諫給へども淀殿ゝ少しも聞給ゝず忽且元ゞ執權職と取上大野修理ゝ仰付らるゝ秀頼公を始として重成躑是を諫何事も且元歸城の上ゝて事を計はんとゆせども用ひ給ゝねゞ大方ならぬ城中の有樣なり扨又片桐ゝ京都ゝ若し所司代伊賀守勝重ゞ方ゝ至り御狀渡せゞ伊賀守謹で是を受取開見るゝ其文ゝ曰

今度東市正母儀淀殿を人質として江府へ送事をゆ是天下の忠臣なり其表へ令若ゞ馳走として二條城内ゝて能興行せしめ大坂へ歸しゆべく候若麁末有ゞ後日ゐ屹度ゆ付べきものなり

七月十九日　　家康判

板倉伊賀守へ

と有けれゞ伊賀守曰御自分ゝい冥加ゝ叶給ふもののない

さや登城いたし能興行仕御覧ゑ入れヤさんと云を且元扨ゝ間蝶の謀をあすよと悟りてヤけゑと我等生來能を好まず拜見の儀ゝ御免有べしとヤ板倉申けるゝ假令御さらひゑてもあれ某が身の上ゑ候へゝ是非々々見物給るべしと且元と共ゑ登城しけれバ最早役者ゝ舞臺ゑ揃三番高砂三輪老松の番組ゑて能をぞ催しけり且元ゝ一夜を明てと三秋の如くゑて夜の明るを待兼つ出立をぞなしゆける實ゑや良藥ゝ口ゑ苦諫言ゝ耳ゑ逆の金言宜あるゝな大野母子が讒言ゑ依て七組の番頭を召れ且元當城ゑ歸り來らバ是非を論せず搦取て首を刎べしと淀殿より命有木村重成遮て申けるゝ且元是迄聊も不忠ある事あし然を大藏が一言を信じ俄然御立腹有こと何共御短慮の御振舞なり東國の樣子をも窺と御紀一有て彌〳〵謀叛ゑ決あバ重成一人ゑて討取べし何ぞさやう〳〵しき事もさわゞのしく人數を用ゐ給ふべきや且市正が心底ゑ深き謀有ての義とぞんじられしありと申此時七手の番頭伊藤丹後守堀田圖書

瀧が言葉を信じ一應の御紀しもあく討取給ゝヤ其誤ゝ秀頼ゑ有て末代愚將の名を殘さん我を始諸將の諫を用ひ給はすと秀頼有ても詮なし母君天下を治給へと既ゑ御はのせゑ手を掛給ひ御切腹と見へけれバ別座の人々これわと驚き押止來り爰ゑ於て淀殿漸々御得心有けれバ秀頼公大ゑ悦び給ひ則野々村伊豫守を以て八月二日辰の刻ゑ登城致べき旨命せらるゝゑ依り且元謹て御受申上る扨又大野修理助ゝ渕田隼人石川伊豆守の両人を密のゑ招きヤけるゑ其方貳人は急ぎ用意して且元登城の折を窺ひ不意ゑ出て討取べし跡ゑ某が能ゑ計ひ加恩の地を申與へんと申けれバ二人ゑ承れりとて退けるゑ渕田石川ゑ向ひヤけるゝ且元ゑ何の咎有て如斯ヤ付る哉甚不審なり石川が曰我とても左ゝ思ふなり是ゝ大野ゑ好計ゑもや候はん何ゑもせよ是非分る迄ゝ捨置べしとヤ合て居さりけり明ゑ八月二日片桐東市正且元登城す木村長門守御玄關ゑ出迎ひ互ゑ言を替さねども目と目を見合て志を通じけり則重成案内して松の間の御樣側通りゑ來る渕田石川の両人ゝ此内ゑ詰居たりしが耳語てヤけるは假令臧の心を以て討取んとするとも一人ゝ且元一人ゝ重成なり兎ても我々が手ゑ逢べき者ゑ非ず其上罪の善惡を識ずとて携ゝずして通しけり斯て且元御前ゑ出る其座ゑ列なる人ゑゝ

左座　織田前内大臣信雄入道
同　源吾入道有樂齋
同　武藏守信行
右座　大野道犬
同修理亮治長
同主馬助治房
左次　淺井周防守長房
稻木右衛門尉敎量
速水甲斐守時貞
仙石入道宗体齋

名嶋民部少輔忠純

右次

内藤宮内少輔豊長

藤田民部少輔家正

湯淺右近進正忠

田多入道藤彌齋

次々七手

郡主馬之助良則　野々村伊羅守成重

堀田圖書之助忠純　伊藤丹後守重俊

曽木民部少輔春房　中村民部少輔氏春

興木野豊後守頼包

その次

渡邊内藏助紀　南部久左衛門尉信景

生駒宮内少輔正純　三浦飛騨守義世

木村主計守　今木源左衛門尉

其外當番の面々和詰たり此時上段の簾巻上れゞ秀頼公淀殿御列座あり淀殿怒の聲高く如何ゑ且元汝我を太閤の妾と蔑如信長公の姪なる事を知す已れゞ分として上を輕しめ人質ゑ出さんと受合已あらず秀頼の許しもなく本多佐渡守正信ゞ聟と成たる由其上京都ゑ滯留して何事をゝ言合せたるぞ旁々不忠の且元を召取て首を刎られよと仰有且元謹で申けるゝ一通御聞あらゞ御立腹の段御尤ゝ存じ奉候然し是ゑゝ種々譯の有る義ゑて中々一夕の事ゝ候ゝす其上君の御大事ゝて候得ゞ且元心根と碎き罷在候委細の義ゝ密々ゑて申上べし何卒御聞下されゝしと謹で願ける

第十二回

片桐陳レ志々竟空　淀君乘レ悲々乃失

月明あらんとして浮雲是を覆ふ讒言明智を奪の慣ひ且元此度の義ゝ一大事あれゞ他聞の憚密々ゑて盲上せんとゞけれゞ淀殿仰けるゝ列座の輩ゝ皆股肱の臣ゑして不忠を存する者一人も非す何の隱謀有て他聞を憚とゝ云此時番頭の衆中同音ゑゞけるゝ且元秘密の事有ゞまゝ斯申せしあらん先一應ゞ聞有て然べしとゞ上れども更にゞ採用あし番頭の輩再ゞけるゝ何をゞ上ても我意を振ひ給ひて一盲のゞ聞入れもあき上ゝ臣有れども無ゞ如し速ゑ御暇を給ゝりて切腹仕るべしとゞ上る淀殿仰けるゝ各各有ずとて事を缺べき程の事あらん切腹ありと縊死ありとも望ゑ任せんと有けれゞ皆々大きゑ憤怒突然座を立んとす且元是を制し不日大坂關東一戰ゑ及ぶべ一朝の怒を以て死せんより寧戰場ゑ於て討死あらゞ君のゞ爲且臣たるの道全からん秀頼公も是を制しるひけるゝ我爲を思ずして心の儘ゑ切腹あらゞ忠臣とゝゞされまじ止まるべしと仰ある木村重成ゞけるゝ一命を捨て其名を潔せんと欲ゞ此場ゑ有あゑ侯人羅撫切ゑして死せんものと切齒をあして憤しゝ道理とこそ見へにけり于時且元座を敬め謹てゞけるゝ駿府にて仰せ有ゝ大坂の城を明渡し和州郡山播州姫路の内へ城替有歟諸大名幷に江戸へ出仕有歟御母堂を人質として關東へ差出さる、歟右三ゞ條の内一ツも叶ゝざるゑ於てゝ天下の兵を引率て責潰せべしとの事あり何れありとも彼返答有べしとゞ捨て突然座を立下城あそ反ける是ゑ據て亦彼評定有ける大野ゝ薄田石川の

両人を招き汝等何故ゑ且元を助けしとゞけれゞ且元重成ゝ兎ても我々ゞ手に合ずと答大野大ゑ立腹今ゝ思知すべきぞと睨視つけて入ゝける此時彼前ゑゝ米た評義一決せず織田有樂齋申されけるゝ玆に同苗常信ゝ博學有德の者あり世を逃れて閑居致せしゞ今幸と當地ゝ有且元を討と討ざるとの義ゝ是を召て問給へとゞせーゝゞ早速常信を召させ登城して松の間ゑ至れゞ大野出迎て一禮をあし密ゝゞけるゝ今日片桐を討と討まときの御尋ゑ及候ゝゝ隨分惡敵御中有べし且元を亡ふて織田殿ゑ執權を給はらんとの御事なり常信微笑して座ゑ直り時ゑ淀殿片桐は謀叛人なりと仰ある常信是を承ゝり唯今迄の忠義を捨て何故謀叛すべきや淀殿曰我を以て關東へ人質ゑ出さん事ゝ受合剩へ品川ゝて屋敷地まで定めし事上を輕んゝ已ゞ心の儘ゝ計ふこと謀叛其逆ゝ其喩ゝものあし常信申けるゝ御自分ゝ信長公の姪也と自負左樣の事を云給ふゝ天往事を顧み給へ故太閤の御恩ゝ山猶低く海猶淺しと云べ

し今御母堂と敬るゝも是皆御恩より非ずや其御子秀頼公の御爲と有ば江戸におろの唐土天竺なりとも望で御出有べき筈なり軒に巣くふ雀夜の鶴に至る迄子故に命を捨るゝ親の習ひ況て秀頼公の御母堂あらずや今松の間に且元を謀反人と云て亡はば某を執權にせんとの由大野修理を以て仰らるれど我出家の身なれば知行財寶に望なし又不自由の義有ば何方よりも請求べし内大臣殿の御母公なれば能々心を定め關東よりの難題御返答有べしと座を立て曰片桐あらば城も存べし且元亡ば城も亡んと申捨て歸られしが其日直に京都に登掃部助と云者をして大坂城中の樣子を關東へ知されけり豈計らんや法体の身なれば心を綴し大事を謀りしに關東へ知され常信も又不埒なりける事ども有り且元が弟主膳を招き一手となりて大野が方へ使者を以て云けるゝ此度某を讒言し君の御大事を引起さんこと其根據汝の全家に有と覺知たり此方より押寄討果すべく思ども重恩を蒙りし君の御城内なれば鮮血を灌漑に忍びず汝より押寄來るべし一戰の上に我誠魂を顯すべしと云たれば大野大ゐに恐怖て返答もあくして引退いたりける扨又速水甲斐守今木源左衛門の両人上意を承且元が邸に至る市正謹で出迎両使上座に通り申けるゝ此度駿府に於て御受有し事ども又本多佐渡守が紙と成りし事御不審の第一なりと云且元答て申けるゝ此儀某が望たる事に非ず正信が娘いらず後家にて有よし其方も恩愛の妻と失しと聞く予が媒せんと有し故に傍請申たる已あり呼取とも呼取ざるとも此方の心の儘にて候両使亦問て曰御母公を人質として江戸へ遣す事を受合給ゝ如何に且元答曰關東よりの難題三ケ條の内一ケ條も叶はずば大軍を以て責潰さんとの事あり是に寄某答候にゝ下として上を計ふ儀ゝ成難候得共人質の事ゝ何卒勘ヘべしと請合しなり両使亦問曰然ば品川表にて四丁四方の地面を定め家康より證文を取るひしゝ如何且元が曰是我第一の忠義なり両使が曰何ぞ忠義と云ん哉其理わ

らば辨明さるべ且元微笑して申けるゝ各何程思案あるも是理了解がたし長物語ながら聞るへ其上文錄二年朝鮮征伐の折柄大明の正使謝用梓龍岩副使徐一貫唯吾遊擊將軍沈惟敬肥前國名護屋に來る惣じて太閤に存生の折ゝ軍慮の事を始何に寄ず某に傍相對有に依り暫しも君側を離事なし然るに傍小性鷹坂左源太と云者古主より折を見合せ太閤へ毒藥を調進せよと頼れしを同人も古主の義なれば拒絶難く又太閤の恩義を感ず奉れば身体維谷淺理に詰り自毒藥を呑て死す秀吉公御親愛の者なれば殘念に思召され醫師術を盡と雖其驗更なし時に沈唯敬が上官に貴道伯知功先生と云者有古今の名醫にして幸と今肥前に有太閤是を召れて診察給ふ伯知功死骸の脈を取て申けるゝ是ゝ毒にて死たれども未だ命數尽ず我一術を施行て是を救べしと何一藥を口に入れ背中を打ば不思議に息出たり夫より毒を吐せしに不日快氣に及びぬ太閤御感に有て種々の傍引出物を下され扨次の日亦伯知功を召させられ傍脉を探らせ給ふ其座に列ある家康公利家公淺野長政に至迄順次診察を乞れしが暫くして筆紙を乞ひ一室に入り相認め是を奉る其文を閲るに太閤の御齡六十三秋の中利家公六十八春の末家康公七十五夏の初淺野長政七十四夏の末と書たり皆本人に見給ゝず某に預け給ひ必ず外看すべからずとの命あり是に依て此事を知りたる者某より外におらず後試るに果して我君は六十三歳秋八月十八日に薨去なり大納言利家に六十八歳春三月十四日長政は七十四歳夏六月四日に死去し右の三人ゝ伯知が書たるに毛末も違ず然れば家康公當年ゝ七十三歳なり今二年の内ゝ死去有ん事決せり故に先淀殿を人質と定め品川にて屋敷の地形を念入是に一年も掛て後普請に日月を費し扨御下向と定まらば御病氣と僞ゝり又半年一年延引さん事其機に臨み如何とも良策有べし其内に家康死去あらば再び諸臣の御代と成さんと指を屈めて待べし何の難き事是有ん故に其品川に於て四丁四方

の御邸を乞請ーあり速水今木の兩使ハ涙を流し嗚呼忠成
のあ片桐殿智成かな且元殿如何あれバ斯く迄思魂を碎き
豊臣の天下を思玉ふ併殿を捨て大野如き愚鈍ものを御寵
愛有御母公の御ハ入こそ哀悼けれ此上ハ我々り身ふ替て
申上むと歸りけるが淀殿へ右のよしヲ上様々取あすと雖
も更ふ御用ひなく是ハ且元ゞの口賢申計ゑて一も實ハ無
事ありと仰ければ速水今木も舌を卷嘆息して曰何程いさ
むれども御用なき上ハ力及ずとて此由を片桐方へ傳へ
ければ且元も今ハ思案を極め一通の書を速水今木方へ送
りてヲけるハ来た大佛殿の勘定ゑ仕らす　則帳面を認
御自分迄遣し可申跡ゑて私欲の沙汰あらバ御見分給はる
べしとヲ遣し扨八月九日ゑ勘定帳を仕立速水今木方へ送
る其書ふ曰

此間ハ何角と御兩使御出被下不淺存候大佛殿入用
勘定帳相認御約束の通り遣しヲ候御披露頼入
候扨又此度我　志と遂す君ふ別れ奉る事不本意の
至なり然ども退て思ふふ我君賢君ふ申しますと
雖ども御母堂ふさゝへられ給へバ御運の程も覺束
なく是のみ嘆ハしく率存るあり某ゞ身上ハ唯天
道ふ任せ候各能心を尽し給へ尚黄泉豊國大神の
御前ふ於て　期對顔候以上

八月九日　　片桐東市正且元判

速見甲斐守殿
今木源左衛門殿

各御披露

と書送り是より高野山ゑ行と号ー人數百五十騎鉄砲廿丁
馬廿疋長柄廿筋等の道具ゑて大坂を未の刻ゑ立出京橋さ
して退きける扨長柄堤ゑ到れバ弟主膳申けるハ高野山
ハ南ふて候を何とて北へ行給ふぞ且元ゞ曰ハ裏ゑも被ぬ
事して何ゥせん是よりハ關東へ身を寄忠を立て義を磨の
所存なりと云けれバ主膳始て其心を悟御尤と答て茨木
の方へ遁けり嗚呼惜むべし且元城中ふ有あらバ十萬の兵

ふも遜ゑ勝るべきものを昔藤房卿北山ゑさつて建武の
亂と成主上都を落給ふ捕正成ゞ智謀を以て寄手を腦
ませしも素淮后の進めゑ寄豈恐ざるべけんや
片桐ゞ大坂を立退ふり其門前ゑ建たる落首

忠臣の唯市正たちのゥバ
あとどこやみの城のうちゥふ

と有けれバ諸人力を落しける亦大野淀殿を嘲笑りて

淀鯉の淵を瀬ふゥゆ飛鳥川
どくの大野ゞ惡水ふつぎ

と有けれども大野ハ是れと耻とも思ハずいたりけり

絵入
實錄　大坂軍記壹編　畢

絵入實錄 大坂軍記

第十三回

重成追懇臣之踪
且元遊ニ忠情之節ヲ

却説且元大坂を退去しと聞へしゝば重成大ゐに憂ひ何卒今一度對面し事の由を尋ねんと馬を飛して追程よ長柄堤よて遙ゐ一郡の士卒を見受し處行列を先よし一騎後れてうたせけるゞ重成聲を聚げ暫し〳〵と呼止め漸その間近おれば是別人ならず且元ゐてありしゝば互よ馬より下て歩行寄暫時言葉もなく涙ゐ呉て居ありしゝ漸有て重成涙を拂ひ申けるゝ貴殿ゝ是大坂の柱石ゝ今是を棄て退去なしるゝゝ行末如何成申べきゝにとしても殘念ゝ願くゝ此處より引返しるへゝし某一命よ掛て諫言ヤ其上御聞入あくゝ共ゐ切腹ーて忠膽を顯さん何ぞ大野奴輩ゞ黨を怨憤て名を汚すの行ひを爲しるふぞや我君の思召も既よ然り其上此度ゝ關東と一戰よ及ぶまと必定あり其時采幣採て手配をゐし籠城有ものゐらば城ゝ名を得し堅城よして甲兵兵粮充足おればよし日本の勢を一國よ成て押寄るとも恐るゝよ足ず然るよ貴殿大坂を去るゝゝ漢ゐ張良ゐく蜀ゐ孔明を失ふよりも尚勝るべし是を何とりせん且元も涙を拂ひ嗚呼交誼厚き其中よも其許おらでゝ我跡を追るふ人ゝ非じと想ゞ故御覽の如く從臣の者ゝ先へうよせ我一騎引下り跂望して有し處能も來りるふものゐあと懐中より一卷の書を取出し其許を待つ譯ゝ此事なりと重成よこれを渡しヤけるゝ此人を軍師と頼み万事の指揮を任せるひおゞ日本ゝおろり唐土と一手ゐ成て寄るとも落城の憂慮有まじ木村ゞ曰今の世よ左様の人ゝ雖乎と問且元曰我此人の識見を用す今斯の如く成行ゝ殘念ゝ是ゝ信州上田前の城主真田安房守ゞ二男左衛門佐幸村ゝ聚ゐ古太閤ゐ約して曰豎臣の御家と共ゐ我家名を起せし上ゝ子々孫々死生と共よすべしと誓有今高野山九度村ゐ蟄居して世態を窺ふ我密よ御味方と成協たり是よ依て幸村大坂の地利と考出丸なくてゝ叶ふまじと九度山の材木を切出し商業の爲と偽りて紀州川より大坂ゐ出す我是を御船入

よ蓄積たり其許心ゐ止て幸村入城の節申給へ然し此事ゝ大事おれば必らず秘して餘人ゐ喩し給ふこと勿れ又黒田の浪人後藤又兵衛基次ゝ智謀軍畧人ゐ俊れし勇士ゝ既よ御對顔相濟又長曾我部元親ゝ御忠節の大將ゝ關ヶ原一戰の後本國土佐を捨て蟄居す是も密よ御味方よゐし置たり其の外南條中務太夫同河内守同外記牧嶋玄番赤松伊豆守福嶋周防守明石丹後守同掃部之助仙石宗彌齋多田藤彌齋武田永翁齋の輩密々ゐ汐目見相濟おれば早城中よ呼び迎能々謀給へ扨亦汐家人の内よて別て汐大事の汐用ゐ立者ゝ木村主計頭汐宿勘兵衛和久半左衛門ゝ二心なき忠臣ゝと知るべと懇よ万事を說諭しけれゞ重成一々に聽了り如何ゐしても此儘ゐして別れん事殘念也と云且元曰其許の言よ隨ひ假令大坂よ立歸るも淀君事よ寄せ某の言ゝ用ゆべからず去れゞ却て籠城の障となりて汐爲悪かるべし今立退と雖も心ゝ君の左右よ有て忠魂を顯さんとヤゐゞ重成も今ゝ抑止然らゞ仰よ任せゝ若軍始まりなゞ初陣とゝ申せども先祖佐々木の紋所四ツ目結の白旗真先ゐ押立大敵の中よ渉縱横よ切て廻り討死の秋至らゞ敵味方の目を驚怖す程の働いさすべしと申よゞ且元扇子を聚げ如何ゐも其節潔働を見物せん我亦敵中よ有と雖も君の汐大事と聞く上ゝ密よ牒知申さん尚黄泉ゐて再會を期すべしと馬ゝ乘たれども眼前の別ゐ臨み五ゐ涙よ呉よける且元重てヤけるゝ既よ我君の汐大事の時よ至り斯の如く城を發ゐ落行事不運と哉云ん天命とや云ん嗚呼口惜き事やとヤゐゞ重成も袖をひたして別れけり實ゐ忠義の士やと書傳へたる文書よても心の中よゞ推量思ゞ袖をぬらしけるそれより木村ゝ九度村よ密使をたて幸村を招きける斯て片桐市正且元ゝ胸中の事ゞも殘らず重成よ傳へ尚大坂の汐爲を計京都所司代板倉伊賀守ゞ方へ使を立てヤけるゝ某駿府よて上意をうけ秀頼公御母堂へヤ上と雖も女義の事故何ゝと御惑乱事定らず此よ依て且元大坂を退去今日當所手前の城地ゐ引取ゝ必定是よて

心酌三ケ條の内御受有べくとい存ずれども左右い大野を始佞悪の輩多故若識者の言葉を信じ某ふ討手を向られんも計り難し其時い無勢ふて難支い出御加勢をゐいるべしと之是い織田常心大坂を立退し砌城中の様子を板倉ふ密告ならむか左あれゞ既ふ駿府ふ聞へ不意ふ出て大坂を固なゞ城中難義ゐらんと計盡し故之板倉是を聞て扨い君の御内意の通り大坂城中各意とゐりし故忠臣無二の片桐さへ御味方ゆと曼さり此上い何程の名城ゐとも踏潰さん事容易かるべしと大きふ悦び加勢を送らむと思へども御下知もゐきふ軍勢を動さんも如何ゐと苦慮し處へ丹波丹後但馬三ケ國の御代官村上三郎右衛門と云者用事有て上京せしりい板倉村上を招き其方支配の地ふい謀浪人多かるべし今度片桐ゞ加勢せんと思ゞも御下知もゐきゐ近國の大名を動搖さん事如何ゐ其方記浪人を蒐集旦元ゞ加勢致すべしとゆ渡す村上心得て立歸り急遽其よ一觸示しけれい先丹波ゐい細井亦左衛門赤井五兵衛堤藤助山名

仙助秦野角助志貴角兵衛岩本頼母永井彌五八久我久兵衛長澤一角一島島之助但馬ふい小田切甚内林長兵衛同半之助小林彌八山名主計今川與八丹後ふ成合十助日岡部加茂久内鈴木彌市九世久馬等を始として屈竟の野武士三十九騎鋪ゐる鎗を提牧馬ふ打乗て勇で加勢とゐしふける茲ふ又中村ゞ大庄屋ふ今里村の三右衛門三津屋村の庄左衛門と云もゞ有兵法劔術を好けるゞ此時門弟を招き申けるい此度關東大坂交戰とゐり諸武士東西ふ別て味方ゐ爲す我くい大坂の御領ゐれゞ御味方申手柄を顯いし大名ともゐるべしと示諭けれゞ其道ふあらぬ百姓迄鋤鍬を捨馳集るもの貳千七百人よゞ及ける去ゞ具足を携へるものい兜ゐく甲ゐれゞ素肌ふて實ふ賤劣き兵をゞ集ける此時大政所ふい芝山小兵衛と云與家老を境の奉行として近年い境ふ住給ひ淀殿の無道を嫌ひ心を澄て居給ひける然ふ此度籠城ふ決定りしのゞ先政所を呼迎らるべしと有て石川伊豆守御迎の仰を蒙る此石川い無雙の勇士ふて武邊に詳明き者ゐしゞ大野ふ向て申けるい此度政所御迎の役を蒙りしに途中の變事も計り難くい故武具を備て參るべくい上意の武具始い老中是を改めいへゞ外に役所ふい得共御出有て御見物い得といふ大野尤と思ひ役所ふ來る此時石川伊豆守ゞ黒糸おどしの鎧腹卷ふ身を固め四尺貳寸有ける大太刀を帶怒氣を吐んで出きたり大野ふ向ひ大音ふて申けるい如何修理汝い是人面獸心之淀殿を妖言のして忠臣を讒し已執權と成んゞ爲め溝田と某を誘詐誘導松の間椽側ふて旦元を討取と申たるゞ何ゞ汝輩の佞人ゞ言を信じ忠臣たる旦元を討べきの其時の悪言よも忘却いせまじ今一度露言て見よと鍔元くつろげ睨視れゞ大野大ふ怖れをゐし頭を抱て逃入ける其間ふ石川い突然表へ出で馬ふ打乗急き堺ふ至り政所ふ右の由を申上る政所是を聞ゐひ扨い我を城中ふ迎ひ入るゝとの事ゐるゝ去ゞ籠城して淀殿の氣隨不道を見むいけがらいし幸ひ旦元茨木ふ立退しふし早使を立て迎呼べしと仰有扨も大野修理い石川

ゑ惡口せられ遺憾や思ひけん弟主馬之助ゐ五百の勢を授け翌日堺へ押寄る此事疾かゐ聞へしのゞ政所ゝ芝山と石川を召率ゐひ京下立賣ゐ立退るゑ其跡へ大野春房押寄て町人頭ゝ呼て吟味す此節の町人頭ゝ今非宗薫油屋天王寺屋阿賀屋海部屋の五人ゑ主馬之助ゝ是等ゑ向ゐヤけるゝ此度政所を取逃せし罪言語ゑ絶さゝ然る上ゝ堺の市中ゐ火を掛壹人も不殘燒殺してくれむと怒りける町人ども大ゐ恐怖談合の上鉛一萬斤鐵硝三萬斤を出し申けるゝ堺ゝ大坂より大恩の町人共あれゞいゝのでゝ汐下知を逸背ヤへき然ども政所の汐事ゝ一向汐知せもあく汐立退故更ゑ存ヤさずと言を盡し斷ゑ及べども大野さらゐ承知せざりしゝゞ町人共大ゐゐ困却復々金銀數量賄賂しけれゞ慾ゑ惑て其罪を赦し大坂ゐゞ歸りけり

第十四回　片桐途ニ奉ニ迎ス政所ヲ　木村誓ヲ痛ニ打ス勇傑ヲ

且元ゝ政所よりの汐使を請涙を流し我少身の時より愛顧を受け今淀殿の我意の所爲ゐつけ汐無念多故堺へ汐逃有しならん扨ゝ又如何ある難事をヤ遭しけん誰ゝ堺の樣子を知さる者や有と尋ねけれゞ多羅尾半左衛門富兵助の兩人堺の出生されゞ參らむ事を希望是ゑ依て屈竟の者を十三人を差添急ぎ堺ゑ參るべきよし命じけれゞ兩士急ぎて既大坂近くなりけれゝ行先を窺ふゐ早片町の柵門を固されゞ通る事能わす是ゑ依て尼ヶ崎ゐ廻りて城主池田高德ゑ賴で舟を借堺の七堂濱ゐ打上り政所ゑ行て門を叩且元ゞ汐迎として多羅尾富の兩人參さりと申大野ゞ手の者是を聞て門内ゐ有ゐふ人數を集片桐ゞ家來あるぞ逃ゐ討取と聲を掛馳出れゞ多羅尾富ゐ向て申けるゝ今ゝ逃ぬ處ゑ和殿ゝ何卒立歸り主人に此由ヤされよと云も終ず追來る敵ゑ打て入八方ゑ當て憤戰暫時の間ふ敵を討事廿八人去ども多勢あれゞ終ゑ多羅尾半左衛門始十三人ゝ同し枕ゑ討死す其間ゑ富兵助ゝ漸々此處を切拔七堂ゞ濱より舟ゑ乘て逃けり且元ゝ多羅尾富を汐迎ゐ遣せども未心安からず重て日比六左衛門河池五兵衛曾郷久兵衛ゑ八十人と

差添遣しける既ゐ尼ヶ崎ゑ到舟を借むとする處へ富兵助唯壹人立歸り堺の樣子を語けれゞ扨ゝ行ても詮方あしと池田高德ゑ一禮して長濱より神崎ゑ出る此時大坂ゐてゝ片桐立退けれゞ追手として自身ゑ向ゐへと勸る者多しと雖も痛片桐を恐ゞ故家來米村六兵衛同治太夫を大將として三百の勢を授けヤけるゝ迎も且元と戰かうとも敵すべからず此頃中島ゐ一揆蜂起しとの事あれゝ是を討取て片桐の勢ゑと号ー高名すべしとヤける是ゑ依て米村ゝ三百の兵を引率し神崎さして向ける爰ゐ亦さ中嶋の一揆共ゝ二千計も屯集けれゞいざや大坂の汐味方せんと騷たち入城ゑ旗おくてゝ叶ぬヤと鈍恩寺ゐ押入て施餓鬼の幡を引摺出し道場の鉦太鼓或ゝ半鐘おゞを叩立出來る米村大ゐゐ怪みあれゝ如何ゑ祭ゑてゝあらじ又聟禮ゑと看ゞ鎧兜も看さり何者ぞ尋來れとヤゐぞ米村ゞ軍中より貳三騎馬を乘出して是を問一揆の内より棟梁とおぼしき者兩人口を揃てヤけるゝ是ゝ中島の者どもゑてゝゞ大坂の汐味方ヤさん爲ゑ此所迄で參りゝと答米村大ゑ悅び去らゞ彼輩を引連て淡木ゝ向べしと云へゞ百姓共共言ゑ應じまづ〳〵兵粮を遣べしと其用意をぞ爲しゐける所ゑ片桐ゞ勢八十余人ゝ尼ゞ崎を出神崎ゑ來り淡木ゑ歸として向を見れゞ貳千余の勢有人々馬を止て何者やらむと不審ゑ思ふ所日比六左衛門の曰此頃兩中島の百姓ども一揆の者を集る由なれゝ其者ども覺たり曾郷久兵衛の曰一手離れてあたの打逸の紋付たるゝ大野ゞ旗印ならん富兵助河池五兵衛ゞ曰何ゑもせよ大野ゞ勢と有ゞ蹈破て通るべしと各々是ゑ同意して神崎川ゐ進みける米村六兵衛一揆の者ゐ向ひ彼所ゑ七八十騎の勢見ゆるゝ何者ぞ汝等知たる歟百姓共答てヤけるゝ是ゝ必定長濱の者どもゑてゝ有べしと望見るうちゑ日比六左衛門曾郷久兵衛河池五兵衛富兵助を始として八十余人の兵共齊川を渡りどつとおめいて駈立れゞ一揆輩大ゑ慌さ右往左往ゑ散乱して討るゝ者數を知ず或ゝ傍の深田ゑ落入て悶死さるゝ者も

多ゝりけり米村ハ最前より兵を纏めて扣しが片桐勢の疲勞ゝるを見濟し時分ハよしと三百の勢を以て八十余人を中ゝ圍餘さじものと責戰片桐勢猛烈と雖も最前よりの戰ゝ半ハ手疵を受け弱し所新手の勢ゝ操立られ打死する者多ゝりけり殘兵四十余人ハ川を跡へ乘返し伊丹の町ゝ打入て兵粮を遣茨木の方へ引取とす此時米村一ッの謀計を案じ百姓どもゝ下知してヤけるハ汝等ハ伊丹より茨木へ行道の傍ゝて小高き處ゝ登片桐が勢と見あらバ砂礫を風上より蒔掛て惱すべしとヤ付る此邊の勝手を知たる百姓共下知ゝ隨ひ間道より先へ廻り今や來ると待掛たり日比曾郷河池富の輩ハ斯事とハ夢ゝも知ず茨木さして引取處に後ゝ馬煙と立て米村が勢三百余騎打て掛る片桐勢何ゝわ少しも猶豫べき四十余人を一手とあし火花を散して接戰斯折しも一揆の百姓米村が下知を受後より砂礫の類を風ゝ任せて蒔掛けれハ片桐勢是ゝ腦され眼を開く事能ハず是ゝ依て富兵助ハ米村半助と互ゝて死す日比六左衛門ハ米村六兵衛ゝ首を授河池五兵衛曾郷久兵衛を始として四十人の輩殘ず討死す米村六兵衛大ゝ悦び八十余人の首を取先ゝ討れし百姓の首と共ゝ鎗或ハ竹串ゝ指貫き片桐勢と戰ひ一戰ゝ驅散し大將且元ハ討得すと雖も八百余の首を取さりと傲言し大坂ゝ歸れバ大野大ゝ悦び首を城門ゝ掛並べ扨城中ゝ流言して曰某が家臣米村ハ昔の鎮西八郎朝比奈三郎ゝも勝りさる勇士と斯者を先手として討て出る程あらバ東國勢恐懼ゝさらずと巧言せり木村重成是と惡何卒此巧言を止めんと思處ゝ八月十八日傍前ゝハ織田有樂齋淺井周防守渡邊内藏助木村長門守其外七組の面々居あらびさり此時大野修理ハ米村六兵衛同治太夫を召連御前ゝ出此程の軍功ゝ傍目見を頌ける重成突然立上り此程より噂ある大剛の勇士さる米村面人が腕を見んと首筋を握りけれハ兩人ハ強力の木村ゝ捉へられ動くこと能ハず重成微笑して扨もよハき鎮西八郎朝比奈ゝあ百萬の剛敵も恐るハぬ勇士程有て成程我

慢強く見へいと締付れバ兩人ハ首筋拙け血を吐て死だりけり大野ハ面目を失ひ默然とーていたりける重成猶も言葉を荒々けれ扨〳〵無益の力自慢やケ樣の者ゝ祿を何與らるゝ其許の心底も疑ハし返答ゝ依て其座ハ立さじと詰寄る織田淺井の輩中ゝ分入て宥諭ける重成ハ能折あれバ大野も共ゝ摘み殺さんと思ども大事の前の小事と思ひ許しける

第十五回

眞田始入大阪城　間諜頭ヲ擒ニ于敵地

時ゝ眞田左衛門佐幸村ハ木村重成より慇懃ゝ使者を以て入城あり度旨ヤ入れけれバ幸村十三人の郎等を荒集夫々手配をヤ渡し郎宅を片付九度村の庄屋年寄を始村中殘ず招き寄せ別離の酒宴を催し扨米驛の類郎宅田畑山林に至るまで夫々に分與へけれバ百姓共大ゝ悦び扨も節角傍輩染ヤせしハ殘念の事〳〵殊ゝ色々の傍恩賜をゐハる上ハ其報恩ゝ大坂迄送りヤさんと各々荷馬を引來り家具什器を附てゞ送りける其時幸村が郎等我も〳〵と馳集合都合八數貳百八十壹人とぞ記しけり先前鋒ゝハ海野三左衛門其勢廿五人鉄砲五丁弓五張長柄五筋旗印を揃其身ハ紺糸ゝ縅しの鎧ゝ紫の母衣を掛黑き馬ゝ金覆輪の鞍置て乘たりける貳番ハ望月主水三番ハ根津甚八四番ハ益田兵太夫各々人數道具前ゝ同じ五番ハ眞田幸村ゝ鉄炮十五丁弓十五張長柄十五筋半月に渕の指物六文錢の大旗對の道具ゝて行列嚴重ゝして打せたり其人數百人ゝ殿ハ幸安兵を督して相隨從大坂よりハ幸村の迎として織田有樂齋淺井周防守の兩人を差出さるゝ有樂齋淺井ゝ向ヤけるハ眞田ハ永々の浪人故万事不自由勝ゝて定めし姿も見苦しのらひ我々麗美ゝ出立初對面の鼻を挫ゲんも快よからざる事にこそと耳語ける扨安部野ゝ至れバ早幸村が先勢來ると告たりける先勢とハ何事ぞ片腹痛と兩人ハ微笑て待處に旗指物立派ゝて猛々緋の袋を掛し弓鉄炮あど見へけれハ眞田ハ常の人に非ずと恐れとゐし道の傍らゝ寄て禮をあし是へ見へるハ眞田殿ゝていやと云けれバ大將と見へた

る者馬上ゐて甲を脱某い幸村が郎等よて海野三左衛門と申者よてい今日の先乗仕つりてい鎧を着しい得ば下馬御免下さるべしと行過る両人い大よ驚き箇程の先勢を召連んとい扨々不審へと待處よ望月主水進み來る是こそと官業を掛るゐ海野と同じ答よて行過る穢て根津甚八益田兵太夫も打過て漸々幸村出來れば両人い謹んて禮を迎秀頼公より御迎として我々此處ゐ相待由を申幸村も馬より下て禮を返し某い眞田左衛門佐幸村よてい此度君の御招ゐ隨ひ入城し上い宜しく御執成頼存ずる由を申扨御両使ゐい御案内の爲先へ御趨下さるべしと申ければ両人い然らば仰よ隨ひい半と先へぞ進みける幸村入城よ及ひければ城中大よ勇ける斯て御目見も相濟御前よ於て籠城の評議にぞ及けゐ此時淀殿も籠の裏ゐて御聞有秀頼公仰有よい既よ籠城よ事定ると雖も一戦よ及時い如何ある謀を為べきと御尋へ長曾我部元親曰先天子を當城ゐ迎奉つり敵を朝敵とゐして戰ふ時い名正しくして勝利疑るかるべし後藤基次曰元親の策是と雖も板倉伊賀守京都を守護ば宇治勢田の橋をすて防禦ぶんい必定へ其間ゐ近國の大名加勢せば事難儀ゐ及べし寧不意よ出て板倉を討取ゐば天子い心の儘ゐるべしと申ける大野修理申けるい各々の意見一理有とい申せ共京都の守護い板倉伊賀守へ能不意よ出るとも其備有べし先茨木の城へ責て旦元を討取隨て枝葉を拂て其上事を計るべし時よ木座より壁を掛る者有人々顧視ば是大野が周施へ以召出されさる小幡勘兵衛景圓へ廂を進出て申けるい木座の意見恐有といへども我所存を申上ひ夫京都の守護い是尊閥の事よあらねば關東よ於ても能其人を撰み板倉其任よ當るを以所司代の重職を受さり關東諸士多中よて撰拔し程の伊賀守あれば假令不意を討とも其備へ有べし然時い容易實取事難し其内ゐ近國の加勢至らば却て味方の不利をあらむと又茨木を責片桐を討事猶以不可へ且元老練の勇將あれい五日十日の内ゐ落城せん事思も寄ず是又諸方の後詰來ゐば何の

益ある事よい某一の計事有宇治上林のうちよ水戸喜助と申者あり智勇勝し者ゐていが兼て一味の者を夥多集合罷在某内緑是あれば彼を誘導忍の者を數多遣し京都よ潜伏所々よ火を掛ゐば何程の板倉ありとも是ゐ驚き驕べし其火の手を相圖として京都ゐ押寄るい心安く板倉を討取天子を迎奉べしと申ければ幸村手を拍て大ゐ悦び此謀甚よ是と則忍の者を二十人撰小幡が組よ入て宇治の水戸喜助が方へ遣し其日の評議い終ける幸村邸よ歸り郎等を集て今日の樣子を物語小幡勘兵衛と云者い是關東の間者ある事と察と雖も猶其驚を探偵んが爲め彼が言ゐ隨ひ宇治へ忍を遣しさりと申せば郎等大ゐゐ感ド始ての會席ゐ御心附の段感入ていい必ず御油斷ゐく万事よ心を付るへ此者ゐて大方い城内の紛れ者相知申べしと暫く密談よ及ひけるが夜半の太鼓遥よ聞へ夜も寂寞と更わされば幸村寐所ゐ入て燈火をかゝげんとする所に忽然棘垣を越て來る者有何者ぞと窺ひ見れば是先年九度村よて助し

殺隠と云忍の者へ幸村問て曰汝何故ゐ爰よ來るや殺隠が曰先年我を助ゐひし御恩を報せんさめへ幸村が曰其故い如何よ曰小幡勘兵衛い關東の間者へ又星合口御門の鍵預り内藤甚太夫畑徳十郎御藏奉行玉置政内猪口武助も小幡ゐ勸られ關東の味方と成ていへ扨此輩い合戦よ及ぶ時諸門の内關東の下知よ隨ひ管守者を切害し東軍を引入んとの企てあり若事成ざる時い所々よ別て火を放たんとの工みていと則懷中より帳面と印の札を取出幸村ゐ渡し是を以て沙吟味有ば事明白よ相分るべし是某先年の御恩よ報する寸志ありと云けれい幸村大ゐ悦び我も左い心附たれども證據非ざれば詮方あく心を痛居たりしが今い心安し扨汝い如何するや若て申けるい沙吟味の日ゐ立退べし幸村其志を感ド金子を與けれども辞して請ず別を告て出よけり扨又宇治の水戸喜助い小幡より内意を受大坂の忍を召連山科の大乗院よ至て酒飯を乞ひしゐ意外の饗應ゐて問者の輩思ず酒を過し日の暮るゝをも知らざり

けり是水戸喜助が計略よして則大乗院より京都へ注進す板倉伊賀守忽三百の兵を催して馳來り壹人も殘ず捕縛て京都よ歸り吟味するよ大坂よりの恐へと者けれが密よ小幡が内線の者を撰一策を授け大坂よ歸しける此輩よ赤面、青東、文箱、天星、飛梅、等の五人之扨右の者共い大坂よ歸り京都の守衛嚴重ふして輕率い計がたし近日風雨烈き夜を待て火を掛其火の手を相圖とーて浮軍配有べしと中小幡密よ我謀成就せりと悦び翌日登城して京都より歸城の者の口上を背付て披露す大野淺井織田の罪状を見て去が火の手の起るを相圖ふ京都へ軍勢を差向んと小幡の智謀と感ドける處へ薄田隼人出來り幸村よ向中ける い仰の如く殘の者い悉皆召捕てひと中幸村小幡を吃と睨彼をも捕縛と云薄田飛かゝり引伏て何の苦もあく勘兵衛を生捕人々是いと驚けが幸村制して小幡ふ向ひ汝如斯謀を以て當城を拔とい賂太き奴りあ大坂よい幸村有事を知ずや其時大野の發進出て中けるい真田氏の振舞其意を得ず小幡い當城の忠臣よして智謀有者之然を輕々敵召捕れし事心得難しと中けれが幸村大よ打笑ひ彼關東の犬と成りて當城よ入込諸事味方の割等を妨剰東軍を引入城中ふ火を掛とす斯る事を知ずして采配を採て人を指揮する事の成べき哉と中ける此時小幡勘兵衛い謀を幸村よ見顯され迚も逃るべき處ふ非すとい思へども未さ體據のあらざれい陳て中けるいこい軍師の仰とも覺ず某が素性い中さずとも浮存じあらむ關東よ恨こそあれ何の因線有て關東の間者とあらひや粗忽の振舞し給ふあと中よぞ大野傍より幸村よ向ひ小幡關東よ恨ある者あれが篤と御正あるべしと云勘兵衛此言葉ふ力を得て再び言んとす幸村大喝呵て曰汝再び舌を動すこと勿れ一味の者い殘ず召捕たりと中よぞ小幡首を垂て罪よ伏す幸村下知して勘兵衛が家を探索しひるよ關東よりの密通數通を得たり則相印の木札帳面を取添浮前よ於て是を披き中けるい既ふ同類七百四人有斯る者を浮内線の人々寵用しるふ

い何とも心得がたしと申けれが大野を始め織田淺井の輩側ふ侍つて何の言葉もあし則右七百余人の者共を大手ふ引出し左右の親指を切落し小幡勘兵衛が頸よ入墨して追放ける後よ神君此由を聞外聞を憚かり首を刎よと怒りるふを本多佐渡守が諫言よて淺草の御鷹寮行とぞ成しける此時京都よい古き家を毀ち火を掛大坂の動靜を窺ひし處よ小幡が謀略露顯勘兵衛大坂を拂れし由聞けれい徒よ心を費せし已よて止ぬ扨幸村い關東の間者を除き浮前よ出て中けるい都て籠城防戰よかぎらず万事に渡りて内事い蕭河の如く外事い韓信の如く共よ整ひしへが安りるへし是よ付ても且元内よ有て事を納某外を防しいが城い日本一の名城よて兵狼矢玉の具備充分あれが何の恐り有べきよ殘念の至之唯内線の人々の私欲を挾み我意を振をやと涙と流て中けり夫より諸將と共よ城内を見廻ける内高麗橋の橋の下よ至が銅の玉夥しく積置たり織田有樂齋幸村よ問て中けるい是い何の爲よ如斯夥多用意いさしさる物ふてひや幸村答て曰是赤連火砲と云在昔朝鮮杜丹蠻と云處よて小西行長大明の將麻貫が爲ふ是を用ゐられ七城を捨て敗走す是よ依て朝鮮國を取事能ず其後加藤清正大明勢の後を討て勝利を得是を分取て太閤よ奉る則此處よ存置る由よ聞此用法い悴幸安ふ敎授置されい中付て試るへと話段々巡視辰巳の角よ至て中けるい此處よ出丸なくてい叶まト太閤よも思召有が故向の小山を其儘ふ置給ふと覺たり某是よ出丸を築造寵居中べしとぞ云よける

第十六回　大助受敎習鐵砲　幸村撫レテ慮築堡砦

斯て人々御前ふ出彼銅連火砲の事を中上る是よ依て御母堂御内線の罪い中よ及ず七組の番頭を始として皆々列座よて大助を召れ銅連の用法を御覽有幸安廣庭ふ下て其用意をおし御前よ向て中上けるい只今銅連の態を御覽よ入れべし然只氣強し鼻を掩いせ給へと中上扨石炭と取寄是を地ふ埋彼銅連と其中よ入火を掛れが忽地中鳴動

玉ハ空中ヲ飛揚シ暫ク有テ地ヨ落庭上ヲ轉々ケル幸安下知シテ水ヲ是レヨ灑ゲバ不思議ヨルカヲ此玉四方ヲ破烈テ蓮華ノ如ク其中ヨリ蜂ノ如キ猛火四方ヨ散乱其臭氣何トモ云ガタシ若是ヲかぐ時ハ忽嘔吐氣ヲ發シケレバ皆々大ヲ驚く秀頼公淀殿ヨも御座ヲ堪ず御入有列座ノ人々大ヨ感じ大助纔十五歳ヨシテ如斯態迄敢タル父幸村ガ武德のほどを賞贊ぬものこそなかりける扨又幸村ハ出丸を築ん事をヤケレバ人々言葉を揃へ夫小城と雖ども是を築ヲハ材木其他の用意なくてハ叶べからず其上合戰近きヨ有バ他所より是を取寄彼是時日を費やす内合戰起りなバ返つて味方の害とならん能々御思慮然るべしとヤせバ幸村答てヤけるハ其義ハ少しも御氣遣ひ御無用ヱ某九度村ヲ整居の砌片桐且元ヨ謀つて浪人渡世のためと偽ハり九度山の諸木を見立是を切出し大坂ヨ廻し遣さり亦出丸の義も大躰整理ある筈ヱ侍吟味ひへと則ち石赤銅の瓦等繩のある處まで夫々書付をもつて示しけれバ人々立別れて探索ス幸村ガ言葉ヨ少も違ずふてう和印をもつて整へ有ければ人々大ヲ驚き是ヲ付ても且元ガ忠義を思ひ涙を流さぬ人なし幸村亦下知を傳へ木の葉を除却土を堀ると一尺餘忽然として堀の石垣顯れたり幸村人々ヲ向ひヤけるハ某し籠城し此處ヲ出丸を築きなハ日本國の勢を引受戰ふとも恐るヽヨ足ずと約束せり故ヨ且元某ガ繩張の通り密ヨ堀を穿石垣等を拵へおきさりかヽる忠臣を退ぞりしむる樣ヨなされしハ殘念ヱとヤけれバ大野ハ面目なくぞ見へヨけり幸村夜を日ヨ付て築しかバ程なく造道千取塀迄成就しけれバ則ち真田丸と名附て幸村爰ヨ引移り專ら籠城の用意をぞなしヨける其上幸村賞罰を正くし仁術を施行けれバ城内の寶寶ヨ嬰兒の慈母を羅ふガ如く靡ぬものもなのりけり扨又神君ハ駿府詰の大小名九月朔日の挨禮を受るヱ處ヲ板倉より八月廿六日出の飛札到來す本多佐渡守挨前ヨて是をヤ上る則ち大坂の樣子籠城の次第詳細ヨヤ來る挨前ヨ列座諸侯大ヨ驚き早御用意

然るべーと申上る則ち井伊掃部頭藤堂和泉守の兩人を召れ早々上京いたすべきよし上意ある江戸表ヘハ松平織部を挨使として大坂の趣を仰せ遣されける是ヨ依て在江戸の大小名を召れ仰渡さるヽヨハ此度大坂籠城ヨ依て挨出陣有べし早々歸國有て其用意せらるべしとの事ヱ是ヨ依て諸國の大名九月十一日江戸を發足して皆々歸國すまた駿府ヨてハ同十二日ヨ眞田大助入城の由ヤ來る去れども彼若年者なれバ何程の事有むとの仰ヱ同十五日ヲ片桐市正の使來たり密ヨヤ上度義是有ヨ依て駿府下向仕つり度よしヤ來る然とも且元神君の謀ヨ落入怨ヱ懷くの折なれバ如何なる事ヤ爲さんも計り難しと有て且元ガ使を召れ何れ大坂ヘ挨出陣有べくの間緩々挨對面有べし遠路の處下向ハ無益なるべしとの挨答ヱ且元所存ヨハ急ヲ押寄るハヽ大坂方籠城の用意整ハず難義なるべし我を駿府ヲ召うちヨハ城中充分ヨ用意出來すべしと思慮し斯ハヤ上ける同廿六日小幡勘兵衛ガ事ヤ來る是ヨ依て大ねヲ驚愕ひ井伊藤堂ヨ挨下知有て早大坂の領地を切取べしとの挨事ヱ兩將命を受て井伊ハ八幡より河州ヨ責入藤堂ハ國府峠より切入たり此由迫々大坂ヲ聞へけれバ挨計義有時ヨ内緣の人々ハ幸村ヲ向ひ挨領地ヱ敵責入事甚だ急ヱ早討取べしとヤけれバ幸村答て曰是ばかりの敵なら打ヲ及ず假令井伊藤堂の輩を討取たりとて何ぞ關東の弱ども成べからず味方壹人の討死ハ敵の百人ヲも勝るべし交戰の時を待て敵を討べーとて更ヲ兵を動さゞれバ大野淺井の輩私語けるハ幸村井伊藤堂の兩將を恐れて戰うハざるヱと笑ひ居たりける扨藤堂高虎ハ河内國國分峠より責入て平野の脇龜井村ヨ陣を取先陣渡邊勘兵衛ヤけるハ某一手の勢を引て敵の樣子を索搜ヤべしと云高虎尤ともと同意しけれバ渡邊先五百騎を引卒して桑津の造道ヨ陣を取て敵の虛實を聞ふ此時十月朔日の事なれバ朝霧深く立登り物の善惡も分り難し勘兵衛耳を聳だて窺ひてヤけるハ遠ヨ櫓の音の聞ゆるハ是大坂より朝霧を幸ひヨ

寄來ると覺たり其備へおくてゝ叶ゝじと陣を固め靜まり返て待居たれども更ゑ敵寄來ず勘兵衛大きに怪み漸霧の晴間に之を見れゞ敵の寄るよてゝおくして是熊野新宮左衛門左馬之助ゲ八百の勢を引て眞田丸より大坂ゑ入城するよてゞ有ける渡邊勘兵衛是を見て切齒をおして怒り扨も口惜き事かお眼前を通る敵を知ず入城させし事こそ安からぬいざや追掛て喰止んと先三百騎を鼓形ゑ伏弐百騎を引卒し新宮勢の跡を追飛ゲ如くに乘掛たり

第十七回

幸安戰破二渡邊カ兵一
幸村諫テ敎二戒ス我子一

袋ふ眞田幸村ゝ九月晦日の夜星を數へ天文を見て手をはたと打ヤけるゝ明日ゝ必ず敵我出丸を犯すべし悴幸安ゑ初陣させ軍配を內緣の人々ゝ見せ平生の惡言を止ひべしとて大助を呼てヤけるゝ明日ゝ必ず新宮勢入城すべし其時敵當手をおうす事あらむ汝是を討べしとヤ幸安父の命を受深谷淸海入道穴山小助を左右ゝ備へ弐十目筒廿四挺を用意して百五十騎の勢を引て出ゑけり幸村本丸ゑ使を立ヤけるゝ明旦當手ゑ少戰あるべくと存ゝ則ち悴大助ゑ初陣致させたれゞ頗ゞ出丸ゑ浮出有て幸安ゲ軍立をも浮覽下されたしとヤ是ゑ依て秀賴公淀殿を始として浮內緣の人々出張有て幸安ゲ軍の樣子を櫓より浮見物ゝる明れゞ十月朔日朝霧深くして物の善惡も辨明ゲたく漸々辰の下刻より巳の刻ゑ至て霧晴たり此時新宮勢出丸近く來けれゞ大助是を迎て城中ゝ送る幸村乘て渡し置たる割符を合し城內ゑ引入る其嚴重ある事言語ゝ述ゲたし夫より大助ゝ千鳥形の造道ゑ出て陣を取深谷淸海入道ヤけるゝ今少し進まれ然べし此處ゝ進退甚だ宜からずとヤ幸安答てヤけるゝ否この處敵を誘るゑ利ゝり進い宜しからずと云淸海入道亦ヤけるゝ某今年九十三歲浮祖父彈正忠殿ゑ仕てより剛來軍の場數多ゝ殿ゝ浮幼年といひ殊ゑ初陣ゝ唯此老人ゝ任せるへ大助ゲ曰然れども今日ゝ此處ゝ利ゝり氣遣ひいたされゝと云深谷ゝ心あらず穴山と共ゝ今少し進みるへと雖も更ゑ用ず百五十騎を三手ゑ分深谷穴

山を後ゑ備させ自ら五拾騎を引卒て先ゝ進み弐十目筒八挺を備へて待ゝ之渡邊ゝ新宮勢を追んと隊伍を乱して來りしゲ折ゝも霧晴て戌亥の風烈しく吹出ーけるゑ向を急度見てゝれゞ一手の勢扣へたり渡邊少しも猶像せず齊しく押寄て先鉄砲を打しむるゑ口藥飛乱て更ゑ用を爲ず如何とせんと思ふ所ゑ大助下知して廿目筒を打掛れゞ先ゑ進し渡邊勢忽ち打倒され思ゝず跡へ引退く大助眞先ゑ進み鎗を入て突立げれゞ渡邊ゲ弐百の兵足も止めず散亂せり渡邊勘兵衛ゝ味方の敗北を幸ひ伏勢の處ゝ欺誘寄討取んと自ら取て歸し又破てゝ導引ゝんとす大助味方を纏めヤけるゝ向の鼻ゝ軍ゑ忌事ゝり殊ゑ渡邊ゲ逃る樣心得難しと兵を引上元のところゝ立歸る深谷淸海入道大助ゲ前ゝ來たり扨々浮若年ゝして其軍慮ゑ至てゝ老年の我等も及ゞんと賞贊けれゞ大助の曰父徐て風を味方ゝする事を敎るふけさ戌亥の風頻ゝ強し此處の曲ゝ戌亥より辰巳ゝ向ふ是味方ゝ風を背ゑ受敵ゝ風ゑ向ふ之又造道の砂を蹴立るゲゆゑ敵ゝ眼を開く事能ゝず鐵鉋の火蓋を切と雖ども口藥を吹散すゲ故筒ゑ火移ず鉄鉋有と雖も役ゑ立ずと云けれゞ穴山も共ゝ舌を振て恐れける去程ゑ渡邊勘兵衛ゝ偽つて敵を伏勢の中ゑ引入て討取んと謀しゲ跡より家來の者共呼ゝつてヤけるゝ何故左樣ゑ逃るふぞや敵ゝ引返しいと云ゑ渡邊大ゑ驚き兵と纏め諸勢を集ヤけるゝ今日の戰ひ纏りの敵の鎗を入るゝ恐れ逃る事を第一とーて斯むのり崩るゝゝ何事ぞ諸勢ヤけるゝ敵の蹈立る砂眼ゝ入て目を開く事能ず是ゑ依て斯の如くゑいとヤ渡邊是を呵て退かしめ扨伏勢の罪ゑ向ひヤけるゝ敵を伏兵の內ゑ引包み討取んと計りしゝ何の故もなく引返せしゝ甚だ不審ゑ我思ゑ汝等覘見し故敵是を見て追ざるあるべしと怒けれゞ白石文吾といふもの答てヤけるゝ中々我々覘くやうある事ゝ仕つらず誠ゑ死たる樣ゝ致し居ヤいと云渡邊益々憤り不祥の事をいふ奴のなと此たびゝ弐百の勢を伏て亦押寄る大坂方ゝ深谷ゲ五拾騎入替て是を向へ廿

目筒をうち掛鉋を入て突崩す渡邊ハ敵を伏兵の處ゟ引入んと散々ゟ成て敗走す深谷能程ゟ敵を討て引退く渡邊不審ゟ想ひ又百人の兵を增て馳向ひ穴山小助深谷ゟ入替て是を迎へ同廿目筒を打掛〳〵ひるむ處を鉋を入て突崩し是も能程にして引返す渡邊勘兵衛さてハ敵我伏兵を探知りしならんと思ひ惣勢を一手ゟあし是非打破れと押寄たり大助ハ三手の勢を一ゟ纏廿目筒を雨の如く風上より打掛〳〵突立れハ渡邊猛と雖も數度の戰ひゟ疲たる上風ゟ向ふゞも名働き忍ゟ任せず散々ゟ討あされ漸々主從五人ゟて本陣ゟ逃歸れハ高虎大ゟ怒り我大勢所ゟ向ひヤ分あし予ゞ前ゟ再び出る事勿れとヤされける此時大助ハ敵の首弓鉄砲鎗長刀の類を拾取城内ゟ立歸る秀頼公を始め皆々感心ある幸村ハ自身太鼓を打て勢を驅す先一つと打ハ惣勢烈を正す貳つゟ後を向三つゟ一廻して禮を爲す是敵の紛者を見出さん爲ゟて幸村ハ大助を召出し怒の聲を發してヤけるハ汝よく承まれ渡邊ハ兵を三手ゟ伏て

昧方を道引汝返て穴山深谷と伏なハ貳度目にハ渡邊を討取べし初陣ゟ敵の大將を討取ざるハ手柄とするに足ず已れ軍をするゞ面白さゟ勇ふ誇こそ拙けれと戒しめける城内の人ハ是を聞て私語けるハ我々ゞ分として遠く大助ゟ及はん然るゟ返つて是を叱咤退く惡く立廻りて軍師の怒を請あとヤ合てゞ恐れけり

第十八回　眞田智謀破高虎　木村奮勇惱敵兵

藤堂高虎ハ多くの兵を失ひしを安からず思ひ居けるゞ急度謀計を按ト出し使を以て井伊直政ゞ方へヤ遣しけるハ今宵八つの鉦を合圖として夜討致すべし其故ハ今朝の戰ひに渡邊敗走せしゝハ城方勝軍ゟ油斷して枕を高くせんと必定あり其不意を討て勝利を得んとの事ゟ直政然るべしと若けれハ藤堂大きゟ悅び夫々手配を爲し其夜の三更ゟ兵粮を遣ふ時の至るを待居ゟり城方ゟハ始ての戰ひゟ幸安勝利を得たれハ此よろこびとして諸將の手へ酒肴を下されけれハ終日酒宴をあし娛樂いたりける幸村本丸ゟ登城して申けるハ今日の戰ひゟ味方勝利を得たれハ其油斷を計り今宵敵より夜討致すべし先頃井伊藤堂ゟ領地へ打入ひ節某ゟ馳向ひ討取べしと仰せありしゞも味方の損せん事を計り止奉りしハ内々ゟて惡言せられし輩も有と雖ハる總て戰ゝひハ其時と地の利ゞ第一ゟて此今宵ハ思ふ儘ゟ敵を取ひしきヤべしと諸將と渠夫々手配をヤ渡す各命をうけて出行ける幸村大野兄弟ゟ向ひ貴殿某ゞ後陣ゟ扣へ下知を待て敵の馬物の具弓鉄砲の類を奪ひ敵の馬ゟ付て城中ゟ運搬べしと申兩人命を請て出行次ゟ道犬淺非渡邊の三人を呼て申けるハ其元達ハ鳴野口大助ゞ手の殿して敵の敗るゝゟ乘し武具兵粮を奪ひ取城中ゟ引べしと云三人命を請て出行幸村一々手配終けれハ自ら一千の兵を引て備へ爲す此時藤堂高虎ハ今宵の夜討ハ我ながらも妙策ゟと思ひ貳万三千余騎を前後ゟ備へ枚を含て押寄る此時木村長門守ハ幸村ゞ命を請一千の兵を引卒深田を前ゟして陣を取待掛しゞ敵寄ると見てけ

れバ閧を喝と上ゐけり高虎ゞ先手藤堂掛解由同圖書同新七同采女五千余騎ゑて進みしゞ同音ゐ閧を合せて押寄る木村重成味方ゑ下知して松明を振立させ敵を釣藤堂ゞ先手前ゑ深田あれバ進事能ハず鉄砲を雨の如く打掛ると雖も其距離遠くして彈丸ハ盡く深田ゑ落て用ゐ立ず後陣ハ追々ゐ馳加ハつて唯一戦ゑ打破らむとすれども深田ゑ支障られ無益の鉄砲を放のみゑて詮方なし此時後藤又兵衛基次時分ハよしと関を發し松明を振立敵を釣藤堂仁右衛門同若内同覩負桑名彌兵衛の輩四千余騎ゑて是ゑ向ふ去ど此處も深田を前に當て備たれバ是又無益の鉄砲を打のみゑて進む事能ハず木村後藤の輩ハ十分ゑ敵を釣寄時分ハよしと合圓を定め五十目筒を卅挺掛並て切て放せバ高虎ゞ軍兵兩方共大ゐゐ紊乱けり幸村是を合圓として一町半すゝみて玉目三貫目の大筒を十挺計一時ゑ切て放せバ藤堂勢人馬ともに微塵ゑ成て死さりけり是ゐ驚き殘兵共本陣さして亂だれ歸る藤堂高虎大ゐ怒り自ら下知して蹈止めんと馳廻る木村重成後藤基次一千宛の兵を率し左右ゑ分れて縱横ゑ切て廻り勇を振て戦へバ藤堂勢大ゑ乱れ平野をさして敗北す高虎も既ゑ危く見へたる處ゑ戸塚庄兵衛今川與市細井助太郎嶋田新助小浪所之助岩田藤兵衛河田杵之助毛利新八を始として命を捨て名を擧んとする輩八十六人取て返し防ぎ戦ひける重成基次聲を掛優しき敵の振舞うあいざや此世の暇を取すべしと基次鎗を取て敵中ゐ馳入しゞ忽ち今川與市細井惣太郎小浪所の助を突て落す重成ハ戸塚庄兵衛河田杵之助毛利新八岩田藤兵衛島田新助を切て落し猶も勇と顯し切て廻れバ深田ゑ追込れて死する者數を知ず幸村ハ大野ゑ下知を傳へ敵の捨たる兵器の類を拾ひ給へとゆけれバ兩人是と拾ひ敵の乘捨たる馬ゑ付城中指て引退く幸村木村後藤の兩人を招きゆけるハ當手の軍ハ既ゑ味方の勝利となる其元ハ守口迄進て鬨の口の加勢有べしと云兩人心得ハと答て各々千騎を率て馳向ゑ此時井伊掃部頭ハ藤堂高虎ゑ約を

なし鬨の口ゑ押寄る先陣ハ木股清左衛門二陣ハ伊澤内記三陣庵原主水四陣藤田丹後守五陣ハ直高ゞ本陣ゑ各五千を引卒都合弐万五千騎ゑ山口伊豆守孕石豊前守ゐ三千騎を付て森口の陣處を守らせ一手ゐ成てゞ押寄る城方ゑハ長曾我部元親幸村の命を請て三千騎ゐて是を迎先有井四郎左衛門畑式部ゐ五百の兵を授け沼のんじきをはうせて鼓島ゐ伏五十目筒を數多掛並て待いたり嫡子左衛門太郎左衛門次郎左衛門三郎右衛門四郎ハ各百騎を率て四ヶ所ゑ分れて伏兵たり眞田大助幸安ハ一千騎ゑて今福堤ゐ潛伏備たり井伊直孝ハかゝる備への有とも知ず自先手ゐ下知して疾進む此時先陣ハ川を離ゝ事三町計直孝ハ堤の口ゐ陣を取たりしゞ藤堂勢の敗北する音を誤聞すハや高虎ハ軍ゑ勝たると覺ゆるぞ進々と先陣ゑ下知をゐす斯處ゑ思ひも寄ぬ鼓鳴の内より有井四郎左衛門畑式部顯れ出で五十目筒を列べ發切て放し直孝ゞ乘たる馬の前輪を打碎けバ何ハハ以て耐べき眞逆さまゑ落たりける家臣の面々大ゑ驚き大將打れゐひぬと首程ゐそあれ陣中俄ゐ騒乱し上を下へと返しけり直孝是を見て大音を揚げ我ゐハ別條ゐしと呼ハれども斯狼狽し折ゐれバ耳ゑも更に入ずこそ騒動すると大方あらず鼓鳴の内よりハ筒先を揃へ玉を込晉打出せバ是ゞ爲ゑ打倒され死するもの數を知ず狹間助右衛門廣瀬作内やう〳〵ゐ直孝と助け森口さして引退く此時元親ハ本陣の勢を下知して五百目筒を打掛〳〵披藤處へ鎗を入直孝ゞ先陣弐陣を突崩せバ右衛門太郎兄弟四人四方より打て出三陣四陣を打破る是ゑ依て井伊ゞ二万五千の兵纔ゑ三千ゑ足ぬ長曾我部ゞ勢ゑ切立られ散々ゑ成て敗北す直孝口惜くや思ひけむ眞中ゑ蹈止り島田郡藤田要人の兩人ゐ五百の勢を付て左右ゐ伏置兵を纏て待居たり斯る處へ木村主計頭重郷一手の兵を引て馳來り直孝目掛て切て掛る島田藤田ゞの伏兵左右ゐ起て重郷を中ゑ取込討て取んと責戦ゑふ木村ゞ郎等荒川熊藏八方ゑ當つて切て廻り忽ち藤田要人ゑ渡り合只一合ゐして馬より下ゐ

切て落す藤田ゞ良等大いゐ怒り八人齊く鋒先を揃へて突てかゝる荒川熊藏すこしも屈せず八人を相手よして忽ち五人を切て落す此勢ひゐ恐れ殘りの三人鎗を捨てぞ逃去たり島田部ハ藤田を救ハんと掛寄る處を重郷の爲一箭の下よ射殺さる此間ゐ直高ハ備と立て味方よ下知して鎗と入んとする後より眞田大助ゞ一千余騎犬浪の逆するごとく打てゐゝれゞ穴山、深谷、津山の跡鎗先を揃へて突て掛る是よよつて非伊ゞ勢微塵ゐあつて四方よ敗北す直孝ゞ家士岡田彌兵衛猪子亦右衛門串元庄助一宮太郎兵衛梶原十太夫星野三郎太夫内川庄兵衛を始として屈竟の兵八百ばゝり討死す去程よ直孝ハ森口迄引去山口伊豆守孕石豊前守と一手よ成り大旗小旗を建並べ敗軍を集むるはと

よよ此方彼方より敗卒ども馳加ハり程あく五千計よありけれゞ直孝少一ゐを安ト兵粮を遣ひ備を立て扣たり斯るところへ長曾我部ゞ三千余騎関を作つて追來る山口孕石味方ゐ下知してこれを向へ死力を出して責戰ふ處よ木村後藤ゞ貳千余騎森口村の中程より討て出五十目筒をうち掛〳〵横鎗を入て突崩す此時眞田幸安木村重郷ゞ勢馳來り面もふらず切つて廻れゞ非伊勢何ゝハ以て耐べき四方よ散乱して討るゝ者數を去らず直孝も鎗を捨兜を落し逃たり〳〵敵躰ありける有様ゑ眞田幸安ハ道犬淺井渡邊よ下知して敵の武具を奪はせけれハ三人の輩これを拾ひ取乘捨たる馬よ付て悦び勇んで引歸る城方の諸將ハ十分の勝を得て伊城内よ引取ける秀頼公貳の丸の橋まで伊出迎ゐり禮をゐしるへゞ幸村、幸安、元親、甚次、重成、重郷を始として恐れ入て平伏す秀頼公宣はく謀を城内よ定め勝事を敵陣ゐ顯す事古今その驗少ゐき事ゑ假令日本唐土一ゐゐつて攻るとも恐るゝゐ足す軍師の人を用ひるゑ事實よ神の如しと宣へゞ三軍彌々眞田を尊ける幸村本丸よ登城して大野淺井織田の輩を戒しめてゆけるハ各ハ君の伊爲をも顧みず人を嫉妬事の甚だしきハ何事ぞ重て斯樣の振舞あらゞ急度罪を正しゆべしと云ゞ皆々恐入り是

よりして差出口ハ止よけり茲に又井伊藤堂ハ散々よ打ゐされ漸々京都ゐ逃登りこの趣きを書付て駿府へ言上す大伊所大いゐ驚きゐひ江戸表へ早々軍勢催促ゐつて上京あるへき旨仰遣はされける是ゐ依て諸國の大小名よ伊下知ゐり尚土井大炊頭を伊使として江戸表伊留主居の面々を書載し大伊所へ伊覽よ入ゐふその人々ゐハ

鶴若殿(水戸中納言頼宣公)竹千代君(三代將軍家光公)松平下總守(蒲生藤三郎)福島正則(此節中風よて歩行叶ハす)同備後守、鳥井左京之亮忠政、奥平美作守忠昌、内藤左馬之助政長、酒井河内守重忠、黒田甲斐守長政、平野遠江守長泰、谷出羽守利政等ゑ

大伊所土井を伊前よ召れ福嶋、黒田、谷、平野ハ謀叛せんも計ゞたし殘の輩油斷ゐく能々相守べしとの伊事ゑ土井畏り奉る由伊請して罷歸る扨駿府の伊留主居ゐハ

國松君(駿河大納言忠長公)越後中將忠輝、加藤式部太夫、戸田武藏守、本多伯耆守ゑ

又前將軍伊供の人々ゐハ

本多上野之助、同佐渡守、戸田伊勢守、水野日向守、同帶刀、松平下総守、同主計頭、安藤帶刀、成瀬隼人、大久保玄番頭、同長門守、水野右衛門尉、本多兵庫之助、高力左近之進

右之輩前後を守護し十月十一日辰の刻駿府を伊發駕ゑ又在駿府の大名ゐハ

松平長門守、加藤肥後守、古田大膳亮、松平主殿頭、同石見守等ゑ

是ハ一日扣へ十二日よ出立ゑ扨家康公よハ道中伊逗留有て同月廿三日伊入落ゑ又新將軍伊供の人々よハ

酒井左衛門佐忠勝、同雅樂頭忠世、戸田采女正正勝、榊原式部太夫康昌、本多中務太夫勝正、松平丹後守康長戸澤上野之助昌元、相馬大膳之亮滿胤、岩城但馬守正好松平左近將監忠直、南部大膳太夫信朝、同信濃守信次、右の人々伊供ゐて十月十二日江戸を伊發駕ゑ在江戸の大

名ゝゝ松平陸奥守、真田河内守信重、同内記信卿等ゝ此三ゝゝ一日後十三日ゝ江戸出發ゝ秀忠公ゝゝ道中ゝ急有て霜月朔日ゝ入洛有ゝ父子ゝ對面有てゝ喜限ゝし諸將替る〳〵ゝゝ禮ヲ上る中ゝも非伊藤堂ゝ先敗面目ゝく謝罪の段謹て言上す則軍の次第ゝ詳有て仰ゝゝ其方共大坂方を蔑如し故ゝ其上左樣の軍立ゝ古の良將と云とも及び難し我恐るゝものゝ真田左衛門佐幸村ゝ彼空死して籠城せしゝゝらずや若左も有ゝ容易勝事能わずとの上意有猶諸國の大名上洛を待備を定べしとのゝゝ事ゝ

第十八回

關東募レ士 起ニス大軍ヲ 坂城集レ勇 堅ニ軍陣ヲ

十一月三日四日迄ゝ諸大名概入洛しゝの〳〵ゝゝ對顔あり其軍兵京中ゝ充滿たり同五日大坂地方繪圖を以て人數手分仰せ付らるゝ先城の東鴫野堤へ佐竹義宣今福堤へ上杉景勝佐竹の二番本田出雲守上杉の二番堀尾山城守京極丹後守夫より東沼を隔て松平丹後守直茂牧野駿河守西尾豊後守遠藤但馬守德永左馬之助二番備ゝ伊藤修理太夫本田繼之助福島伊豫守松平岩見守根津小五郎伊達景家秋田城之助京極若狭守同修理之助仙石兵部少輔六郷兵庫頭松平大膳亮松平信濃守水野伊豫守保科肥後守松平丹後守松平安房守新庄越前守羽柴丹後守松平越中守真田河内守同内記松平長門守吉川駿河守等ゝ辰巳より南の方真田丸の備へゝゝ松平加賀守井伊掃部頭松平陸奥守藤堂和泉守越前殿黑田筑前守淺野但馬守酒井左衛門尉松平下總守有馬玄番頭一柳監物古田大膳亮桑山加賀守同左衛門亮脇坂淡路守生駒讃岐守金森出雲守小出大和守寺澤志摩守本田左近亮神保主膳正松平豊後守高力左近太夫丹羽五郎左衛門溝口伊豆守羽柴美作守佐久間藏人堀淡路守等ゝ茶臼山ゝ陣の近邊ゝゝ旗本五十頭備へらるゝ其外與力同心百人板倉内膳正大將として壹万人ゝ旗本五拾頭與力同心前の如し高木主水正ゝ大將として前同斷の人數を率ひ外ゝゝあつて弓鉄砲並ひゝ頂りの兵粮を配り新將軍のゝ陣近邊ゝ備へたり倉橋内匠頭大番頭ゝてゝ旗本近藤石見守

ゝ番頭ゝて御旗本百人本田大隅守大番頭ゝて御旗本百人井上左門與力同心共前後左右ゝ備へて五萬人ゝ住吉の松原天王寺の戰場ゝゝ

本田佐渡守　同上野介　立花左近將監
松平周防守　永野日向守　同監物
奥平兵庫頭　細川玄番頭　同外記
谷出羽守　安藤帶刀　酒井雅樂頭
堀田上野介　同出羽守　成瀬隼人
柳原遠江守　永井右近太夫　同信濃守
石川主殿頭　蜂須賀阿波守　松平土佐守
池田宮内少輔　竹中伊豆守　森武藏守
稲葉伊豫守

其外御旗本諸役人代り〳〵ゝ勤らる川口ゝゝ九鬼、向井、千賀の船奉行ゝ二番ゝ

羽柴左近太夫　池田丹後守　山崎左馬之助
市橋下總守　分部左京亮　市川兵庫之助

北の方備前島南中島天滿の陣ゝゝ

池田武藏守　同宮内少輔　同左衛門尉
別所豊後守　石川主殿頭　同玄番頭
岡部内膳正　有馬左衛門尉　加藤左近進
池田備後守　田中筑後守　鄕田丹後守
木下左衛門太夫　片桐東市正　同主膳正

石川伊豆守宮城丹後守の跡前島ゝ陣を取凡國々の勢諸旗本都合百三拾万人外ゝ竹筒持百石ゝ二人掛り人夫七拾万人余其外浮武者軍處々ゝ陣を取たる有樣誠ゝ日本開闢以來未曾有軍勢の集りたる事を聞ず京都より江戸ゝ到る道中木曾路九州より京都迄毎日人夫の往復絶間なし概略木〳〵ゝ野陣已ゝして登りたり日本ゝ小國と思しゝ如斯大軍の有けるかと創めて驚く計り此時大坂の城中ゝゝ關東勢大軍を以て寄來らんゝ兼て期したる事なれゝ先味方の勢揃へを爲べしと集合まりたる人々ゝゝ

真田左衛門佐幸村　後藤亦兵衛基次

長曾我部宮内少輔元親　水村長門守重成
眞田大助幸安　長曾我部左衛門太郎元盛
水村主計頭永基　増田丹後守友定
伊藤丹後守武英　櫛口但馬守兼興
内藤宮内少輔忠豊　三浦飛彈守義世
稻木左衛門尉敬景　伊駒宮内少輔正綱
神保出羽守幸昌　速水甲斐守時貞
桑原藤太好宗　生駒主殿家種
佐々木九郎左衛門義正　堀田出雲守正明
岡部大學介勝元　松田主殿頭秀致
同左衛門秀郷　山本新左衛門光景
矢野和泉守正近　加藤九郎左衛門明友
森左京之亮家翹　伊藤美作守弘永
飯田左馬之介長部　片岡能登守經純
堀對馬守直連　山橋下野守任英
山名伊豫守義照　田中左衛門尉國政

關丹後守長英　宥木甲斐守親光
同民部少輔三好　金森掃部助可憲
瀧川伊豫守詮益　秋田伊賀守長森
佐崎右近之進正嶽　湯淺宮内少輔信俊
戸田民部之助爲重　羽柴河内守秀政
木下左馬介秀親　赤松内膳正勝直
牧島玄蕃頭助長　牧野主計助介定
南城中務太夫能房　同河内守定直
同外記定綱　伊木七郎左衛門友定
郡主馬之介忠秀　黑川但馬守興胤
鎌田兵部政貞　氷野内記政國
中島式部少輔久英　野々村伊豫守雅興
大野道犬齋治胤　同修理之助治長
同主馬之助治房　小田有樂齋長益
澤井周防守長房　島津兵庫介好定
淺邊内藏之助紀

此面々ハ一方の大將分ヘ此外先鋒の翌四十六人の面々ハ

佐倉主馬介　津田監物　本田新介
湖田隼人　和久半左衛門　白樫主馬
佐藤主馬　平子主膳　明石掃部之介
同丹後　仙石宗彌齋　多田藤彌齋
同丈助　武田永翁齋　岡部大學
伴國右衛門　米田監物　別所内藏之介
下方帶刀　萩野兵庫　德原市十郎
一宮兵衛尉　御宿勘兵衛　長岡監物
高松彌三郎　氷野外記　丹羽幸内
中尾新左衛門　藤堂庄兵衛　上原治郎左衛門
三宅源次郎　吉田出羽守　永井一學
岡村帶刀　柴田彌五郎　野々口助十郎
林源次郎　鳩幸右衛門　大舘左衛門
津田兵庫　村上將監　同兵庫之介

光枝頼母　松宮丹波　堤一學

其外三百石以上の輩五百七拾騎五十石より三百石迄一千八百人此度召抱し涙人上下合せて九百卅五人同心足輕五千六百人倍臣壹萬八千六百人中間御直の者貳万八千人馬役頭永井文九郎伊丹庄介　待中間三百人御馬五十疋諸士の馬三千疋御土藏奉行山田太郎兵衛能勢藤三郎三宅宗十郎下役人七拾三人足輕百人中間千八百人陣々兵粮炊役より兵粮配付の人々奉行頭ハ

土山丹下　伊勢兵助　平野九左衛門
澤兵衛　坂井彦九郎　牧長八
山本九八郎　圖師久馬　木下小助
土方五作

十人惣頭ハ祝丹後守足輕九百八十人中間貳千人又火消夜廻りの組頭ハ

毛利豊前守勝長　同河内守元隆
細井讃岐守頼範　平井大和守保能

今水但馬守正祥　伊賀丹波守家久

右六頭の士三千人足輕五千人中間八千人一時替り六番わなりて進む都合人數拾五萬五千貳百卅人と

亦手配の次第左の如し

高麗橋の固より　大野主馬三千人大野修理三千人小頭より

ハ伴團右衛門七十人岡部大學七十人米田監物七十人三將の手の者合せて貳百拾人御家人貳百騎倍臣與力同心足輕中間惣人數合せて貳萬七千人大筒五拾挺小筒貳百挺弓三百張扨二番備へハ福島伊豫守三千人騎馬百五拾騎三番よハ赤松伊豆守(貳千人)騎馬七拾騎と此手ハ橋を引さるゞ故別して念を入斯の如く三番手迄付らるゝ

農人橋口へハ　野々村伊豫守三千人騎馬三百騎大筒廿挺小筒貳百挺弓貳百張貳番備へハ鶴口丹後守貳千人騎馬百五拾騎と

本町橋へハ　武田永翁齋三千人騎馬貳百騎大筒廿挺小筒三百挺弓三百張貳番備へハ伊藤丹波守貳千人騎馬百五拾騎(但シ小頭共)

長堀口へハ　深村周防守三千人騎馬貳百騎大筒廿挺小筒三百挺弓三百張貳番備へハ郡主馬之助三千人騎馬百五拾騎(但小頭共)

中堀口へハ　堀田圖書之助三千人騎馬貳百騎大筒廿挺小筒三百挺弓三百張二番備へハ青木甲斐守貳千人騎馬百五十騎(但シ組共)

堀留口へハ　堀田丹波守三千人騎馬貳百騎大筒廿挺小筒三百挺弓三百張貳番備へハ中村民部太夫貳千人騎馬百五拾騎(但小頭共)

保砂口へハ　南條中務太夫三千人騎馬三百騎大筒廿挺小筒三百挺弓三百張貳番備へハ益田丹波守三千人騎馬貳百騎(但小頭共)

星合口へハ　牧島玄番三千人騎馬貳百騎大筒廿挺小筒三百挺弓三百張貳番備へハ伊藤美作守三千人騎馬大筒小筒弓前同斷

眞田丸へハ　眞田父子手勢貳百八拾人加勢伊木七郎左衛門御宿勘兵衛三千人組頭よハ伊藤内藏介和久半左衛門名島頼母戸田兵庫小頭五人大筒廿挺小筒三百挺弓三百張外ゟ紙筒王目百目より五百目迄是ハ幸村工夫の筒と此眞田丸ハ關東勢戰ひ利ある故眞田幸村是を守

黑門口へハ　名島兵庫頭三千人大筒廿挺小筒三百丁弓貳百張貳番備へハ中島式部少輔貳千人騎馬百五拾騎(但小頭共)

平野口へハ　稻木對馬守三千人騎馬三百騎大筒廿挺小筒三百挺弓三百張貳番備へハ森民部貳千人騎馬百五拾騎(但小頭共)

鳴野口へハ　矢野和泉守千人騎馬百騎小筒百挺弓百五十張是ハ大野ゞ先手と二番にハ大野主馬之助貳千人小筒五百挺弓五百張騎馬百五十騎(但此手ハ堤故大筒ハ御城内ゟ仕掛る)三番よハ木村長門守七百人(但手勢預りとも騎馬廿五騎五十目筒四十挺卅目筒五拾挺貳拾目筒六拾挺弓箭を用ずして向ふ

今福口へハ　飯田左馬助千人騎馬五拾騎小筒百挺弓百五拾張二番ハ渡邊内藏之助貳千人騎馬百騎小筒三百挺弓三百張是も大筒ハ城内ゟ仕掛る三番よハ後藤又兵衛七百人(但手勢共)騎馬廿五騎五拾目筒四十挺三拾目筒五拾挺貳拾目筒六拾挺貳間半の長柄四拾筋弓を用ず

京橋口へハ　牧野豊後守三千人騎馬貳百騎大筒卅挺小筒三百挺弓百張貳番よハ福嶋周防守貳千人騎馬百五拾騎柵と門との出張ゟハ吉田玄蕃亮三百人騎馬廿五騎小筒五拾挺弓五拾張(但組小頭共)

西の大手へハ　大野修理亮五千人騎馬三百騎大筒五拾挺小筒千挺弓千張貳番ハ生駒宮内少輔三千人騎馬百五拾騎三番ゟハ三浦飛彈守貳千人騎馬百騎太筒拾丁

玉造口へハ　淺井周防守五千人騎馬三百騎大筒卅挺小筒五百挺弓五百張貳番ゟハ神保出羽守三千人騎馬百五拾騎三番ハ森右京亮千人騎馬百騎大筒拾挺

十露盤橋へハ　長曾我部父子五人手勢預り共千五百人騎
馬百五拾騎大筒廿挺小筒卅挺弐番ハ堀田出羽守五百人
騎馬五拾騎(但組小頭共)
右組頭ハ弐千石以上の者ゟて組下ゟ旗本を廿人支配す小
頭ハ與力五拾人の事ゝ同心を支配するゝ
中の島へハ　織田有樂齋三千人騎馬弐百騎小筒三百挺組
頭小頭共
伯樂ヶ淵へハ　薄田隼人平子主膳八百人騎馬五拾騎玉目
壹貫目筒六挺小筒百挺弓百張小頭とも是ハ寄手の大船
を打破らんが爲ゝ織田有樂齋是を支配す
川口ゟ船番ゟハ　米田六兵衛同治太夫(両人とも大野ヶ
家來)騎馬十五騎小筒五拾挺弓五拾張三百人ゟて固め
たり是ハ幸村此處ゟハ番人ハ無用ゝと云ふの故已ヶ手の
者を出す
穢多ヶ崎へハ　明石丹波守多田藏彌齋明石掃部之助組頭
小頭共三千人騎馬五拾騎小筒弐百挺弓弐百張玉目三貫
目の筒六挺是ハ大船を打碎のん爲ゝ此捕手ハ太閤樂
き置るふゝ
三浦三左衛門五百人小筒五拾挺弓廿五張武者廿五人
木村主膳正　伊藤新兵衛　安俄大和守　野馬左近進
佐藤内記　赤松左京亮　桑山丹下　野々村主膳正　荒
川兵庫　高山砂之助　品川早太　村山源太　平井角馬
畑井左内
右拾五頭何れも人數道具等三浦ゟ同く本丸と外郭の間ゟ
備へ何れゝとも危からむ方を救援べしと扣へたり殊ゟ忍
びの者あらむかと嚴しく出入ヶ改む扨又夜廻ゟハ十二組
五拾人騎馬五人小筒拾挺づゝ鎗拾五筋力者八人棒拾本宛
其頭ゟハ山本重太夫市川八郎左衛門細井三郎兵衛牧原才
藏戸田文吾町々　菊松原五郎兵衛星合與市川北車助落合
藤四郎の拾人の夜廻半時替ゟ勤む松火弐本を拾間割先ゟ
行しめ棒の者ハ後ゟ下り力者八人先ゟ進む次ゟ騎馬五騎
馬の左右ゟハ鎗を連ね東西廻合時ハ挨拶して分るゝ之其

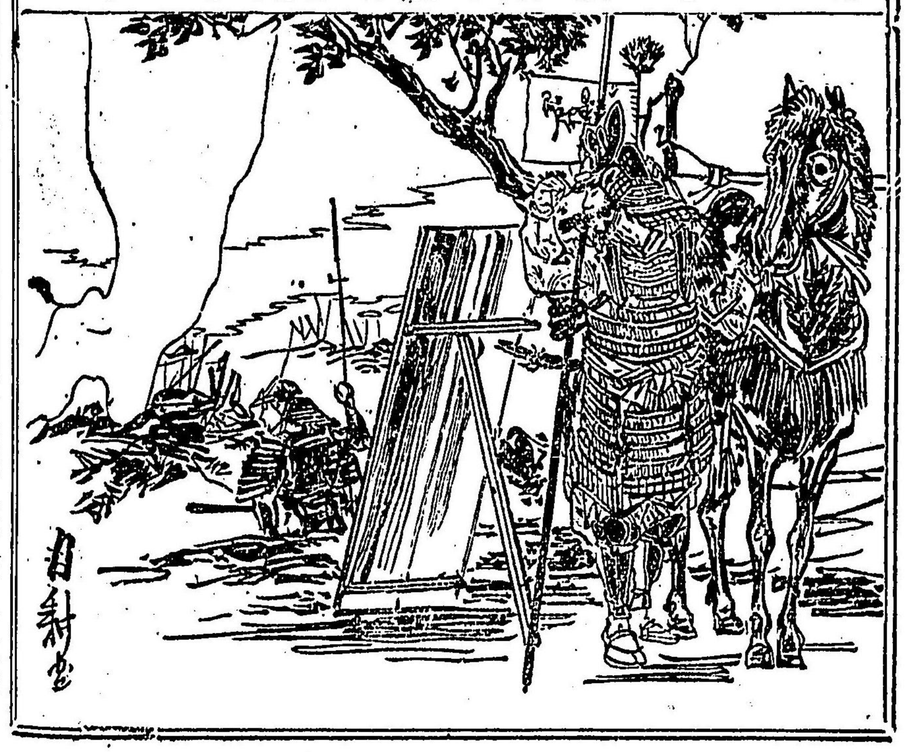
間ゟハ小廻ゟり拾人宛を一組として十二組ゝ何も忍び回
りゝ又横目廻十二組有て是ハ拾五人を一組とす是も東西
より廻合ハ一禮して分るゝ之扨其間ゟハ後藤木村真田父
子長曾我部の輩何時とゟく廻れハ夜中暫時も夜廻の怠る
事ゟし扨又焔硝奉行ハ大事の役ゟれハとて長曾我部左衛
門太郎福嶋左近加藤内記千五百人ゟて守る強弓の者五拾
人鉄の者五拾人棒の者弐百人徹夜番百人ゝ秀頼公の陣旗
本ゟハ木村主斗頭後藤隠岐守を両大將として組頭八人ゝ
其人々ゟハ
今川主膳　松田内藏之助　山口左馬之助　伊東角馬
堀左近　堀田右京　中村源吾　野々村金吾　青木一治
小頭五拾人右九組ゟて人數八千人騎馬五百騎小筒五百挺
弓五百張外ゟ林源次郎鳩幸右衛門五拾人宛目付として夜
廻嚴重ゝ渡邊内藏之助ハ組下を隨へ寄手の賣口と見屆ヶ
上る尤騎馬の者ハ皆虎の皮の指物を許す是を虎の指物衆
と云ゝ此外ゟ使番廿四組壹組拾弐人宛ゝ惣人數五千人を
廿四組とす速水甲斐守青木氏部少輔今木源左衛門の三人
ハ五百人宛を從へ大將ゟ山馬の時ハゟ留主を固め又ゟ山
馬の節ハ張拔の五百目筒廿挺を以ゟ馬の前後左右ゟ有て
守り奉る是ハ真田ヶ方より屈強の打手を攫び付奉ると
ぞ本丸弐三の丸共ゟ諸方口々へ敵味方の通路を知する騎
馬八拾騎ゝ城中の手配緊畧斯の如し

第十九回

両將軍進發万兵　蜂須賀詣二寒住吉一

慶長十九年甲寅十一月九日両ゟ所(家康公、秀忠公、)ゟ若
陣有て諸將の手配ハ京都ゟて評定如しゟ父子茶臼山の
ゟ陣ゟ入ゟ有て是より住吉と當所と父子一日替ゟ守べ
しとの義ゟて城内の樣子をゟ聞合有て此日ハ惣勢ゟ遮裝
仰付られ諸大名共手〳〵の旗印を揚東ハ山の根南ハ和泉
路北ハ山の根色々の物蹤し家々の旗印差物兵器を並べ武
者の備へざる處もゟし却て城内より加賀陸奥の陣へ使
を遣したると世ゟ言ひ傳れども是空言ゟて其故ハ加州ハ
ゟ鉾ゝ陸奥ハ古太閤ゟ怨望有故ゟ此使參るべくやうなし

是い秀頼公を恐將と云んが爲に扱亦大坂狀として蒙の口碑に傳ふる書有是亦僞と其故い秀頼公の返書に一ケ國も宛行いすとあれど攝津河内和泉三ケ國を伊知行に寄られたり何ぞ文に空言を書るふべけむや是も秀頼公を惡く云あすものと同日夜に入て蜂須賀阿波守至鎮住吉の陣へ參りて申上られけるい私今日小菱浦え參着申い處穢多ケ崎を見るに今晩押寄るべ乘取申へし此儀如何候んと申ければ公聞し召れ尤と責て見られよと彼說有又陸より加勢を遣べしとて九鬼丹後守向井左近小濱民部千賀與八郎の四將を召れ今宵蜂須賀船を出さば陸より難波村に押寄備へを立貴戰体を爲蜂須賀が乘取し後貴入べし是い前に勇氣を充め却て後と拔計畧と仰有ければ各々畏まり來ると退出す是にても米拙念思召て金森出羽守小出大和守を召て船手の四將難波村へ向ふ二番手を備へよとの事と又有馬左衞門佐い三番手淺野但馬守い四番手と命せられ向井九鬼の跟舟場へ貴入時共に貴入べしとの



仰に各々命に隨ひ馳向船手の四將二千人金森小出三千人有馬五千人淺野八千人蜂須賀千五百人の人數にて十八艘の小早に乘舟い齋しく笘葺に成して先尼が崎に行て時を待居り凡大將たる者い天の時と地の利を推窮べ功を成事能ずとのや時に霜月九日幸村天文を見て申けるい今宵い風靜に夜色朗明なれば穢多ケ崎乘取申べく間伯樂が淵川口中島嶋野今福所々の砦の兵を引擧べしと云に大野修理曰何の處に先へ破れ申さんや幸村答て穢多ケ崎先破れん大野笑て左樣に思慮に斗に成るものにてなし某い又穢多ケ崎の砦い危き事有まじと存じい云幸村曰く勝敗い豫期すへうらす何を以て敗らると云大野曰軍師い又勝と云何事ぞや是より互に論と成しば去べ賭にせんと約しける若幸村のけに負なば三日が間大野の馬の口を取べし大野まけば腹切致すべしと定めける然れども其備おくてい叶じと長曾我部後藤木村眞田大助を召出し二千人を引て夜の内より押出し穢多ケ崎破れなば直に船場を乘取貴入欲を討取べしと命じければ各々命を請て退ぞく四將途中にて申合せ先眞田大助い五百の勢を引て伯樂淵に向ふ長曾我部い五百騎を引て莫堤に伏たり今堀堤より後藤陽場に木村各々五百の兵を引て伏居たり此時眞田大助い伯樂が淵に至り游田に對面して明日の戰ひ油斷せば敵攻入るべし五百騎の内二百い伏三百にて守るべしと申付る隼人兼政命を受て則平子主膳に三百の兵を付て砦を守らせ自らは二百騎を引て伏居たり扨大助い日本堤に來たり蘆葦おと繁し所を見立て五百の勢を伏敵の樣子を窺ひける此夜蜂須賀平鎮い尼ヶ崎高濱に至り池田高直に逢て酒數樽を乞餞を脫て七百の勢に呑せ其夜の七つ過に船を乘出せと下知を爲舟子ども是を聞て船遊びも時にあるものなりと云けれい森甚五兵衛大に怒憎き奴輩が申條ぞ者源の義經い風雨烈きに舟を乘出しるふも虎穴に入て虎の子を捕るの心に船を出さず討殺せと下知をなす是に恐れ舟子ども我劣と漕程に其夜の六つと

云頃ゐゐ穢多ゥ崎の此方ある鼓嶋ゑ乗付たり打節潮干て泥深く人々難義の体ゑ見へたる處ゐ大將良鎮是を見て其儘飛込泥掻分て行程ゑ船方の小頭牛引五郎八續て飛入良鎮の上帯掴で片手ゑ指上向ゑの岸ゑ渡したり是を見て稲田大炊同九郎兵衛樋口内藏介長谷川伊豆山田道閑同織部中村左近森甚五兵衛同甚助蜂須賀外記を始として我劣らじと飛入〳〵鼓掻分て立出るゑ小池の如き溜水有泥を洗ふゐ湯の如くあれゞ人々大ゐ喜び暫時休憩居りける爰ゑ又大野修理ゐ幸村と賭したれゞ何卒勝と思ひけれゞ明石仙石多田の單へ使を馳てゆけるゐ其表今日の處ゐ死力を出して防戦萬事油斷なく駆入との義ゐり何も心得ゆと答て其用意をぞ爲たりける時ゑ慶長十九年霜月十日の朝六つ時灘波村ゑ寄たる小濱向井千賀九鬼の單を始として金森小出の兩將有馬淺野が軍勢次第々ゐ操出し既ゐ責入べき勢あれゞ明石千石是を見て前ゑのみ氣を寄たり時ゐ戌亥の風強く吹出し砂を吹揚眼も明ゲたきゲ故笠幕雨皮あゼよて張塞ぎ唯南ゑ向て三貫目筒を三ケ所ゐ仕掛敵軍土手より此方ゑ打出なゞ討取んと待掛たり時ゑ蜂須賀の勇臣山田織部稲田九郎兵衛林同藏中村右近森甚五兵衛を始として戌亥の角より烈風の如く打入たり明石仙石の單思よらざる事あれゞ一戦ゐも及す散々ゐあつて引退く阿州勢ゐ勝ゑ乗切立〳〵追討して首八十三取て暫く息を休め船手の四將入替て是を追ふ明石千石の單ゐ印を建て逃たりけれゞ向井將監是を見て扨々上方武士ゐ逃事の上手ゑ東國武士ゐ鎧の押付を見てだも恥とするゑ犬ゐも劣し奴ばらゐあと十分ゑ悪口して追所ゑ思も寄ぬ鼓島の内より三拾目筒廿挺鐵の如く打掛〳〵長曾我部元親同右衛門太郎同次郎同三郎同四郎久武内藏助中野源兵衛五百倉下総大浪の激する如く突て出蓬立〳〵切廻れゞ船手の四將散々ゑ成て敗走す是ゑ依て明石仙石力を得て味方を懇め待處ゑ程あく抱稲の旗印押立て長曾我部元親出來たり我軍師の命を受て各々の敗軍を救助とゆけ

れゐ明石千石多田の單幸村ゲ知識を感ト大ゐ大野の不敏を罵晉つゝ元親と一つゑ成てぞ引取ける此時大將軍家康公ゐ今日の戦ひの動静を見んと思ひるひ態と小勢ゑて出させるゑを真田ゲ候者斯と注進す是ゐ依て後藤又兵衛真田大助二手ゑ分て討て掛ゞ大將軍大ゑ驚き浮本陣へ歸らせるゑ事能ゐず長柄の方へ逃させるゑ浮旗本の人々命を捨防戦けれゞ其際ゐ拾町計落延るゑ後藤又兵衛真田大助の兩將も今ゐ追とも無益ゑと引取ける家康公ゐ馬を飛し跡をも顧ずして二時計馳るゑ馬も疲勞れて進かたけれゞ歩行立ゑ成て落るゑ此時大久保彦左衛門永非右近追付奉れゞ少し心を安ドるひ爰ゐ何國ぞと浮尋有る彦左衛門處の者を呼て尋けれゞ茨木ゐていと答へ家康公仰有けるゐ今片桐味方ゑ隨と雖ども心の裏計ゲたし油斷有べからずと急をばのりゑ道を早め富田林迄落させるゑゑ今ゐ疲れ給ふて歩行と能ず彦左衛門傍の酒屋ゑ伴ひ奉る此酒屋ゐ富田の福人紅屋市右衛門とて名高者ありしゲ三人の人々を熟々と見て是情人おらずとや思けん奥座敷ゑ通し様々と浮介抱ゆ上嚮應ける大將殊の外御容腹ゑと仰出されけれゞ彦左衛門熟所へ出て其由ゆゑぞ急ゐ浮膳を仕立ける大將是と待兼るひ何ゑても苦しのらず早々出すべしと仰有おぞ取敢ず浮茶積を差上ける空腹の打なれゞ殊の外喫喰られ是ゐ何ぞと浮尋有ける市郎右衛門香の物ゑていと答復有のと浮尋ねあり香の物の義ゐ何程ゑても浮座ゐとゆけれゞ大將大ゑ喜悦るひ軍中ゐて功の者何程ゑとも有とゐ甚た吉兆ゑと夥しく召上られ風味尤よしと浮賞翫有我ゥ陣ゑ送るべしと仰付られ緩々浮休足ありて夫より浮本陣ゐ歸らせるゑ從是浮陣屋の間浮膳の度事ゐ紅屋より香の物を差上ける浮利運の後浮壱の余三百石の地面をゐゐり毎年奈良漬を江戸表へ獻上仰付られ今ゐ於て相替らず紅屋より奈良漬を仕立藁宕山ゐて冷し浮所司代長床坊幷ゐ紅屋三人の立合ゐて江戸へ下る事普く世の人の知所ゑ

第二十回

關東四將取敗軍　大坂四勇奮稀力

去程は船手の四將長曾我部元親は切立られ散々に成て敗走す金森山羽守小山大和守是を見て三千余騎を操出し四將を救元親を追掛たり有馬左衛門佐も同勢を操出し是は續向井左近聲を掛上方の腰拔共尋常の勝負を爲さず伏勢を以戦いざ油斷爲るふなと呼わりける金森小山の輩い此言葉を耳わも掛走元親が旗印を目當とし前後も顧ず追掛共間既に壹町計になりし所右の方の竹島動搖と見へしが忽然鉄砲を雨の如く打掛〳〵上り藤は後の字入たる旗押立大鳥毛の馬印を眞先に進め後藤又兵衛尉基次と名乘もあへず切てかゝる是わ紅勇將わい片山勘兵衛同舍人同彌三郎山田幸右衛門同幸助同幸次郎同外記同助左衛門大崎内藏同藤太夫同庄内早飛彌市を始として勇を振て突て入我劣じと切て廻る金森小出が三千余騎是が爲わ切崩され散々わ成て敗走す後藤基次い強て長驅せず兵を止て長曾我部と一手わあり靜々と引取ける有馬左衛門佐五千の兵を操出し如何に伏兵あれゞとても此上わい備へまじと追掛る大坂勢い一手になり取て返し鉋を合さんとする處に何ぞ計ん傍の竹原より有馬勢が眞中え鉄砲雨の如く打出せゞ左衛門佐が五千余騎是いと驚處を無不意右衛門半田市兵衛川上主税笹岡丹波木村助五郎伊藤國右衛門牟禮兵庫同彦三郎を先わ立白地わ四自結の旗を押立金の幣の馬印を眞先わ進め木村長門守重成と名乘掛々而も振す突て入八方に當て切て廻り烈しく戦ゞ有馬勢防戦能わず大に乱討る〳〵者數を知す重成も強て敵を追す能程わ兵と經元親基次と一手に成て引揚たり此時四番手に備へし淺野但馬守是を見て先敗の諸將わ對し此上い各々一手わ成て戦べしと自眞先に進て追掛る是わ依て船手の四將金森小出有馬の輩我後じと進處に忽然穢多が崎の堤より眞田大助幸安と名乘て百騎余の勢打て出たり九鬼向井の輩是を見て如斯りの小勢何程の事わらむ中に圍て討取と手勢に下知して馳向ゞ有馬も是に續て壹人も遁あと追掛たり幸安百騎の勢を眞丸わ備て是に當り勇を振て接戦此時復茅島に伏たる深谷清海入道穴山小助伊三入道が三手の兵一度に發て卅日或い五十目筒を打掛〳〵小勢を以て大敵を中に取圍たり此音を聞や否先に引揚し村木後藤長曾我部千石明石多田が勢猛しく取て返し大山の崩るゝ如く責掛れゞ淺野有馬九鬼向井が輩散々に崩立茅島の中に追込られ討る者夥多大坂方の諸將い思儘に勝を得明石多田千石の三將を止て陣場を守らせ城中にぞ引取ける幸村高麗橋わ待請御符を改人數を數へ諸將の働き幷大助が白樂が淵に至り薄田に下せし事あど一々に聞大に喜則大助とめして下ける汝今日の掛引い中々造道にて渡邊と戦し類わ非ず斯あらゞ君の御用にも立べしと是を賞則佛道の四天に象東武を幸安西將を元親南師を重成北將を基次と定めける是大坂の四天王と後世に其名高し扨幸村い本丸に登城し下ける大野殿い悠然わ候得共切腹あるべしと下此時大野い母を以て淀母堂淀殿に哀訴奉是に依て淀殿幸村に向ひ宣ひけるい軍師の言尤にい得共彼い幼少より一所わ生育不便あれい此度い自に對し許るいるべしと仰ある幸村下上けるい上意ありと雖も軍中苟にも戯言あし如斯の事を其儘にて置い得ゞ軍令行れず城中の乱とも成へゞ決て助がたしと下淀殿重て仰けるい軍師の言葉一々非理有と雖も思ふ子細もあれゞ曲て免るへ依てい重て一言も言せざる爲め彼が預りの人數を取揚下べしと有りけれい幸村も不得止其旨に隨ひ大野わむかひ淀殿強て仰られいへゞ此度い此儘に差置べし此度穢多が崎わて掠取れし大筒にて味方を打おゞ是味方に利有と思ふふり又白樂が淵川口の人數も引取たりと雖も今是を引取時い某う籠城を敵わ去られ重ての戦に妨害を生し味方の損せん事を知おがら其儘に捨置ねゞ成ぬ樣に成行事有其許の猿智惠より事發其上類に片桐且元を讒せられしおゞ回顧せゞ賞に其元い歟の問者に齎く存に故に預の人數を

召揚られ五十日の閉門ヲ付るゝと大野を押込たり扨皆の人數を引取入城致度い思へども我死たる由を世上ゑ云ふらし密ゑ入城するより外ゑ計略おし然れども若我生て當城ゑ有事を故ゑ知るゝ時い敵亦其用心を爲さん然れい容易家康を打取事難し此故ゑ味方の損ずる事を知つゝ其儘わ差置ゝとヲける扨又蜂須賀安房守い難おく穢多ヶ崎を乘取三貫目の大筒を三挺奪しのば是を郎等わ持ゆ本陣わ參之を奉る君大ゑ悦ゐひ蜂須賀を美賞ゐひ滿悦の余有馬法印ゑ酌採せ三合入の大盃ゑ漫々と請るふ處へ船手の四將敗兵を纒歸りたる由言上す間おく小出金森ヶ軍破しとヲ上君大ゑ驚きるふ處へ有馬淺野ヶ惣勢大崩わ成たる由注進す茲ふ於て思ゆ侮手わ有し盃を有馬法印ヶ頭の上へ落しゐへバ周章ゆ次の間へ逃出す其樣抱腹かりける事ども〻漸有て近習を召れ白樂ヶ淵其外川口の砦ふ有し人數い引取しゝ未た引取ざるゝを見よと仰有ゆ近習の人々上意を傳て是を尋しわ未其儘わて引取ヲさずと言上しけれバ少し侮心を安じるひ亦盃を採るゑ永井右近傍わ有けるヶ侮尋ヲける君是迄如斯驚るゑ事を存じ奉らず其上今日の戰諸將利を失ヒヲせども左程味方の害ゑも成ヲ申じ蜂須賀ヶ穢多ヶ崎を乘取大筒を得たるい味方の利ゑして城方の害と成ヲい何故斯い驚せるふやとヲ神君仰有けるい予ヶ驚しい味方の敗軍せしゑ非ず今日の軍法中々等閑の者及處ゑ非ず其上幸村ヶ軍立よ能似たり幸村存命ゑて城中わ有バ我如何ゑ思慮を費すとも容易勝と能いじ故わ驚しゝ然ども砦の人數を引取ざるを見て幸村城中ゑ在ざる事を知べし幸村だゑ在ねバ恐るゝ足ず若幸村城中わ在バ斯る拙き事い有べらずとど仰ける爰わ又中村右近山田織部い各々三百騎を引て白樂ヶ淵ゑ押寄平責わして乘取と自眞先わ進て押寄る平子主膳い部鎧て居しヶ十分わ敵を引寄筒先を揃へて連發不戸を開て突て入中村山田味方ゑ下知して付入ゑせんと揉合處ゑ薄田隼人ヶ三百余騎思掛おく打て出前後を包で突立れバ中村山田散々ゑ切立られ已ゑ危見へけれバ平岡甚助岩上長八山本三平蜂下源内澤口彌八星野五兵衛味田庄兵衛の輩討死す此間わ中村山田い辛じて引取けり平子弥田い砦ゑ引取大助ヶ智謀を感じ彌幸村父子を重じけり

第廿一回　両軍血戰於鳴野　片桐盡忠救主

同十一月十四日佐竹右京太夫ヶ家臣梅津半右衛門篠田内藏助黑澤甚兵衛戸村重太夫戸塚九右衛門五人の物頭陣廻の爲早朝鳴野口を廻しわ城方矢野和泉守ヶ手の足輕百四五十人割何の用心も おく火燃して居を見て立歸り家老澁江内膳ゑ向て言けるい某等只今陣廻いたしい處敵の守甚輕忽わ相見い今不意わ打入候いと必此手を乘取ヲべしと云澁江内膳密ゑ行て是を見るゑ實ゑ油斷の躰おれバ佐竹殿ゑ斯とヲ右京太夫も是ヶ見分し掛らバ勝利疑おしと雖も侮免おきわ軍も成難し如何せんと云折しも安藤治左衛門陣廻わ來りけれバ右京太夫招き寄て對面し樣子を語けれバ治左衛門も彼所わ行て篤と見定め侮光わい〻侮前い某宜ゑヲ上べし早々〻掛有て然べしと云捨て侮本陣さして急ける右京太夫大わ喜び梅津半左衛門篠田内藏助黑澤甚兵衛を先手として貳番備い澁江内膳三番い本陣〻其勢三千騎を率して打向ふ此時城方鳴の口の固ゑい一番矢野和泉守貳番い大野主馬助各々五百騎〻三番ゑい木村長門守七百人是い城中ゑ備たり又今福の固ゑい一番飯田左馬助貳番い渡邊内藏助三番い後藤又兵衛〻各々人數鳴口ゑ同じ佐竹勢い密わ堤の影わ廻り矢野ヶ勢の油斷ゑ乘し鉄砲バらゝと打掛闘を造て切て入バ矢野ヶ勢不意の事おれバ大ゑ驚き掛合て防とする者一人もおく散々ゑ成て逃けれバ佐竹の先將勇を振ひ爰わ追伏彼方ゑ切立首と取事夥し矢野和泉守も討て出勇を振つて防と雖も不意を討れたる上敵い新手を入替責立れバ既わ此處ゑして討死す此時今福の固たる飯田左馬助い鳴野の先手とい漸々小川一ッを絶てたれバ此物音ゑ驚き矢野を救い

んと川を渡命を吝す戰ハ佐竹の先手既ゐ危く見へけれバ右京太夫下知を爲旗本の新手を入替〳〵飯田と中ゑ取込て責戰左馬之助も終ゐ力盡て討死ず佐竹方ハ十分ゐ勝利を得て勇進で突入ハ武者ゑ備し大野主馬此勢ゐ恐をゐし跡をも見ずして逃出す是ゐ依て今福の武者手ゐ備たる渡邊内藏助も何とゐく氣味惡や成けん城中差て逃入とする處ゑ佐竹方ゐ一時ゑ打出す鉄砲の音ゑ響て鳴野川ゑ眞逆さまゑ落入て大ゑ水を喰ける〻漸々家來ゐ助られ命から〳〵逃入けり何者〻ゑたりけむ

渡邊〻浮名と流鳴野河かたきゑ合ふて目も内藏の助

此時木村長門守重成ハ黑木藤左衛門半田市兵衛大竹何右衛門午禮彦三郎伊藤歪兵衛高松内匠笹岡右京松原五右衛門山口左馬助智德院大野木主馬岩村林之助を始として旗差ゑハ日根野九郎兵衛を十里を歩行大剛の勇士ゑ召具七百人を眞丸ゐ備へて突て出渡邊大野を大ゑ呵早く逃よ

城中ゑ追込澁江内膳ゐ勝做たる中ゑ突然おめひて切て入八方ゑ當て突て廻佐竹義宜是を見て澁江討すゐ内膳救へと旗本勢を下知われハ佐竹の勇將内山隼人鎗を拘て驅出れハ城方よりハ大井何右衛門是を迎へ切結び一來一往戰しゐ終ゐ内山を突て落し首を取て指擧たり此時伊藤歪兵衛ハ佐竹の先將山田新助同求馬を切て落す中ゐ智德院ハ赤樫の四寸角ゐる小筋鎧を入ひる卷ゑたる捧を片手打ゑ打振て散々ゑ薙廻る木村〻十二の勇將巴十文字ゑ切て回れハ終ゑ澁江〻陣を突崩し佐竹の本陣ゑ切て掛る佐竹義宜味方を勵まし引ゐ進めと下知する處ゑ四つ目結の白旗颯と旋せ木村重成爰ゑ有佐竹殿ゐ見參せんと呼つて面も振ず切て入前後左右ゐ突て廻る義宜も命を捨味方ゐ下知して戰と雖も何ハハ以て木村〻勇ゐ敵すべき既ゐ危く見けれハ入江隼人中河文治掛隔りて討死す此間ゑ義宜ハ武町計逃延たり木村重成猶も殿く追掛れハ佐竹の勇將伊藤隼人同國右衛門取て返し防戰す木村助五郎四尺八

寸の大太刀眞向ゐかざし伊藤隼人ゑ渡合火花を散して戰ひしが一擊の下ゑ隼人を馬より切て落せハ笹岡右京ハ國右衛門を突て落す是ゑ依て佐竹勢散々ゑ成て敗走す木村重成ハ烈敵を追拂ひ金の幣の馬印を押立暫く息を繼いたりけり此時城内ゑハ長門守〻軍立を見物有ん迎秀頼公淀殿其外女中を召連られ鳴野口の櫓〻御覽有軍成〻働きを感るゑ扨又茶臼山ゐハ早朝佐竹の物頭矢野和泉守并ゑ飯田左馬助〻首を持參して實檢ゐ備しハ大勢所大ゑ悦有て叩感狀をゐハ感狀をゐハ間あく密ゑ告る者あり秀頼公櫓ゑ登の由を言上す神君俄ゑ中非大和を召され仰けるハ夫城を築ゑハ何れ成共一所ハ崩し安く積建る事是其職分の秘密と聞當城普請の總樂ハ汝ゑ何ゐの崩し安きぞと勢尋有中非大和ゆけるハ是大事の義あり然れとも天下の勢爲ゑハへハ包藏ず申上ハハん叩鳴野口の櫓を上意の如く仕置ゆと申上る是ゑ依て片桐市正を召蜂須賀安房守〻稲多〻崎を乘取し節奉得し三貫目筒三挺を以鳴野口の櫓を打碎べしと仰付られ則備前島ゑ於て北用意有爰ゑ又上杉中納言景勝ハ今福提の一の手を蒙扣し〻佐竹勢の敗軍を見て假令木村鬼神ゑとも今ハ戰勢て有べし重成ハ後を立切て彼を討取高名せよと下知われハ諸勢一度ゐ川を渡し號呼で掛らんとす城方ゐハ乘て眞田〻拵きたる造道より後藤基次七百余騎を引率し片山掃兵衛同舎人山田幸右衛門同外記同助左衛門同兵助織部頼母同甚助同丹下矢澤藤太小早川文治内山兵庫小田甲乙助を十三備へゐおし上杉勢の川を渡し上る處を五十目或ハ三十目筒をひし〳〵と打掛八方ゑ當て切散す上杉景勝是を見て惣掛ゑ成て押寄る後藤又兵衛少しも屈せず縱横ゑ切て廻れハ十三備への勇將共薙立〳〵突て落す此戰の猛烈と筆紙ゑ盡し難し上杉勢大ゑ乱れ散散ゐ敗走す其次ハハ敵ゑ息をも繼さず鳴野川へ追込々首を取事七百六十中ゑ上杉景勝ハ川へ乘込馬の足を損じ鍬

を返して水中ゑ落入鎧ゐ重し沈みて兜の星計見へたるを後藤が良等正木正左衛門鍵鉛ゑ引掛て引寄る已ゐ危見へたる處ゐ景勝の勇臣戸田甚助猛虎の如く乗入て正木が鉛の柄を切落せゞ宇佐美新兵衛も同乗込辛して両人ゑて救揚本陣さして歸りける後藤又兵衛木村が方へ使を以て跡ゐ某へ淆任せゐつて伍引取有べしと申けれゞ重成恭ゐあしと一禮を述て引取ける佐竹勢ゐ重成ゑ追崩されゝ備を立直しけるが今木村が引取を見て口惜くや思けん澁江内膳ゐ下知して追掛來る後藤又兵衛是を見て惣勢を一手ゑあし澁江を迎へて突て蒐爰ゑ後藤が旗下ゐ片山勘兵衛四尺ゑ余る大太刀を打振群集敵を薙立々終ゐ澁江ゐ渡合馬より下ゐ切て落す敵兵ゐ大將を討れ接戰の氣力なく殘兵も散々ゑ敗走す佐竹義宣大ゐ怒後陣の勢を操出し後藤が七百余騎を引包て責戰甚次が勇將ども大喝一聲四角八方ゑ切て廻れゞ佐竹勢又散々ゑ敗走す甚次ゐ澁江が首ゑ生捕し兵卒ゑ持せ佐竹の陣ゑ返しける是澁江が討死を敵へ知さんが爲ゑとぞ此時上杉の瓜陣ゑ備ゑる京極丹波守堀尾山城守後藤を討と今祝川を渡す木村重成是を見て堀尾京極の兩將と引請乗崩す木村が勇將智德院ゐ堀尾が肱股たる良等上田吉兵衛川口茂作の兩人を突落す高木藤右衛門ゐ京極の家士澤口水之助を切て落し首を取重成味方ゐ下知して猶も烈く驅立々終ゐ京極堀尾が両勢を追まくゐ使を以て後藤が方へ早淆引取有べしと申けれゞ又兵衛心得ゐと引取ける木村ゐ日根野九郎兵衛ゑ旗建させ凱歌をあけて引入ける是を木村後藤が瓜度の掛とぞ云ゑける扨木村重成城中近くありし時數多の死骸を蹈越血ゐ染たる男竹の皮を以て包たる物を差出し申けるゐ某ゐ片桐且元が良等ゑ秀頼公淆母堂戰を淆見物有と早東軍ゑ相知れ夫ゑ付一大事のゐへゞ淆両所共疾檜を淆引取有べし委細ゐ書狀ゐゐと申ゑぞ木村重成大ゑ驚き其儘馬を馳て城内ゑ入淆大事のゐぞや淆両所共早檜を降ゐへと大音ゐて呼ゐりけれゞ秀頼公淀殿驚怖ゐひ聲ゑ應ト

て檜を降ゐゑ斯處へ真田大助馬を飛して馳來たり父幸村申ゐ今日不吉の氣顯ゐ間某參りて早本丸ゐ入奉れと申上る是ゑ依て彌々驚ゐひ取物も取敢ず半町計逃退ゐゑ大地も崩昔して今迄淆座有し檜一重を打崩土煙四方ゑ散亂す皆々身を振して恐懼けり重成最前の書を奉れゞ秀頼公是を懷ゑ本丸ゑ入ゐゑ此時寄手の物勢ゐ檜の崩を見て攻入んと真黒ゑ成て押寄來る長曾我部ゐ玉目壹貫目の大筒三挺十露盤橋より打けれゞ群集たつたる寄手あれゞ彈丸ゐ當り死する者數を知ず淆目附中乘廻早引取申さるべしと下知有ゞ面々陣處へ引取ける此時本田出雲守忠朝ゐ佐竹の武番手ゑありしが何方へも蒐で徒ゑ扣へ居安藤治左衛門樣子を尋ゐ忠朝答て申けるゐ前ゐ沼ゐて足場悪く夫故扣ゐと申けれゞ則此趣を言上す公宣く親平八あらい足場ゐどゑゐ厭ゑ下きゑ親ゐ劣し者ゑと仰ある出雲守是を聞て口惜くや思けむ夏陣ゑ於て討死す大坂城内ゑゐ檜の崩を兩度ゑ包門を拂滑め真田ゑ始諸將本丸ゑ揃ひけれゞ秀頼公片桐が書を出しるゑ書ゑ曰

貴殿今日の御憤戰賞ゐ各人の眼を驚し感入候貴殿と長柄堤ゑて約せし如く君の淆大事と聞く上ゐ救ひ奉らんと申せしゐ今日某が陣所より大砲を以て淆檜を崩壞ゐゐ付てゐ君幷ゑ淀殿淆檜ゑ在て戰ひ淆見物と亦はり候附てゐ此由言上是有べくゐゑ且亦筒ゐ後の患あき爲ゐ破烈やうゑ仕掛置ゐへゞ跡ゐ淆氣遣ひ有べくらすゐ以上

十一月十四日　　片桐市正且元判

木村長門守殿

と有けれゞ諸士涙を流申上けるゐ此度檜を崩壞君と淆母堂の危難有んとせしも是大野殿が無益の舌を勤し穢多が崎の大筒を敵ゑ掠奪れし故ゑ夫ゑ引換不忠と思召す且元ゐ彼筒を再役ゐ立ぬ樣ゑ計ひ淆大事を救奉事真の忠臣といふべし然るゑ大野を是とし且元を悪しと思ゐ

事こそ悲けれと詞を揃へてゆける重成も涙を拂ひ今軍師と頼む幸村を用ひしも素且元が忠義の致す所なり蠶ゑ某長柄堤まで離別の時心の君の側ゑ居て必ず大事を救とゆせしが果して斯の如しとゆければ秀頼公涙ゑ呉てゐします淀殿もさすが且元が忠義の程を思召けん袖まで涙を拭ひ座ます扨又茶臼山ゑの佐竹が勝軍をば悦有し處ゑ其後再度迄敗北し上杉京極堀尾が輩數多の人數を失しかば機嫌宜からず片桐を召出し大筒の破烈たる事を涙ある此義の如何ある故の存せすとゆ神君再上意有の其方の味方の勝を悦や城方の勝を祈やと仰あり且元答て君熟知めす如く拙者儀太閤の涙取立を蒙り其高恩の海山ゑ比ひ之只今涙味方ゆも本意ゑ非す去れば寄手の凱歌を聞ての旨を痛心を冰し城方の勝と承れば心を安じ公宣く尤のゆ分ゑ扨天下若予が世とあらば汝の如何するや且元答て弟主膳を召遣れ下さるべし私の伯夷叔齊が跡を慕高野山ゑ入て果ひべしとゆければ君涙感涙有ては暇をゐれば且元の我陣ゑ歸り弟主膳ゑ教訓し跡の事あどゆ合同十一月廿日ゑ供人總召具高野山ゑぞ赴ける是を傳へ聞人々哀悼者ぞあるのりけり後ゑ又神崎中島の手の大將の池田宮内少輔同武藏守之大坂方の織田左衛門佐三百余騎ゑて固しが池田兄弟が軍威ゑ恐れ中島ゑ扣たる織田信濃守と一手ゑ成んと大和川を渡しけるが如何したりけむ互ゑ打合水ゑ溺て死する者數を知ず信濃守折合て是を救ひ一所ゑある池田勢是を見て鉄砲を打掛呼呼んで追掛たり織田も鉄砲五六發打出したれども氣を含れ戰氣色もなく漸々織田雲性寺と一手ゑ成て逃入たり池田兄弟の織田を追拾備を立休足す同十一月十六日も黄昏ゑ及ければ互ゑ軍の止ゑけり此日川口ゑの舟手の面々城方の船を乘取んとゆ合中ゑも九鬼長門守の物頭渡邊歪兵衛小見兵助長谷川甚兵衛を始として足輕中間小舟ゑ取乘押寄れば大野が物頭一番ゑ逃出す是ゑ依て跡ゑ殘し百人の舟手の輩何事やらむと驚く處を九鬼が

兵切て廻り追伏て首を取事卅級一殘兵の跡をも見ずして逃歸る九鬼勢の風凰丸を乘取て一息ほつと次處ゑ赤裸ゑて太刀を銜來る者有舟ゑ飛乘や否向井將監一番乘と名乘ければ九鬼が郎等大ゑ笑我々が乘取たる舟赤裸の大將ゑの得こそ渡すまゝと云向非が曰汝等の信臣ゑ我名乘が非か九鬼の臣等ゆける其許只壹人丸裸ゑて來りゐひ若敵舟中ゑ有ば一討ゑなりゐふべしと大ゑ笑ふ向井尚々憤怒慮外ゑとて既ゑ討て掛んとす九鬼長門守舟を乘付郎等を制しゆける向井殿の能々高名が仕度思召ばこそ此寒天ゑ裸ゑて川を渡しゐふぞりし涙高名ゑあされよとて相渡しければ事故なく濟ゑけり此事後ゑ涙聞ゑ達し九鬼ゑの別て涙感狀をゐのりしとぞ

第廿一回

主殿頭奪ニ磯多崎ヲ　治太夫取ニ敵軍首一

爰ゑ石川主殿頭の大久保忠憐が次男ゑ實父忠憐の涙不審の輩蟄居しけれとも主殿頭にの涙拂もなく此度の涙供ゑも召具ゐひしの石川ありがたさ身ゑ余り何とぞ高名して二父の名を擧んと福嶋の鼓島ゑ來て白樂が淵を乘取ひと競ひける打しも十六日の夕暮より雨篠を乱し辰巳の風強く吹郎等共ゆけるの今宵の雨強して容易渡しゐふ事叶ひ難し先々涙引取有て重て計るへと諫ければ石川曰我此度の涙供一通の事ゑ非す何卒此川を渡し二父の名を擧擧を殘す者ゐらば假令此處ゑて死とも本望ゑ汝等も我志を思ひやりて共ゑ力を合さん事を頼ゑと云ければ郎等是を聞て涙を流し來た十七歳ゑ成ゐふ殿ゑして斯る剛氣の事をのゐふて臣等と頼ゐふ我々死力を出し此川を渡し君ゑ高名をさせ奉らんと互ゑ心を猛烈ども雨の彌々強く水の益々增殊ゑ風強けれ容易渡へき樣もなく徒ゑ其夜を明し十七日の曉天ゑ小舟一艘流來たる神崎與左衛門鉄鉋ゑ引懸て飛來兒を脱て水を返山しければ鹽谷孫十郎早速平吉浜川嘉右衛門吉田才八石黒友十郎伊藤茂佐の七人飛乘〳〵鉄を以てりいゑして川を渡す是を見て永非丹治川ゑ飄と飛込て泳けるを鹽谷孫十郎鉄の柄ゑ付て舟へ

引上向の岸ゑ着此方ゐゝ主殿頭身を躍して既ゑ馬を乗入んとす郎等大ゐ驚是を止んとすれども止る氣色もおし斯る處ゐ永井丹治向の舟と引て還れゞ主人を諫て此方ゑ置牛尾勘兵衛同杵之助松本正内八木又助游水正吉今井可之助此舟ゑ打乗向の岸に渡りける是を見て砦の内より弐十人計突て出石川勢と責戰主殿頭大ゐ氣をいらち郎等の諫も用ず亦乗入んとする處へ川上より舟十四五艘流來る石川勢大ゐ悦び是ゑ乗込難あく勢をぞ渡しけり砦の躍ゝ大將湖田升ゑ平子主膳も留主おれゞ防べき樣もなく我一ゐと逃失ぬ石川ゝ思の儘ゐ砦を乗取首十一討取此由を茶臼山へ言上す扨も白樂ケ淵の砦一戰ゑも及ゞず石川の爲ゑ乗取れし其故を尋ゑ湖田ゝ織田有樂齋ケ組下ゑ然ゑ有樂齋ケ長子信濃守ゝ中島の砦を固め居たりしケ有樂齋我子の砦ゐ至り熟見ゑ何とも危く思けれゞ湖田を呼寄猷川を渡らゞ陸んと思ひ使を以招けり湖田ゝ何事やらむと使と共ゐ至れゞ有樂齋大ゑ悦酒肴を集て種々饗應す集人ゝ我砦心元おけれゞ歸らむ事を乞と雖も此大雨洪水ゑ何物ゝ川を渡すべきと云て更ゑ許ず爰ゑ又平子主膳ゝ石川の勢川向ゑ寄たれゞ大ゑ氣をいらちて湖田ケ方へ人を走る事再三ゐ及ども集人歸らざれゞ今ゝ堪兼て自身織田ケ陣所ゐ來りけれゞ有樂悦びて種々饗應共ゑ歸さず石川曰敵兵留主中ゑ若押寄おゞ大事ゑと雖も織田更ゐ許ず此漫々たる水ゐ川を渡す愚者や有べきと彌々酒興を増両人ゐ進しのゞ止事を得ずして十六日の夜ゝ酒宴して止まりぬ扨又砦ゐ殘し翌ゝ雨ゝ強し水ゝ高しゑも敵兵川ゝ渡すまじと油斷して兜を脱鎧を解ていたりけれゞ石川斯安々と乗取ける平子主膳ゝゐゝる事とゝ夢ゐも知ず十七日の曉天ゑ漸々織田ゑ廻を廻て砦ゐ歸れゞ早石川勢入替て有けれゞ大ゐ驚き切歯を爲して怒と雖も詮方あくして引歸す爰ゐ池田丹後守ケ水主ゑ治太夫と云者有元來心剛ある者ありしケ堤ゐ出水を見て居たる折節水上より鎧武者一騎流れ來る治太夫是を引上見れゞ早事切て助

べき樣もあけれバ鎧兜太刀あぶを剝取死骸ハ川へ流し過り其鎧等を着し朋輩ハ向何と似合たるゝ我退付大名ゝ成べしと戯けれバ皆々打笑て立歸る治太夫ハ三間の楯を傍ハ曙堤の蔭ハ寄て莫あぶ呑て休息ける此時平子主膳ハ砦を石川ゝ乘取れ今ハ湖田ハ對面し其ハ謀らバ又良策もあらんと茫然堤を來りし折治太夫是を見て敵の落武者ござんなれと堤の蔭より覗よる平子ハ斯とも知す過行處を楯を以て馬の雙足打拂へバ何ゝハ以てたまるべき馬ハ屏風を毀如く平子ハ地上ゝ眞逆ゝ落る處を起もたてず力ハ任せ楯以て打据終ハ首をぞ取たりける則太刀鎧ハ添て主人丹後守ハ見せけれバ驚て茶臼山ハ言上す大慶所是を聞るひ平子ハ兼て慾惡深き者なれバ心地よしと仰有て治太夫を召れば感狀をゐたりける此治太夫ハ素播州二見の百姓ハて苗字とてもなく不計我家の横手ハ川の有を思て横川治太夫と申上けれバ是を慾感狀ハ付て下されける湖田ハ織田ゝの陣ハ有て此事を聞口惜次第ハ討死せんと乘出すを有樂齋樣々止一先引取べしと云處ゝ池田黨押寄來る湖田心得たりと死もの狂ひハ働きて池田の家士内山才次郎同友八山田耕之助早走大兵衛の四人を切て落し縱横ゝ突て廻れバ此勢ひゝ恐れをなし更ハ追者ありけれバ織田を首諸將故なく城中ゝ引取ける如何なる者のしたりけむ

白樂ゝ淵へも身をバ投ずして
すゞさたなくも逃た敗とう

と有けれバ彌々無念ゝ思ひ腹を切んとせしを幸村父子之を諭し樣々と止まりぬ

第廿三回

眞田掘戰ニ于堡砦
東大ニ被破ニ于敵

去程ゝ諸方の砦破れしゝバ幸村織田有樂齋ハ向ヤけるハ某諸方の人數を引取とヤせしを其許大野ゝ組して是を防害剩其身ハ湖田ゝ扶られて歸城せしこと一として取處なし斯る者ハ慾大事の人數を預置べき謂なし今日より慾預の人數召上らるゝの由殿ハヤけれバ織田ハ面目を

失ひ其座を立て引ゝける淀殿是を無念ハや思るひけん幸村ハ向軍師ハハ如斯の名城ハ又出丸を築しハ何の德有や幸村答て德の義ハ一々ヤ盡し難し先近きハ小敵を討取其後大敵を討取ヤべし其時ハ慾來襲を廻しとヤて出丸ハ歸りける扨真田丸の寄手ハハ先士手の向第一陣ハ松平加賀守ハ其後左右ハ

非伊掃部頭　松平奥陸守　藤堂和泉守
越前殿　黑田築前守　淺野但馬守
酒井左衛門尉　松平下總守　有馬玄番頭
一柳監物　古田大膳亮　桑山加賀守
同左衛門佐　脇坂淡路守　生駒讃岐守
金森出雲守　小出大和守　寺澤志摩守
本多左近亮　神保主膳正　松平豊後守
高力左近太夫　丹羽五郎左衛門　溝口伊豆守
羽柴美作守　佐久間藏人　堀淡路守

等ハ然ハ加州勢の先將奥村八郎左衛門ハ眞田丸の南小敵の中ハ陣を取て有しゝ霜月中旬の事なれバ戌亥の風烈く吹て雨皮の屋根を吹卷る是ゝ依て人を上て直させけるハ前の小敵より鉄砲を打掛足輕兩三人を打殺す奥村口惜く思ひ勝負を決せん事を廻へども加賀殿是を許るハす奥村詮方なく切齒を爲居たりけり然ゝ霜月十八日夜幸村ヤ上けるハ明日ハ小敵を討取て慾目ゝ わくべし出丸へ慾出下さるべしとヤハより則慾出の慾用意ある扨十九日の明方より彌々戌亥の風烈しく加州の陣處雨皮の屋根を吹卷る事夥多し是ゝ依て中間足輕多屋根ゝ登て修理んとする處ゝ出丸の脇の小敵より鉄砲廿挺計打掛れバ忽足輕十八人中間八人打殺す其余の手負ハ數云れず奥村今ハ堪兼手勢ハ下知して彼敵ハ攻入バ人影だハもあし八郎左衛門猶々怒此敵在ゞ故かゝる無禮をこそ爲さんと長等ハ命じて敵を切盡す此時井伊藤堂を始として寄手の陣々ハより奥村ハ何をするぞと見物す奥村も外聞恐如何ハせんと思ふ處ゝ出丸ハより列橋を渡て高聲ハ言けるハこれへ押寄給ふハ

加賀殿、先將奥村殿と見やれ此間に軍もおくれ故に徒然の余り狩などし賜ふとこそ覺へ去ど寄手城中の鬨の聲を恐れて雉子兎の類に皆生駒山大和路へ逃失へんに依て信濃の鍛冶が練磨たる矢の根を少々振舞やべし早押寄給へと云捨て城に入て橋を引奥村本陣を見れば主人を始皆々思物あり其上諸大名諸士の見る處此儘にて引んも口惜く進退谷り手勢に下知して責かゝると雖ども堀に深し堀に高し小人數にて如何とも詮方なく呟詰て立たる處を山丸より拾匁筒を釣瓶落しに打ければ一度に打倒され忽百卅九人打殺さる奥村はうく〳〵の躰にて逃歸れば加賀殿大に怒るひ我法令を用ゐず多の人數を失ふ事不届至極と有て忽三万五千石を召放されければ奥村に涙人とぞ成よけり幸村に彼母堂に向ひ是小敵を討しよてはまた近日に大敵を取拉て彼覽に入んと其日に本丸に返し奉扨諸代の郎等を召寄今天下の大事に臨み幸村膝を折て汝等一人の内一命を乞受る事ありと云ければ其言葉終ざるに渡邊四郎左衛門と云者生年廿五才なるが進出私一命素より君に任せし上に何卒其儀奉りたしと申幸村大に悦ひ然に今宵四時に我居間の庭前に來べしと申付て入よける扨其時刻に至れば渡邊に庭に來る幸村立出申けるに約束の如く只今汝が首を打て君の彼用に立る覺悟をせよと刀を拔き渡邊に首差延て待居ける幸村刀の旨を以て是を打ば渡邊心に思けるに儲に切たるが何迚首の落ざると主人の方を見餘る此時幸村渡邊に向ひ汝が心金石の如しと知れ其實に忠義あるや心を引みん爲あり依て一大事を託す其所聞今宵敵陣に至りケ樣々に爲べし假令運盡幾ましき死を爲とも名に末代に止むべしと申ければ渡邊曰某に命に素より君に奉りし假令一歩樣に成とも少しも遺憾いまじと答へければ幸村四郎左衛門が忠義を感ず謀を授けられば渡邊命を受身を中間の姿に拠敵陣に至て土手の内を徘徊す夜警の者是を見咎め汝に何者ぞと問渡邊に苦らざる者と答て態と狼

狽逃出せば夫曲者ぞ逃すなと右左より追取囲終に縄を懸て茶臼山に連行此由を言上す彼前に縛火挑灯星の如く諸大名彼旗本伺公有て頓て曲者を引出させ彼覽有て仰けるに汝奴の姿に似せたれども中々奴の類に非ず如何なる者ぞと彼尋われども渡邊一言も申さず是に依て先懐中を捜索見よと上意有横田甚五郎立寄て改るに更に怪き事あし神君仰けるに夫忍びて敵地に使する者常の如く密書を懐中すべきや髪を捌き衣を裂て吟味致べしと仰ける横田甚五郎命を受彼曲者がもとどりを捌き衣を裂に至て標の處に一書を縫入たり則取出して是を奉る其書に曰

重て申入れ今度其方が調略を以両將軍を當表へ引出しし事大悦せしめ此上に東國勢と申合せ不日に裏切可致し事成就に於ては約束の國を給ふ事不可有相違其外任望恩賞可致行もの之

十一月廿日　秀頼判

と有ければ諸將大に驚き扨に藤堂和泉守に心替致せしと云則戸田新兵衛を以て和泉守を召高虎に何事やらむと取物も取敢ず彼本陣に參り傍の人々に挨拶すれども酒井榊原の輩一言の答もあし藤堂に不審あゝら彼前に出其時彼書を出し汝是を高聲に讀べしと仰ある高虎畏れと是を讀て大に驚き赤面す公大に笑せるひ此間に若幸村が空死し籠城せしと氣遣せしが是に死たる事顯然たり若彼が城内に在はもあらば樣の拙劣計畧にせまし是に智の淺き者の謀にて予に藤堂を疑惑せ其際に乘せんと計しものと正しく大野あとが所爲あらん高虎念に虚事あるべれと上意あれば和泉守有難き身に余り彼曲者を申受則申差に して出丸の大手に立其書に曰

ケ樣の淺しき謀を設けて何ぞ寄手を謀り得んや以後の見せしめに斯の如く成敗するものと大御所の大智を知ば速に門を開き降參すべし

藤堂和泉守どの

と大筆ゐて書さゝり幸村是を見て涙を流し扨も天晴成忠臣を君の爲ゐ失たりと歎きしゞ涙を止め彼ゞ死たるゞ故我謀既ゑ成りと則淀殿ゆ内緒の人々を招四天王の單を召て手配す扨寄手へ矢文をゞ射出しける寄手の諸將是を得て本陣ゐ擧る其書ゑ曰

某何人出丸の未中を守りゆい若是迄の罪を赦しゐひ恩賞の國とゐゝりなゞ鉄炮ゐ玉を込ず又城乘の時打寄責合て心安く乘入せゆべし寄手の諸將宜就達を願み奉りい

十一月廿日　織田有樂齋　大野道犬

と書付ゐり是ゑよりて一責致べしと仰出さる、藤堂高虎ゆ前ゐ參りてゆけるゝ何卒今日の先手を某しゑ命せられ下されゐゞ一命を捨ゆ恩を報じ奉りゐしとぞ願ける君聞召され是を許ゆ有則ゆ手配仰付らる、第一陣にゝ藤堂和泉守二陣ゝ井伊掃部頭三陣ゝ淺野一家の面々ゑ四陣ゝ越後少將殿五陣ゝ小出播磨守金森出雲守松平下總守同丹後守酒井左衛門尉戸田若狭守其外ゆ目附十人ゆ使番十人都合其勢七万貳千人ゑ又出丸大手の大將ゑゝ松平加賀守松平奥陸守濱口伊豆守水野集人正此勢合て八万貳千人惣勢十六万余ゑ又大ゆ所ゑゝ生玉の馬場先ゐ盛籠を組上させゆ見物有藤堂高虎ゝ未申の方へ押寄て烈しく下知して堀ゑ飛入々乘入んとす此時城中より打出す鉄炮ゝ皆紙玉を込されゞ玉ゑ火燃付なゞら落けれゞ寄手彌々勇を奮して責登る後陣より是を見て續て堀ゑ飛入々責掛れゞ三陣四陣五陣も一勢ゐ押寄る城内ゐゝ四天王を始として宿衛兵衛伊木七郎右衛門の單千鳥塀の手配ゐして靜鑑かへつて合圖を待扨寄手の面々ゝ蟻の群る如く我一ゐ塀を乘越むとす城内よりゝ薙刀を以乘越る腕を切落々する程ゑ塀の屋根ゝ恰も大根ゐどを干たる如くゑ見へたりける大ゆ所ゝ鳶籠ゑ登せるひ戰ひを ゆ覽有しゞ頻ゑ振いでけれゞ大ゑ驚ゐせるひ早々下りるゑ此時幸村ゝ三貫目の大砲を膝盛ゑして公の盛籠へ上らせるゑ黄氣を見定め打

けれゞゆ供ゑ有し水野與八川勝藤五郎松平舍人を始として ゆ近習十八人微塵ゑ成て死たりける公ゑも ゆ氣色と失いるゑを大久保彦左衛門肩ゑ懸て ゆ本陣ゑ逃歸るゝ危かりしことども ゑ此大筒の音を合圖として千鳥塀のせんを放せゞ車の如く打返す中よりゝ大石轟ゞ落て跡ゑ續者迄も押ゑ打れて死たりける城中より是を見て大筒拾挺打出せゞ恰も將棋の駒を倒すゑ殊あらず寄手の諸將大ゑ恐れ馬ゐも乘得ず徒行ゐ成て土手の内へ逃入たり徒卒ゝ互ゑ優乱へしゐい乘捨たる馬ゐ蹈倒され死者數を知ず出丸ゆ打出す小筒烈しく然して玉一つゑて弐人三人討ころせゞ死骸ゝ積で岳の如し其中ゑ松平勘助が陣所のみ備を立て有れゞ城より大筒を以て是を打んと云幸村止てゆけるゝヶ程の大崩ゑ只壹人依然として歩止まるゝ實ゑ大功の勇士ゝとて使を以て其名を問ゑ答て曰松平庄五郎生年十五才則今日の殿ゑてゆと云使歸りて此由とゆせゞ幸村重てゆ遣しけるゝ天晴の ゆ殿ゐゆ也 ゆ筋目とゆ殊ゑ若年と云傍感涙致しゆ是ゑ依て ゆ陣所へ大筒打掛ゆ義ゝ差留ゆまゑ早々 ゆ引取有べし末 ゆ繁昌を祝して末廣を進上ゆゑと有けれゞ庄五郎是を取て云けるゝ日本無双の真田殿より末崩を給る事 ゆ武勇ゑ感ゝん爲受納ゆゆ此上ゝ仰ゐ任せ引取ゆべしと答て靜々と引取ける今日殊ゑ可笑かりしゝ松平奥陸守ゑ出丸の大手ゐ向ひ様々悪口して上方勢ゝ者と云て未だ生を云ざる間ゑ城中より打出す大筒ゐ氣を失馬より下ゑ落ける所を真田大助突て出八方ゐ當て奥陸守を追掛る奥州の將士山脇平馬鉾を取て是を防深谷清海入道横さまゐ駈來り山脇父子を突て落し四方ゑ當て勇戰す此時大助ゝ奥陸守を追詰て既ゑ危見へけれゞ田村主水同一學戸澤掃部北谷内藏伊達角之亟歸し合せて討死す其間ゑようゝと逃延たり扨城方に生捕し者五百人計有けるを幸村尽く助け歸す中ゑも奥州の兵卒ゑゆ遣しけるゝ城方の者ゝ弓矢の道も知ず畜生のやうゐ云るれども今日の手並ゑ懲て以後ゝ仇口を止るへとゆ

べしとて赦免ける扨浮母公浮内縁の人々を本丸ゟ歸し奉まつり松明を以て堀の死骸を揚させ旗印を岳の如く積上させ札を建其文に曰

陣中に浮旗印を失ひさぞのし浮不自由にゝん是ゟ集置ゝへゝ其主浮見分有て浮取可有もの之扨又石と大筒ゟ打さる死骸六七千も有之ゝ皆忠死の輩ゟゝへゞ宜敵屍を納遣されゝへかし

東軍是を見て大ゟ怒再び押寄と進者も有と雖も又謀もや有んと恐れて退けり

絵入大坂軍記實錄卷之三

第廿五回

雨將軍巡二視陣中一　幸安射二撃河内守一

閑れゞ東照神君ゟゝ危厄を避るひて仰けるゝ我常々幸村の深慮あるを恐しゞ彼城中ゟ在ゝ幾百万の勢を以攻るとも寄手討るゝ者夥多て終ゝ味方の敗北を釀すべし先土手を築て陣屋を堤より内ゟ掛直させよと浮下知有尚も必元ゟく思召て新將軍へも仰遣されて同月廿四日浮陣廻有べしと仰出されける家康公浮出馬有ときい必南光坊の僧正浮彫武者と成て鉄砲四百挺貳行ゟ立次ゟ弓貳百挺手替の物頭十騎各々抱の人數を連て行列す次ゟ八幡大菩薩の大旗貳本騎馬五百騎貳行ゟ列浮旗本ゟゝ松平下総守人數五百人自分の弓鉄砲旗馬印と立る次ゟ水野隼人人數三百人ゟて右ゟ同左備ゝゝ土井大炊頭右備ゝゝ井上左門後ゟゝ岡部美濃守松平采女頭安部摂津守酒井岩見守合計壹万八千人之又五丁程絶て丶浮譜代の輩浮供奉之外ゟ尼崎や又右衛門浮免籠ゟて浮案内ヲ上る扨又川口を掛てゝ新將軍の浮順覽之浮先ゝ酒井左衛門尉本多中務同兵庫頭西尾隠岐守戸田豊後守右ゝ本多美濃守左備へゝ永野日向守後ゝ永井下総守松平土佐守弓鉄砲浮旗浮馬印ゝ大浮所ゟ替たる事ゟし扨又城内ゟも此事を聞て秀頼公并ゟ浮母公ゟも浮覽有べしと先振袖の十五六才計ゟる美麗き者を撰其出立ゟゝ謡紅の腹卷ゟ紫縮緬のたすきを掛黄金裏斗付の太刀を帯白綾の鉢巻ゟ小手脚當をゟし皆一様の下髪之流蹴の浮乗物の左右を守護す浮先手ゝ早速甲斐守今木源右衛門左右ゝ織田淺井大野渡邊等之秀頼公の浮先手ゝ南旗中務太夫福嶋周防守次ゟ五七の桐のとうの旗印千成瓢箪の馬印次ゟ鉄砲五拾挺弓五拾張長柄五拾筋行列す左右ゝ牧島玄番後藤隠岐守其外木村主計頭伊藤丹波守浮供ゟ伺す平野口の浮門ゟゝ真田長曾我部の輩待掛ゟり此時浮本丸ゟり軍中之浮酒肴を賜る幸村始四天王の面々浮機嫌を伺ひ奉り座列定て浮母子敵陣を見渡るふゟ六文銭の旗貳本有けれゞ是ゝ如何ゟと浮尊ある

幸村答てゆ上けるゝ敵の方ゐ建し旗ゝ文字ゐく某が甥共ゑ侯兄を河内守とゆ弟を内記とゆ十七才と十五才ゑ相成し父ゐてし伊豆守ゝ去年相果し由某信州上田を立退し砌ゝ三才と當歳子ゐてし故之ゐと面も覺申さず定て此度の陣供ゑ仰付られたりと相見し去ど戰場の慣ゑしへも勝負の時ゝ不便ゐがらも打捨べしとゆ上る秀頼公是を聞し召れ諸將ゐ迎せるひ敵寄るも六文錢の旗を見る時ゝ必ず弓鉄砲ゑて討べからずと仰付られけれゞ幸村謹て其理由をゆせども是ゝ軍陣への酬禮と述るゑ故幸村も涙を流し有難しとゆ上る是を聞諸將思ゝず感涙と催しける扨城中の面々櫓ゐ登て敵陣の樣子を窺ひける幸村ゝ遠眼鏡を以て望いたりしゞ迎氣を見て退口敵方陣廻有べしとゆ上る淀殿秀頼公ゝ今やくゝと片唾を呑で陣見物有程ゐく先手押來る此時諸將幸村ゑ向ひてゆけるゝ此陣こそ大將家康ゐるべし軍陣天下分目の一戰然ての工砲試みるべしと大筒ゐ目を掛て進けれゞ幸村答て否々此者ゝ木金水火土の氣を別れ色もゐく形もゐし思ゑ是ゝ影武者ゐるべし大事の一砲ゐ坊主あどを打て何ゆせんとゆ内ゑ黄氣立登る幸村是を見て諸將ゑ向ひゆけるゝ跡ゑ出來る者こそ家康ゑ總て天下を治る者ゝ地の主たるゞもゐ黄氣立て天ゑ翔頓て此氣を消べしと壹貫目筒ゑ玉を籠て窺ひ居ゐ家康公ゝ御馬ゑ召れ諸大將を召具せられ陣々を陣覽有ゑ真田河内守ゞ陣のみ土手より外ゑ有て一際進たるを陣覽あり急陣召有て上意あるゝ甕ゑ陣處を土手より内ゐ掛よと觸しゐ汝ゝ何故命ゑ背や兄弟陣答ゆけるゝ此幾永知奉りしへども我々ゞ伯父ゑてし者余ゐ慮外仕し故若城より打て出ゐゞ一番ゐ馳合迎を天ゑ任せ勝負を決と存奉陣觸ゐ遊ひ如斯ゐしとゆ上る公聞召されこゝ必得ぬゆ條りゐ汝ゞ伯父故乱ゐ沮撃せざるを知ざるゝ又真等の者共も何とて諫さるぞ早土手より内え入べしと仰有て土手の外れへ出るゑ幸村ゝ壹貫目筒を膝蓋ゑて打けるゑ柳の枝ゑ障て少し玉下りけれゞ公の乘ゐひし馬の横

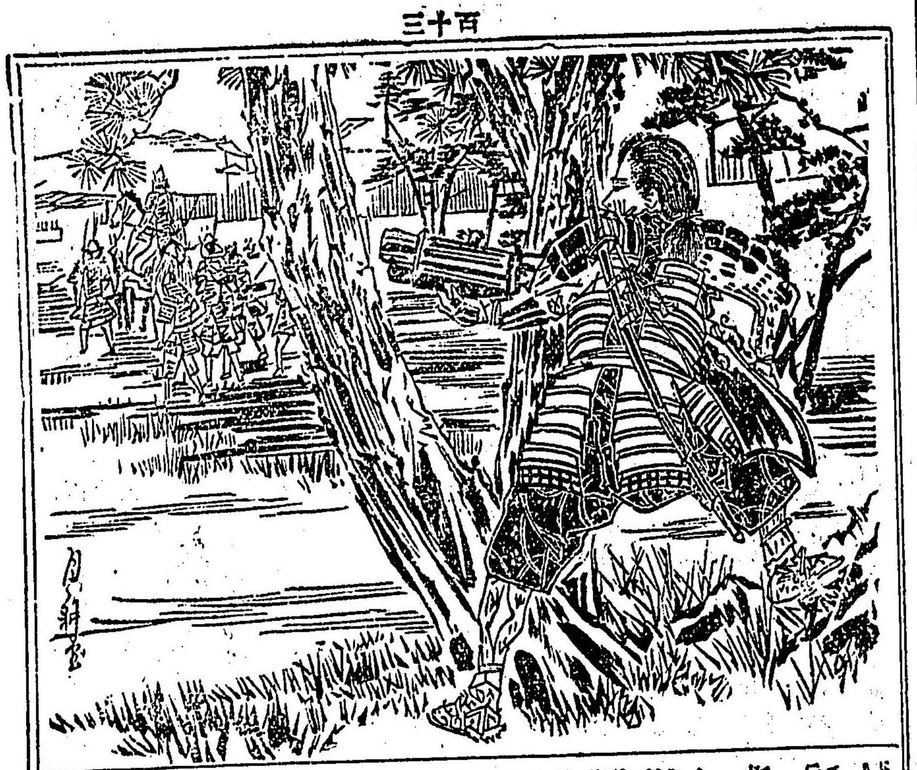
腹を打抜ゞ真逆さまゐ落るゑ陣側ゑ有ける今杉主水大野源八を始ゑして陣近習十人計微塵ゐ成て死たりけり幸村是を見てゆけるゝ扨々殘念ゑ又此度も討洩せしゝ嗚呼貴氣ゝ益々盛ゑとゆける是ゐ依て先備へ大ゐ騒擾引返さんとするを公ゝ陣落馬しるひしも意とせられず行列を立よと陣下知有是ゑ依て又備を立直す此時真田河内守兄弟ゝ大筒の音を聞と齊く手勢三百余騎を引て城際近く押寄勝負を決せん事を望む幸村ゝ是を打んと大筒を差向るを諸將止てゆけるゝ若年ゐして一命を惜ず押寄るゝ是實ゑ忠義の人ゑ必ず打るゐ事ゐられと秀頼公淀殿ゑも又是を止先るへゝ幸村も其意ゐ任せけり時ゑ大助竹抱を束て潛より出ゆけるゝ我ゝ是真田大助幸安ゑ兄弟の人々ゐ一言ゆさん抑和殿達小勢を以當手へ押寄られし志の儚ゑ討捨んとゐもひしへども我親族たるを以て君鉄砲と許たまゝゝず仁去討取事の安き印を見るへと弓執延てひやうと射れゝ河内守ゞ兜の白端坐を射忍の緒ゝ切て兜ゝ大地ゑ落たりける内記是を見て北矢を取亦大助ゞ兜の吹返しを射て瓦ゐ弓勢ゑ顯しける時ゐ安藤帶刀成瀬隼人馳來り真田兄弟早引取るゐべし若延引せゞ陣拠當たるべしとゆ是ゑ依て河内守大助ゑ向ひゆけるゝ主命あれゞ是非ゐく引取ゆゑ扨和殿丶弓勢感じ入てし且秀頼公此度我命を助るゐとも重ての戰ゑゝ必ず陣首をるゝるべし其時用捨ゝ致ずと云て引返す公此由を聞召同人を近く召れ眷を撫るひ扨々只今の振舞感ずるゐ餘りありと陣賞美有如何あれゞ汝一家の者ゝ斯勇氣ゑ勝さるぞ父伊豆守ゞ存命せゞさぞ嬉かりつらむと陣涙を流しるゐ兄弟ゝ拜伏してこゝ冥加もあさ陣上意哉と同涙を催しける扨公ゐゝ今日南光坊を陣影武者と爲るひしを夫と見分て我を打し事實ゑ恐懼べきとゑ此上ゝ油斷あらずと思召尼崎屋又右衛門ゞ四手駕ゑ召換られ遠く新庄ゑ廻りて陣越ゑ此尼崎屋ゝ故太閤の陣時より大坂町人頭として將軍家の陣用達ゑ此度も陣中の陣供を勤めしとぞ扨公ゑゝ漸次と陣廻り有て長拆

堤の松平武蔵守の陣屋ゑ彷入有程なく新將軍も濱邊より彷入ゐて南光坊と彷待受在られ彷親子彷對面有て今日の危厄又眞田兄弟ゞ忠節を彷話あれゞ皆々舌を巻て懼ける新將軍之を聽扨も不審の事共ゑ是ハ味方ゐ返り忠の者有て君の彷馬を敵へ知らせゑるゐハ非ずやと仰けれゞ南光坊進出てヤけるハ夫天下を治る人ゐハ必ず黄氣の立もの ゑ是國土の主ゑるゞ故ゑ地氣登て是を覆と雖ハ りしハ然ども尋常の人容易ゐ此氣を知る事能ず幸村能氣を見る事を得ゑりと爰ハ得ゞ此後ハ別て彷注意有るべしとヤ上る 新將軍笑せるひ其事曾て聞知ゑれども雲しらずと宜ゞ南光坊例を引てヤ上る 某漢書を閲ゑ高祖皇帝未だ民間ゑありし時放埒の身持ゑて晝夜家ゑ有事なく山林遠鏡ゐ遊びて家ゐ歸らず然るゐ妻の呂后必ず跡を需めて尋來る或時高祖呂后ゑ隠んため先ゑ先ゑ行て知ざるやう隠室ゑ籠居す去ども呂后其處ゑ尋來る高祖不審ゐ思其故を問ふ呂后の曰君の在す處ゑハ必ず黄氣有 故ゑ能君の在處を知とヤされし故高祖も詮方なく其後ハ行先を告出しと云此人後ゑ天下を治て漢朝四百年の基を開るゑ君も何ぞ高祖の德ゑ劣るハん哉とヤけれゞ兩將軍彷感有て彷休足の上備前島片桐ゞ陣より城の躰を見んと始の如ゑ出立備前島へ入せるゑ秀忠公ハ天滿堤より城の有樣を彷見物有幸村天滿堤を覗ひ見て松崎久太夫ゐ命じて五百目筒を放たせけれど其出四百間ゐ余けれゞ玉の勢ひ弱して彷馬の足ゐ當て新將軍ハ堤より轉落るゑ彷供の面々大ゑ驚き漸々ゑ介抱奉りける夫より彷親子共瓦ゑ恐れるひ彷歸館の彷備しあり然ども始ゑ疑させるひて東ハ赤口西ハ海邊ゑ彷廻有て東西へ立別て彷歸館ゑ此時城内ゑハ松崎久太夫大事の筒を仕損ト切齒をなして大ゑ怒討て出んと躍動けるを幸村曰我所存あれゞ暫待べしと深止けり

第廿六回

幸村籌策腦ニ東軍ー　尾代多宮死ニ敵中ー

眞田幸村ハ四天王を始諸將を尽く集て今宵の還彷を途中ゐて討へしと手配を定む先高麗橋の先手ハ中嶋氏部



人數五百騎弐十目筒五十挺三拾目筒五十挺後陣ハ後藤又兵衛其勢千五百騎と引卒し五拾目筒五十挺弐拾目筒弐拾挺三拾目三拾挺を備ふ小川土佐守ハ弐拾目筒を拾挺用意し五拾騎を引て是ゞ遊軍たり本町橋の先手ハ赤松伊豆守後陣ハ木村長門守遊軍ハ水野内記人數鎮砲ハ前ゑ同じ堀留口の先手ゐハ仁木大膳亮後陣ハゐ長曾我部宮内少輔遊軍ハ小川吉兵衛人數鎮砲前の如し保著口へハ伊藤丹後守後陣ハ眞田大助遊軍ハ和久半左衛門人數鎮砲前の如し星合口へハ牧島玄蕃後陣ハ後藤隠岐守御田隼人郡大學遊軍ハ米田監物人數鎮砲ハ前の如し田丸よりハ伊木七郎右衛門後陣ハ幸村ゞ長等海野左衛門尉遊軍ハ塙團右衛門人數鎮砲前ゑ同じ黒門口へハ生駒帶刀後陣ハ眞田ゞ長等望月主水猪子瀬右衛門及川八助人數鎮砲前ゐ同じ七手の勢合て壹万四千三百余人ハ後藤隠岐守幷伊木七郎右衛門望月主水ゞ手より炮錄火矢の相圖を以て打出んと嚮の外土手の裏ゐゞ伏たり城内諸方の橋よハ大筒を仕掛寄手の撓橋

お依り切て放さんと搏へける扨又扳道よりゝ眞田が長篠根津壮八 同 元之助 増田兵太夫を大將として五百騎を三手お分高津の下ゟ伏たり一手ゝ深谷清海入道 同 伊三入道 増田三七郎を大將として是も五百騎を三手お分生玉の東ゟ伏たり時ゟ相圖の大筒を打はどてそれ七ケ所の城兵一度ゟどつと鬨を合せ卅目筒五十目筒を打掛々土手より外へ切て出寄手の諸將大お驚擾處ゟ蜂須賀池田石川の三將備を立て切て出高麗橋を取きらんと横さまお馳行處を後藤基次千五百余騎を三手ゟ分て大軍を中お取込勇を振命を捨て戰へゞ蜂須賀池田石川ゲ勢討るゝ者數を知ず此時本町橋堀留口保者口星合口出丸黒門口皆如斯あれゞ本陣の勢を出す輩もあり又馬廻ばりゟて馳合す輩も有寄手の陣々大方あらぬ騒動ゝ此時加賀淺野奥州鍋島毛利黒田細川加藤立花有馬福島備後越中井伊藤堂酒井榊原松平水野の軍勢怨蒐ゟ成て責戰ふ城方よりゝ木村長曾我部眞田大助其外七手の勇將四角八面お當て驅馳駈馳突て廻る此時眞田ゲ忍のもの諸方ゟ散乱して火を放てゞ折節夜嵐烈しして寄手の陣々一度ゟ燃上れゞ諸將ゝ大ゟ狼狽騒ぎ更ゟ戰勇氣もなく惣崩ゟ成て散乱す城方の諸將ゝ得たりや合と突立々縱横ゟ切廻る城中ゟゝ幸村八方ゟ下知を傳へ窮方へゝ勢を增爰を先途と來附執て指揮をゞ爲しおける新將軍お諸大名を陣々ゟ止るひ淀殿本計お天王寺を指て淀歸館お飯ケ清水の本迄來るふ處ゟ忽然深谷入道兄弟顯れ出て小筒五拾挺を打掛〳〵切てかゝる淀供の面々是ゲ爲お打倒され死者數を知ず新將軍も淀馬淀鎧ゟ當けれゞ氣を失ひ給ひ馬よりどうと落るふ安藤帶刀成瀬集人兩人齊く馳入て新將軍を救ひ出し肩ゟ掛てゞ逃たりける深谷兄弟増田三七勇を振て追蒐突立れゞ將軍ゟも逃延るゝ事能ず既ゟ危見へけれゞ淀側ゟゝひし矢代多宮淀陣笠羽織を乞奉り是を着し將軍秀忠爰ゟゝ返し合せて戰と呼叫けれゝ深谷兄弟是と賞の將軍ゝと想引包て切立終ゟ多宮を討取て陣笠羽織を取

添大お勇で拔穴より引返す是ゟよりて將軍ゝ辛して茶臼山ゟ逃入ゐひ扨々今宵の危さよと舌を卷て忍懼るふ扨大淀所の淀事如何と接下させるひて安藤成瀬を馳て淀否を聞合るふ此時寄手ゝ大敗軍ゟて散々ゟ乱けれゞ神君の淀行衛更ゟ知ず安藤成瀬ゝ味方の敗軍お ゝ目も掛ず淀行衛を尋奉る此時木村重成薄田隼人後藤隠岐守望月主水真田大助の輩加賀陸奥酒井藤堂本多等を突崩し退乱す中ゟも大助幸安ゝ穴山小助三輪琴之助を左右お備へ千五百騎を以て榊原の陣を打破續て上杉佐竹堀尾京極の十三陣を馳散し終ゟ神君の淀本陣お切入たり猪子千助是を見て五十騎計取て返し是を防んとす穴山小助迎へ合せ終ゟ猪子を始として五十余人討取ける大助ゝ猶も本陣深く切入たり是お依て本多中務 同 兵庫蹈止まつて防禦 幸安ゝ是を百合草品之助神道武者之助の両人お任せ五百騎と引分て丸備へと成一聲叫んて打て入淀流本水野猪之助日根野彌五郎竹中半兵衛清水帶刀松 平 長十郎永井一學鈴木新八を始として七十三人枕を並て討死す大助ゝ神君を見より鎗をひねつて飛掛る甲斐政右衛門寛頼此中ゟ隙て切て蒐る幸安ゝ面倒ゟと忽 同 人を突て落す神君大ゟ怖るひ馬を轉て逃るふ大助猶も追掛奉れゞ返し合せて討死する者十有二人幸安益々氣を勵まし神君ゟ追りける總か其間三段計お して今や討れるゝんとする處ゟ眞田河内守同内記常陸天の如く馳來り幸安ゟ渡合挑戰りふ其間ゟ神君ゝ三丁計落行るふ幸安も今ゝ是迄ゟと兵を纏めて引返す河内守兄弟ゝ公の脫去てゐひし淀羽織を見て扨ゝ討れるひしの今ゝ生て誰ゲ爲ゟせんと亦取て返し幸安を追神君遠ゟ此躰を見るひ予ゝ爰ゟ在り往を止よと仰けれゞ兵卒眞田を呼返す河内守兄弟ゝ余りの嬉さお君の側ゟ至り涙を流して申上けるゝ淀討死を遊ばされしゝと存じゝ故淀首を取返し切腹仕るべしと愛惜しる處思の外淀逐目出度と申上て淀羽織と奉る神君大お感じるひ此度の働き比類おしと淀感狀并淀太刀一腰づゝ賜ゝりけり夫

より茶臼山へ陣歸陣在て陣親子陣對面有て陣悦あり互に今日の危厄を陣咄し有て恐るゝ時は夜い唔と明わけり退々は敗軍の諸將馳集り或い恐れ或い陣武運のいみじきを祝し奉る扨又深谷い矢代ゞ首は陣笠羽織を添て幸村は見せけれゞ幸村實檢してゆける是い新將軍わい非ず然とも漢の季信はも劣ざる忠臣ゝとて其品々を取揃へ土手の上は札を立て曰

此度於淸水新將軍の陣名をゐい討死す名を知ずと雖天晴の忠臣漢の季信はも此すべし幸村是を感して斯の如し

扨又此夜伊達井伊加賀藤堂越前池田毛利土井水野蜂須賀伊藤九鬼の陣所悉燒失けれゞ川口今宮木津難波住吉天王寺勝間桑津八尾久宝寺長柄尼ゞ崎の邊迄引退きける

第廿七回

幸村五ゞ所設ニ伏兵一　神君賜レ兜ニ佐平次一

東軍い斯の如く打負ると雖とも神君い御氣色常の如くはて曾て恐ゐい ず勝敗い合戰の習わて幾度も有事ゝ城方今日の勝軍わ恍如何ある眞田ゝとも勢を山す事い有まじ我明日陣廻して責べき処を差圖おさんと此度い更は味方へも陣沙汰おくして陣廻の陣用意を密は遊されける幸村い勝軍を報て山丸は歸りしゞ急わ良等を集て手分をおす穴山小助望月卯右衛門言葉を揃へ東軍新は破れたる事おれゞ中々出べき樣おしこい何國への陣手分ぞと不審しけれゞ幸村答てゆけるい家康今日陣廻を仕損てたれゞ明日い味方の出ざるを計て忍廻を爲べし是と討取む事掌わ有と穴山望月川勝林根津の五人わ百騎宛を與へ謀略を授て夜間は城を出し其身い屈竟の兵八十余騎を撰拔て密は城を出たりける扨神君わい十一月廿五日の拂曉は茶臼山を出るひ態と住吉の方へ廻りゐ同一やうある乘物三挺をつらせ陣本三百人を召連るひ靜は藤間の此方迄行ゐふ處は思もよらぬかたへの敵陣より関をどつと上て六文錢の旗を風わ靡し眞田左衛門尉幸村是は有大將わ見參せんと呼いつて討てかゝる陣旗本の面々大わ驚きすいや

眞田ゞ伏兵と猛狂驚げゞ三番目の乘物より大久保彦左衛門飛で出家來わ持せし鎗おつとり幸村は向て突て掛る幸村暫時桃戰しゞ如何思けむ乘逃て引返し住吉さして逃出す大久保い己卑竟なり何國までもと追掛れゞ陣旗本五六十騎是は續わ伊達政宗い住吉は陣を取て有けるゞ此由を聞て眞田を討んと馳出る幸村い大久保を思ふ儘はおびきいだし住吉近く成けれゞ一散は濱邊わ退き川意の舟は飛乘て帆わ任せてゞ引取ける神君い是は驚きるひ道を早めて急ゞせるゐ去とも今日の陣廻のこと諸將は示しるいざれゞ陣味方はも是を知者なしよう〳〵曾根崎の此方迄來るへゞ後の方わ聲有て眞田幸村爰わ有と打てゐる陣旗本の面々半い蹈止まり半い陣供して森の中迄逃るへゞ復向の方より六文錢の旗を押立幸村爰は有て待事久兎も逃ぬ所あれゞ早陣腹召れよと百騎の勢を一手となし面も振ず突て入四角八方は切て廻れゞ爰わ於て陣旗本夥多討死す此間は武挺の乘物い陣近習五十人計陣供して中島の方へ落るゐ然るは向の方わ一村の繁りし林のあれゞ又ゆや伏勢有んかと思ひゐひ物見を出して窺ひるゐは未だ其人も歸らざるわ思ひも寄ぬ方より又幸村と名乘て散々は切立るゐ近習の面々命を捨勇を振つて防間わようよう武丁計逃るゐ此時は乘物わ付添輩い十人わい過ざりけり然る所耳許は鉄炮の音して眞田幸村討て出大音はよゆけるい我爰は有て君を待奉る事久し早陣首を給いるべしと突てゐれゞ神君今い逃れ給ふ途おく既わ危く見へたる處は壹挺の乘物より本多出雲守躍れ出四尺八寸の大太刀を眞向わ差かざし嘗るを幸ひ切て廻る此勢ひは猛い少しく南の方へ引退忠知得たりと勇を振て追掩る此時初は出たる幸村支へる陣近習を討取退のけ來れゞ殘の陣近習十人計此處は討死す神君い只壹騎よちゝと大道村へ逃込るゐ酒井雅樂頭い敵を切拔て神君の陣跡を暮ひ追付奉る幸村い神君の陣通行有べき道筋を計五人の勇將をもつて已れゞ名を呼せ伏兵とおし思ふ儘は大將

一騎と爲しよける始勝間あて討て出たる幸村ハ根津甚兵衛弐番ハ川勝三番ハ望月四番ハ林五番穴山小助ハ皆一樣の出立ゑて幸村と名乗せ其身ハ八十騎の勇兵を從へ黃氣を考追掛ける神君ハ酒井壹人傍供ゑて大道村ゑ逃入るひ路傍の茅屋ゑ傍入有て暫時影を隱し呉よと仰られけれバ此家の主快承引御寛の如き茅屋ゑて隱奉る處ゑしすのこの下へとも潜ゑへと云バ苦うらずとてすのこの下へ隱場ふ酒井ハ態と他の家の門ゑ立歟を行幸村ハ黃氣を追て馳來りしゞ大道村ゑ到て忽黃氣を見失ひ如何すれども見へず餘不審ゑ思ひ兵を分て尋ども終ゑ其行方を知ず斯る處ゑ傍の茅屋の門に酒井雅樂頭只壹人鎗を横たへ立いさるを眞田ゞ良等斯と告れバ幸村爰ゑ來て再び黃氣を窺へども更ゑ見ず幸村爰ゑ於て神君の傍遯未だ尽ざる事を知り大音上ゑヤけるハ今日某ゞ謀ゑ陷て如斯狼狽給ふ上ハ假令何國ゑ隱匿給ふとも飛道具を以て討取あバ事容易と雖も幸村尋常の勝負を存るゞ故後日又再會を斯せんと云て引返す斯處へ本多出雲守討漏されたる兵十人計召具て飛ゞ如くゑ馳來り酒井と共ゑ敵を防ゞんとす眞田ゞ良等是を見て我討留んとひしめくを幸村是を制し彼等ハ幾人討たりとて無益ゑとて引取ける酒井本多も戰を好ざれバ眞田ゞ引を幸茅の茅屋ゑ立歸る幸村黃氣を見失ひしも宜あるゑ君をすのこの下ゑ隱し奉り佐平治其上ゑ座し居たり是ゑ依て虎口を逃給ふ両人ハ下家より君を出し奉り傍安躰を賀せる處へ大久保南光坊も駈付て諸將ゑ斯と知せけれバ我も〳〵と馳集り守護して傍辺ゑ歸らせ給ふ佐平治ゑハ當座の傍褒美として金紋の傍兜を脱で下されける今ゑ此家の寶物とゑして所持するよしゞ程の騒亂ゑ寄手の陣々揃合ざるハ傍陣廻を知ざる故ゑ是を謀て小勢を以追詰しハ實ゑ名將と云ふべし城中ゑハ數度敵を破り上下勇ども寄手ゑハ親と打れ子を失ひ愛を含て自ら陣中寂寥たり此時茶臼山の傍本陣ゑハ諸將追々參集し傍機嫌を伺ひ恐れ入て傍目見を

爲す君宣ひけるハ昨日ハ壹夜骨折ゑ然ども予ゞ運ハ天ゑ叶をもて危場處を逃たり頓て勝利を得事何の疑ひの有んと仰有て陣處を燒れたる面々ハ近隣の人家を毀早陣屋を造べしと命じ賜ひ眞田河内守兄弟ゞ忠義の段ゑゞ傍物語有處ゑ新將軍の傍身代ゑ立たる矢代ゞ首城方より傍羽織を添て土手ゑ建たる由言上す則取寄て傍覽有落涙ゑ及バせ賜ひ一宮寺ゑ厚埋葬らせ其子孫を後ゑ傍取立有ける扨神君思召ける樣ハ城中十万の勢有と雖も皆烏合の勢あれバ反忠の者必ず有べしと柳原式部を召て密ゑ城中へ矢文を射させ給ふ此時城内ゑハ勝軍の御賞を行ひ賜ふ諸將本丸ゑ登城しけれバ功有者ゑハ傍感狀褒美を被下ける然る處へ是合口の番頭南條中務保寄口の番頭牧島玄番の両人幸村ゑの前ゑ出て寄手の矢文を差出す幸村是を披見して大ゑ両人ゑ賞し兼ての差圖ゑ逆ず能々持參せられたり両人ゞ持口を開き敵兵を引入あバ十万石ゑ取立當座の賞として金子千両と下さるべしと認め奥ゑ公の傍判

を据られたり此度ハ約束の如く是より一倍して下さるべしと則秀頼公ハ勝利の後ハ廿万石より取立の書墨付并に御當座の褒美として金貳千兩宛と下されける南條牧島言葉を揃へ私ども儘て一命を差上奉る身なれバ此金子を何ゝ仕らむ外々功有輩へ遣さるべしと返しけれバ幸村兩人より向ひ是ハ軍中の命令に失功有を賞し罪有を罰して諸軍を正す若之より反して功を賞せず罪を正すんバ何を以り諸軍を指揮せん先々是ハ納給ふべし扨敵の謀計ハ就て又敵を計べしと秀頼公より伊達政宗を内頼の書を認め又南條牧島の兩人より内應すべしとの書ハ彼の矢文をも其中ハ入たり扨和久半左衛門を召出し此度の使ハ貴殿あらで叶べからず氣を見て變ハ應ずへしと謀を授け三通の書を渡せバ半左衛門是を受取貳通の書ハ深く隱し君よりの内書を首ハ掛て出丸より出たり幸村ハ南條牧島ハ計略を含め兩人家來の内ハて一命を捨て身を顧ざる者を壹人宛撰置諸將の手配を成て和久が返事を待居たり時ハ慶長十九年十一月廿六日の夜に

第廿八回

陸奥守生捕和久　牧島南條降東軍

此時和久半左衛門ハ伊達政宗が陣處ハ至り秀頼公の内書と出す政宗是を見るハ裏切致すハ於ても奥州一國を下さるべしとの事に政宗勃然として大ハ怒我昔し太閤ハ國を縮少られ其憤怨今ハ忘れず何ぞ味方ハあるべきやと忽近臣ハ命じて半左衛門を生取しむ和久聲を挙てゆけるハ如何ハ政宗汝味方せざバ止まで之何故敵の使を斯ハするやよし〳〵頓て汝ハ解べし其時面倒あらぬ樣ハ縛と云政宗益々怒何ぞ已如きの者を解許す事の有べきやと良等ハ和久を引せ茶臼山ハ至て永井右近を以て言上す神君此由を聞るひ則ち陣の脇へ引せ内覽有此時内側ハ爛星の如く立連ね白中を欺むく神君彼者ハ向ひ汝ハ北條氏政の臣和久半左衛門ハあらずや和久答て然り公宜ハく予先年汝を招きし時ハ種々悪口して影を隱し今汝が主人氏政が敵たる秀頼ハ仕剰寄手ハ使するハ何事ぞ和久が曰古太閤ハ

天子の勅命ハ依て氏政を打給ふ是敵と云べきハ非ず其上名家の絶むとを憾恨思召され大和の國ハ於て壹万石を賜ハり子孫を内取立ある是を怨望奉るべきや全琳北條家斯成行しハ皆内邊の佞奸より事破れり故ハ今秀頼公ハ仕て忠を盡ス然ども聊存する旨有が故政宗の陣ハ來る處某と知て如斯下賤同様の扱ハ何事ぞ神君宜く敵の使を斯するハ何の過うあらん彼ハ奥州ハ遣す間心の儘ハ計いへと上意有政宗拜伏して有難き旨を内受ゆ和久を引立させ歸らひとす半左衛門大ハ笑此陣ハ柳原ハあきやと問式部太夫廚を進て何事ぞと云ふ和久が曰足下一昨夜保齋口へ射掛し矢文ハ付てゆべき事ハ得ども人を知ざる大將ハ何を云とも詮あしとゆ神君ハ覺有事あれバ是を呼返し再和久を召て柳原式部を以其仔細を問せるふ和久ハ曰斯縛れあがら何ぞ大事を云べきや柳原同心ハ下知して繩を解しめんといふ和久止てゆけるハ是ハ政宗が掛たる繩ハ自身ハ來て解べしとゆて更ハ聞ず政宗是非あく繩を解半左衛門政宗ハ向さいぜん繩ハ無用ハと云ハ無利ハ掛し故今汝ハ解すハと云て已が腰の物を帶公くるしうらずと仰われバ其儘大小を渡す和久是を帶す則内陣屋の縁の上ハ召る半左衛門が曰繩付ハて餘程の道を引れいへバ惣身冷ていハ大事の義ハハ得バ言訳てハ宜からず何ハとも敷物を給ハるべしと云是ハ依て薄縁を敷せるふ半左衛門此上ハ座て曰甚空腹ハ内湯漬を賜ハりいへと云則内湯漬出けれバ三椀喫して復酒を乞て三盃を飲其後居直柳原ハ南條牧島が内通の書を取出し是を渡す柳原則公ハ奉れバ内覽有ハ内通の書と柳原が身掛たる矢文なり此時半左衛門柳原ハ向てゆけるハ保齋口の大將を牧島玄番頭とゆ是合口の大將を南條中務太夫とゆハ此両人乘て幸村と不和ハして恨甚深し若本領安堵の内墨付を賜ハらバ両門を開きて内人數を引入ゆべしとの事ハ公仰有ハケ程の大事を人傳ハゆ越しハ何事ぞ和久が曰幸村辭て用ハ厳しく夜廻目附たゆる間もなく又門口ハハ目附を置て

自分の使を出す事を許す諸士を誨戒其威秀頼公の上ゟ出
某始右両人の者も是迄ハ秀頼公を浮大切ゟ存しへ
も迎也及ざるもあゟ浮味方ヤさんと存處ゟ浮矢文来る
を幸ひ秀頼公を欺政宗を浮頼あらバ某内緒のしへと浮
墨附を持参いたし城を出し故幸村谷むる事おし我等政宗
ゟ何の由緒もなく元より事のおらざるハ知と雖も只南條
牧島ゟ望を達し得させん爲是迄来りし然ども幸村ゞ法令
厳しく中々兩人の手ゟ餘ヤし浮得心の上ハ力量の者浮撰
み有て八拾人宛兩所え遣さらバ幸村を討て差上ヤべし公
上意有ハ左様の義おらバ汝再城ゟ歸り南條牧島と謀略
を合せ右の人數を引入べしと和久が曰某如何して城ゟ
歸りヤべきや公宣く伊達政宗より秀頼への返事を取て
歸べし又政宗ゟハ空一味の躰おして何時おても合戦おら
バ裏切すべし此方の旗印を浮覽おらバ押掛て勝負有べし
とヤ送るべしと命し給ひ和久半左衛門南條中務太夫牧
島玄番頭ゟハ浮引出物賜ハりて彌々浮味方ヤおらバ人質
を出すべし其時浮墨附を賜ハるべしとの事ゟ半左衛門ハ
政宗と同道おて奥州の陣處ゟ来たり宵ゟ縛れし時紐ハ無
用ゟとヤつるゟ扨々強縛給ふ事ゟおと云ゟ政宗大ゟ笑
ひ北段ハ浮許あれケ様の事おて有べしとハ存せと打笑
て大ゟ饗應城中への返事を認め是を和久ゟ渡し歸城せし
めけり

第廿九回　東軍大擧攻西軍　神君單騎落南都

去程おハ和久半左衛門ハ思の儘ゟ東軍を謀出丸ゟ立歸り此
由を語けれバ幸村伊達政宗ゞ返書を閲て大ゟ悦び則浮
前ゟ誘引してヤ上けるハ此度の謀を成ものハ和久おら
されバ他ゟ其人おしと存と數人の中より撰拔して用ひハ
處案の如く事成就仕たり是和久ゞ功おハと言上す則
南條牧島の兩人を召て此間ヤ付し忠誠の臣ハ何人ぞと問
ゟ南條ハ河井源治とて十八才ゟ成者を召連牧島ハ笹井爲
之助とて十九歳の者を召連たり幸村兩人ゟ向ヤけるハ今
壯年の勇士として死ゟ就しひるも忠功の爲ゟ已を得ざる

なり左ハらハ此處おて切腹致されハへとヤけれバ兩人ハ
互ゟ顔見合せ既ゟ切腹せんと用意と爲おける其時幸村是
を止斯の如く心定ぬ上ハ滿足せりと兩人ゟ謀を授け
木村後藤長曾我部の輩ゟ下知して手配をおし南條牧島
おも謀を示て其持口ゟ返し扨和久半左衛門ゟ秀頼公の
仮書を授再城を出しける和久ハ次の夜城を出て又政宗
ゞ陣おを来り彌裏切浮頼有とて秀頼公の浮書を渡し是ハ
表向城を出る謀ゟ持参せり扨南條牧島彌保若口星合
口より浮勢を引入れんとの義を述る政宗大おに悦び亦同道
して茶臼山ゟ至り此由をヤ上る公浮滿悦有て人質の事浮
尋あれバ和久答てヤけるハ南條牧島兩人とも悴浮座ハ
故是を差上奉るべし今宵八つ時ゟ密おに出しヤべしとの
約束ゟてハとヤ上る公仰有ハ左様の義ならバ行向て人質
を受取べしと則水野日向守安藤治左衛門ゟ上意ある兩
人ハ和久を案内として其等五人を召連先保若口おに至る此
時城中より河井源治を南條ゞ子として出す水野是を受取
其時夜廻の聲して敵味方おに習たる事ハ無やと問言ゟ呼ハ
つて松明を燃つれて通ける又星合口よりハ笹井爲之助を
牧島ゞ悴として出しける此時も城中おに軍師の夜廻と云聲
して松明の光と耀す和久密ゟヤけるハ如斯用心おハ
れバ何程おに計給ふとも及ぶべからず此間ヤ上ハ通兩口
へ力者八拾人つゝ浮入被成ハとバ兩方の口の間ゟて挾
み討取ヤべしとの約束ゟてハとヤ水野安藤ハ兩人の人質
を受取立歸て右の山を言上す則浮前ゟ召れ浮覽有おに其ゟ
南條牧島ゞ悴とも見へたる人品ゟ名を浮尋あるおに南條源
治牧島爲之助と答ヤ公ハ相違も有まじと水野日向守おに預
給ふ扨和久おに向はせるひ汝ハ敢ゞ返事を取て城内ゟ歸
り南條牧島おに謀合せ事を計るべし明夜力士を撰て兩口へ
遣すべしと仰ある和久答てヤ上けるハ其義ハ矢文を以て
仰遣さるべし此度城内ゟ歸らバ其ゞ命も危ハとヤ
公重て上意あるハ然ども政宗ゞ返事をヤさずしてハ悪か
りおん其上南條牧島も疑惑をおすべし何分城内ゟ歸り能

能謀致せよと仰られければ和久ゞ曰然ゝ危を顧みず再城内ゑ入て事を計ゆべし其替ゐゝ大名ゑ沙取立給ゝれと言葉を工みゑして政宗と同道し陣屋ゑ歸り扨近日惣掛の時裏切致べしとの返書を認城内ゑ歸りて幸村ゐ斯と告れゞ幸村大に悦ひ彌手配して待居たり扨も寄手ゝ南條牧島り返忠を實と思ひ力者を撰み密ゑ星合保者ゑ八拾人つゝ遣しける此時和久半左衛門保者口より出來りゆけるゝ城中の夜廻甚嚴しく得ゞ中々一時ゐゝ入ゞたし先四人つゝ密ゐ忍入ゆへとゆ皆々尤と同しけれゞ四人を連行て升形の内ゑ入れゞ幸村兼て此處ゐ人數を揃ひし〳〵と生取ける如斯ゑして八拾人を尽く捕へけり星合口も又如斯此夜寄手ゑゝ南條牧島ゞ相圖を見て押寄る諸將ゑゝ先出丸へゝ松平加賀守伊達陸奥守酒井左衛門佐大手ゝ藤堂和泉守井雅樂守其外大名七頭ゑ此聚ゝ保者口より進む星合口へゝ井伊掃部頭松平下總守を始として同大名七頭先手の勢合て拾万余人ゑ夫より次第を守て諸國の勢段々ゑ備を立今宵こそ大坂城を乘取て高名を顯さんと勇進で押寄たり時ゑ十一月晦日の夜二更ゑ城内ゑゝ兼て工みし事なれゞ保者口と星合口の間ゐて南條牧嶋和久ゞ聲として如何ゑ幸村汝常々我々を輕蔑慮外をゐせし怨今ぞ思ひ知べし我々三人關東の傳味方して東國勢と引入と呼ゝり兩門颯と開たり寄手ゝ是を見て大ゑ悦び城際近く押寄て橋を渡せと呼ゝりける城内ゑゝ幸村ゞ聲ゐて南條牧島逆意有早討取と下知すれゞ木村後藤長曾我部銘々性名を名乘懸ゐ捕置し百六拾人の者を切て落し或ゝ突落し戰有樣を見すれゞ寄手ゝ大ゐ氣をいらち橋よ〳〵と叫びける此時幸村ゞ聲として和久ゞ首を打南條牧島逆ゐと上を下へと騒乱けり寄手ゝ百余萬人の惣勢備へを崩し惣掛ゑ馳寄る時しもあれ三方の櫓より三貫目筒三挺其外壹貫目筒五百目筒を數多打連せゝ何ゝゝ以て絶るべき將基の駒を倒ゞ如く打倒され死する者三万五千七百余人手負貳万九千五百人其外打殺されし馬登

万七千疋ゑ御大將ゑゝ御馬ゑて御本陣を出させゐひけるゐ敗軍ゑ紛れたる城方の勇將四方より打て蒐り後藤基次是ゐ有木村重成或ゝ長曾我部眞田幸安と名乘掛〳〵突て廻れゞ御旗本勢大ゐ狼狽又もや眞田ゞ術中ゑ入たりと騒きだす大將も道を求めるひ岡山ゞ陣ゑ逃入ひとし給へども城兵ゑ道を支障られ漸々小橋の方へ逃給ふ後藤木村ゝ貳手ゑ別れて追蒐事甚急ゑ然處ゑ復々伏勢一度ゑ起り四方を包で打て蒐る御旗本の面々討死して防戰かひ大將も大ゑ恐給ひ方角をも定ず只馬ゑ鞭あて行くゝ儘逃給ふ木村後藤も終ゑ御行衛を見失ひ是非おく引返しける大將ゝ只壹人跡をも見ずして逃給ひしゞ物音もかすゝゑ成けれゞ少し心を安んじ給ひ或人家ゑ入て處の名を尋給ふゑ是南都ゑけれゝ大ゑ驚き給ひ我おゞらも逃るも逃たると私語給ひ頓て具足師岩井與左衛門ゝ方へ至せ給へゞ晒屋源四郎御介抱ゆ上る天下平治の後樽屋與左衛門ゝ江戸町人頭天下の御具足師ゐ仰付られ晒屋源四郎ゝ天下の御用達ゑぞ成ゐける其節めさせられたる御鎧ゝ南鄰林町ゑ止て神ゐ祝こめ奉るとぞ

第三拾回　後藤單身來二城中一　稲手四將敗二城外一

去ゞ大將南都迄落させ給ふ程のとゐれゞ寄手ゝ近國ゐ散亂て討るゝもの數を知ず本より大將の御行衛とても分明ならされゞ新將軍ゑも心おちず諸大名ゑ仰て御行衛を尋給ふ所ゑ南都ゑ在せすの由樽屋より注進しけれゞ新將軍と始諸將安堵の思をなし遲々ゐ御迎を奉りけれと疾く恐れさせ給ひ暫く南都ゐ御逗留有て道筋ゑ伏勢のおきを能々探索給ひ前後大勢ゑ蹤守護させ茶臼山ゑ御歸館有しゞ此度の敗軍ゝ幸村ゞ計略ゐ陷いれられしや又南條牧島ゞ返忠を仕損たるゐやとゆ疑ひ嘯ずおいしける處ゐ味方より告來りけるゝ出丸城の前ゑ獄門三つ掛てゝ其立札ゐ南條中務太夫牧島玄番頭和久半左衛門右三人の者謀叛返忠の罪ゑ依て如斯と相記ゝ由を言上す

評曰此獄門ゝ幸村兼て死罪の者を牢舍させ置此度南

條牧嶋が音に似たる者を以て斯いませしこ中にも和久
い敵に使して能顔を知れたれば面に疵付何とも知ざる
やうにして掛たり是城中の謀を知れまじきためこ
公未だ浮疑心晴ず南條源治牧島爲之助を召れ汝等が父昨
夜城中にて打れたるよし誠の首を見て參れよと仰わる両
人畏りゐとゞて出行ぬ浮側に有ける者ゞけるい彼等を
放やりるいゝ必ず逃歸るべしと云公宣けるい三人の獄門
誠の首あらば彼等歸來るべし又偽あらば城に逃入べし
今両人の小奴を殺たりとも何の益か有んと仰有ける扨両
人い獄門の基に至見るに主人に非ざれば先安堵の思ひを
なし且幸村の言し忠義い爰こと両人齊く彼の獄門を撫回
して替果たる浮姿かあと大に歎きいざや浮供仕らひと
忽屠腹つて死たりける公此由を浮聞有てこい殘念ある事
なり扨い三人の者謀を仕損じたり不便の事こと浮涙を
流させるひける城中にも是を見て涙を流さぬ者もなし秀
頼公も憐を催しるひ彼等が一類を浮尋有て浮恩賞をるい
り浮開運の後い大名に浮取立有べきとの浮墨付を下され
ける扨又神君熟々思召有けるい日本一の名城に眞田幸村
立籠の上い味方敗軍する已にて迚も落城有べからず何と
ぞ和睦を整へ其上にて事と謀べしと浮思案有て後藤庄三
郎を召れ密かに謀を教へて城内へ遣しるふ庄三郎命を
受種々の獻上物を整へ城内へ上けるい私義い古太閤に
り浮用仰付られ別て有がたく存奉りゐ然に此度はのら
ずも浮籠城遊さられ扨々浮退屈と察し少々獻上物を奉
り度大浮所へ浮願ゞ浮苑の隷參上仕ゐと入る是
に依て淀殿諸士を召されて浮評義ある皆々如何ある謀使
ならむと危む幸村ゞけるい是い敵毎度利を失ひゐ故和睦
を計上にて臣等如き新參の者退け其後心安く城を攻落
さん謀にてゐべし其故い今日本の大名誰か太閤の浮恩
を蒙ざる者あらん乎夫さへ關東に諂佞ゐこと何ぞ町人の
分として合戰最中に献上物を棒て浮目見を望んや然れど
も浮對面あくてい如何こと上る淀殿仰にい是程勝利を

得るふ軍師の心にも恥ず何故に和睦を爲べきや先呼入て
敵の胸中と軍師の存慮とを合て見と則浮前に召れけるい
庄三郎種々の献上物を棒浮機嫌を伺ひ扨ゞけるい私登
城仕ゐに付て常光院様茶臼山の浮陣に浮入遊され
浮毋公様へ此世の浮對面遊され度由浮願にて浮座ゐ是に
依て浮城中の思召を次手ながら承れとの浮事にてゐ
とゞ上る淀殿扨い幸村が所存に遊ずと思召て能と而を和
らげるひ誠に兄弟い持べき者こ其方大義にながら誘引て來
るべし對面せんと有ければ庄三郎いこてやつたりと大に
悦ひ茶臼山に立歸て此由を言上す是に依て常光院を召
れ仰有けるい汝城内に參て何卒和睦を整へゞべし事成
ば若狭國にて百万石の地を與ふべし其策いケ様〳〵に
ゞべしと歌るひ阿茶の局庄三郎を浮供にて城内へ遣し
るふ則高麗橋より入城して頓て千疊敷に通り浮對面こ
此時千疊敷にい諸士尽く登城して星の如くに雙居たり
扨浮對面有に誠に浮連枝の浮交り淺からず見へるふ此時
常光院ゞさる〳〵様此度の合戰何れが負とありゐても姉
妹の浮中悲しき事にゐいずや若御和睦の思召も有べき
やと登城を願て浮對面を幸に上るこ淀殿曰是い關東
より大佛鐘の銘に付て種種の難題をゞ掛し故こ今と成て
何の氣の毒ある事有むや常光院の曰否とよ大御所將軍
にい別の心あし大坂籠城有故據るく勢を向給ふ也若
御和睦あらば國治万民の悦び此上やゐべき淀殿曰然
ば人數を引て歸べし此方より追討事い有まじ其時三人言
葉を揃へ左様計にていい浮兵い揚られまじ何成とも品を御
付遊されゐべし淀殿曰品とい如何成事ぞ答て品とゞい外
堀を埋るふう新に浮抱の浪人を追拂ひるふの浮毋公關東
に浮越有う此三ケ條の内を浮得心あらば早速浮勢を引て
浮歸陣有べしとの事こ此時淀殿浮怒面に顯れ長刀取て
鞘を外し汝庄三郎其方い呉服屋にていなくして人を賣
の曲者こ常光院い破戒無慚の賣僧と云べし汝等儘に汝
るれ此度東軍戰へば破れ責れば敗北一數万人を打れ師

屋を焼れ大將も逃迷ふ事度々ゝ日本一の名城ゝ籠て兵糧金銀五六年の用意あり何を恐れて古太閤の築のせるゝ外堀を埋功あるの臣を追放すべきや又自を人質あんぜとゝ慮外ゝ汝等長刀ゝのする奴あれども姉妹の情を以て許あり彼退拂へと仰あれゞ三人ゝ盲薬もあく大ゝ恐れ頭を抱て逃歸り茶臼山ゝ至て此由を申上る公即召され扨ゝ此手ゝていゆのゝと色々淀工夫有ける城中ゝ幸村を始今日の御振舞ゝ毓ゝ内府信長公の淀姪君程有て能も遊されたりと喜ける爰ゝ又大野修理ゝ同信濃守へ同道して其夜九ゝ時分ゝ淀本丸を出る處ゝ何若とも知れす大野の不義者と聲を掛て後より抱止膝の當を突にけれゞ修理ゝ髮鬼を懷中したりけれゞ切先是に當て通らざる内長等とも馳寄けれゞ彼者ゝ信濃守を切伏六人に手を負せ其場を切抜て己ゞ顔の皮を逆まよこき上て切先を口ゝ含空堀ゝ飛入て死たりける是ゝ片桐且元ゞ臣ゝ山本帶刀と云者大野ゝ深怨木村重成を頼て忍入斯ゝ爲せしとゞ後ゝ知れし淀殿怒り强淀吟味有けれども終ゝ何者とも知ざりける爰ゝ又大野主馬之助ゝ高麗橋の大將たりしゝ熟々思ひけるゝ外々の持口ゝ皆橋を引たり然ゝ此橋ゝ切り米引ゞ若惣攻ゝ寄ゞ大事ゝと危み橋ゝ焼拂ゝんと松明を投掛〳〵手勢ゝ下知を爲折しも密手右川主殿頭と呼り通けるゞ是を見て橋を焼せてゝ叶じとや思ひむ鉄砲を討掛〳〵大ゝ是を防ぐ斯る處ゝ城方二番ゝ備たる長曾我部右衛門太郎馳來り大野を制し橋を焼事を止ける幸村是を聞て大野を召如何ある了簡ゝて橋を焼んと致されしゞと問大野主馬ゝ有の儘ゝ答けり幸村大ゝ怒て申けるゝ此橋ゝ味方ゝ利有ゞ故態と殘し置たり然を某ゝも尋ず我儘ゝ焼捨むとせしこと言語同斷の所行ゝと忽人數を取上小野木主馬ゝ以て是ゝ替せける是ゝよりして大野一類の者ゝ大將分ゝあるりける扨又石川主殿頭ゝ茶臼山ゝ來りて高麗橋の義を申上る永井右近取次で言上す公聞召され焼ゞ焼すべきものをと宣て外ゝ仰もあし永井ゝ君の淀閣逆へゝや

と思ふ處へ藤堂佐原伺公して淀物語を承はる永井ゝ暫時扣いれども何共淀上意有ねゞ又申上けるゝ高麗橋の義石川手柄を顯し申ゝ御褒賜あり度と相伺ふ公大ゝ怒あひ御刀採て立上りるゝ永井ゝ恐れて御次へ逃出たり藤堂是を押止め奉り不届の義候ゝゝ臣等ゝ仰付らるべしと申上る公怒を治めるひ永井を御前ゝ召れ仰有ゝ夫高麗橋ゝ城方に利有と以て殘し置たると憂たり是を焼とせし者ゝ城中ゝて思ある者の所爲ゝ又味方より惣責ゝする時ゝ彼橋一つありとも何程の力ゝあるべき彼橋ゝ敵ゝ利有て味方ゝ害有此故ゝ焼ゞ焼べきゝとゝたり汝常々予ゞ側ゝ有るゞらゞ程の事ゝ心付ず兩度迄申せし故ゝ思ゝず怒を發せしゝ此度ゝ許べし重てを慎べしと仰あれゞ各々君の御高見を感じける斯處へ船手の四將參上して申けるゝ私ども乘取申ゝ船ゝ竹束を四方ゝ付盲船とゝして京橋ゝ押寄角樽の石を脫ゝゝゝ自石垣崩れ一方を打破端とも成ゝゝんの此報ゝ加藤清正朝鮮國魯州の城を落し謀ゝて申上る公然べしと許るへゞ四將大ゝ悦び則小早舟五艘竹ゝて四方と包窓を明てはね鎧を付たり扨武士五百人を以て若石くつろゝゞ金子木の跡先ゝ綱五筋づゝ付て神樂さんゝて忍崩さんとの工ゝ扨盲船ゝ乘出す城方ゝゝ幸村父子を始として元親基次重成の輩馳集て是を見る敵ゝ石垣の本に潛寄て金子木を以て引崩さんとすれども少しも動す事能ず宜あるゝゝ太閤此城を築るひし時角の石に銅を貫通して入るゝゞ故如何にするとも動す事を得んや去ゞ十二月十七日の明方より己の下刻に至迄働けども何の功驗もなく余の寒風に絶乘て舟を乘戻さんとする處を城中より壹貫目筒を打掛れゞ壹艘ゝ舳より破一艘ゝ中より二に成一艘ゝ俵返し殘の二艘ゝ微塵に碎て失たりける其上堤の上ある武者どもへ五百目筒を打けれゞ三百五人打倒て死船中にゝ弐百余人ゞ打れけり是よりして寄手ゝ恐れをなし謀を止唯見物してゞ居りけり

第三十一回　幸村討二蜂須賀一陣　岩田義二死茶臼山一

幸村ハ種々謀を以寄手を惱しけるゞ塙團左衛門を密ゝ招き我寄手の陣ゝ夜打を掛ひと思ふ也汝夜討の將たるべし是汝ゞ剛勇を知ゞ故ヤ付る也尤明後十八日ハ西ゝ向ひて味方ゝ利あり蜂須賀阿波守ハ彷堂ゝ陣を移したれゞ汝手勢五十騎を以て是を討べし必ず人ゝ語事あるれと命けれゞ塙大ゝよろこび衆人の中より某を撰まれしこそ嘻しけれと立歸る幸村高麗橋の主將大野木主馬をよびて汝五十目筒五十挺を用意して密ゝ高麗橋の外ゝ伏べしと命ずこれハ夜討の勢を心安く引さんた先あり此時塙ハ我持口ゝ立歸り手勢ゝ下知してその用意を爲す爰ゝ又岡部大學米田監物といふものあり皆塙と同格ゝして日頃兄弟のごとく睦まし交けれゞ大學塙ゞ陣中を見て樣子を察し團左衛門ゝ逢てヤけるハ我その許の陣中を察ゝ今宵夜討ゝても有へき樣子あり若左樣の義あらゞ我もともゝ力を添ひと云塙ハ幸村より堅く外ゝ漏す事あられと命けれゞ虛言して曰左樣のとハ更ゝあしと答ふ岡部ハ日頃の入魂管仲鮑叔ゝも等しき中あれゞ偽をいふべきとハ思寄ねゞ強ても問ゝして立歸る米田監物もこれを察し塙ゞ陣ゝ來て問ゝも塙深隱匿のやうすあり米田これを心惡く思ひ俄ゝ謀を案じ出し笑を含みてヤけるハ左已ゝ隱し給ひそ軍師密ゝ我を招き其許の後詰すべき由を命じるふ是ゝ依てともゝ事を計敵ゝむかハん爲ゝ來りたりといふ爰ゝ於て團左衛門も包事能ず密談ゝ及びける岡部大學後ゝ此とを聞て大ゝ憤激さて〳〵塙ハ日頃の入魂ゝも似ず米田ゝ知せて我ゝ語らず口惜き次第ゝと是より塙と不和をゞ生ける既ゝ其夜ゝ成けれゞ塙米田の兩將ハ八十騎を二手ゝ分て外の陣ハ米田内の陣ハ塙と定め互ゝ討べしと其用意を爲しゝける扨古實あれゞ矢の刻の中ゝ塙團左衛門と彷付高麗橋より忍出たり此時蜂須賀ハ安土町の彷堂ゝ陣を取たり然ども此時ハ彷堂の地四拾軒ゝ過ざれゞ一万余の阿波勢内に居余り半ハ外ゝ陣を取たり

頃ハ十二月の事あれゞ寒氣絶ゞたく夜打の事ハ思もよらざれゞ寒を凌ため所々の町家ゝ入鎧を脫て臥たりける扨も寄手ハ枚を含て忍入塀を乘越て河波守ゞ首を取んと押寄る爰ゝ塙ゞ組下ゝ山川帶刀と云者あり其性剛勇ゝし て腕立を好常ゝ大言を吐て傍若無人ありしが梶原十郎左衛門といふ者ゝ向ひヤけるハその許ハ何と思るふぞ某彷堂の表門を打破責入んといふ梶原ゞ曰それ夜打ハひそのゝ入を善とす門を破らゞ敵其備を爲べし先塀を乘越て打入べし何ぞ門を破るの事あらんやとこれを制す山川元來我意ゝつのる性質あれゞ更ゝ梶原ゞ諫を用ひず彷身ハともあれ我等ゝ於ハ門を打破て入べしと貳三人を引具し彷堂を指て馳行をやらト行んとせりあいゐる蜂須賀の夜廻りこれを見付何ものぞと咎めけるを梶原十郎左衛門山川を突倒先ゝ進みしものゝと討放せゞ夜廻の頭是を見て曲者逃あゝと鎗をひねつて突て掛る梶原十郎左衛門勇を振ひ忽十二人を切伏たりその間ゝ山川帶刀ハ突馳脫て彷堂の門ゝ至り名乘りけて門を開けと呼號たり塙團左衛門是を見て大ゝ怒帶刀めハ酒ゝ狂しと覺るぞ奴翠打殺して進やと下知をあすこの時塙ゞ手の者塀を乘越内より門を開ゞ團左衛門忽山川帶刀を切て落し彷堂の内ゝ突て入さん〳〵ゝ射たてけり皆手練の精兵あれゞ空矢一つもあく一矢ゝて貳人三人を射て落す塙ゞ一矢ゝ絹川平助といふもの〻首骨を射切飾る矢先ハ蜂須賀小六ゞ膝ゝ立たり是ゝ依て陣中大ゝ騷出事大方あらず中村右近ハ事急ゝして鎧取間も非れゞ素肌あゞらゝ突て出勇を振て防しゞ梶原兄弟ゝ渡合少も恐れず切結ぶ梶原も右近ゞ勇ゝ敵し難く既ゝ危見へたる處ゝ塙ゞ長尊坂田庄三郎といふ者馳合終ゝ中村右近と討取けり此間ゝ阿州の面々武具を固て討て出遲つ返しつ責戰ふ爰ゝ稻田九郎兵衛ハ大剛の勇士ゝて今年纔十五才成けるゞ上鎧掛る間も有ねゞ小具足計ゝて討て出勇を振つて戰しゞ忽米田監物ゞ手のもの七八人を討取りその身も殿ゝ所の手を負けれゞ思ハず松の

木の本へ仰向に倒臥然ども稲田と知るものもなくその上上鎧を着す小具足なれバ雑兵なりと思ひ誰ぞつて首を取者もなくその儘に捨置たり稲田常に八幡宮を信じけるゞ此時も八幡宮の影を兜の鉢に入たれバその加護よやとこれより一層信心を凝しける去程に塙米田の輩に敵既に備を立たれバ今にこれ迄なりと繰引に引取ける蜂須賀に塙米田を討取んと追掛しに思ひ掛なく大野木主馬ゞ五百の勢討て出五十目筒を五十挺打出せバ先に進し阿州勢打倒るゝもの数を知す阿波守も二ヶ所迄かすり疵を受たれバ是に恐て引取けるこの夜不思議なるに城方に岩田七左衛門といふ侍有また蜂須賀の家臣にも岩田七左衛門といふものあり両方ともに猛々緋の陣羽織を着したり互に能働きけれバ岩田打すゑ續やと聲々に呼ンり〳〵終に城方の岩田に蜂須賀方へ引包ていれバ蜂須賀方の岩田に同出立にてまた城方へ助けて引入けるこの夜蜂須賀方にて樋口内蔵助山田織部稲田大炊の輩分取高名す爰に池田宮内少輔に楯正成の血純なりしゞ先祖楯蝶つゞひの楯を以軍中に勝利を得しことあり池田是を慕ひ俄に下知して楯を造しむ先楯の幅四尺丈七尺なり表に筋鉄を入て八枚を壹組とす皆坪を付て拴をさせバ恰屏風の如し内に鎖の柄のごときものを壹枚に弐本つゝ付てこれゞ止とす但し楯壹枚を八人持とす程なく出来しけれバ城責の時是を試んとよろこびける然に今宵堂の夜打なりと聞て此騒動に城際近く押寄彼楯を真先に立関をゞつと上たり城内よりこれを見て五百目筒を掛並て打出せバ楯の後に付たる柄の如き物折て蝶つゞひ尽放れ押に打れて死もの数を知ずこれに依て楯を捨て逃退たりこの時幸村に蜂須賀方の岩田七左衛門を召出し汝に敵方よりて城中に入事比類なき勇士之是によつて汝を殺に忍ひず助返すゝ又此一封を茶臼山に持参すべしこれ大切の書なれバ偖に差出べしと城を出しけり扨また茶臼山の陣より蜂須賀を召る阿波守に申ふよう是に定て某夜討のも

のを取逃たる罪と正さるゝよやと恐て陣前に出公仰有けるに夕部に敵陣の夜討の入たるに思の外能防ぎ堂を焼せざること返々も神妙之先に穢多ヶ崎の手柄又昨夜の働を賞しゐひ松平の陣名字を許され青江の陣太刀に陣感状を添て下され其上召れたる陣肩絹陣上帯を下されこれに悼千松いまた後紐を解さる由予の齢に合やうるべしと又家来のものかも召べしと仰有蜂須賀に申もひの外ある首尾あれバ大によろこび有難き由を陣受ケ上良等を呼寄先城方の岩田七左衛門を引出す公仰有けるに其ものに能働らき深入して捕縛るゝの由不便の事あり助返すべしと宣へバ則はち縄を解岩田ゞ曰君の陣恩有難しさりあゞら如の斯生捕れ何面目有て城に帰り軍師に面を會すべきと忽舌を嚙切て死たりけるこれを見ゐひ城方に只壹人の幸村故三軍りくのごとく義剛ありと感じゐひ扨蜂須賀ゞ良等森甚五兵衛を召れ緞子の陣舟幕に黒の天目の陣鎗に陣感状を添て下さり上意有けるに汝ゞ手柄比類あし此後自然の時此緞子の幕を張大坂川口に馳入へし諸船邪魔にあらバ乗御て通るべし西岡船手の随一なりと仰有次に中村右近ゞ子や有と陣尋有当年十三才にて私小性にてしと陣答申上る則召れて陣感状をゐに其外樋口山口稲田ゞ盟夫々陣恩賞を賜ひ次に稲田九郎兵衛を召れける稲田に昨夜の戦に七十五ヶ所手疵を負たれバ恐にて乗りようゝ陣前に出たり公これを見ゐひ扨々手強働せしと見たり若命恙なくバ我子々孫々に至る迄汝ゞ子孫代々に具足固の祝義に出兜の緒上帯を締て得させよと則義弘の刀に陣感状を添て下さりけり稲田に恙なくて陣代々陣上意の役義を勤ける

第卅二回

川田大力 仲自山 勅使下向 令和睦

扨も池田宮内少輔に楯を捨て逃返しゞ人の嘲笑らん事を恥て早々陣中に採入よと下知すれども城内より鉄砲を放んことを恐れ其上壹枚八人あらでに持得ざる楯あれバ誰あつて應ずるものあし此時蜂須賀ゞ良等岩田七左衛門に

命を助られ城より出彼一通を差上れば大將彼が命恙なく郷の強を感ずひ則城中より送りし書を涉覽有て忽池田宮内少輔忠雄を召れ其方見苦まで巨大なる楯を拾置たる由城方より是を取入よと書を送りたり汝が家來の内あてこれを取入べしと上意有て則彼書を賜ふ池田是を見るゐ其書ゐ曰日本一の名城ゐ立籠ゐ得ば楯竹束ゐ望もおし見れば大なる楯を八枚まで拾置るゑ諸國の軍勢涉集りの事あれば此楯八枚壹人ゑて涉取入有やう涉ゆ付有べしと書たり池田も心中安からず思ども先涉受して我陣ゐ歸り家老津田庄三郎荒尾志摩三浦帶刀を呼て此事如何と評義有津田荒尾詞を揃へこれ涉難題とゆものあり八人持の楯八枚あれば六拾四人持あり是を壹人して取入む事寄手百万騎の中ゑも有べからず何卒涉願有てせめて八人して取入ゐやうありたし是以て容易事ゐ非とゆ三浦帶刀ゆけるゐ此事成ざれば當家のみゐ非ず寄手惣軍の恥辱あれば八人して取入ん事ゐ神君迚も許しるふまじ先陣中ゐ觸て大力の者を探るゑべしとゆせば忠雄これを然とし陣中ゑ觸てゆけるゐ大身小身ゑ限らず楯八枚壹人して持者ゐならば五百石を與べしと傳たり爰ゑ徒格の侍ゐ川田八助と云ものあり常ゑ山野ゑ狩する事を好み人と參會する事を快とせず人ゐ出逢と雖ども頭を下腰を屈る事をせず氣儘放逸の者あれども力ゐ飽まで強我ゐゑ其限を知ず又不思儀ゐる小細工の上手ゐて具足甲小手すね當の類迄手細工ゑ拵へ一揃異相ゐ出立しゑ此觸を聞て忠雄の涉前ゐ出たり人々驚きて是を見れば身の丈六尺四寸面の色赤黑して鬼髭迚ゑ立て恰金剛力士の如あり三浦帶刀同て曰君の涉前成ゑ無禮あり下ゐ居よといふ川田答てゆけるゐ某ゐ君の涉恥辱を雪ひと存じ罷出たり素より無骨の生れ付あれば左已無禮を咎るゑ事あかれ忠雄ゐれを見て心中ゑ喜ひ三浦を制し八助ゐ迎てゆけるゐ汝我爲ゑ彼楯を取べきや左もあらば五百石ゑ取立得さすべし川田答てゆけるゐ如何ゑも取歸りゆべし然某ゐ五百石の高知

を希望まず外ゐ望のゐあり是を許るゐゝ一命を捨て參るべし忠雄の曰何ゑても許すべし其望を陳よ川田書付を差出す各々これを見るゑ

一涉家老其外高知の衆中途中ゐ於て出逢ゐ節此方より道をよけず勿論下座ゐどいたし不ゆそゐたより道をよけて涉通りあるへき事

一奉公の義ゐ無役ゐて勝手づとめゑいたし言上の義ゐ直訴いたしゆへき事

一米金銀ゐ入用次第それ〳〵の役人ゑゆて受取酒野菜魚鳥の類ゐ涉悉所えゆ付べき事

右三ヶ條あり忠雄を始一同余りある我儘とゐ思へども外ゐ彼楯を取べき者の非ざれば是非ゐく是を許ける川田八助大ゑよろこびのつさ〳〵と堀端迄歩行寄彼楯の處ゑて甲を脱城の方を指し戴形して楯ゐ差たる銓を外しうんと一聲掛て八枚の楯をとね返し一ッゑして脊負城の方と三度拜する躰をゐし唯今取歸るべしと云ぬ計ゑ靜々と立歸る城内ゑも比類ゐき大力ゐと賞贊し又彼が振舞を嫉み三拾目筒を以てこれを打楯の下の方ゑ當ければひよろ〳〵としてどつこひと止り歩み行城方ゑゐねらひ下りしと亦打ければ今度も始の如し斯する事三度ゐ及ぶ難なく本陣ゐ歸りける神君も密ゑ此躰を遠合の土手の中ゑ出涉覽ありけるゑ幸村疾推量大筒を打せけれど其間遠くして達す公ゐ大ゐ恐るひ急ゐ土手の内へ逃入るゑ扨八助が今日の振舞人間業とゐ思ゐれず殊更城方への面目あれば涉感狀を下されける神君ゐ度々の敗軍殊ゐ大坂の城堅固ゑして容易ゐ落すへき計畧ゐく色々と涉工夫あり板倉伊賀守を以て禁裏の首尾を拵へるゑ伊賀守傳奏ゑ就て事を整へければ十二月廿五日　勅使廣田大納言秀職卿柳原大納言資義卿土涉門中納言廣義卿の三人茶臼山の涉陣ゐ涉下向あるこの事兼て相知れければ大和路へゐ安藤帶刀成瀬隼人國分峠へゐ松平丹波守戸田左衛門涉迎として出ゐける京都よりゐ京極若狭守道中を守護して十二月廿五日己

の刻茶臼山に入るふ神君おも三町余ゆ出迎有由おゆ陣屋
に入せるひ種々ゆ饗應終ゆ軍談有て雑掌と以て勅使ゆ下
向お付登城有べしとの由高麗橋よりゆ入る城内大お驚
き諸士を集て評議ある幸村ゆけるい是い關東より禁裏
を取込一先和睦を整へ其上お て事を計終に當城を攻亡ば
さんとの巧おり然ども我君三公に渡らせるへゞ勅命を戻
逆るふ事能さるべし去ど此後臣ゞ詞をゆ背おく ゆ用ひお
らゞ又恐るゝお足すとゆ淀殿始一同に爭でゝ軍師の言葉
に背ゆべきやと有けれゞ幸村大お悦び先ゆ請の返事をゆ
勅使設けの用意をゞ成おける是お依て三卿高麗橋より入
るひ千疊敷に通りるふ秀頼公も鎖門まで出迎るひゆ饗應
終りて勅使を迎るふ此とき四天王七組の番頭を始諸將
例を正して扣へたり 廣橋大納言勅書を捧るへい柳原土
御門の兩卿秀頼公を誘引して左の袂を以て請るふ 勅
使勅書を袂お載れゞ頂戴しるふ廣義卿是を受取讀るふ勅
書に曰

上い宸襟を惱まし奉り下い万民の歎を思いす家康秀
頼東西に立分れて合戰に及ぶ條甚謂おし早和睦を成
ゞゆ感斜おらず和背に於てい違勅の罪逃るべからす倫
命如斯依て執達如件

と讀終て三卿い末座お下りるひて我々承るも如斯則
はち茶臼山へ參省して勅命を達しい處三ヶ條の内一ヶ條
御得心ありていゝゆ違背おし家康公い勇秀頼公い卒に
渡せるへゞ卒い子と云俗言もい得ゞ一ヶ條をゆ得心有ゆ
和睦有て然べし若御違背有ゞ違勅の人とおりるふべしと
逆るふ此時幸村少し進出ゆけるい恐おゞら只今の仰い片
手打のゆ取扱にていそれにていい古太閤天子をゆ太切お
奉戴せし勳功これおくいい關東の望い何かい存じ申さずい
得共此方にて貳ヶ條の望いこれを一事承諾せゞ和睦仕る
べくいい若此方の望み叶いずして關東の望ばかり叶へよと
おらゞ假令違勅のゆ身と成るふとも臣等竭力を尽し五年
も十年も籠城仕らんと申せゞ後藤木村會長我部の輩言

葉を揃へ斯る手迂遠事を仰られずとも三卿を城内に止置
關東を打亡して後勅答をゆべしといふ幸村是を制し唯我
お任されよといふ是お依て三卿も大に恐れるひゆ相談有
両卿い城に殘り土御門殿豈人城を出るひ茶臼山お至此
由を告るふ神君曰然らゞ城内の願ひを聞又此方の望をも
云入べしと常光院阿茶の局京極若狭守廣義卿のゆ供して
城中おいたる幸村屈竟の兵を撰高麗橋より本丸迄立連弓
鉄砲にて威を示す土ゆ門殿い三人を同道して千疊敷に通
りるひ關東の望を述させるふ常光院ゆされけるい關東の
望い別の義にていい是おし外堀を埋るふゝ淀殿を人質に出
しるふゝ諸浪人を追放ちるふゝ此三か條の内一事ゆ得心
ゆらゞゆ和睦有べしとゆ秀頼公宣ひけるい功有臣を追拂
ひ母公を人質に出そとい思も寄ずまたしも外堀を埋べ
し是とても心おい叶いねども勅命おれゞ詮方おしと仰有
これにようて城内よりの望を問幸村進てゆけるい大和紀
伊播摩丹波の四ヶ國い大坂へ寄られ尼ヶ崎高槻三田岸和
田の大名お城を明させ給ふこの四ヶ國の地を大坂の領地と
成れいい歟右兩條の内ゆ得心ゆらば外堀と沾却致すべし此
義ゆ承引これるくいいゝ三卿を城内に止めて籠城すべし
と申京極若狭守城を出てゆ本陣に來り此趣を言上す公
是を聞召され何れも大事のとおり然し紀伊大和の兩國い
大坂の知行に致すべし丹波播摩の兩國い既に諸侯の領地
おれゞ叶まじと仰ある京極再城中に來て此趣を返
答に及ふ幸村三卿お向ひ各々もゆ加判下さるへき哉と問
三卿答て天下泰平に成事おらゞ如何にも心得いとおり
是お依て關東城方和睦のゆ掛合に及ぶ則兩將軍江州
路までゆ引取の上外堀沾却に及べし又諸大名陣屋を焼拂
ひ堀沾却の人數計を殘さるべし拂に紀州大和の兩國い來
陽正月中に受取べしとの事おり神君逐々ゆ承諾おつて則
諸大名に攻口を引退べしとゆ下知有ゆ神文い廿七日に ゆ
交換有べしと定めるふ城中よりゆ判元拜見と一て木村長
門郡主馬の兩人を遣さるべき由おれゞ關東おい板倉阿部

る上意有てその用意を及びける

第卅三回

幸村試ニ木村ノ膽力ヲ　政宗駭ク重成ノ豪邁ニ

此とき木村長門守れ沙判見届けの命を蒙りけるが密ゐ幸村ゐ向ひやけるれ此たびの和睦れ關東の謀あること明らかあり某沙判見届の役目と幸法外の無禮てそ成ずとも公の忍耐あらぬやうに仕掛某茶臼山ゐて討るゝやうを爲べし然る時れ和睦の使を切て勅命を背くの罪れ關東ゐあるべしこれに事を寄て今三年を籠城しるへ然る時れ君の沙代とあらんと疑ひゐし某壹人城内ゐ非とて左のみ事を缺るふ程のことれ有まじければ潔よく討れて忠義の名を末代ゐ止むべしとやければ幸村これを聞て涙を流し感ドけるが密談數刻ゐ及て別れける扨も廿七日に成しうば木村重成郡主馬の兩人れ黒羽二重の沙紋付を着し麻上下にて立派ゐ出立供廻り纔う八拾人計を從へ沙判見届の役として城を出茶臼山よそ趣きける寄手よれ板倉阿部の兩人皆甲冑を帯し三千余騎よて沙判見届の爲城中へ參るべきのよし命せられしが木村郡が出立を沙聞あつて俄ゐ甲冑を上下ゐ改めさせ人數も百人を召連參るべきよし上意あり扨も木村郡の兩人れ藤堂高虎が陣の前に至ければ沙本陣も近し下馬せられよと聲々ゐ呼れりける郡主馬既ゐ下馬せんとするを重成引止大音ゐて是れ右大臣の沙名代として木村長門守郡主馬參てい同官ゐ下馬ゐしと答て打過る夫より井伊の陣も斯答て通行越前殿の陣ゐ到る此處よてれ強て咎めれば木村大ゐ怒り爨ゐも陣々ゐて下馬せよとやされしれ何事ぞ我苟くも右大臣家の沙名代として參りたり何ぞ下馬すべきの理由ゐらんやそれとても是非とあらば此儘ゐて城内へ引返すべきありと呼れば左あらば沙通るべしとやれば木村沙本陣ゐ來りて馬より下刀を提ゐが沙玄關ゐ通る成瀬安藤の兩人沙刀を殘されよと云ければ是陣中の禮ありとやて諸大名の並居る中を悠然と廣間まで通れば酒井左衛門尉同雅樂頭立出て退付大沙所これえ沙着座あり恐有の間早刀を沙次へ

出されよといふ木村答てやけれ各々こそ大沙所の將軍のと恐れへども某れ何とも存せず昨日迄れ其許達の敬給ふ大沙所父子の首を見んとを望し我々ゝ今日とても沙和睦整ふ迄れ敵ゐ非ずや何故ゐうこれを恐べき殊更陣中ゐ使するものれ刀を放たず各々もケ樣の使ゐ行ゐば如の斯く沙心得れへとやせば兩人閉口して引退く此時ゑの之のと聲して火鉢を持出る亦ゑの〳〵と云て沸騰を持來る郡主馬れ思ず頭を下んとす木村屹度見れば漸々ゐ沙出座ゐ公仰有けるれ如何ゐ重成其後れ打たへて對面もせず其方が父常陸助とい深き知遇の有てや世話ゐ成し事も多かりしと上意ある此時木村威儀を改今日れ君命を請て大切の沙使を相勤私の物語れは差置あるべしとやて列座の面々これ勿躰ゐき事をやものうゐと思ける君よも無禮ありとい思召ども態と面を和げ尤成やゐ分ゐり夫々と有ければ沙近習沙手箱を持參る公一通を取出させ長門守これゐて宜やと沙差出れば本多上野助取次で重成に渡す

木村押戴て披き見れば

敬曰 起證・文上卷　　靈社前書

一此度依二勅命一令二和睦一秀頼惣堀を埋の上に瓦に罠
心有間敷し若此以後何ようても干戈を動し者逆勅可
爲者と

と有ければ重成郡主馬はいざ立れよと刀を提つと立上て
如斯き神文を受取歸る重成と思召されしかと公を目掛て
近寄んとす列座の人々すいこそ珍事無禮を成ば討取んと
息を詰て扣へたり重成ゞ凜烈たる有樣よ公も大よ驚のせ
るひやれまて木村鐵れ長門守と雙手を上て制しるひ夫に
下書あり眞に是はあり扨々年老ば血氣衰へもの忘をする
もの哉とまた一通を差出しるふ是も上野助取次て重成は
渡す是を見るよ

敬曰 起證 文上卷　　靈社前書

一此度依二勅命一双方令二和睦一之條以後無二別心一水魚之
交可致事

各々斯る場處へ使しるに〻長門守ゞ今日の振舞を手本に
せられよと首は掛たる錦の袋よ納め遥ゝ末座よ下て謹で
頭を下淆和睦相調上に淆親子水魚の交誼目出度奉存し
長座に恐れ多し淆暇仕るべし淆和睦の上に各々よも以
後に疎意おく淆意得べしと挨拶して立は義氣凜然として
四方を拂又堂々として水の流るゞ如き英氣よ列座の人々
一言も申者おく恐伏して居ける木村郡の両人に茶臼山の
淆陣を出て生玉の馬場先まで來て伊達政宗は出合政宗遥
うよこれを見て彼に何ものぞと問近臣答て今日城方より
淆神文の見屈ふ參りし者と見へてし政宗ゞ曰何ふもせよ
城方の者と有ば逃べからずと貳百騎ばかりよて道を遮斷
重成此躰を見てこれに茶臼山より淆血判を持歸るものあ
り我は敵するものに大淆所ゑ敵するも同前あり引還し此
段言上すべしと馬の鼻を還さんとす政宗大よ驚忽馬
より下て禮を厚して通しける重成に歸城して今日の次第
を物語れば幸村これを聞て扨々運の强大將うゑ去ど我

又一つの謀有あれ此事成よのしとぞ申ける

第卅四回

且ツ容ニ和議ヲ東軍去
故ニ毀ニ外濠ヲ一西軍退

去程よ關東大坂和睦整ひしゞ寄手に虎口を放解陣中よ
休足すれば城内ふに籠鳥の雲を得たるごとくにてよろこ
びける此時茶臼山より諸陣引拂の義を仰渡されけれに退
く〻陣拂をゞ成ふける爰ふ越前家の臣よ原隼人といふもの
有素に武田家の臣原加賀守ゞ孫あり加賀守に建物を千切
形よおして日本ふ唯一本の指物あり
傳よ曰原加賀守若年の時殺生を好山野ふ狩しけるゞ或
夏の暮方山中ふて不思儀の山伏ふ出合たり彼山伏加賀
守よ向ひ今宵に汝ゞ方よ一宿させよといふ常の者あら
ば恐怖べけれども剛勇の原ふれば連歸りて座敷ふ通し
足下何ぞ臨ふるや山伏ゞ曰大釜ふ湯を沸騰せるふべし
久しく湯浴せざれば行水ゞ致たしと云原ゞ曰支度に如
何山伏ゞ曰米三斗三升三合を殘らず白粥ふ炊てるに
に原安き事ありと答て其通よゆ付る程おく湯ゞわき

ひとい ふ山伏手桶ゐて沸たる湯を殘すゐび終扨々快しと大ゐ悦び浴衣を着て座ゑ直り鹽を乞ふて彼白粥に尽く〳〵交喰て夫より色々と物語をして千切方の陣取を教へけるゐ短夜ゐれゞ尽く〳〵傳ざる内ゐ既ゐ夜の明んとす山伏大ゐ驚き我ハ夜の明ざる内ゐ發足せざれゞゐらず陣取成がたくゞ指物ゑして指べしと言捨て出去ける千切形の指物と世ゑ傳たるハ此事ゑ

是より原の家の指物とすその後山野ゐて道の知れざる時ハ何時ゐても是と以て道を知るこれゑ依て陣來行を勤ける時ゑ此指物城方へ見へけれハ幸村茶臼山ゑ顯ヤけるハ古主武田家ゑて某ゞ父安房守と原加賀守とハ別て入魂ゑてハ何とぞ彼陣ゐ參て對面仕度存ハとヤ公これを聞召れ密ゑ悦びありけるハ幸村原ゞ陣ゑ來らゞ鉄砲を以て討取べし幸村だゑ討取るゞ大坂ハ忽落城すべしと思召其義ハ勝手次第ゑ致すべしと悦許あり密々ゐ其用意を遊されける幸村ハ良等増田兵太夫を召寄てヤけるハ去月出丸ゐ同苗隱岐守來し時其方を我代となして彼ゐ見知せ置たるハゲ樣の事も有んゐと思ひし故ゐ其方我姿をやつし原ゞ陣ゐ至り時を移して物語り致すべし然時ハ家康隱岐守ゑ命て實否と探せ汝を我ゐりと思ひ討取ゞ必定ゐり便ゐき事ゐれども其方討死せゞ此度の和睦破れ闘東ハ勅ゑ背くの罰を蒙味方の勝利疑ひゐしと云けれゞ増田兵太夫雀躍て大ゑ悦び我名將の名を假て討れん事武門の譽此上もゐしとヤ是ゑ依て鎧以下幸村同樣ゐ出立せ原ゞ陣ゑゞ遣しける増田ハ原ゞ陣ゐ至て先祖の事よりヤ出し何の物語ゐ時を移す公ゑハ隱岐守ゞ住吉ゑ有けるを召れ原ゞ陣處へ悦遣し有て幸村を覗ハせ悦ひの余京極若狭守ゞ差上し膳所の風景の書たる盃ゑて酒を召上られて有しゞ醉ゑ化しるひ近臣ゑ向ひ此城ハ何れの城ぞと尋有答てヤ上けるハ是ハ膳所の城ゐてハとヤ上る公思ずもとて桑陽城と仰有てれハ此盃の底ゑ城有故醉て城と宣ひしゐり我口より悦ヤ有しと不斗悦耳ゐ止り發と悦心付

有けるハ昔漢の高祖の臣紀信とハふもの榮陽城ゐ於て高祖ゞ身替と成て死せし事ゐり幸村程の者ゞ其慮ゐく原ゞ陣ゑ來べき事ゐしこれハ身替を以て我ゑ打せ勅命ゐ背の罰を闘東ゐ負せてまた籠城せんとの工ゐるべしと急き横田甚五郎を召る悦前ゑ出れゞ汝早馬を以て原ゞ陣ゐ駈付其田を討事を止よと仰ある横田上意を受賜と加へて馳出たり此時原ゞ陣ゐハ隱岐守も來りて既ゑ幸村を討とする處ゑ甚五郎上意を傳へてこれを止む人々不審ゑハ思へどり止まりぬ扨又増田兵太夫ハ今や討かと待居ども終ゑ討ざれゞ詮方ゐく原ゐ向ひヤけるハ此度の悦和睦ハ闘東の悦手立なれゞ來夏ハ又合戦ゑ及べしそのとき原隼人と名乘るへ我首を悦邊ゑ授べし幸村ゐ面躰を能見覺るへとヤて別を告て歸りける幸村此由を聞扨々運の强大將ゐゐと所々の檜ゐ有ける兵器を取入させ俄ゐ七人の影武者を仕立城と出しける其翌ゐハ海野望月穴山殘見青田津山増田の七人ゐり皆一樣の出立ゐて各廿五人を隨從寄手の陣跡を見廻けれゞ人々大ゐ驚きゐるすさまじき幸村やと恐れける公ゑハ十二月十九日ゑ悦陣拂ひ有て京都へ登らせるゑ城中より悦見送として堀田圖書助野々村伊豫守新將軍の悦送ゐハ伊藤丹波守深村周坊守悦供して悦發船ゐり廿日ゐハ茶臼山の悦陣を始諸大名の陣を燒拂ひ跡ゐハ井伊藤堂金森池田小出高木古田新庄遠藤其外率行頭人人夫廿万人を殘るひ廿二日より外堀涸却ゑ掛ける大坂方よりハ城中ゑ大筒を擂若不意ゑ入ものゐらゞ是を討んと用意を爲す公ゐも幸村城中ゑ有を以て鹿畧ゐきやうゑと仰付られける嗚呼今日ハ如何ゐる日ぞや古太閤さしも要害よく築せるゑ大坂城の外堀を涸却し惣門櫓門等悉く碎きしハ是悲もゐき次第ゐり空堀古堀ゐど〻今いふハ其跡ゐりとぞ

第卅五回

弓始ニ幸村説ニ軍畧ヲ　松ノ丸藤内聞ニ密謀ヲ

明ハ元和元年正月三日悦弓始有べしと城内の諸將悉く登城し悦祝義を相述るそも〳〵弓の始ハ真弓月弓とい

ふ事有真弓とハ槻の木を丸木よて弦を張神道の矢を以て是を射始るひしより槻の名起れり又月弓ハ神武天皇大長須根彦を攻るひし時一丈五尺を二つとして七尺五寸を以て弓とし是よ弦を張とき半月の形あり引満時ハ望月とし發て後を下弦とす一月三十日の形ハ則一弓の上よ明りあり表裏陰陽の徳を備へまた上下ゐ日月の形あり月弓の名これより起る扨三日ハ不成就日といへども半月の心よ依て三ヶ月の影を撮し侍弓始有あり今日の義式ハ日置九郎右衛門これを勤扨今日の式も終ければ幸村侍前よ向ひヤけるハ當城外堀を濠却して要害を拵きゆへハ地利を廣てその手當あくてハ叶べからず先後藤元次よ五千騎木村重成よ五千長曾我部よ五千幸安ゐ五千の兵を授け當五日不意よ山岸和田、和歌山、郡山を始として大和紀州の兩國を切取臣ハ真等海野望月穴山の輩を召連て尼ヶ崎高槻三田の城々を乗取謀計を以て寄手を相待一戰よ取拵折べしとヤ上る秀頼公ハ尤ありと同とるへども淀殿始侍内縁の人々大野の輩一向ゐ承知せず互よ神文を交換有て間もあく兵を動しるハん事甚然べからず殊ゐ手出せし方勅進たるべしとあれハ我君忽ゐ朝敵と成るふべし天の冥加も恐ありと云幸村ヶ曰夫ハ常昧の事あり斯るとき大事の圖を捨て勝利を得んとハ思ひも寄す又神文の事ハ武田上杉北條織田等神文を破るひし事其類少のらず此度計何故天命を恐れるふべきや大和紀伊の兩國を大坂に寄られしも關東の謀計あり和紀の兩國を容易く大坂ゐ渡さるべき樣あし此義ハ聽て相知ヤべし扨去多侍和睦評定の節此以後ハ臣ヶヤ事を侍採用下さるへき樣言上せしハ爰の事よてひあり時よ織田雲性寺進み出てヤけるハ兎角和紀の兩國を受取さへすれハ涙風立すして平穏よ歸すべし此事ハ某參府致急度受取歸るべしとヤけれハ淀殿大ゐ喜悦然らハ大義あゞら侍坊駿府よ赴りて受取歸らるべしと有けれハ幸村微笑てヤけるハ侍坊關東ゐ參られゐハ再當城へ歸らるゝ事ハ有べからず夫已あらず味方の

大事を關東へ漏すべし其故ハ去年侍子息信濃守殿を人質ゐ出し置今また侍自分ヶ大坂と脱出んとハ甘く計れたれども幸村よおいてハ斯有へしと疾より推察仕ひとヤけれハ淀殿大ゐ怒るひてハ無禮あり幸村雲性寺ハ我伯父よしてあんぞ關東ゐ一味し偽をヤさるべきやと仰あれハ幸村爰ゐ於て是非を述ず此日より出仕を止て引籠ける秀頼公深く嘆息るひ四天王の輩を召連て真田ヶ陣よ入せるふ幸村大よ悦こび迎へ奉り能こそ侍成下されたりと奥ゐせうと扨此度の軍假令侍勝利と相成ひとも如斯侍母公の侍口入有てハ世の治る事ハひまト漢の呂后の古事も思召合さるべし然れども臣として君を保護し奉る事能ハず某も討死と覺悟ハ仕ひへども再思ひ直し心の及ぶ程ハ計畧を施しヤべく所存ゐて侍座ひ其故ハ今日島津より伊賀入道を以てヤ越ひハ若其地ゐて大事成ざれハ早く陳摩よ侍下向有べし何時よても侍迎の舟を差登すべしと則侍覽ひへ書狀の奥よ起證文をハ認てひ此國邊土よてひへども人氣穏安よして義勇強く誠よ君よ侍供致すべきの地なり島津古太閤よ誓詞を立しより今ゐ背す慶長五年關ヶ原一戰の後ハ國よ引籠て此度の軍役をも勤ずひへハ大坂の軍終ハその軍勢を以て關東より島津を攻るとハ鏡ゐ懸たるヶ如し某君の侍供して彼國ゐ到り島津勢を指揮して事を謀らハ勝こと掌中よひあり侍母公斯て在世ハ兎ても大坂よて事を成ん事叶べからず然と雖もこれ大事の密事あれハ必らず夢よだも人よ漏泄るふゐ結局處ハ薩摩侍下向と思召されひへと涙を流てヤけれハ秀頼公も侍涙よくれるひしヶ至て侍孝心の深けれハ幸村よ向ハせゐひ左有時ハ母君ハ如何せんと仰有幸村答てヤ上けるハ當城よ在ます内ハ尤も孝と侍盡し有べし然とも島津よ渡るふ時ハ必ず侍母公を捨るふべし秀頼公宣ハく夫ゐて人輪の道ゐ背うんゐ幸村の曰侍母公ゐ孝を立るへハ亡君の祭を失ひるふあり能々察しるへ爰ゐ於て秀頼公も侍得心あれハ幸村大よ悦ける此時雲性寺ハ大坂を七日ゐ山

立して駿府ゑ到り當月三日弓始の跡よて幸村ゲヤせし事
委細ゑ言上す公大ゑ驚きるひ幸村早も我心を推知たり少
も油斷ゐりのたしと忽ち淺野金森小出池田岡部九鬼を始
として近國の大名ゑ俟暇ゐゐり早歸國して能々國を守べ
し眞田といふ曲者あれゞ必ず油斷致べゝらずと上意有こ
れゑ依て取物も取敢ず急き歸國ゐ及ける扨また大坂ゑい
淀殿始雲性寺ゲ便を屈脂俟待あれども終ゑその首信
ざゑなのりけれゞ大ゑ驚きるひ幸村を召て足下先達てヤ
されし如く急ゐ軍勢を催し紀伊大和を始として近國を攻
取るへ幸村答てヤけるゐ正月始の頃ゐ諸國の大名皆駿
府と江戸ゑ有て城々空虛ゑして今ゐ雲性寺駿府ゑ有城中
の密議を泄ゞ敵その備あくゞ有べゝらず是を攻て何ぞ利
を得ことわらんや若軍半ゑして國々の勢押寄あゞ身躰
爰ゐ谷て味方敗北せん事疑ひあし淀殿曰よも家康神文い
破まじ此上い大藏二位の局正榮尼の三女ゐ靑木伊藤の兩
人を添駿府ゑ遣して和紀の兩國を受取べし幸村ゲ曰去年

片桐ゐの下向の時も三女亂を弓出せり此度もまた災害を引
起たらんゑい容易あらじ必ず俟無用ありと諫れども淀殿
更ゐ用ゐゐず三女伊藤靑木を駿府へ差下しるゑ右の
二月八日ゑ駿府ゑ着し則本多正信を以て此由言上ヤけれ
ゞ早速俟前ゑ召出され甚俟機嫌能何故ゐ參りたるぞと俟
尋有伊藤ヤ上けるゐ秀頼公の俟領地い去年の亂ゑ寄殊の
外ゑ困窮せりこれゐ依て俟哲文の如く兩國を俟渡し有た
しとの俟使ゑてい公宣いく大坂の知行所未だ相渡さゝる
の如何ゐも早く渡すべき旨急々ヤ遣すべし是い將軍の事
繁忙ゐ寄て延引すると覺知たり扨また三女い能折ゑ參り
たり此度宰相義直ゑ大納言殿より嫁を賜て近日ゑ婚禮を
取結ゞんとす尾州い田舍の事あれゞ古實を存知たる者少
く殊ゑ無骨勝あれゞ覺束あし汝等尾州ゑ來て義式の樹酌
を頼入あり伊藤靑木も參べし其間ゐい江戸よりの左右も
相分るべしと有けれゞ三女い尼ゑても苦ゝらずいゝとゝ
俟受ヤ上是ゑ依て三女貳士を召具せられ十一日尾州へ入

せるひ十九日迄ゑ俟婚禮の規式相濟けれゞ三女貳士を召
出され將軍よりの返翰あり是を見よと下されけれゞ兩士
押戴きて披見るゑ此度恩賞として大和紀伊の兩國を秀頼
ゐ下さるべきの條其所謂是おくいんゝ夫秀頼い國を亂
し天下を顚覆さんとする謀叛の徒あり斯るものゐ恩賞
をゐゐらゞ天下の人皆謀叛致すへし慈悲も事ゐ寄い秀頼
ゑ恩賞の義い存も寄ずいと有此時公宣ひけるい老てい子
ゑ隨ふ慴あれゞ予ゲ心ゐも任せ汝等返て此趣をヤべしと
仰有けれゞ伊藤丹波守進出てヤけるい夫ゑてい去年の俟
神文ゑ俟背有て天下ゐ信を失ひるゑべし二ゑい神罰の程
も思召るべしと家康公阿々と笑いせるひ神文に背たらゞ
何とするぞ日本廣と雖も今我ゑ罰當ん程の神い有べゝら
ず能罰當る奴ゲあるゑもせよ齡既ゑ傾きたれゞ行掛の駄
賃あり去冬眞田ゲ每度予ゲ謀の裏をのき大軍を破りし
返報ゑ我又裏の裏をゝきて一盃喰たるあり大坂の馬鹿も
のども早立去べし其內靑木民部い用事あれゞ殘べしと仰

あれば今は如何とも詮方なく三女伊藤は廿日は尾州を立て廿三日は大坂は歸り此由を言上す淀殿大は驚き且怒るひ幸村を召て仰有けるは扨々女の鼻の先智恵おて神文を飲と思してそ愚あれ此上は軍師の差圖は遊ましと宜く頼入と有ければ幸村申けるは某種々淀諫言申せども淀用なく事おき時は淀内縁の翠權威を振るふ此故は若合戦始りあば一番は討死仕るべく存じはへども夫おては君命を違戻彌々淀迎の求と存ては故思ひ止まり申べし此以後は軍事の淀口入を淀川捨有べしと申て退きける駿府おては青木を止めるひ密は仰有けるは汝大坂は立歸り何とぞ千姫を奪ひ來るべし其恩賞おは則姫は十二万石を付て與へしと仰れば青木民部大は悦ひ承知の淀請を申て立歸る此青木は今年廿八才にして美男の聞へ有ける民部は三月朔日は大坂へ歸て申けるは翁は家康公淀氣の結れし時は斯は仰有しのとも全淀本心より出たる事おてはあし是は依て急々両國を淀渡有べく答あり必らず三女は仰有しとを淀心は止め給ふべからずとの淀事はひと申ける幸村は早青木が變心を察し密は民部を招きて申けるは我其許の忠臣を知が故一大事の役目を申付あり其故は此度の和睦既は破とす是は依て關東より千姫君を奪ひ返さんと計は必定あり是味方は人質を取さる故自ら關東の鋒先鈍し其許今日より姫を守り給ふべし是一大事の役あれば油斷あく心を用て守り給ふべしと申ければ青木民部心は思ふよう我駿府おて命を受し事を知ず姫君の守護を申付は真田が運の盡ありと一人悦び夫より松の丸の淀殿は移て勤番すその頃真田幸安の家來は及川八内といふもの大助は無禮しさりとて幸安刀を脱て追駈る八内は徒行して民部が詰たる淀殿は逃込何卒淀助下されよと頼む民部其仔細を問は八内答けるは某は真田大助が家來及川八内と申者あり我元より女姫おて兼道を好申はが主人大助余は愛らしくは故艶書を送りは所我思を叶えん已あらず無禮ありとて刀を脱て追廻し如斯辛き目を見せては

我情の叶ざる意趣已は大助今は思知すべきぞと血眼は成て申ければ青木是を聞及川が大力は餘て聞知上女嫌とあれば淀殿おは置ても氣遣あし何とぞ彼を取込て味方とあさば万事便よかるべしと思ふ處へ幸村より人と以て申けるは八内義悴大助が機嫌を損じ淀殿へ逃込は由悴を慰諭は内淀世話はいはへとも淀止置下さるべしと申ければ青木密は悦び畏りは と答て使を返し夫より及川が心をためし關東の密謀を語て汝我おは組せば公は言上して大名は淀取立有樣は致べしと言ば八内大おは悦ひこれより青木おは隨心の躰を見せ淀殿は止りける是幸村が深き謀おて後道明寺は於て大功を立さり民部は かゝるべしとは夢おも知ず及川を復あき者は思ひ何は寄ず八内おは相談しければ及川は一々幸村おは通し謀を助けゝる

第卅六回

佞者失策燃焚刹　両雄奮勇死歃中

扨又淀殿は諸將を淀集有て仰けるは去年中井主水が規矩を以て櫓を打し事不屈あり彼は古太閤の高恩を蒙りあが

ら人面獸心の振舞あり先軍始おは此者を打取べし幸村諫て申けるは左樣の事を申さば中井計は限べからず日本の内は住程のもの先君の高恩を請ざるものは壹人も有べからず彼は輕々しき者おては得ば茶臼山は召れ手詰は成て仕つりたる事と存られは殊は今夏の始おては得ば北方の陰を以南方の陽を打んと勝利有べからずと申せども淀殿は更は聞入ぬは大野主馬之助を大將として塙團左衛門岡部監物米田大學を差遣壹万弐千の勢おて向せ給ふ此時塙團左衛門直之は幸村が陣所は來り某淀母堂の命を受て中井が討手として法隆寺は向はあれ能謀もあらば投給へ幸村申けるは兼て和殿の忠功を知る故我一つの謀を授け申べし郡山の城主筒井隼人頭は物は狼狽る性分あれば法隆寺の火の手を見ては忽は馳付べし汝は五百の勢を以て彼が出たる跡へ廻り火を掛て攻べし扨兵を早引上途中は伏て待べし筒井我城の火の手を見ば周章引返すべしこれを打ば筒井が勢を粉の如あすべし斯して法隆寺は

向いゝ味方の危を救べし塙厚謝して立歸り既よ打立ける邊よて大野よ向ヤけるゝ惣勢一方より向ゝ謀あきよ似たり某ゝ五百の勢を引て間峠よ伏大和路よりの加勢を討べし大野尤と同しけれゞ凹左衛門ゝ五百騎を引て別れける跡よて岡部大學よ向ひ塙ゞ謀の善悪を問岡部答て是妙計あり大野曰汝と塙とゝ不和成と聞しゞ何故よ塙ゞ言を是といふゞ大學曰意趣ゝ私あり謀の善よゝ聽ひ悪よゝ聽べからず大野これを笑ひ汝等ゝ習りし者どもあり我ゝ左わ非と既よ法隆寺わ至り関を上て貴入たり中井主水ゝ早此事を聞大坂勢の向ざる先わ京都わ逃遁れけれゞ中井ゞ宅よゝ人壹人もあし大野ゝ主水を取逃したる事を口惜く思ひ火を掛よと下知をあす打節魔風烈くして餘焔盛よ燃上れゞ郡山より是を見て筒井隼人大よ驚き去冬大悔所悔陣の砌此寺ゝ大切の伽藍あれゞ必ず燃べからずとの尊命あり燒せてゝ叶ふべからずとて手勢を引て馳出たり塙凹左衛門ゝ引逃へて郡山へ押寄すれゞ塙ゞ其等坂田庄三郎城兵の立歸りし振わて門前わ至り門を開よと呼れゞ何事やらんと潛を開けゞ庄三郎疾馳入て矢庭わ番兵六人を切殺し内より門を開けゞ諸勢一度よ込入八方よ散て火を放ち手輕く引上て筒井ゞ歸路の左右わ伏て待居たり筒井隼人正法隆寺の火の手よ驚き馳出しゞ池田村小泉を打過時忽郡山よ火の手上りけれゞ大わ驚き引返す

解よ曰郡山より法隆寺ゝ西南よ當て其道弐里あり郡山池田村小泉かざめ村法隆寺あり

わ塙ゞ伏兵左右わ起て切立突立散々わ蹴廻る筒井勢ゝ素より狼狽しとあれゞ何ゝ以て支もべき粉の如くよ散亂しよう〳〵福住の方へ逃入たり扨又法隆寺の火の手を見て馳付る輩にゝ植村主膳同新六寺澤兵庫頭松倉豊後守岡部内膳各々手勢を引て法隆寺わ駈付〳〵大坂勢を中わ取込突て懸れゞ此勢よ辟易して大野ゞ大勢よどろよ成て既わ備を乱さんとする處わ米田岡部の兩將鎗をひ

ねつて突て廻り右わ當り左を支へ後を討ゝ前に進み勇を振て血戰す爰わ依て大和勢少し浮足わ成たる處へ塙ゞ五百余騎大和勢の後より突とおめいて切入れゞ岡部米田ゝ力を得て敵を八方へ切散し恰も慣猟の群犬の内わ入ゞ如く大和勢ゝ敗北して小泉の方へ引處を追打して討取首五百八十余級よ及ける是皆塙岡部米田ゞ武功あり大野ゝ大よ悦び兵を纒めて歸陣し城内わ入けれゞ淀殿悔感斜あらず主馬之助よゞ程の武略わらんとゝ今迄知ざりし迚悔嘆美有こそ是非もあきこれより主馬ゝ此武功を專わ掛大言を吐て晋ける扨又幾野金森小出の輩ゝ大悔所の命を受て南方の地を縮少んと計ける大野此由を聞て悔前わ出ヤけるゝ近國の逆臣ども南方の地を掠ゝ臣打向て退治仕つらんと云淀殿大わ悦給ひ早打向て大功を立べしと許し給ふ秀頼公これを止め軍師よ問ずしてゝ如何ありと仰有是よよつて幸村を召れ淀殿仰有けるゝ南方わ逆臣多し主馬助よ命せて是を討せんと思ふあり幸村答てヤけるゝ此事ゝ決て悔無用あり今四海尽々く敵とあれゞ纒の枝葉を討たりとて益有べからずと諫れども大野頻ふ向んとを望む幸村曰足下此間の軍わ勝利を得しゝ塙ゞ力よ依てあり若塙あくんゞ足下生て歸る事能まじ南方征伐の義ゝ決して無用あり大野色を變てヤけるゝ何とて軍師ゝ某一家をかくのごとく疾給ふぞこの間法隆寺の軍わ打勝又大功を立んとするを妬みて斯ゝ言給ふあるべし某南方よ打向ひ敵將の首を取ずんゞ再歸るまじ軍令狀を書て向ゝんと望ける幸村猶諫とすれども淀殿更よ用ひ給いず爰わ於て詮方あく大野わ軍令狀を書せ是を許す大野ゝ弐万三千余騎を引率し塙岡部米田の輩を從へて先岸和田わ押寄虎叫んて責れども味方の損ずる計わて何の仕出したる事もあく十日余ぞ過たりけるこの時塙凹左衛門大野よ向斯徒わ日數を送るうち若海野勢後を立切ゞゆゝしき大事よてひ大野曰我自謀有汝等漫よ口を動す事勿れ塙ゝ此言を聞て二言とも言ず我陣わ立歸り徒卒わ

下知して一人前ゑ三人の兵粮を用意させ是を腰ゑ付させ次の日南方を指て出行ける大野ハ岡部大學を招き塙ゲ言し事を物語善悪を問岡部答てゆけるハ塙ゲ言甚善是を用ざるハ愚の至あり大野曰汝ハ彼と中悪に何とて彼ゲ言葉ゲ善と言ぞ岡部曰中悪とて善ハ善悪ハ悪あり何ぞ是を以非とせんや早塙ゲ言ゑ隨給へと云ども大野更ゑ用ず岡部も今ハ是迄ありと退て塙ゲ陣を覗ふ所ゑ早手勢を引て出たりといふ南無三彼ゑ後たりと岡部も手勢を引具して塙ゲ跡を追てぞ出行ける爰又淺野但馬守長俊ハ岸和田の後詰をせんと田子勘兵衛大石新左衛門同與左衛門藤井六郎太夫石川傳助を龜山と云處に伏置一團とあつて進たり塙團左衛門ハ丹羽六郎左衛門を案内として梶井迄來し處淺野ゲ先手上田主水龜田大隅ゑ武千余騎ゑ端あくも行合たり塙團左衛門何ぞハ以猶豫すべき百五十騎を眞九ゑ備へ上田龜田ゲ村雲立たる其中へ面も振ず討て入四方ゑ當て戰ゲ坂田庄三郎ハ八角の樫の棒を振廻し當を幸打て廻る是ゑ向ふて打殺さるゝ者數を知ず上田龜山の兩將ハ敵の小勢を輕蔑引包んで討んとすれど塙ゲ猛烈戰ゑ思ハず乱て敗北す此時龜山ゑ伏たる淺野勢一同ゑ起て塙を中ゑ取籠一人も餘さじと揉立る團左衛門ハ事ともせず馬ゑ流鏑を掛て前ゑのけ後ゑ廻り死やゝと下知をなす坂田庄三郎ハ獅子恐身の怒をあし攻立切立駈廻る此時先ゑ敗れし上田龜山も取て返し散々ゑ切て蒐れゲ團左衛門勇ありといへども小勢の上最前よりの戰ゑ勞れけれゲ今ハこうよと見へたる處ゑ岡部大學五百の勢を引て馳來たり此有樣を見るや否や自眞先ゑ進みて龜田ゲ勢ゑ打入りて唯一戰ゑ追まくれゲ團左衛門も力を得て勇を振て突崩す上田田子大石藤井石川の輩ハ味方を下知して引ゑ進とあせれども崩れ立たる味方の勢ゑ揉立られ龜山ゑ追上らるゝ塙岡部の兩將は十分ゑ敵を敗備を立て急ゑ繼此時塙團左衛門岡部ゑ向ひ今日の傍加勢謝するゑ言あし元來貴殿と我とハ琴をたつの交ハりありしゲ去多夜

討の一言より互ゑ吳越と隔絶りたり然れども其節朋友の情ゑ背しハ軍師の命ゑて夜討の事を他へ漏じと誓ひし故あり此後ハ恨を晴し給へと云ゲ岡部曰軍ハ軍恨ハ恨あり戰危き時ハ幾度あても我命の有ん限ハ救ゆあり一度結びし意恨ハ一生忘るべからずとゆけれゲ塙も餘方あく岡部と馬を雙て扣へたり大學塙ゑ向ひ敵敗北すると雖も再押寄んハ必定あり味方小勢ゑして皆疲勞たれゲ戰ひ危早加勢を大野ゑ乞ん團左衛門尤ありと同し岸の和田へゆ遣す大野是を聞て大ゑ怒已爭軍法ゑ背き扳掛して加勢あどゝハ不届あり早引返べしと申米田是を諫て申げるハ今加勢を遣し給ハずんゲ同將必ず討死すべし早勢を向られまと再三ゆと雖も大野是を用す両人の使を追返す使馳歸て此由を告れゲ塙岡部の両將大ゑ憤怒斯る無謀人の旗下と成しが我々の不運ゑ此度の戰ハ利有まじと軍師の仰有しが果して如斯し今ハ討死と覺悟を定めんと堤の上ゑ備を立敵の寄るを待居たり上田龜田の輩ハ塙岡部の纔の勢ゑ切崩され主人の怒甚しけれゲ再梶井ゑ押寄て必死と成て切てかゝる塙ハこれを見て百騎計を左右ゑ從へ上田ゥ勢ゑ切て入面も振ず突立れゲ岡部ハ龜田ゲ備ゑ無二無三ゑ切入て火花を散して戰ふたり此時塙ハ上田ゥ勢を弐三度四五度切脫て味方を見ゑ坂田庄三郎丹羽六郎左衛門を始として殘すくゑ打れけれゲ今ハ是までありいざや向の森ゑ至り心能切腹せんと梶井川ゑ打入處ゑ上田勢嚴敵追掛來る團左衛門ハ再び馬を歸さんと振向處を淺野勢ゲ打出鉄砲塙ゲ咽を打脫ゲ何ぞハ以堪るべき梶井川ゑ落入て流れ行殘兵ハ各々敵陣ゑ馳入て討死す岡部大學これを見て今ハ是までありと敵陣ゑ切て入其身も深手を負けれゲ梶井川ゑ飛入塙ゲ死骸を抱直之々々と呼ども早事切たり岡部ハ刀を逆手ゑ取直し如何ゑ直之今こそ中直して死て三津へ伴ハんと忽ち腹十文字ゑ切て死たりける其事本陣ゑ聞へけれゲ大野主馬大ゑ驚き周章けれゲ陣中何とあく騒乱す城内よりこれを見て扨ハ後詰

の勢近付たりと覺るぞいざ切て出力を助よと城門颯と押開き面も振ず突て蒐る大野彌々猛狂出一支もせず逃出す是に依て惣勢散々ゐ敗北す大野ハ味方の討るゝをも顧みず逃延て石津川を渡此時米田申けるハ如斯多の兵を失ひ何面目有て軍師ゐ見へいべき此川を後ゐ當て今一戰致すべしと言ども大野ハ更ゐ耳ゐも掛ず馬を打て逃出せゞ米田監物大ゐ怒大野を罵て申けるハ汝塙岡部を救ず剰斯敗北を引出しゐゞら此後ゐ至ても米だ命を惜ゞ斯愚鈍と共ゐせんより寧塙岡部ゞ吊ひ軍して名を後記ゐ止むべしと馬の鼻を引返す處へ岸の和田の城兵五百計り追來る米田監物ハ此中へ切て入四角八方ゐ當て血戰し敵十二騎討取て堤の上ゐ掛上り腹切て死たりける大野ハ辛して堺迄逃來りけるゐ舟手の四將九鬼向井小濱千賀の輩是を聞ていざ打取んと用意を爲す大野此由を聞て魂を天外ゐ飛し纔か主從三人ゐて城内ゐ逃歸り母の大藏を以て淀殿を賴みけれゞ淀殿も大藏ゞ種々嘆き申を哀れゐ思召されて幸村を召て敗軍の樣子を淀物語りあり何卒彼ゞ命を助へと宣へゞ幸村答へて左樣の事を承り居る間ハ座あくハ南方の敵を追散さすんゞ味方の害ありと言捨て座を立出陣の用意ゐこそハゐよびける

第卅七回

幸村謀計惱ス船手一　甚次變名布二散兵一

去程ゐ淺野但馬守ハ梶井の軍ゐ打勝て岸の和田の小出金森と一隊ゐゐり堺の南の港ゐて進みて船手の四將ゐ會し專ら軍議をゐしゐけるこの時幸村ハ南方の敵を撃んと先北兵の押へを置その人々ゐハ後藤又兵衛を大將となす深村周防守、堀田圖書之助、伊藤丹後守、植島玄番頭を副將としてその勢五千余騎ゐて神崎川の北ゐ備へを立て北方の押へとす又長曾我部元親を大將とゐす南條中務町野左近進を副將としてこれも五千余騎ゐて神崎川の南ゐ備へ木村長門守を大將とゐす赤松伊豆守、津田右近、郡主馬之助、真木野豐後守を副將として伊丹の邊ゐ備へたり諸方の押整ひけれゞ幸村ハ悴大助を召てヤしけるハ予ハ七百騎を率て河内口より出敵の尾を攻討べし汝ハ呈兵千七百を引て下道より進み首を討べしと父子相分れて進みける

真田大助ハ良尊穴山小助を招き汝ハ五百の勢を引て阿部野海道庚申の森ゐ埋伏し深谷青海入道ハ五百の勢を引て天下茶屋の茶店ゐ伏べし各自五百目砲三十目五十目銃を準備せよと命じけれゞ兩人心得いと答て出て行幸安ハ深谷伊三入道、三輪琴之助、猪飼武右衛門、百合鍋之助、近藤無手之助を左右ゐ隨へ七百騎を引て住吉の松原まて進み深く隱れて備へたりこの時淺野を始め各自軍議終て大坂ゐ寄んと進む先陣ハ向井將監二陣ハ九鬼、小濱、千賀の輩三陣ハ小出、金森、渡邊、北條の人々ゐり淺野ハ弱ゝらん方を助んとこのところゐ陣を取寄手の先陣既ゐ住吉の鳥居前まて進みける向井將監馬を駐め明神殿〳〵と二聲いふて通りける次ゐ備へし九鬼馬上より是ハ何を仰られゞ向井答て當時關東の淨威勢ゐ何ものゝ敵すべき明神殿能聞へ此度の軍味方の勝としやれゞ此住吉の玉垣神殿ハ瑠璃の七寶反橋ハ珊瑚抔ゐ成べしまた負るやうゐしやるゞ最後神殿玉垣燒毀ち小便を仕掛て呉んといふて通り

しゞこれを聞人々好あき向井ゞ雑言やと笑はぬものもありけり向井い城ゞたを散々ゐ悪口して天下茶屋まで至りまた雑言を吐んとする處ゐ深谷ゞ打だす五百目砲ゐ吃驚しそりや伏勢と散々に成て逃出す武陣三陣入替り漸々備を立直し庚申の森を後ゐ當て戰ふたり深谷い嚴敵追蒐て五十目三十目の銃を打掛〳〵責立る九鬼、小濱い味方ゐ令して敵い些少の小勢あるぞ蹈止つて戰へと駈廻る後の森よりまたもや五百目砲を打懸て穴山小助ゞ五百余騎面もふらず突て蒐る深谷も味方ゐ令をあし鎗を入て突崩すこゝゐおいて船手の四將小出金森北條ゞの軍卒前後の漱よ途を失ひ散々よ敗走して漸々住吉まで逃延たり向井い馬より飛で下り如何よ明神樣最前の無禮い許容し給へと俄よ敬ふこそ可笑けれ斯て九鬼小濱の躍らい敗軍を纒めふゝたび盛返さんとするところ耳元ゐ相圖の一砲聞るや否や忽ち三貫目筒を打出せゞ人馬共よ打倒され死ゐものの數を知ず向井の躍らまた散々ゐ成て堺を望て逃行ゞ深谷伊三、猪飼武右衛門眞先よ進み鎗を入て散々ゐ追立る大助い長追するゐと勢を纒め敵の馬物の具を拾ひ取備へをあす此際穴山小助、深谷清海入道も來て大助ゞ武畧を感じ偖中濱、大道、野川と三手よ分れて追討よし給へと勸めける大助答て父の仰ゐい汝い首を打て予い尾を討べしと定めて深き謀計有べし先兵糧を食ひ南方の容子を窺いんと言に兩人道理と同じけりさても船手の四將い散々よ討ゐされ漸々小屋の濱よ出て息を纒船ゐ乘んとするゐ船い皆楫を入て沖よ有り向井將監大いよ怒り己等何の爲ゐゝ船と沖ゐ出したると叫喚ける船ゝも追々岸よ付けゞ向井の躍怒を鎮めて乘んとするよ忽ち船の中より六文錢の旗と差出大音よて我い是眞田ゞ臣ゐて百合鑓之助、近藤無手之助の兩名あり主人大助ゞ命を受て船い悪皆く奪ひ取たりと三十目五十目筒を雨霰の如く打出せゞ諸將い皆膽を冷し何國ともあく散乱すこの時淺野但馬守い湊よ有て先陣の左右を待兵を進んと思ふ處よ反正天皇の陵の中

より軍兵些し計り旗印もあく出來る淺野不審ゐ思ひ敵歟味方ゐ見て變れと令をあす軍士馬を馳てこれを問よ答て言やうい先手のものよていゞ味方大ゐ打負て本道い通り難き故間道と經て逃歸りいありと軍使走師てこれを告淺野い怪み見る處よ段々と兵の出來るよぞ急よ令して軍勢鬱時止れと喚いるこの時幸村い六文錢の旗を俄よ差上淺野ゞ本陣へ大砲を打懸れゞ人馬夥多敗討れて上を下へと騒動す眞田ゞ長等津山三七、青田彌十郎、根津甚八、同元之助、淺見五郎兵衛、樫山藤六の面々眞先ゐ進み鎗を入て突立れゞ淺野勢い不意を討れ防んとするものもなしこの大砲の音を聞と等敷住吉よ控へたる大助ゞ千七百余騎穴山、深谷を左右よ備へ南を望て進發す既よ堤の半途まで來れゞ向井、九鬼、小濱、千賀、金森の躍敗軍を引て逃行を大助見付てゐれ遁すゐと言程こそゐれ眞田ゞ勇將我劣らトと切て蒐る九鬼、小濱の躍驚愕ゐゞら防んとすれども憊病神の付たる關東勢何ぞ要時も堪ゆ可き右往左往ゐ散乱す眞田父子い東北西の三方より引包で攻立れゞ淺野を始め船手の四將南を望て逃行を眞田ゞ勇將追蹤して首を取こと貳千八百余ゐぞ及びける東方の諸將い漸々ゐ逃延岸の和田の城ゐ入んとする處ゐ出火よてや有けんまた眞田ゞ忍びや入たりけん猛火燄ゐ燃上れゞさていこの城も敵の手よ入たりと打驚き夢路を迷る心地して紀州和歌山まて逃行ける幸村い大ゐ打勝大坂ゐ歸城し大助を召てヤけるい汝再度出て北方の敵を打散すべし大野ゐ習ひて軍勢を揃ふこと為かれと命じけれゞ大助兵を引率て神崎ゐ至り後藤、長曾我部よ見ゐて手配をあす重成ゐい一手の勢を引て堺口よ伏箇樣〳〵ゐ致されよ木村命を請て出行次よ後藤を招きて足下い一手の勢を率てかくのごとく計ひ給へ後藤命を請て出たりさて長曾我部を招て貴殿い浮橋をゝけ樓を作て今よも攻蒐る休をあし箇樣〳〵よ計ひ給へ父風雷を入道給へり元親ゞ曰風雷如何程のひぞ之よ答ふるゐ五千よ近からんと長曾我部大よ喜悦出たり

ける

評ふ曰今大助が風聞といひしに去年今村の庄官三右衛門三津屋村の庄官庄左衛門等大坂ゑ味方して片桐り兵を破り入城せしが大野が我意を憎み幸村が忠意を感じて神文を以て誓を立誠忠を盡ん事を望む幸村其志操を感ずして謀計を授け彼等が手下の百姓を敵軍ゑ入置たり彼百姓等に陣中ゑ有て水を擔ひ兵粮を炊き野菜を運び抔しければ東軍大ゑ喜悅ける

偖眞田大助に千余騎と引率て神崎川の南に伏て相圖を待ての時神崎の寄手ゑに細川越中守、松平大膳太夫、山内土佐守、立花左近將監、森美作守、堀尾山城守等ありまた尼が崎ゑに池田利隆を首として一柳、生駒の輩押寄けるさるほどゑ長曾我部に神崎川ゑ浮橋を渡し今ゑも攻寄る形容と示せば西國勢これを見て敵川中まで渡さば打落せと細川、山内、森、立花の輩鉄砲を擣へ前ゑのみ氣を入て待居たり後藤又兵衛に遙か川上より渡りて陣場ゑ押寄思ひも寄ぬ横合より壹貫目砲を切て放ば將基倒しのごとく打倒され諸陣みな色めく折節川下ゑ伏たる大助鯨波を作て寄來り五百目壹貫目砲を擲雙へて切て放ち揉立〳〵戰へば關東勢三方ゑ敵を受散々ゑ成て敗走す中ゑに備へを立て鉄砲と打出さんとする輩も有といへど先ゑ眞田が入置し百姓ども密かゑ火藥を濡し鉄の目釘を拔置ければ鉄砲に役ゑ立ず鉄を合すれば穂先に飛散今に防ぐべき術も無き處ゑ件の百姓處々ゑ散亂て陣々ゑ火を放ければ何かに以て堪ゆへき散々ゑ成て逃出すを後藤、長曾我部、眞田の三將手勢く逼りて追討ければ小鹿の岸ゑも足をとゞむる事能はで漸々小濱まで逃延ける扨又尼が崎ゑ控へたる池田利隆一柳以下の輩に伊丹の火手を相圖と心得備を出し長濱より塚口ゑかゝる處ゑ相圖の一砲耳元ゑ響とひとしく木村が伏兵突出す池田の諸將驚く處を木村助五郎、伊藤團右衛門、半田市之丞、知德院の勇將猛虎のごとく荒出て四角八方に切て廻り忽ち池田勢を三段五段ゑ切崩す

利隆烈敗令を傳へ漸々ゑ兵を纏め尼が崎へ引取んとするを重成馬ゑ流鞭を打て猛本勢を令し非の字巴の字ゑ乘分〳〵息をも繼せず貴立れば惣勢再回散亂して尼が崎の城ゑも入事能はず漸々小泉まで逃延此處ゑて敗軍を纏めける木村に後藤眞田と一手ゑ成勝軍とぞ喜悅ける此時重成ゆけるに此勢ひゑ乘て尼が崎ゑ押寄せ城ゑ燒拂へんといふを大助諫めてゆけるに君の運を開き給へば無くて叶はぬ名城ありこれを燒に安く築に難しと三將道理と同ゑて夫より船ゑて大坂ゑ立歸れば幸村大ゑ喜悅迎へ入て諸將を賞し運前ゑ出て淀殿ゑ向ひ大野主馬に貳万三千の兵を失ひ悴大助に些少の勢を以て大功を立てし給を申さば大野に甘九才悴に十六才あり然るに大野を斯計りは不便を加へ給はる上に達て申上まじくし此上に我々父子討死を仕つりて誠忠を顯し申べし諸將ゑも討死の場所を定め給へと運前を立去んとすれば淀殿種々詫給へ共聞ぬ顏して退きける扨も幸村に淀殿諫言を用ひ給ぬと憤り討死するとの取沙汰あれば秀頼公大ゑ驚き給ひ木村、後藤、長曾我部ゑ謀りて幸村を召謀計を尋給ふ幸村四邊の人を拂ひ不依此回平野ゑ打出關東百万の勢を呑で天下を再回君の物と仕るべし誠ゑ此回の戰ひこそ天下分目の勝負ゑていし故米だ日本まで行いざる火責を仕つらんと存ず川意も大概ゑ整ひし然れども両將を釣寄ん事安きゑあらず味方ゑ一失あくていに叶ふ可らずと後藤に向ひ足下影武者の用意有やと問ふ基次答て不依が乳兄弟に山田幸右衛門とゆものあり處々の戰ひゑ疵を蒙りしへば山田も亦我如く身内ゑ疵を付し故不審ゑ存じぬれば惣じて一方の大將たるべきものに影武者無ていに叶ふ可らず某し君に面ざしの似たるを僥倖まさらの時の備用ゑ立んと斯に割ひしと答えたりそれよりに彼者を影武者と定めしといふ幸村大ゑ喜悅斯の如くならば足下に游田隼人、小川次郎右衛門、角部虎之助、結城權左衛門、山川民部、松川庄九郎を始とし八千余騎を率て國分峠ゑ出て備様〳〵ゑ待遇足下ゑ

ん潛ゐ熊野ゑ立越新宮左馬之助が方ゑ在します國松君の
供して歸らるべし其跡ゐて影武者の討死が大事ゑて
隨分謹慎能諜り給へとゆゐぞ後藤一々諜計を受其日より
三田沖之助と變名して專ら任度ゐぞ及びける

第卅八回　小宮山分捕ス駿馬　小笠原被奪ニ武器

後藤又兵衛改名してその用意ゐ及けれゞ幸村長曾我部を
招きゆけるん其許ん小島主水町野十内淺田新八並川掃部
星野右近小島長兵衛を初めとして八千余騎を引卒し別久
村ゑ伏て敵十三峠を越後藤の後を包んとせゞ影武者を出
し行厂落鶴の妙術を盡し機ゑ臨み變ゐ應じ給ふべし元親
命を受て引退く次ゑ木村重成を招て和殿ゑん八千余騎を
引卒て關峠ゐ伏せ關東勢を討給ふべしさて慈愛あきゑん
似ゑれぞり此度ん討死と覺悟し給へてれ家康を釣寄るの
諜計ゑして味方の大利爰ゐ有り足下の今討死あくんゞ迎
も家康を討取こと能とトこれ誠ゑ忠義なれゞ遺憾ながら
覺悟し給へ重成答て我起居とも忠ゑ死して名を後代ゐ
留ん事を願ふ何ぞ生を貪る輩らゑ習んやと大ゑ喜悅山
口左馬助笹田右近清水玄蕃今井の輩らを始として八千余
騎を引て打向ふ爰ゑまた信州松平の領内ゐ小宮山數馬同
藤宮同登とて三人の兄弟有り俱ゐ眞田家の臣ありしが關
ヶ原一乱の刻上田の合戰ゑ兄の數馬ん手傷く働き鉄砲ゐ
て膝の口を碎られ歩行も自由あらざるより幸村が上田を
立退砌も供をすること能んねゞ十才と八才ゐある弟を連
て信州ゐ止まる幸村が父割符を渡し何時ゐても尋ね來る
べしとの約束有けれゞ常ゑ古主を慕ひける爰ゐ又信州松
本の城主小笠原兵部太夫ん多夏両度ゐなら供ゐ其子
信濃守ん兩度とも國ゐ在て留主を守り居られけるが熟々
思ひ廻らすゐ老たる父を戰場ゐ出し我ん國ゑ殘りて腰拔
役を勤る事如何ゐしても口惜き次第ゐ假令許可ゐく
とも戰場へ廻かんとて家臣ゑ城を守らせ置人數百計ゐて
出立の用意ありこれゑよつて領内の百姓等人夫を出すべ
き由命トけるが總て軍役の人夫ん百石ゑ弐人當ゑて村々

の高持より出すありさて小宮山が住居する村ん中里とい
ふ處ゐて小笠原の領地ゐり兄の數馬ん弟貳人ゑ文武の二
道を敎へ藤宮ん廿四才登ん廿三才ゑて供ゑ武藝ゑ熟練し
たり然るゑ去冬古主大坂ゑ籠城と聞て兄弟三人走加ゐら
んと仕度せしが早くも和睦ゑ成けれゞ今ん上りても詮ゐ
しと思ひ止まり居たりしゑまた今年戰ひと成て幸ひ小笠
原の出陣あれゞ折よしと喜悅て村の庄官方ゑ至り人夫ゑ
行ん事を望む夫と知ねゞ庄官ん承引則ち兄を小笠原の
家士高野仙助方へ遣して六助と呼藤宮ん萩原兵助方へ登
ん大宮五助が方へぞ遣しけるさても信濃守ん道を急ぎ四
月廿一日ゑん石部の宿ゑ着たるゑ折能く越前少將殿も
同日當所ゑ泊ありゐ小笠原これを聞て早速少將殿の供
前ゑ出私義兩度の供を仰付られず余り無念ゐ存ずる
故押て出陣仕つりん供前の供執成給ん り度とぞ願ひけ
るゑ少將殿聞給ひ其志操神妙ありゐ供前の義ん拙者ゐ供
任せあれと仰あれゞ信濃守ん大ゑ喜悅その夜ん當處ゑ泊

りけりさても小宮山兄弟ハ明日ハ己ゐ京ゑ入るれバ今夜當處を立退べしされど永々の浪人ゑて尾羽打枯し武具も掛ず主人ゐ見えん事面目ゐしいざや武具を奪ハんと三人とも立別れ忽ち高野仙助萩原兵助大宮五助が武具を奪ひ石部の河原ゑ出しおき再び立歸て太刀鎗を奪ひ取馬を牽出して鞍をおきこれゑ打乘大坂ゑ到らんと思ひしゐこの馬頻りゐ嘶きけれバ越前の軍率不思議ゑ思ひ石部川原ゑ馬の嘶くハ如何ゐと騒ぎ出す小笠原の家士も目を覺し見ると枕元ゐる太刀鎗を始め馬まて奪ひ取れけれバ大ゐ驚き聲を揚盗賊ゐるぞ逃すゐと狼狽廻つて追蒐る此際小宮山數馬ハ兩人の弟ゑ向ひ云ふけるハ斯てハ迚も協ふべからず我ハ片足不具ゐれバ大坂ゐ到るとも目覺敷働き難べらず汝兩人ハ早く此處を落延大坂ゑ到るべし我ハ此處ゐて討死せんと追手の中ゑ突入たり弟二人ハ兄の言辭の默止難く追手を切拔道を求め大坂投てぞ上りける數馬ハ壹人鬼神のごとく敵十三人を突伏けるゑ原隼人ゑ爲ゐ討れける浩る處へ信濃守も走付てこれと見るゑ我相印を付たれバ大ゑ驚きよく〳〵吟味を遂たるゐ真田ゑ割符を持たりけれバさてハあれまても間諜を入置しにそ人々聽を潰して恐怖けり

第卅九回　後藤又兵衛六回交戰　木村長曾我部現二勞名一

去程ゐ四月廿五日ゐハ後藤又兵衛八千の兵を引率て道明寺國分峠ゐ陣を取この時基次ハ地利を察し大敵を破るハ謀計ゐ如ヒと手分をゐす先押子源太ゑ千余騎を授け汝ハ栗崎ゑ伏て我敵を導引此所ゑ到るを見て擊て出敵を破るべし押子命を請て引退く次ゑ片山勘兵衛、山田幸右衛門、諸合造酒之丞、山田外記、大川平馬、島田内藏助を招き汝等ハ各三百騎を引率て中井、川岸、今田、内山、荒川、山田の六ヶ所ゑ伏て我敵を栗崎ゐ引入るを見バ双方より引包で擊べし各自命を受て退く次ゐ薄田隼人を召て汝ハ千七百騎を率て猪の鼻ゑ伏敵敗北して逃るを擊べしと命じ自ら五百余騎を引率して龍田口ゐ出て敵を待この時公ゑハ

尾州を浮立有て四月廿五日ゐ京都へ浮着有り兩旗頭井伊藤堂加州の先陣長九郎右衛門奥州の先陣片倉小十郎を始として諸國の大名迫々ゑ京着す然る處ゑ大坂勢國分峠闇がり峠へ早擊て出ひと注進す公これを聞し食れ大和の國を取れてハ甚だ大事ゐり先その手當有べしと結城越後中將殿を大將として松倉豊後守、寺澤兵庫頭、植村左衛門尉、同新六郎、新庄駿河守、本多美濃守、服部左京亮、高木主水、甲斐庄左衛門、神保主膳正、遠藤但馬守、古田大膳正、栗山左衛門、須賀掘津守、筒井隼人を始としてその勢都合七万余騎國分峠へ差向らるまた一方ハ藤堂和泉守を大將として岩倉但馬守、和馬大膳亮、戸澤上野助、南部大膳太夫、同信濃守、津輕越中守、六郷伊賀守、溝口伯耆守、高力左近之進、松平内匠頭を始として其勢七万餘騎これハ志貴山を越て進むべしと命ゐ給ふまた一方ゑハ井伊掃部頭を大將として小笠原兵部太夫、同大學、山口伊豆守、本多若狭守、松平越中守、石川近江守、孕石豊前守、藤田能登守、近藤下総守、秋田城之助、仙石越前守、京極丹後守助等を始として其勢七万余騎闇がり峠ゑ向ふべき由を命ゐ給ひ猶これゐても心許ゐく思し召れけん越後殿の二の手ハ片倉小十郎、藤堂の二の手ハ有馬玄蕃頭、井伊の二の手ハ毛利甲斐守、吉川駿河守ゑ命じ給ふ此輩ハ次の日ゐ出立ゐりさてまた越後中將殿ゐハ四月廿六日の夜諸將を集め明日の軍の淨評議有り既ゑ手配等仰渡され皆退りんとする處へ片倉小十郎參着し公此手を心許ゐく思し食れ拙者淨指揮を以て來着す然る上ハ明日の先陣拙者仕つらんといふ越後殿仰有るハ先陣のことハ和濟だり和殿ハ二陣ゑ進みヤさるべし小十郎が曰小身の輩ら先陣をせられてハ陸奥守が一分立ず明日の先陣相協ひヤさずハハと兵を引て龍歸りヤべしと逼りけるゐれゑ依て越後殿も詮方ゐく大和大名ゑ淨斷有りて片倉を先陣と定めらる片倉諸將ゑ向ひ各自先喜悦給へ拙者先陣ゑ向ふ上らハ大坂勢を粉のごとく打破り首ハ各自ゑ拾ハせヤべしと飽まて廣言ゐ

しけれバこれと聞者爪彈きして憎ぬ人ぞなりける斯て四月廿七日の夜の明方ゐ片倉い其先ょ進み諸勢ょヤけるい上方武士い極て憶病あり拙者先陣するうらい一戰ゐ突崩して討取べし今年い去冬と違ひ外堀を埋たれバ城ょて の軍い出來ず手ょ立ものも有まじけれバ無二無三ょ攻伏て大和勢ゐ鼻明せんと勇み進んで龍田山を越闕屋といふ所まで來り向ふを吃度見渡せバ後藤ゲ勢五百計り旭に向つて備へたり小十郎これを見て大ゐ笑ひ不便や大坂勢い寐惚たりと覺るぞ今夏の初先あれバ日の光殊ょ強しこれょ向へバ鐵砲の狙ひ定まらず軍ょい強く忌てとありこれを知ざる寐惚勢追散せと令する際後陣の大和勢追々跡ょ續きしりバ片倉い大ょ怒り大音ょて罵晉けるい方々い我功を奪いんとし給ふり上方勢い惡き癖ょて人の功を偷盜たゲれど今日い拙者先陣致せバ大坂勢を四角八方へ追散し未塵ょするを見物あれとこれを聞人々い惡き片倉ゲ云分りゐと怒れど有禦ょ同士軍もあらず堪忍して進げり斯て片倉小十郎い大坂勢を目掛猛然ょ突入たり後藤も些少鐵砲を擊懸しゲ故と崩れて見せけれバ小十郎い勝ょ乘一人も餘すなと令をゐして追駈る後藤い且戰ひ且逃て敵を導引小十郎ゲ長等別所源左衛門主人の馬の口を取て大坂勢長もすれバ伏兵を以す敵の逃口心得難し無斷と淫進有るゐとヤけれバ小十郎ゲ曰是迄い然る事も有ゐん今日の形容實ょ備へ乱たり三百や五百の伏勢有る共何程の事のあらんと猶も嚴敵追處ゐ耳元ふ相圖の一砲響くや否や押子ゲ千五百余騎擊て出小十郎味方ょ令して後陣を分て防んとする處ょ後藤又兵衛取て返し猛虎の如く駈立れバ押子ゲ勢い大砲を打掛鎗を入て突崩す是ゐ寄て片倉勢思いず吉川のうたへ引退く爰ょ伏たる片山拙兵衛五百目砲を切て放せバ六ケ所ょ伏たる山田幸右衛門、同外記、島田内藏、大川平馬、落合造酒之進の輩ら一同ふ發て八方より大砲を打懸〳〵引包で揉立る後藤押子ゲ勢も馳來りて散々ゐ駈惱せバ討る〳〵者數を知ず片倉小十郎も進退爰ょ谷り

て既ょ危殆見たりける此時後陣の大和勢片倉ゲ惡口い憎しといへども見殺ゐして救ずんバ後日の侮谷も如何ありと神保主膳正、植村父子、松倉豊後守、寺澤兵庫頭の輩ら吶と喚いて走入バ後藤基次是を見てすい大和勢の加いりたるぞ一隊ゐ擊取と千變万化井の字巴の字ゐ駈立れバ大和勢も立足あく漸々一方を切拔片倉を救出しはう〳〵の躰ょて猪の鼻迄逃延たり諸將備へを立直し息を繼んとする處ゐ薄田以下の伏兵七つの大砲を打出せバ何りい以て堪るべき辭々と打倒され右往左往ょ散亂す薄田い例の鎖棒振廻し縱横無塵ょ駈立れバ是ょ向ふ者壹人も助るいあうりけり此時後ゐい後藤、押子ゲ兵勢ひ酷く追擊程ょ馬物具鎗太刀をも打捨て我先ゐと逃て行後藤い十分ゐ敵を追まくり薄田ょ向ひてヤけるい我い是より國分の敵ょ向ふべし和殿い爰ょ有て不意を擊べしとて國分を望て進發す扨も越後中將殿い味方の敗軍を聞て大ょ驚愕是を救んとて先陣既ょ擊出んとする處ゐ上り藤ゐ後の字の馬印を異先ゐ押立基次問近ょ押寄來り大砲を打懸〳〵大軍を一呑ょせんと千變万化して働バ越後の先將早浪主水、横山喜兵衛後藤を目掛て擊て寄る基次い些少も動せず忽ち主水を切て落し返す力ゐ横山と擊拉ぐ是ょ寄て越後勢既ょ乱れんとする處ょ越後の勇將鈴塚一學鎗を捨て突て懸り暫く支へて戰ひしゲ終ょ後藤ゐ討れたり是を始として六度の鎗合ょ越後の勇將六人を討取ける是よりして此處を六鹿山と名付たり斯る武勇ょ誰の敵せん散々ょ成て敗走す此時大和勢い人馬の息を休め再び押寄んと猪鼻を越る處ゐ薄田ゲ勢復擊て出四角八面ゐ切散せバ散々ゐ成て跡をも見ず逃行しこそ淺ましけれ扨又藤堂和泉守い十三峠志貴山を越て道明寺へ擊入敵の後を取切んと戶澤、相馬、南部、勢城、溝口を先陣とし二陣い自ら旗下の勢を以て備へ後陣有馬、六郷、松平内匠頭其勢都合七万三千三段ょ備へて進發す此時長曾我部元親い右衛門太郎を大將として有井四郎右衛門、畑式部、山田源兵衛、久我内匠を始

とし千六百を率て一方より伏させ又右衛門治郎を大將として五百騎よて傍より伏させ右衛門三郎、右衛門四郎を大將として是も五百騎よて一方の伏と定め各自張扱銃三十目と五十目銃を用意す斯三方より伏兵を置又八尾の地藏堂を後より當て小嶋主水、町野十内、淺田新八、並川掃部、星野右近、小嶋長兵衛を始として鶴翼ゑ陣を張せ其身い別久村、平野、牛田、伯岩ゑ淵、弦ゑ崎の在々ゑ隱て敵を待扨又東軍の先陣ゑ進みたる戸澤、相馬以下の輩らい地藏堂ゑ備へたる敵を見て小勢あるぞ一戰ゑ駈散せと喚き叫んで進み行二陣ゑ備へし藤堂勢も同く勇んで進む處ゑ思ひも寄ぬ横合より右衛門太郎ゑ千六百余騎大砲小銃打掛〳〵呐と喚いて擊て蒐れゑ東軍大ゑ騒ぎ立中ゑも相馬因幡守い馬の首を打碎られ眞逆樣ゑ馬より落右衛門太郎い採配打振蒐れ〳〵と令すれゑ有非、畑の猛將共我劣らじと突て入關東勢大ゑ亂れ右往左往ゑ散亂せ二陣ゑ控へし藤堂高虎是い口惜と蹈止り防んとする其處ゑ右衛門次郎、右衛門三郎、同四郎ゑ伏勢三方より引包散々ゑ突立れゑ色めき立て見たるゑぞ後陣ゑ控へし有馬六郷是を救いんとする處ゑ別久村ゑ控へたる元親ゑ猛下勢八方より追取卷突て蒐る其勢ひ恰も龍蛇の如くゑして追立〳〵揉立れゑ關東勢大ゑ討れ散々總崩れとゑり十三峠ゑも足を止むる事能はず小泉迄平崩ゑ成て引たりける爰ゑ又井伊掃部頭い水口郷鶴脊川ゑ陣を取閉ゑり峠を越て打入んと手分をゑす先先陣ゑい小笠原兵部太夫二番い山口伊豆守三番い本多若狹守四番い石川遠江守、京極縫殿助五番い松平下總守是を先手の一備へとす六番い孕石豊前守七番い木股清左衛門、庵原主税八陣い井伊ゑ本陣ゑり此三備へを弐陣とす九番い秋田城之助十番い仙石越前守是ゑ後陣と定めける扨又木村長門守い我手ゑ在りし諸將ゑ對ひ拙者此所へ擊出たるい一世の大事ゑり尤も討死と覺悟を定めたれゑ伏兵をもちへて詮ゑし唯敵勢を雷の森まで深々と引入れい井伊直政ゑ本陣ゑ切入て彼ゑ首を討取冥土の奴とゑ

さんと思ふゑり誰ゑ我ゑ替て此陣を守らんや山口左馬之助進み出て拙者能此陣を守りいん木村大ゑ喜悦び則ち山口ゑ五行五輪の陣法を授け伊藤國右衛門、牟禮彦三郎、同兵庫、大非何右衛門、黒木藤右衛門、高松内匠、大野木半次郎、知德院、佐久間大學、高松兵助、半田市正、何れも廿五人宛を一備へとゑし重成い精兵七百騎を引率し花岡山の影ゑ備へ直政ゑ本陣ゑ切入て勝負を決せんと控へたり然程ゑ東軍い鶴脊川を打渡し向ふを見れゑ四つ目結の旗を後陣ゑたて威儀整々と控へたり東軍の先陣小笠原兵部太夫是を見て扨い木村重成此處を警めたると覺たり率打散して高名せよと鎭砲を打懸〳〵責蒐る城方よい八田金十郎是を向へ戰ひしが暫時待遇て左右ゑ開けゑ少し隔て笹岡右京五百騎ゑ凛然と備へたり小笠原是を見て若謀計もやと猶豫して有る中ゑ山口伊豆守、本多若狹守何程の事わらんと無二無三ゑ切て入ゑ笹岡右京も暫し支へて引退く清水玄蕃是ゑ替て東軍を迎へ戰へゑ松平下總守是を見て敵い優敷も繰引ゑすると見えたり追詰て討取と令をゑせゑ小笠原、本多、石川、山口を始として我も〳〵と追掛來り引包で討んとす清水も能程ゑ待遇左右ゑさつと引分れて初めの如く退けゑ山口左馬之助木村ゑの代と成て四つ目結の旗を靡せ凛然として控へたり東軍い是を見てすい重成ゑ本陣ゑるぞ早擊破れと令をゑし我劣らしと切て蒐る山口左馬之助も勇を振ひ散々ゑ戰ひて八田金十郎ゑ讓り同く後陣へ引退く斯の如くゑして敵を導引難ゑく雷の社迄引入たり此時井伊直政も段々ゑ寄る處ゑ思ひも寄ぬ花岡山の影より張扱の三貫目砲を切て放せゑ半田、高松、牟禮、大非、伊藤、黒木、大野木、佐久間、知德院を始として十一人の勇將何れも廿五人と一組として我劣らじと突て入前後左右ゑ當て戰へゑ井伊ゑ陣中大ゑ騒ぎ押合蹈合討るゝ者數を知ず中ゑも孕石豊前守い衆を勵まし令する處を知德院走寄て筋金の入たる八角の樫の棒を以て擊けれゑ惘ひべし豊前守ゑ首い胴ゑおし入て馬諸共

よ死てけり木村重成ハ本陣よ切入て直政よ組んと大音ゐ名乗けるハ字多天皇の後胤佐々木の末流木村長門守重成とハ我事あり汝直政ハ頼政ゞ良等猪の早太ゞ後流あれバ敵ゐ取て不足あれど今東三拾三ヶ國の筋頭を預れバ勝負して得さすありといひけれバ井伊の家士是を見て重成あるぞ逃すおと八方より追取巻を木村ハ面倒ありと怒りを おし四角八方よ切立薙立反返し忽ち廿四人を切て落し直政目掛て撃て寄る直政既ゐ討れんとする處よ井伊の近臣十三人掛隔たり討死して是を救ふ半田、大野木、高松、伊藤の羅千蠻万化ゐ揉立れバ井伊ゞ軍卒散乱して右往左往よ逃散たり城兵ハ何方迄もと追撃程よ鶴脊川ゐ追込れ死者數を知ず木村ハ敵を思ふ儘よ追散し堤の上ゐ馬を乗上軍扇を開きて暫く息を繼ゐける東軍の先陣小笠原、本多、石川の羅ハ敵よ釣れて深々と雷の社迄ハ進む處ゐ後陣の鯨波の聲ゐ驚きこハ何事と色めく處を山口左馬之助、八田金十郎、笹岡右京、清水玄番の羅大象の涙を蹈て海の上を渡るゞ如くよ取て返し關東勢を退まくれバ本多、伊藤、石川、小笠原、京極、松平の惣軍立足もあく敗北して主従親子も顧見ず我先よと逃行ける山口ハ敵を十分よ追撃して重成と一手よあり備を立て控へける此時幸村ゞ命を受て木村ゞ手へは増田兵太夫後藤ゞ手へハ望月主水長曾我部ゞ手へハ海野左衛門各自五百騎を率て走來り國分志貴山閣ゞりを打越て頻りよ追詰る休をあせバ井伊藤堂を殆として最初の手並よ身振をあし峠にも止り得ず大和の國へ引取ける扨又家康公ゐハ廿六日ゐ南都ゐ陣入有り新將軍ハ廿七日辰の刻よ陣着あり幸村是を知て南都よ間諜を入埋火の法を以て廿八ヶ所よ火を掛て焼立る折節東北の風烈敷して余炎天を焦しける公大ゐ驚愕給ひ般若坂へ引給ふ處よ思ひ寄ざる處より真田ゞ間諜鎮砲を打出し諸將の膽を冷したる其騒動大方あらず公よも膝頭と顔先とゐかすり疵を受給ひ落馬有りけるを大久保彦左衛門脊負奉り邪魔よ成る味方を切拂ひ長池迄逃延ける此物音

よ驚き大和ゐ在合諸大名我先ゐと走付て陣安否を承ハんとすれども所々の火の手よ支へられ又ハ木村、後藤、長曾我部ゞ鯨波の聲貝鐘の音よ驚きて南都へ容易入事能ハず漸々夜明方よ長池ゐ集りて公を守護し奉つる扨両將軍よハ南都の容子を陣間合有るよ別義あしとの事あれバ父子共南都よ入せ給ひけり

第四拾回

島田所之助遭三手困難
飯島太郎左衛門尽レ忠

斯て両將軍ハ南都よ入せ給ひ陣評議ある新將軍宣ひけるハ何とぞ木村長門守を味方よ招ゥバ大ゐ利爲んと仰有る井伊直政ヲ上けるハ賢ゐ重成陣味方と相成ハハゞ味方の利潤此上ハ有べからず然れ共彼中々降參すべき者よ非ず愬ひよ陣使を立給ひて味方の恥辱共相成べき義もやとヲ上る新將軍重て仰有るハ掃部頭ゞヲ條其利有りといへども熟々大坂の有様を見るよ上ゐハ淀殿諸將の諫を用ず傍らよハ大野ゞ徒侫弁を揮ふ是よ依て諸將の心意區々あり斯る時あれバ重成忠意を懷く共淀殿大野よ飽果て味方せんも測り難し若木村味方ゐ加ハらバ是を傳へて降參する者多からるべしと大陣所よも豫て重成を惜ハせ給へバ先招いて見よと上意ある是よ寄て嶋田所之助陣使を承まハり木村ゞ陣よ趣き關東よりの陣上使ある由をヲ入る重成ハ紫の陣幕を張て曲床よかゝりて使者を召出す島田禮を厚くして公よりの陣書を出しけれバ重成是を受取て披きみるゐ此度陣味方ヲよ於てハ河内一ヶ國を下され永く陣客分との事あり重成是を見て大に怒り家康我を去らず俸祿を以て招くハ何事ぞ我秀頼公の恩德を蒙る事深し斯る時よ臨んて何ぞ關東の味方すべきや此度よ於てハ死を必して城を出たり夫神國ハ清濁を尊む然るゐ今家康ゞ書を取て我兩腕を穢したり軍中よ使を斬ハ禮ゐあらずと雖も我腕を清むべき物あし汝迷惑ある所へ使して氣の毒あれ共汝を斬て我腕の穢れを雪ぐべしと忽ちゐ島田ゞ首と打落し從者よ向ひ汝ゞ命ハ取よ及バず耳鼻をそぎて追帰すべきあれど夫よてハ國よ歸り妻子よ逢時面目有まじ頸

ハ跡より生る物ありとて悉皆髪を切て島田ゞ死骸を馬ゐ乘て追返し扨木村助五郎、伊藤圓右衛門を招き汝等ハ近江國圓福寺より我ゑ從ふて忠節他ゑ異る者あり定めて討死の供を願ふべけれ共努々此事恊ふ可らず我君秀頼公ハ淀仁君ゑ在して臣の諫を能用給ひ誠ゑ古太閤にも劣り給ハねども淀殿といふ淀方ハ黒くも君の光を覆へゞ淀行末忘元あし汝両人ハ生殘り我ゐ成替て君の淀先途を見奉るべし我言辞を背あゞ主從の縁も是限りなりと堅く命じ島田ゞ首ゐ書ゐを添て是と我君ゐ奉つれと詫し切ヤけるハ往昔瀬田義貞ハ兜ゑ名香を焚て討死し給ふ我も是ゑ習ふべし此後名香の薫りゑる首取しと聞ゞ我討死と知るべしとて名香を兜ゑ焚占是を着して忍の緒を眞結ゑし弗と切て再び脱ず魏々然として見えけれゞ両人ハ主命ゐ背く事能ず是非ゐく大坂ゐ立歸る茲ゐ若江郡高井田村ゐ飯鳴太郎左衛門と云者あり古太閤明智と合戦の時手作の瓜を献上して祝ひ奉つりゑる功ゑ寄て此村三百石ハ作取の淀朱印を給ハりけれゞ太郎左衛門此恩德を羅ひ去冬も白米五百石を奉つり籠城を望むと雖も大野是を許ず土民の分として籠城抔とハ案外ありと兵粮を受取て追返す然るゑ太郎左衛門思ひけるハ何卒大坂の淀力と成て古太閤の淀恩を報じ奉つらんと此度又重成ゞ陣所ゐ來りて淀加勢ゑ加とらん事を望む重成ヤけるハ其志操ハ最優しけれゞ我ハ討死と覺悟して城を出今若せし兜ゑ再回脱ぬ所存あり末期の軍ゐ加勢を頼みし抔と後代の人口ゐ懸らんも口惜けれゞ此事ハ恊ふべらずとの事ゐて飯島も詮方ゐく我家ゐハ歸りしりど去年と言ひ本年といひ両度迄嫌れしを無念ゐ思ひ我士民ゐれ共太閤の淀恩を報せんと思ふ事ハ誰ゐゐ劣らん能々此上ハ我々討りゐりとも両淀所の淀陣ゑ切入て討死すべしと我子三郎左衛門孫三七を始として廿余人を催し妻子をゞ悉皆切殺し新將軍の若江ゑ淀陣を召れし際忍び入て散々ゑ射奉る是ゑ依て淀陣中大ゐ騒ぎ將軍も淀馬ゐ召る、程ゑ本多出雲守、小笠原信濃守走來て追取卷飯島父子三人ハ千變万化して敵を切拔主從九人ゑ成て雷の社迄引退き太郎左衛門、三郎左衛門父子腹掻切て死す郎等六人も皆刺違ひて死ゑりける孫の三七ハ獨遺言ゐ任せ祖父と父の首と討て木村ゞ陣ゑ走到り下拙等ハ土民ゐてハへ共斯の如く討死仕つり將軍の淀陣を驚がし古太閤の淀恩ハ報じハ是淀覽ハへと二ツの首を出しけれゞ重成聞て打感きこハ殘念の次第ゑ我百姓を嫌ひて人數ゑ加へざるゑハあらず我人數既ゑ足ぬる故加勢をゞ忌しあり斯る忠義の人々を無益ゐ討死させたるハ是一生の誤りありと大ゐ後悔し一封の書を添て幸村ゞ方へ送る幸村對面して事の容子を聞終り嗚呼殘念あり百姓ゑ筒程の者あらゞ將軍を討取事ハ安かるべきゐ最惜むべき事あり之郎等増田兵太夫を召出し汝當春悴を失ふ之此者ハ箇様〳〵の者ゐて武勇も勝れて見にゞ汝ゞ嫡子として暫時ありとも娯樂べしとて三七ゐも能々ヤ聞せしりゞ両人とも大ゑ喜悦増田と父子の交りをあし幸村ゞ陣ゑ止りける爰ゐ又後藤基次ハ廿八日の夜山田幸右衛門を召てヤけるハ我ハ軍師の命を受て熊野の新宮ゐ赴く之汝我ゐ替りて此所を守り敵寄來らゞ血戰して討死すべしと懷中ゑり畳紙を取出し是ハ大切の者あれゞ討死の際迄も肌ゑ付て失ふ可らずと命ヤ片山勘兵衛山田外記ゐ向ひ汝両人ハ幸右衛門を我と思ひ忠死を遂べしとヤ付次ゑ錦田卓人を召和殿ハ櫻田八幡の前ゑ陣を取將軍國分の軍散じて後道明寺へ淀馬を入給ふ際箇様〳〵ゑ待遇其後潔よく討死して白樂ゞ淵の惡名を雪ぎ給へとヤ置其身ハ片山一學、山田帶刀、同助左衛門、打越繩之助を召連て熊野の新宮ゐゞ向ひける

傳ゐ曰後藤國松君の淀供して歸る道ゑて山田助左衛門腹痛して歩行恊ず又兵衛是非ゐく其所ゑ置て歸りしゞ此者太平の後紀州家ハ召出され今ゑ其家連綿さり

第四十一回

桑名彌治兵衛密報　渕田討入東軍ノ本陣

長曾我部元親ハ別久村ゐて廉堂ゞ大軍を撃破り八尾の池

藏堂を後に當て陣を取ば藤堂高虎い敗軍を集め再回勝負を決せんと志貫山を越て陣を取る茲ゐ桑名彌治兵衛と云者あり嘗い長曾我部ゞ臣あれ共關ヶ原一乱の後浪人して有りしを藤堂彼ゞ武勇を甚ひ大祿を與へて良等とす此時高虎一つの謀計を案じ出し桑名を召てヤけるい汝古主元親へ内通の書を認め箇樣〳〵に謀計をあせとヤ付る桑名も古主の事と思へども否む事もあらず内通の書を認め元親ゞ陣ゐ贈る元親これを披きみれば何時にても戰ひの節後陣より裏切して惣味方仕つるべしと桑名より内通の書あり元親大ゐ喜悦桑名い古主を忘却すと感心して堅く約束して使を歸す跡にて右衛門治郎ヤけるい此事い何共心得難しと言へば元親莞爾と笑ひ是い敵の謀計に極つたり桑名箇程の事を巧ひに何ぞ使を白書に差越べき事わらんや我敵の謀計に付て高虎を破るべしと手分をなす各自謀計を受て引退き大砲小銃の用意をして向ひける去程に藤堂高虎い桑名を以て敵を釣寄此度こそ大坂勢を打破初めの恥辱を雪んと密に喜悦藤堂仁右衛門同圖書同新七を大將とし桑名彌治兵衛を後陣とし其勢八千余騎深田の八丁畷に押寄る此時渡邊勘兵衛い大道の堤ゐ陣を取て有りけるゞ是を見て大ゐ驚ろき使を馳てヤけるい其隊へ必ず懸り給ふべからず拙者と一隊ゐ成て惣進有るべしとヤければ藤堂仁右衛門答てヤけるい惣自分い惣勝手次第あり拙者に於ていい敵を見ていい少しも猶豫い致さずと八丁堤ゐ押寄る是ゐ依て渡邊も詮方なく是に續く傳ゐ曰此時藤堂仁右衛門渡邊ゞ詞を用ず我身も討死し味方の敗北を引出せしい故有る事あり去冬陣の時渡邊出丸の戰ひに後れを取しゞ仁右衛門高虎ゐ向ひ常々殿に渡邊い一騎當千我々共い物の用にも立ざる樣ゐ仰られしへども勘兵衛い多くの兵を失ひ我々共い却て箇樣の仕損じい仕つらずとヤす高虎答て渡邊假分仕損じを致す共汝等に比較ば十倍ありとヤされしゞ仁右衛門是を聞て扨々口惜き次第あり此度〻是非討死せん

と思ひける是に依て始終渡邊と心合ず八丁堤に懸りし故高虎の手配瓦落離と違ひ大敗北といあり去程に藤堂仁右衛門い八町堤ゐ兵を纏めける處ゐ思ひも寄ず右衛門太郎中道より撃て出三貫目の張扳砲を打懸れば藤堂仁右衛門を始として名を得し侍ひ微塵ゐ成て失ける右衛門太郎兄弟四人得たりやあふと突立れば何のい以て堪るべき左右の深田ゐ追込れ討る〻者數を知ず後陣に控へし桑名彌治兵衛兵を令して味方を救んとすれども頼れ懸りし味方に運て散々ゐ敗走す渡邊勘兵衛い先手の敗軍を左右に開らせ追來敵を杙留んと備へを立て控ゆるを有井四郎左衛門畑式部勇と稱つて斬て蹈れば渡邊是ゐ當らんとする處ゐ中野源兵衛久武内藏助梵天村より懸て出大砲小銃を打懸〳〵横鎗を入て突崩せば渡邊勇ありと雖も堪る事能ず散々に撃れて敗走す此時高虎い後陣に在て謀計の爲ざるを覺り大ゐ氣を怒ち早引取と令あせば藤堂ゞ伏兵有馬戸澤相馬の輩ら一隊に成て引行處を右衛門太郎兄弟四人寂然に駈立れば畑中野久武有井ゞ輩ら渡邊を追まくつたる威勢ゐて突て蒐れば有馬相馬戸澤の惣勢乱れ立て高虎ゞ本陣に頼れ懸る此時元親も兵を引て走來り大炮を本陣に打懸れば高虎も大に亂れて十三峠に引退く元親嚴敷追撃して首を取る事一万四千余其外馬物の具を奪取り本の地藏堂に歸て陣を取是に依東軍大に恐怖を為し再回押寄んと言ふ者もあり藤堂い両度の敗軍ゐ面目あしと雖も詮方なく公の惣陣へ此由を言上す此時公ゐい三輪ゐ惣本陣を居られ伊達政宗い竹の内峠を越古市川を渡りて國分へ向ふ加賀勢い二丈ゞ嶽より越前勢い國分峠より押寄る此貳の隊い越前中將殿あり大和大名い殘ず龍田越より押寄る惣勢合せて七百六千余騎とぞ聞ける此時山田幸右衛門弟を招きヤけるい我後藤殿の代りと成て今日討死をするあり汝い是より城内ゐ歸り我に代りて忠を尽すべしと歸し置其身い後藤ゞ旗馬印に五千の兵を五隊に備へて敵を待去程に五月朔日朝五ツ時ゐい奥州の先

陣片倉小十郎鎖砲を打懸〳〵責寄る山田ハ故と撃すくめられたる躰をおし近々と敵を釣寄三十目五十目筒を百挺計り薄々と打出せバ伊達勢是ゑ打立られ色めく處を吶と喚て走入巴非の字ゐ駐立れバ片倉此威勢ゑ辟易して逃行を輕々追撃兵を纏めてさつと引是を見て二丈ゲ嶽より押寄たる加州勢吶と喚て撃て蒐るを山田外記一千余騎ゐて向ひ合せ唯一揉ゑ追崩す越前勢ハ峠より異一文字ゐ打下るを行方兵庫小川十内一千余騎にて大砲を打出し撓む處へ鎗を入千變万化と駐立れバ揉立られて越前勢立足もあく敗走す龍田越よりハ大和大名一隊ゐ成て押寄るを片山勘兵衛一千余騎ゑて大砲を打込バ先隊の勢皆破多〳〵と打倒され驀立を片山勘兵衛威勢ゑ乗て揉崩せバ一戦ゑも及ず右往左往ゑ遁散るを神保主膳大ゑ怒り爰を引て誰ゐか面部を合すべき引な〳〵と令をなす

此神保主膳ハ越中の神保ゑて三万五千石を領し名高き家あり

片山勘兵衛是を見て鎗追取て突て蒐る神保か從兵主を討せしと懸隔たるを事ともせず右と左ゐ追まくり終ゑ神保を追詰て真たゞ中を突通し猶も喚て斬立れバ大和大名立足もあく散々ゐ成て崩れける片山ハ能程ゑ追撃て兵を纏て山田と一隊ゐある此時片倉小十郎ハ始の軍ゐ懲もせず八百六十の銃先を揃へ打て蒐る幸右衛門少しも驀ず敵ハ三五の小銃ゑ味方ハ三十目五十目あり何程の事あらんと鉄炮一度ゑ切て放ち再回片倉勢を追崩す加賀越前越後の勢一隊ゐ成て撃て蒐るを喚き叫んで八方ゐ請流し千變万化して戦ひ加賀の先隊を追崩し越前越後勢を斬崩け一息ほつと繼所を大和大名走懸るを少しも驀ず惣勢を一隊ゐおし吶と喚て突て蒐り一戦ゐ追排ひけれバ越前越後の両軍後を取切んと追來るを心得さりと山田幸右衛門同外記坂より上へ追登す奥州勢又斬て蒐るを事ともせず走散す斯して味方を引纏め人數を見るゐ弐千五百計りゐ成ゐける時ゑ五月朔日巳の上刻あり大坂勢ハ今日を限りと定め

し事あれバ少しも怖れず弐千五百を異丸ゐ備へ息を繼てぞ控へける大和勢の内より松倉豊後守弟十左衛門を先陣として押寄る片山畑是を迎へて突崩し豊後守ゲ本陣ゑ斬て入バ松倉大ゑ恐怖て引退くを片山勘兵衛遮さし者と追蒐る十左衛門引返し命と惜ず防ぎ戦ふ是を見て新庄、遠藤、須賀の輩ら松倉討すな十左衛門を救へと鎗を入て突て蒐る片山ハ少しも騒ず敵を四方ゐ追散し猶も松倉を目掛て追詰る松倉ゲ長等遠藤武者之助とて大力の勇士踏止つて片山ゑ組付勘兵衛も亦勝たゐ勇士あれバ何の苦もあく遠藤を鞍の前輪ゐ押付て首掻斬て捨たる處ゑ誰と知ず後部より兜を去たゝか撃者有り撃れあゲらゑ掻摑み兩馬ゲ問ゐ倒と落取て押へて其首を取んとせしゑ能見れバ年齢ハ十五六ゑしてまだ角額の若者あり兜の押付の板を見れバ今討取たる武者之助と同く三ッ龜甲の紋を付たり扨ハ遠藤ゲ悴よあ優しくも父と最期を同うせんとする歟斯る者ゑ首を遣すハ本望ありと思ひ聲を掛てヤけるハ我ハ後藤又兵衛ゲ長等片山勘兵衛と言ふ者あり下より突通し跳反して高名せよと冒ふ下より答て我ハ今足下ゑ討れたる遠藤武者之助ゲ一子龜之助とヤす者あり斯敵ゑ組敗れあゲら貰ひ首して何のせん早我首を討給へと云勘兵衛之を聞て戦場ゑて父の首を取返し其場を去ず敵を討ハ拔群の高名あり迎彼ご刀を手ゑ持添左の脇腹よりぐつと突込我と我手ゐ一撈りして迎も死る命なれバ汝ご如き孝子の手ゐ首を渡すハ本望なりと言へバ龜之助も涙を流し敵ながらも斯る勇士の首と得たるハ武門の名譽此上なしと終ゐ片山ゲ首を打落し陣刎織ゑ添て主人松倉ゑ奉つる松倉則ち公の傍貰撿ゑ備へたり公龜之助ゑ傍前ゑ召れ戦ひの容子を傍尋あるに龜之助始め終を有の儘ゑ言上おし是ハ貰ひ首ゐてハとヤす公是を聞し食れ能貰ひ首ありとも討取ハとヤべきゑ有の儘ゑヤす條神妙の事あり討取たるゐ優れりとて傍感状を下され其上松倉ゐ傍所望有りて傍小性ゐ召出され遠藤主水と名乗ける武士たる者ハ假ゑも

偽りい言ぬ物あり扨又山田幸右衛門い片山ゑ討死を後れたるといふ處へ加賀勢又押寄來る大崎宗彌行方兵庫走合して秘術を盡し切拂へゞ片倉小十郎足輕を令して數百挺の鉄砲を切て放す此時山田い炎天の暑氣ゑ堪兼兜を脱胸當を外し着込計りゑて令とあす處ゑ片倉の足輕ゞ打出す鉄砲ゑ山田幸右衛門ゞ胸腸を打貫れ眩眩きあがらも左の手ゑて胸を押へ右の手ゑて採配打振八方ゑ下知をゐし何あく片倉を擊散し手勢を見れゞ從兵悉皆討死して唯山田外記壹人あり幸右衛門い是迄なりと邊りの在家に火を放ち山田外記に謀計を言含め腹十文字ゑ切て死たりける山田外記い空死してぞ居りける片倉勢是を見て我首取んと集る處ゑ山田外記直くと立ゞ夫りや生たいと迎出す外記い聲荒汝等い死首を取ゑ來る歟是い道理ゑり生首い些取悪からん併し左のみゑそるゝ事ゑもわらを吹方い皆討死して殘るい我身壹人ゞ主人甚次を介錯して首を土中ゑ埋たれど勇士の首を土中ゑて朽させんも殘念ゑりと幸右衛門ゞ首を羽陣織ゑ包み明細書を血の付たる竹ゑ狹ゑ立置て勇士の最期を見よやとて腹十文字ゑ掻切て我手で首を刎落しさも勇ましく死ゑりける是を見るより片倉小十郎走寄て後藤ゞ首を明細書ゑ添て公ゑ奉る其書ゑ曰

去冬以來度々の合戰ゑ城方勝利と得ずといふ事ゑし然れども德川家の運强し故ゑ始終の利を得給ふ今月今日後藤又兵衛を始とし諸將討死して國分ゑ命を落すい城内ゑ大野と云佞人有りて淀殿我々の謀計を用ず斯相果い上い運利運已後定めて大野父子ゑい高祿を下さるべし然有るゑ於てい我々一念の惡鬼と成て德川の家を三年とい立置まじ若又彼等父子を重き刑罰ゑ仰付られいい我々ゞ憤怒も解ずべき者也

月　日

と有りけれゞ公も身の毛彌立て恐怖給ひぬ扨首實檢有るゑ醒有て後藤ゞ面を見知りゑる者あけれゞ眞偽如何と思食しける所ゑ黒田甲斐守參上しけれゞ則ち運前ゑ召れ後

藤ゞ首を運尋有るゑ長政答て申上けるい此者拙者ゞ家を出候て久敷相成候得ゞ惜ゑ夫と申上げ難くい得ども甚次あらゞ左の小指半分程切てあき筈ゑていと申上る依て死骸を取寄運覽有ゑ果して小指半分あし扨い後藤又兵衛が討死ゑ遂ひあしと有て兜を見給へゞ一紙を入ゑり外ゑ此一書い黒田甲斐守ゑ運見せ下さるべしと記しゑり則ち長政是を見るゑ朝鮮ゑて歸國の上十分一の知行を遣んと約しあゞら是ゑ遂ふゞ故ゑ國を去たる次第公より運招の時ゑ參らざる意趣秀頼公より七十貳万石の運朱印下されし條筑前を去時に五万貳千石に一粒足ずしても有付ずといひし事の遂はざる事を書記し置たり扨包紙を披て見給ふゑ秀頼公の運朱印有て運利運の後い七拾貳万石下さる可き趣きあり公を始め奉りて言葉の遂はざるを感じて止ず公宣はく甲州い些少成事ゑて惜き侍を失ひたりと仰有けれゞ長政い面目を失ふて退きける是に依て彌々後藤ゞ討死ゑ決したりと運喜悦有りて五月朔日申の上刻國分へ運入有りて道明寺ゑ運本陣を据らるゝ處ゑ樂田山ゑて何者共知れずヤヲハの掛聲ゑて朝長の曲を謠ひ居るゆり如何ある馬鹿者ぞと諸將不審をなし一番に新庄駿河守、沼田大膳亮、神保庄三郎、甲斐庄喜右衛門、津賀攝津守二番い植村豐前守、筒井隼人正、本多美濃守、高木主水正、遠藤但馬守三番い寺澤兵庫頭、松倉豐後守、市橋下總守、一柳監物四番い片倉小十郎五番い酒井左衛門尉ゑり此時走來て大運所樣の運入なるぞ何者ゑれゞ斯の如くゑり哉と聲々に呼いれ共湯田ゞ諸へ猶止ず人々腹を立て慮外者なり討捨よと鉄砲を打懸湯田隼人い物ともせず結城權左衛門、角部虎之助、山川兵部、小川治郎右衛門、同庄右衛門等を前後左右ゑ備て三十目五十目の銃を一度ゑ打懸大和大名の撓む處を打破りて走通る二三番の備の諸將總蒐りゑそるを殘らずうち破て片倉ゞ陣ゑ走込八方へ乘廻し終ゑ酒井左衛門ゞ備へゑ切込ける惣じて城兵七百の小勢ゑれども何れも必死の和を顯いし壹人も生んと思ふ者ゑく踏

込々々討取けれバ關東勢い然のみ死を志ざす者あけれバ五手の勢皆やぶれ八方へ引退く湖田い拾貳貫目の刄金砲の棒わて人馬の嫌ひあく打殺し終よ道明寺の陣本陣よ撃て蒐る酒井雅樂頭、須賀長門守、両勢懸隔て命限りわ攻戰ふ中よも酒井の軍中より增尾鍋藏と云大剛の者湖田を討止んと大薙刀を打振て斬て蒐る湖田い物ともせず增尾が薙刀打落し拾貳貫目の棒を以て發矢と打バ首い胴あよへ込て馬諸共よ死てける是を見てより寄付者もあき處よ蜂須賀の郎等小道甚内同正藏とて聞もる勇士打合て湖田よ組付んとす結城權左衛門是を見て何するぞと正藏が上帶を引掴み片手投よ打付けれバ馬武者貳騎を打越て三騎目の者よ當て両人共一言もあく死たりける角部虎之助い小道甚内を斬て落し湖田を助て切入たり今い公の陣も大よ騒き此時越前勢鉄砲三百挺を瓶懸よ打けれバ加賀奥州勢も是を見て銃先を揃へて打はゞに湖田が勢的わ成て討れける然ども結城角部山川等い討れざれバ湖田を助て響田の方へ引取ける始の五隊是を見て此者共を遁さトと一隊よ成て撃て蒐る湖田隼人納と喚て駈込四方八方よ當て切て廻る湖田い白帷子よ白糸威しの鎧を着るが敵の血汐よて皆紅ゐよ染み渡り面い朱を以て塗が如し尤あるゝあ拾貳貫目の棒よて人馬の嫌ひあく打碎き敵を殺す事數を知ず此圍みを衝と走抜て味方の者を顧回るわ角部い酒井が陣わ圍まれゝより又引返して酒井の陣を打破り虎之助を救ひ出せバ小川、山川の両人も亦大和勢わ包まれゝより蒐る隼人正大よ恐怖馬を打て逃行を湖田追駈て一撃うてバ叫と血を吐鞍の前輪わ取付と郎等懸隔て陣中わ歸りけれバ其夜空敷ありよける湖田い五隊の圍と打破り味方を見れバ主從些少十一人よありよける安わ於て響田山よ走上り諸ひ殘しの朝長を諸ひ酒宴して居る所へ大和大名酒井、片倉の輩ら又押寄る湖田も今い是迄ありと鉄砲を燒捨其一文字よ斬て入四角八面よ駈廻り敵を撃事數を知

ず此時結城權左衛門を始め從將悉皆討れて殘るい湖田隼人ゐり隼人い猶も笠印袖印をりあぐり捨道明寺の陣本陣よ忍び入公を尋ね奉つる本多三河守い公の陣側を守護して有りけるが目疾き智者あれバ是を見付味方よ命をあせバ大勢拔連て湖田よ撃て蒐るを右手へ投すへ左手へ斬伏大音よて名乘けるい我い是城方の勇將湖田隼人ゐり大陣所を討んと思ひしよ見付ざるこそ口惜けれ土人形同前の奴原五百や六百取卷迎切拔て歸らん事最安しされど討死と定めされバ此所よ命を落し一念の惡鬼と成て一々食ひ殺して呉んずと胸當を解腹十文字よ掻切て明星の如き眼わて敵を疾視し祟狀い恐怖かりける次第ゐり然バ誰有て首を取んと近寄者ゐし公此由を聞し食れ斯る勇氣を以て討死するい淀殿大野を能々憎みし者ゐらんと死骸を厚く葬らし給ひしとゝ

第四十二回

井伊木村戰若江豐臣滿喜六獻二單衣一

去程よ湖田討死わ寄て公い道明寺より平野の方へと急が世此時結城權左衛門を始め從將悉皆討れて殘るい湖田隼人ゐり隼人い猶も笠印袖印をりあぐり捨道明寺の陣本陣よ忍び入公を尋ね奉つる本多三河守い公の陣側を守護して有りけるが目疾き智者あれバ是を見付味方よ命をあせバ大勢拔連て湖田よ撃て蒐るを右手へ投すへ左手へ斬伏大音よて名乘けるい我い是城方の勇將湖田隼人ゐり大陣所を討んと思ひしよ見付ざるこそ口惜けれ土人形同前の奴原五百や六百取卷迎切拔て歸らん事最安しされど討死と定めされバ此所よ命を落し一念の惡鬼と成て一々食ひ殺して呉んずと胸當を解腹十文字よ掻切て明星の如き眼わて敵を疾視し祟狀い恐怖かりける次第ゐり然バ誰有て首を取んと近寄者ゐし公此由を聞し食れ斯る勇氣を以て討死するい淀殿大野を能々憎みし者ゐらんと死骸を厚く葬らし給ひしとゝ

第四十二回　井伊木村戰若江豐臣滿喜六獻二單衣一

去程よ湖田討死わ寄て公い道明寺より平野の方へと急が

せ給ふ大將を始め人々も心撓みけるを察して長曾我部元親木村長門守わ密事を通じ百姓と形容を換五ケ所ニ埋伏す公わい斯る事共知し食ず陣本前後を守護して進む處わ長曾我部右衛門太郎同四郎両方より思ひ懸ゐく切込ければ陣供の衆中大よ慌きすはや伏勢ぞざんあれと左右わ別れて防ぎ戰ふ斯る處へ後よりい右衛門三郎右門衛四郎前よりい元親自ら大軍を率て撃て蒐れバ何かい以て堪るべき去たゝか討れて敵する者ゐく逃散たり公い大久保彦左衛門永井右近を始め三十人討りよて漸々圍みを遁れ逃させ給ふ元親い何所迄もと追駈わぞ大將を落し奉らんと各自踏止つて命を捨戰拾壹人迄討死す其隙わ公い此所を遁れ逃よ落させ給處よ木村重成三十騎計を率て討て出遁を遮り撃て蒐る是い敵じと陣供の人々必死わ成て防と雖も木村が勇猛よ當難く廿八人迄討れける然ども大將よ陣を遁強く此難を遁れ給ひ馬よ鞭を加へて走り給ふ大久保を始め皆敵を防ぎて水野帶刀只壹人陣鎗をかたげて陣跡よ

縋たり然ども烈敢遁させ給ふ故道よて水野倒と轉ける大將馬上より帶刀縋け千石遣るぞと仰有る是を力ゐ漸々と供せしが又倒と轉けるを千石成ぞ縋と上意ゐ又起上り走りけるが雨揚句の山道故辷る事度々あり千石〳〵の供聲を力よて漸々山の際豊浦村迄來たりし處供馬も疲勞て前膝折て倒と伏ければ大將い異逆樣よ落給ひ井戸の中へ轉び給ふ水野大よ驚き鎗を捨て引上奉つりけるよ供身い泥だらけよ成せ給ふ斯る處へ大久保走付て共に介抱し奉つり豊浦村百姓喜六が方へ入奉つりける喜六大將を一目見て是ぞ大御所樣あらんと大に歡ひ奥の一間に入奉つり種々歎待けるが御召物泥に染さる故召換を奉つらんと思へども喜六方よ袖を通さざる着物あく肌よ付たるものい恐れわりと急よ木綿を裁置物を縫て奉つり大將は横嫌麗は敢勝負木綿目出度と上意有し故今の世よ至る迄ぞやうぶ木綿と名付て五月朔日よ着るあり後ゐ豊浦の喜六い帶刀供紀よて八百石を給いりたる事い世の人よく知る處あり扨又井伊掃部頭い惣軍よ命して株瀬川の東の橋よ押寄る此時山口左馬助木村よ向ひヤけるい明日い拙者一番を仕つり討死仕度しなり其故い兄よてしふ伊豆守方よりヤ越ししふよい唯今よても心を改め關東の供味方仕つるゐ於てい一生懸命の地を下さるべしとの義なり我今日よ至り祿を貪りて汚名を末代ゐ止むるの行ひを仕つるべきや降參の躰よ待過敵陣に至りて兄伊豆守と刺違へて相果ヤす了徜よてしふ其騒動ゐ供攻入供尤もよ存ドしなりと重成之を聞て當あれば止めヤべけれど各自討死と定めたる上あれば强て止めヤさねば供先ゐ爲るべしとて其身い黒木、笹岡、大礼、大野木、伊藤、松井、黒井、知德院の輩らを左右よ備へ本陣よ斬入て掃部頭と刺違んと扣へけり去程ゐ五月朔日左馬之助い株瀬川の西ゐ來り兜を脱て降人の躰よ待過川を渡り往けば伊豆守喜悅て近々と馬を寄る時よ左馬之助鞍坪よ畏まり万事頼み奉つると言ふかと思へい突然寄て伊豆守と引組春中より我腹ゐ掛て突通し古太閤の供扨又井伊掃部頭い惣軍よ命して株瀬川の東の橋よ押寄る此時山口左馬助木村よ向ひヤけるい明日い拙者一番を仕つり討死仕度しなり其故い兄よてしふ伊豆守方よりヤ越ししふよい唯今よても心を改め關東の供味方仕つるゐ於てい一生懸命の地を下さるべしとの義なり我今日よ至り祿を貪りて汚名を末代ゐ止むるの行ひを仕つるべきや降參の躰よ待過敵陣に至りて兄伊豆守と刺違へて相果ヤす了徜よてしふ其騒動ゐ供攻入供尤もよ存ドしなりと重成之を聞て當あれば止めヤべけれど各自討死と定めたる上あれば强て止めヤさねば供先ゐ爲るべしとて其身い黒木、笹岡、大礼、大野木、伊藤、松井、黒井、知德院の輩らを左右よ備へ本陣よ斬入て掃部頭と刺違んと扣へけり去程ゐ五月朔日左馬之助い株瀬川の西ゐ來り兜を脱て降人の躰よ待過川を渡り往けば伊豆守喜悅て近々と馬を寄る時よ左馬之助鞍坪よ畏まり万事頼み奉つると言ふかと思へい突然寄て伊豆守と引組春中より我腹ゐ掛て突通し古太閤の供

目見仕つると馬より落貫りれて死たりける是を見て雙方の長等百五十人突違ひ刺違へ同と枕よ死たりける重成い此騒動よ乘ゞて井伊ゞ陣よ切入ば卒禮高松の勇將ども各自よ相敵を取て命限りに攻戰ふ總て城方い今日を限りと定めたれば命を惜む者壹人もなく猛虎の勇を奮ふて四方八方を貫破れば今迄一足も引ドといひし寄手の勢も有槃命の惜ければ顧れ懸つて見えよける重成い本陣ゐ切入て直政と勝負を決せんと走廻る名を惜む輩ら懸隙たりて討るゝ者廿三人終ゐ直政よ言辭を懸東卅三ゞ國の猛頭拙者よ遲立られ度々の軍よ後を見ずる法や有る此度い是非ゐ勝負ゐれと突て蒐る直政も鎗と合て戰へば何かい以て堪ゆべき既よ危き其處へ藤田能登守走來りて支へける其際ゐ非伊い遙よ逃延けり重成い大ゐ怒り汝故よ思ふ欲を取逃せしとて忽ち藤田を突落し味方を纏め見るに城方も餘程討死して九百騎許りゐ成たりける掃部頭も度々の敗北よ面目無くや有りけん今度い是非とも討死せんと冷すれば其等木股清左衛門、庵原主税、組下溝口伯耆守、石川主殿頭、仙石越前守水野日向守、松井市正抔五千の勢ゐて引返す木村重成是を見て何うい些少も猶豫すべき吶と喚て突て蒐れば井伊も采配取て命をおし大軍よて揉立れど重成い事ともせず又本陣ゐ切入て直政ゐ近付汝い猪の早太ゞ來我い木村源太ゞ末葉あり敵手よ取て不足いあるまじ勝負〳〵と突て蒐れば直政またもや恐れ馬を飛せて逃行を汚穢返せと追駈る關市郎右衛門と言ふ者懸隙たりて一鎗よ突落さる其外早川平馬、落合一學、鹽田金十郎、同金六、音羽武太夫の輩ら引返して木村ゞ鎗先ゐ命を殞す重成い是等の輩らを突殺し猶も直政を追蒐て其間已ゐ近付ば一鞭當て突鎗よゐいやと思ふ處井伊ゞの運や強かりけん傍ある松の枝を突折ば其枝兩馬ゞ間よ倒と落ば木村ゞ馬是よ驚き逡巡する其際に直政い青町討り逃延たり木村も今い是迄なりと突と走出て味方を見れば日根野九郎兵衛も深疵を負て討死す其餘の輩を見るゐ高田、半田、知德院

の物印に見ゆれど其外に曾討死と見えたりける重成馬を捉よ乗上武士壹人來よかし我首を與へて高名させん者と見合居たり爰に井伊ゞ眞等ゞ安藤長三郎と言者あり最前長門守を追立られて蘆の中を屈み居けるゞ長門守ゞ進り上を在を見て熟々と思ひけるに若し木村ゞ首を取物あらゞ重き恩賞ゞ預り高名に末世を傳るあり然ど我々ゞ手ゞ合大將を有す首に欲し如何にせんと猶豫處ゞ味方の者の捨たると見へて鉄砲二挺玉薬ゞ込て落し有るを天の與へと大ゞ喜悦卒打んと蘆の陰より狙ひ寄覆ひ〳〵放しけれゞ長門守ゞ大口を射て左の股をうすりたり重成回顧看れゞ長三郎に蘆の陰を屈みゐる刀の鐺の見えけれゞ重成に聲を懸て其所ある壁待ひを用事有り是へ出よと言けれども長三郎に恐怖て鼻息もせず屈み居る重成是を見て壁待ひ怖い事にあいぞと鎗を捨たれゞ安藤些少安堵して彷用如何を蘆の中より頭を出す重成猶も近く招き其方に如何なる者ゞ長三郎答て拙者に井伊ゞ眞等ゞ安藤長三郎と申て百五十石を給に り馬廻りを勤む者ゞて侯重成聞て扨に身分の輕き者ゞある併し汝に武運を叶ひし仕合ものあり今汝を我首と與ふべし早取て高名せよと兩手ゞて兜の鍬を壁み上て必ず此兜をぬがす勿れ兜を取ゞ我首ゞに成まじ勿論貴ひ首なり迚實檢ゞ備ふべし必ず恩賞を預るべしと言れて長三郎に夢の如く重成ゞ首と打落し側ある太刀を見れゞ至極よき利刀あれゞ奪ひ取自已ゞ刀を死骸ゞ差せ扨首を太刀の先ゞ貫きて大音上鬼神の如く恐れし木村長門守を安藤長三郎ゞ討取たりと言ふ聲を寄手に鯨波を揚て大ゞ喜悦此時城方の諸將悉皆討死す其中ゞ知德院只壹人血を塗れて直くと立我將重成に安藤如き者ゞ討る〳〵大將あらず定めて譯有て遣されたる物あるべし我此一言を陳ん爲を今迄生命たりと腹十文字を掻切て切先を咽へて死たりける扨長三郎に首を持て主人を見すれゞ井伊則ち長三郎を召連て新將軍の御前を出る將軍宣ひけるに此首に公の能御見覽あれゞ御實檢を入よと仰有り直

よ道明寺の陣に参る公陣覽有て長三郎を召れ汝此首ハ貴ひしあらん安藤答て否左様よてハいハず討取ヤハ公長三郎が刀を見給ひ此刀ハ汝が所持歟答て重代の刀よて座し祿ハ如何程取るぞ答て百五十石ありと此時公ハ庵原主税よ命じて重成が死骸を取寄陣覽有るゐ左右の腕を切迄有ける其時公宣ひけるハ安藤長三郎ハ疑ひもあき貴ひ首あり殊ゐ自己が太刀ハ是所よ有り此太刀ハ信長公より予よ與へられ予又關白秀次よ差遣ハし秀次より重成が親常陸助よ傳へし物なり自己貴ひ首を偽る而已あらず太刀を盗み歸る段奇怪あり掃部頭恩賞無用あるぞと仰ける扨木村が首を見給ひ忍びの緒を切て豫て討死を期したる不便さよ殊ゐ久敷兜も脱ずと見えて忍の緒の痕付たり内兜を見よと脱せ宣ふよ其香ひ堪ある事言計りあし扨一書ゐ記して曰今兜ゐ名香を焚きハ事雖よても首取ハ方汚く思し食れんとて斯ハ致しハあり又畳ゑ紙ゐ先日陣使を斬し事嘸惜しと思されんが是非義の陣使あれがあり城内を出しより討死と定めしハ大野と云侯人有る故よハと事明細ゐ有りけれが公陣感限りあく彼が茶臼山よて言ひし言葉よ少しも違ず古今珍奇き義勇の士あり此間使を遣たるハ予過失ゐて有りしあり嘸無禮ありと思つらんと兩眼よ陣涙を浮めさせ給ひ斯る勇士の首を此儀よハ難し迚死骸と共よ葬らせ邊の僧よ經が讀せ跡懇ろゐ吊れ其上石碑迄を建させ給へり實ゐ陣信賞有事長門守が節を守し故とハ言ながら有聚天下を知食す公の陣仁智を有難き事ゐあり

第四十三回

大坂勢焼二討メ平野一焉　三好伊三入道勇戦ス

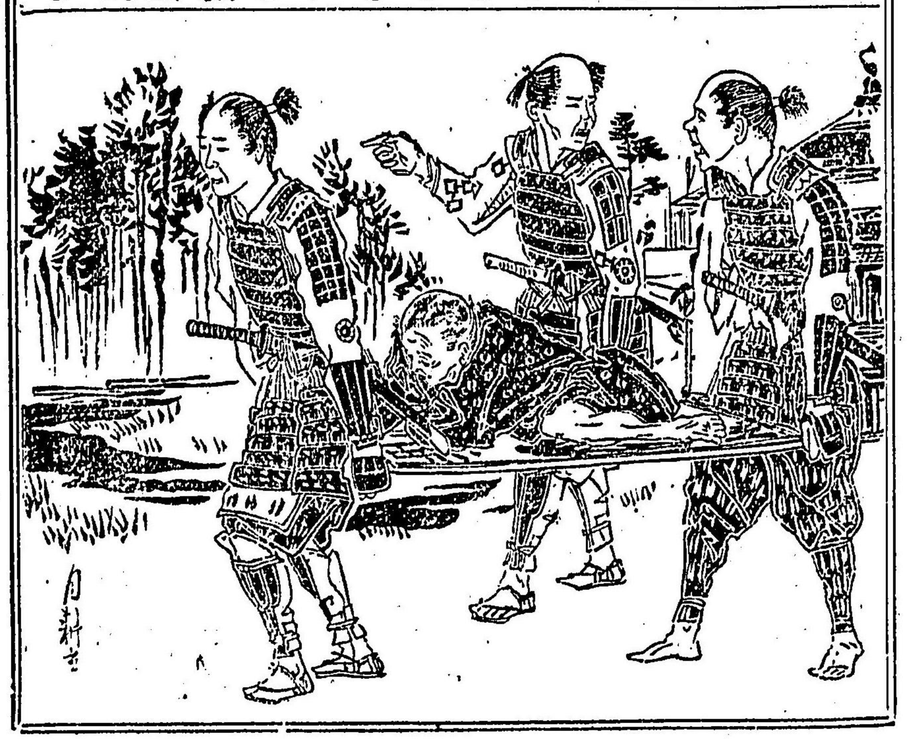
去程よ五月二日ゐハ大陣所諸將を召れ幸村が軍機を以て本丸よ立籠るあらが容易落城す可らず其中ゐハ味方兵粮よ盡て敗軍すべきゐ箇様ゐ聚出大坂方の勇士討死するハ淀殿大野ゐ飽果たる故ならん然れが幸村も一兩日の中よハ討死すべし先歟の形勢を見せよと間諜を所々ゐ出して窺せ給ふ間諜者立歸て此近邊よ大坂方の者壹人も見ゐハず長曾我部真田も引取てハとヤける公之を聞し食れ

予直よ見積すべしと松平内匠、戸田左門、大久保彦左衛門永井右近、横田甚五郎等よ陣供を仰付られ又陣使番長田勘十郎、氷野六左衛門を以て新將軍へ此隊の軍予直よ見積て沙汰すべし左右あき中ハ軍を出し給ふ事無用あり と仰遣されける此時酒井左衛門、同雅樂頭、本多佐渡守井伊、藤堂の輩ヤけるハ自身の陣見分ハ陣無用なりと諫れど公之を聞し食れず否予が癖として箇様の事ハ他の者ゐ見せたる計ゐてハ發束なし又將たる者ハ能之を察せざれが大敵を破り難しと宣へが大久保ハ眉を顰め拙者若き時より試見るよ箇様ゐ堅意地を仰出さるゝ時よハ必ず危き事の有り此度も亦發束なしと言ければ公復て宣ひけるハ危難ハ幾度も有る者あれど始終の勝をこそ能しとすれとて更よ陣用ひあく陣自身陣見積の陣用意有り扨又長曾我部元親ハ八尾より引取幸村ゐ對面すれが其時幸村ヤけるハ足下ゐハ嶋野口ゐ引取休足有りて明暁箇様々々よ爲給へと分す元親頷掌して退く跡よ幸村諸將ゐ向ひ夫兵の討死ハ生るも死るも存亡と考ふる事第一なり重成が討死ハ我片腕と落せし如く惜めども重成討死せざんが迚も敵勢を平野へ釣寄る事難き業あり木村が討死よて拙者も近き中ゐハ討死せんと思ふあらん家康假令翼有る共此度ハ遁すべからず猶一失一得の術を施こし敵を謀計ゐふすべしと及川八内よ通し青木に姫君を今宵中よ盗出す様ゐ計るべしとヤ送りて幸安よ黄氣の見様を教へ増田兵太夫根津甚八を介添として張抜銃を渡して亀井村の傍らゐ伏穴山小助を大將として青田彌十郎、淺見五兵衛、白山三七、樫山藤六の四人を付て火鑓を用意させ亀井村の敷の中よ伏今やくと待居たり此時公ゐハ五百騎計よて亀井村の少し南よ陣出有り平野を陣見積有りて馬を控へさせ給ふ窓ゐ天下を知し食陣高遁ゐや唯脅を締付らるゝ様よ思し食れけれが陣馬より下させ給ふ此時大助ハ黄氣を見澤し大砲を放しけれが鉄を打碎き陣供の近習五六人微塵よ成て失よけり此銃音と合圖として穴山以下の輩ら敷の

中より火をかくれば在家へ燃移りて龜井村一面の火となり大久保彦左衛門公を小腋ゑ揺込扨こそ斯あらむと思ひたり甚五郎いあきや此敵を切拂へといへば心得たりと切拂ひ是より道を索めて漸々後の森迄逃延しゐ火焔益々熾よして敵い八方より責立ける程ゑ防ぎ戦ふ手術あく侍旗本の鑓數人討死す侍近習水野藤九郎は陣笠侍陣羽織を給いりて取て返し家康此ゑ有り返せ者共と令をあす淺見五兵衛是を見て突然走寄只一鎗ゐ突て落し先將軍を討取たりと呼いれば非例、藤堂、酒井、本多の軍此間ゑ公を救ひ出して道明寺の侍陣ゑ入れ奉つる此戰ひゑ戸田彌作、内田兵助、朝比奈志賀之助、松平造酒之助、小川隼人、大野木專内、本多助次郎を始として侍近習數多討死す扨道明寺ゐ侍歸有りて吐血し給ふ事夥多しくは印籠の藥を召上られ漸〻侍心付給しとぞ扨又青木民部い姫君を男ゑ仕立己が供廻りの如くゑあし及川諸共玉造口ゑ來りて南條河内守同外記ゑ向ひ我軍師の命を受て平野ゑ參りしあり

といふゑ兩將も豫て幸村の内意を請たれば何事あく通しけり斯て道明寺の侍陣ゑ參り姫君を悉あく侍供仕りしも全く及川が武功の致す處ゑてしと委細言上なしければ公い大ゐ喜悦せ給ひ此姫〻の事而已心意ゑ掛りしが今取返せば後易し明朝平野の容子を見積り程あく大坂を平治せんと青木を深く侍賞美有りて始の侍約束彌々間違ひ有まじとぞ仰られける及川い豫て真田が謀計を受公の平野へ侍立の跡ゑて道明寺を燒拂んと巧みけり幸村が一失一得の手立といひしい此事ゐり扨幸村い三好伊三入道ゐ謀計を授け老さらばひし百姓の形容ゑ寥させ辻堂ゐ殘し置悉く陣を拂ふて引取けり此時公ゐい終夜寐給いで大坂平治の侍工夫有りしが俄ゑ間諜者を十二人侍前ゑ召れ汝等拂曉ゑ平野ゑ行て敵の容子を見て參れと上意有るゑ畏まりいと平野ゑ至り見れば六文錢の旗三本を立たり皆々大ゐ驚き敵い未だ引取ず早此由を申上んといふ中ゐ根木雷元と言者有り大膽不敵の奈の者ゐれば人々より進み

進み篇と見るゐ多くの烏飛廻りければ扨い大坂勢の引たるゐとんと近々と行て見れば旗い皆繩ぐらみゐして兵い只の壹人もなし扨こそと旗壹本切折て持歸り云云と言上す公是を聞し食れ安藤次右衛門ゑ上意有りて再び彼所を見せしめ給ふ次右衛門い彼十二人を先に立て平野ゑ至り町中を見廻るゑ人迎い壹人もなし某辻堂ゑ八十有余の禪門鉦を鳴して居る者あり人々立寄何者ぞと問へば舌を出して横腹を探り見せけるを次右衛門立寄腹が痛いかと問へば點頭汝い何者ぞ假名ゑても書あらば文字ゐ書て見せよといふ彼老人木切を取て傍らの土ゐ私しい當村五助と申者の〻父念齋と申者ゑて此處陣場と成い故百姓い殘す逃行私しい斯迄老果いへば孫子の足手纏ひと成て何かせんと存ト爰ゑ止り地藏尊を頼み居い處大勢の人來りて殺さんとせしと真田とか何とかいふ人のなさけゐて是を止め兵粮抔分下されしが夜前何か失たりといふて騒ぎ立皆々立歸りゆい其時も又此老耄が口走ば惡し殺さんとせし



を再び其人止めしのゝ簡様ゐ舌を出して皆立歸りゐと記しけり次右衛門是を聞て扨い姫君を奪れたりし故驚き立て歸りしからん汝道明寺の陣へ參るべしと戸板ゑ乗用事あらゞ戸を敲けと言聞しこれを舁せて道明寺へ急きけり伊三入道い戸板の上ゐ在て謀計の成しを喜悦猶も敵を誑らんと戸板の上よりふ便をしけれゞ人夫共大ゑ怒るを安藤制して定めし戸板を敲きしを此方の間へざるゐるべし迎道明寺の陣ゑ歸り此由一々言上す公是を聞し召れ成程姫を盗まれたれゞ左こそあらん又其奴い實の下郎ゑ逃ひ有るまじと佐久間肥前守ゐ預け給ふ伊三入道い心ゑ喜悦すゐと言ゞ番人を斬殺し太刀馬を奪ひ思ひの儘ゐ働らんと故と腰ゞ立ざる眞似をして番人を欺きける是ゑ依て陣を平野ゐ移さるべきと仰出され五月二日午の刻ゐ道明寺を陣出馬ありて先陣ゑい井伊掃部頭其隊の大名十二頭松平市正、同采女、戸田左衛門、小笠原兵部太夫、谷出羽守、中川内膳正、戸田民部少輔、本多美濃守、脇坂淡路守、永野隼人正、同日向守、服部左京亮都合三万七千余騎二陣い藤堂和泉守、此隊の大名十二頭南部大膳太夫、津輕越中守、相馬因幡守、一柳監物、戸田上野之助、永井信濃守、森川民部、六郷伊賀守、岡部内膳正、高力左近、長谷川丹後守、近藤武藏守、合せて其兵三万七千余騎次ゑい八幡大菩薩の大旗次ゑ井伊、藤堂の大旗馬印纏ゐ兩陣共平野越ゑ桑津を隔て陣を取次ゑ越前少將越後中將を大將として此隊の大名八頭堀尾山城守、酒井石見守、京極丹後守、伊藤修理太夫、松浦肥前守、相良遠江守、稻葉伊豫守、秋月長門守都合三万二千余騎無紋の陣幕旗馬印物印を立る次ゑ松平加賀守此隊の大名ゑい有馬玄番、丹羽左京太夫、渡邊民部少輔、北條左近將監都合三万三千余騎何れも先陣を八丁隔て三段ゑ陣をとる旗い梅鉢の紋所馬物印ゐ是を立る平野の東い伊達陸奥守壹万五千余騎南い幾野但馬守、金森伊豆守八千余騎六月朔日を松平長門守、毛利、吉川一隊ゑ成て八千余騎馬場町口い板倉、寺澤、筒井

植村等八千余人天王寺口い松平土佐守、生駒雅樂頭、森美濃守等八千人平野の辰巳い細川越中守五千人八尾の間い鍋島丹後守五千人龜井村燒跡ゐい松平山城守、大村河内守、五島淡路守等壹万人ゐて鑾固惣勢貳十余万人ゐり其外諸大名平野より道明寺迄陣々ゑ段取す道明寺のは留主居ゐい酒井左衛門尉、同雅樂頭、本多内記、青木民部を殘し給ふ最も跡ゑ氣遣ひあらざれゞ本陣ゐい人數も少ゐく壹人ゐても役ゐ立可きものい陣供ゑ出たり扨大陣所ゑい道明寺を陣立有りて平野ゑ急ゞせ給ひしゞ東口ゑて安藤次左衛門を召れ汝い手勢を引率し是より若江ゑ至り新將軍を守護し是より左右を侍て出馬致させよと仰付られ扨平野の町ゑ陣入在りて辻堂の有る處ゐ陣を居られ先陣の容子を陣聞合有りて陣心能氣ゑ陣中を陣見廻ゐるゑ此間獻の兵粮を焚たる跡見ねて近傍ゑ竈數多有りけるを陣覽ありて爰ゑて湯を沸し湯漬と喰んと仰らる是ゑ依て陣料理人竈の下を焚付る此時公い小便ゑ行かんと陣近習を召連られ彼方ゐる敵の際へ陣越ゐる至躰此君い陣若年の時より佛法ゐ歸依し給ひ陣中ゑても念佛を唱へさせ給ふ事小人の如くゐり然るゑ此堂の裡ゐ石地藏の有りけれゞ易大神通力方便と唱へ給ひ地藏堂を憚りて斯く敵の際迄出給ひ小便して在せし處ゑゐる恐怖や大地擘き渡りて百千の雷地の底より出るゞ如く四方眞黑ゑ成て地藏堂を始四邊ゑゐりつる者人馬の嫌ひゐく空中ゐ飛上り大地破れて陣側迄火燃出る家康公い忽ち退けゐ反給ふを大久保彦左衛門い迎も歟ハトとい思ひながら脇ゑ挾み東を望て逃んとす此時火空中を飛廻る事雨霰の降る如く暫時も目を開くべき樣もゐし平野の家々ゑ焰硝を滝き慴しと見ゐて件の火落るや否や忽ち四方火と成て數万の石火矢を一度ゑ放つゑ異ゐらず家康公を始奉り大久保永井横田の人人衣類ゐ火燃付頭の髮着毛悉皆く燒てみゐ癲病の如し然ども陣迎や強かりけん逃りゐ大ゐる溝有りて折節五月の事ゐれゞ水十分ゑたゝへゐり大久保是へ飛込泥と陣顔ゐ